



TITLE:

青年の自己感情とそれを規定する  
自己の諸相：青年の内在的視点と固  
有の文脈を考慮して(  
Dissertation\_全文)

AUTHOR(S):

溝上, 慎一

---

CITATION:

溝上, 慎一. 青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相：青年の内在  
的視点と固有の文脈を考慮して. 京都大学, 2003, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2003-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r11261>

RIGHT:

# 青年の自己感情と それを規定する自己の諸相

—青年の内在的視点と固有の文脈を考慮して—

溝 上 慎 一

# 目 次

第1章 問題と目的	1
第1節 問題意識	1
第2節 これまでの青年心理学における自己研究の問題点 (1)－文脈の視点－	3
第3節 これまでの青年心理学における自己研究の問題点 (2)－自己感情・自己の諸相の測定－	6
(1) 「全体的自己－特定領域の自己」の関係	6
(2) 自己感情と自己の諸相との橋渡し (bridge)	11
(3) 自己評価尺度の肯定性－否定性次元／社会－個人基準	13
第4節 本研究の構成	16
第2章 自己関連の概念整理	18
第1節 はじめに	18
第2節 英語の I, me, self の相違	19
(1) 語源的, 文法学的観点から見た I, me, self	19
(2) 人称代名詞がもつ関わり方の文脈－格－	22
第3節 日本語の自我, 自己の相違	23
(1) 格のない日本語の人称代名詞	23
(2) 「わ」「われ」「おのれ」	24
(3) 「わ」「われ」「おのれ」と I, me, self との対応	25
(4) 「我」を「自我」, 「己」を「自己」と表記すること	27
(5) 「私」や「自分」の扱いについて－「我」の代替としての「私」使用－	28
第4節 自己関連の概念の用いられる文脈と語源的, 文法学的な観点との相違	29
(1) Allportによる自我概念の整理－8つの自我－	29
(2) Allportの自我論を「自我 (ego or I)」「客我 (me)」「自己 (self)」の観点から検討する	32
(3) 語源的, 文法学的観点を超える心理学独自の「自我」「自己」概念の用いられ方	35
第5節 self- (セルフ・ハイフン) における言葉使用の混乱	37
第6節 ego, I, me, self の同時的使用－G. H. Meadの自己論－	40
第7節 H. J. M. Hermansの対話的自己論	43
第8節 まとめ	50

第3章 青年の自己感情－肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度の作成	52
第1節 問題と目的	52
第2節 肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度の作成（調査1）	54
第1項 目的	54
第2項 方法	54
(1) 調査内容	55
(2) 調査対象	55
(3) 調査時期	55
第3項 結果	55
(1) 自己評価尺度の因子分析の仕方について	55
(2) 自己評価尺度の因子分析と構成概念妥当性	56
(3) 項目分析	56
(4) 内的－貫性の検討	57
(5) 自己評価下位尺度間の相関	58
(6) 自己評価下位尺度とRosenbergの自己評価尺度との相関	58
第4項 考察	58
第3節 自己評価尺度の再検査信頼性（調査2）	60
第1項 目的	60
第2項 方法	60
(1) 調査内容	60
(2) 調査対象	60
(3) 調査時期	60
第3項 結果	60
(1) 自己評価の下位尺度項目におけるテスト－再テスト	60
(2) 自己評価の下位尺度得点におけるテスト－再テスト	61
第4項 考察	62
第4節 自己評価尺度とYG性格検査との関係（調査3）	62
第1項 目的	62
第2項 方法	63
(1) 調査内容	63
(2) 調査対象	63
(3) 調査時期	63
第3項 結果	63
(1) 自己評価尺度の因子分析	63



(2) 自己評価タイプの作成	64
(3) 肯定性－否定性次元／社会－個人基準の分別測定の実践的意義	65
(4) 自己評価タイプの組み合わせの特徴	66
(5) YG性格検査との関係	67
第4項 考察	70
第5節 自己評価尺度と適応意識との関係（調査4）	72
第1項 目的	73
第2項 方法	73
(1) 調査内容	73
(2) 調査対象	74
(3) 調査時期	74
第3項 結果	74
(1) 自己評価タイプの作成	74
(2) 適応意識との関係	75
(3) 自己評価タイプとRosenbergの自己評価尺度との相関	78
第4項 考察	79
第6節 自己評価の指標から見た青年の自己感情の様相（調査5）	81
第1項 目的	81
第2項 方法	81
(1) 調査内容	81
(2) 調査対象	82
(3) 調査時期	82
第3項 結果	82
(1) 自己評価タイプの作成	82
(2) 大学の学年別・男女別・全体で見た青年の自己評価タイプの分布とその特徴	83
第4項 考察	84
第7節 まとめ	86
第4章 青年の自己の諸相－WHY答法の開発－	89
第1節 問題と目的	89
第2節 WHY答法の理論的構造	89
(1) 自己を理解する視点としての内在的－外在的視点	91
(2) 内在的－外在的視点による方法	92
(3) 内在的視点による方法の特徴－自己概念、自己意識研究から－	95
(4) 「自己評価を規定する自己の諸相」を表出させる「なぜ」という問い－物語的説明－	97

(5) 自己評価を規定する「集団にとっての」重要な自己	99
(6) WHY答法—自己評価を規定する自己の諸相の表出—	101
第3節 WHY答法における「それはなぜですか」の設定個数と分析カテゴリーの検討	102
第1項 目的	102
第2項 方法	103
(1) 調査内容	103
(2) 調査対象	103
(3) 調査時期	104
第3項 結果	104
(1) 「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係	104
(2) WHY答法のカテゴリー分析	104
第4項 考察	107
第4節 WHY答法の妥当性の検討と上位次元—下位次元カテゴリーの2段階階層による分析（調査7）	111
第1項 目的	111
第2項 方法	111
(1) 調査内容	111
(2) 調査対象	113
(3) 調査時期	113
第3項 結果	113
(1) 「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係	113
(2) 自己評価センテンスの妥当性	113
(3) 「それはなぜですか」の妥当性	115
(4) 上位次元カテゴリーの作成	116
(5) 下位次元カテゴリーの作成と留意点	120
(6) 上位次元—下位次元カテゴリーの2段階階層によるWHY答法のカテゴリー分	125
第4項 考察	128
第5節 記述における説明度を上げたWHY答法のカテゴリー分析—青年の自己評価を規定する自己の諸相—（調査8）	132
第1項 目的	132
第2項 方法	133
(1) 調査内容	134
(2) 調査対象	134
(3) 調査時期	135
第3項 結果	135
(1) 「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係	135

第3章	(2) 自己評価センテンスの妥当性	136
	(3) 補足欄への記述率	137
	(4) カテゴリー化に際して	138
	(5) 上位次元ー下位次元カテゴリーの2段階階層によるWHY答法 のカテゴリー分析ー学年別・男女別・全体で見た青年の自己評価 を規定する自己の諸相	140
第4項	考察	147
第5項	全体的考察	148
第6節	まとめ	150
第5章	自己の世界を取り巻く大学生固有の文脈	152
第1節	はじめに	152
第2節	意味構造に迫るために	153
	(1) 語りは意味の表現	153
	(2) 語りは「今」「ここ」の場における意味構築の作業	154
第3節	文脈に実証的に迫る視点ーポジション結合が意味を作るー	156
	(1) 語りがなぜ意味構築につながるか	156
	(2) 結合こそに意味がある	157
	(3) ポジション分析ー結合されたポジションを探すー	158
第4節	ポジション分析によって垣間見える大学生固有の文脈	159
	(1) WHY答法の記述に垣間見える大学生固有の文脈	159
	(2) ポジション分析をおこなう上でのWHY答法の補足欄の構造	162
第5節	分析：自己の諸相を支える大学生固有の文脈	163
第1項	目的	163
第2項	方法・調査対象・調査時期	163
第3項	結果と考察	163
	(1) カテゴリー作成	163
	(2) カテゴリー化の留意点	165
	(3) 自己の諸相を支える大学生固有の文脈	168
第6節	まとめ	170
第6章	まとめと今後の課題	172
第1節	本研究のまとめ	172
第2節	今後の課題	178
	(1) 青年期の発達の検討を文脈を踏まえておこなう	179
	(2) 大学生にとっての学業	180

参考文献 · · · · · 182

引用文献 · · · · · 182

# 第1章 問題と目的

## 第1節 問題意識

青年期は、Hollingworth (1928) によれば、親に対する従順・依存から自己決定・自活への移行期間、すなわち親からの「心理的離乳 (psychological weaning)」の期間とされる。また、Havighurst (1952, 1953) にいわせれば、青年期は将来の職業や生き方、価値観を確立する時期ともいえ (他にも Lewin, 1939; Spranger, 1925)、青年期は広く、人生における自身の主体的 (autonomous) 有り様を確立する時期 (Dekovic, Noom, & Meeus, 1997; Honess & Yardley [eds], 1987; 宮沢, 1979)、その意味において、児童期までに構築 (construction) されてきた自己を新たな青年期課題の上で再構築 (reconstruction) されなければならない時期 (= 自己の再構築・再定義) だといえる<sup>脚注1</sup>。Erikson (1950/1963) のあまりにも有名な句、「思春期や青年期においては、以前には信頼されていた斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) が再び多少問題となる」(p.261) ことから始まる青年期のアイデンティティ問題も、実はこの自己の再構成・再定義のことを指している (他にも Erikson, 1959; 1968)。

このような中、筆者にとっての青年への関心は、第1に青年の「自己感情 (self-feeling)」がどのような状態であるのか、そして第2にその自己感情を規定している「自己の諸相 (aspects of the self)」は何なのか、を明らかにすることにある。青年の内面世界は、これまで「疾風怒濤 (Strum und Drang / storm and stress)」(Hall, 1904) とか「時間的展望」(Lewin, 1939) や先に述べた「アイデンティティ危機」な

<sup>脚注1</sup> 「主体性」と訳される “autonomy” “autonomous”, 「自己 (self)」と密接な関連をもっている。すなわち, “autonomy” “autonomous” の auto-は, self の語源であるギリシャ語の “auto- (auto-)” と同じである。主体が, 他のものによって導かれるのではなく, 自己を拠り所として, 自己性を発揮しながら行為している状態, それが主体性なのである。したがって, 青年期で主体性確立が問題になるということは, そのまま「他」に対して「自己 (自身)」がどうあるべきかを問題とすることだといえ換えていくことができる。

どの観点から焦点化して扱われてきたが、青年の内面世界を、そうした個別現象の観点からではなく「自己」という人の存在的総体の概念を主軸にして明らかにすることには、次のような必然性があると考えられる。

第1に、「自己」は、時間的展望やアイデンティティ危機などはもちろんのこと、身体、親子関係、友人関係、学業、人生や時間的展望といったこれまでなされてきた青年期の代表的問題、青年期の感情的様相として論じられてきた疾風怒濤をも含めて総括的・包括的に扱うことのできる概念である。元来青年期の問題は、疾風怒濤やアイデンティティ危機をはじめ、否定的な様相で論じられがちであったが (Coleman & Hendry, 1999; 村瀬, 1976; Simmons, Rosenberg & Rosenberg, 1973)、他方で、青年期の否定的様相に反証する研究が見られるように (cf. Bandura, 1964; Coleman, 1978; Duvan & Adelson, 1966; Elkin & Westley, 1955)、青年期の否定的な様相ばかりをア・プリオリに焦点を当てるのは問題である。その点、自己という概念を用いれば、われわれは青年の内面世界を総括的・包括的に扱うことができるのみならず、否定的な状態から肯定的な状態まで、ひいてはその中間的な状態、アンビバレントな状態まで様々な状態に分けて扱うことも可能となる。ア・プリオリに「否定的」あるいは「肯定的」という点から出発しないためにも、自己の概念が必要である。

第2に、疾風怒濤のように、青年期が否定的嵐の到来期とされる場合、それは単純な否定的嵐の到来を意味するわけではなく、「自分を知る」「自分をつくる」という生産的な文脈を合わせ持った否定的嵐の到来を意味するわけである (cf. Achenbach & Zigler, 1963; Blos, 1962; Erikson, 1950/1963, 1959; A. Freud, 1936/1966; 1958; 1969; Friendenberg, 1959; Katz & Zigler, 1967; 加藤, 1977, 1987; 水間, 1998; Phillips & Zigler, 1961)。この点を考慮するならば、われわれは青年の否定的感情だけを焦点化して扱うべきではなく、感情を規定している質的諸相まで含めて扱うべきであると考えられる。自己の概念は、青年のもつ感情や質的諸相を、肯定性や否定性、その混在の状態まであわせて扱うことができるから、青年研究では自己の概念を主軸に据えることが必要だと考えられるのである。

第3に、青年個人の一個存在を大事にする、あるいは、ステレオタイプ的な青年イメージから脱却することが、自己の概念を主軸に据えることで可能となる。社会には、

青年に対するステレオタイプ的な見方が存在する。上述の「疾風怒濤」や「自我の発見」「アイデンティティ危機」などもそうであるし、青年を大学生と限定する際に当てられることの多い「勉強をしない」「まともに漢字が書けない」「本を読まない」「礼儀が悪い」などの世間の批判もそうである（山崎, 1985）。しかしながら、そのようなステレオタイプな見方とは裏腹に、青年が生きる実態はきわめて多様である。青年の自己に焦点を当てるということは、さまざまな青年個人の一個存在に焦点を当てingことを意味している。否定的な青年を扱うと同時に、肯定的な青年をも扱うことを意味している。単純になりすぎない見方を青年に向けていくためには、はじめから否定性を表に出した「疾風怒濤」や「アイデンティティ危機」という言葉よりも、自己という言葉の主軸に据えて青年を議論していく方が適切であると考えられる。自己の概念を主軸に据えることは、青年の内面世界をさぐる原点ともいえるものなのである（梶田, 1991）。

次節では、本研究の問題意識を、これまでの青年心理学における自己研究の成果上に位置づけ、その独自の展開を示す。

## 第2節 これまでの青年心理学における自己研究の問題点 (1)

### —文脈の視点—

もっとも、これまでの青年心理学研究で、自己の概念を主軸に据えた研究がなされてこなかったわけではない。つまり、これまでの青年心理学研究においても、上記で述べてきたことを前提として、青年の自己感情や質的自己へのフォーカスが数多くなされてきたのである。青年心理学研究の中に、青年の「自尊心 (self-esteem)」や「自己評価 (self-evaluation)」、「自己受容 (self-acceptance)」、「自己概念 (self-concept)」、「自己像 (self-image)」、「自己形成 (self-development)」などのテーマをもつ研究は膨大な数であり、アメリカ心理学会 (APA) の雑誌論文データベース PsycINFO で、“self” “adolescence” をキーワードとして論文を検索すると、1872 年以降で 84959 件の論文がヒットするくらいである (2002 年 7 月時点)。

しかし、青年期は時代の産物であり (Frith, 1985; Musgrove, 1964; Muuss, 1962/1968), 時代が変われば同じ青年期でも、その特徴や様相は変貌して然るべきであるが、このことを前提として進めている研究は驚くほど少ない。青年研究の成果が、普遍化・一般化されることを暗に前提として進められている研究は実に多いのである。

たとえば、本研究の問題意識に関係のある青年の疾風怒濤現象について見てみよう。周知のように、青年の内面世界の荒れ模様を「疾風怒濤 (storm and stress)」と名付け、青年期特有の現象としたのはアメリカの Stanley Hall (1904) であった。「疾風怒濤 (Strum und Drang)」という言葉は、18世紀の Rousseau における人間の激しい内的世界の吐露を受け継いで勃興したドイツ文学の「疾風怒濤運動」に端を発している (Arnett, 1999; Coleman & Hendry, 1999; 竹山, 1951)。Goethe (ゲーテ) の『若きウェルテルの悩み (Die Leiden des Jungen Werthers)』(1774) はその代表作品である<sup>脚注2</sup>。

Hall が見ていた時期のアメリカは、南北戦争 (1861-1865 年) を境に急変貌を遂げた後の、アメリカ固有の歴史的文脈を背負う象徴的な時期にいた。すなわち、アメリカ社会は、南北戦争後工業化がすすみ、都市の人口増加率は農村のそれをはるかに上回っていた。技術革命による多くの発明と技術的な進歩は、産業および人々の生活に驚くほどの変化をもたらし、それまでの農業社会に適用された伝統的な社会思想ではもはや彼らの生活観を説明することはできなかった。こうした時代の風潮は、若者たちの過激な反応となって跳ね返った。青少年の背徳、犯罪、性の頹廃、さまざまな精神的疾患、そして新旧世代の断絶は、都市化・工業化の急テンポにすすむ状況のもとで大きな社会問題となっていたのである (岡路, 1973)。Hall の提唱する青年の疾風怒濤は、彼の生きたアメリカ社会の時代的文脈と密接につながったところから生まれたものなのであった。

<sup>脚注2</sup> 青年の内面世界を描写したものばかりではないが、Schiller (シラー) の『Die Räuber (群盗)』(1782) や Goethe (ゲーテ) の他作品『Göts von Verlichingen (ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン)』(1773), 『Faust (ファウスト)』(1831) も、ドイツ疾風怒濤運動の中で出された作品として有名である (亀井, 1951)。ちなみに、わが国で “Strum und Drang” は当初「疾風怒濤」ではなく「襲ひと迫り」などと森鷗外によって翻訳されていた (成瀬, 1929)。語義的には「突撃強襲」なのだが、とも述べられている。



また、青年心理学の初期といえば、アメリカ・Hall の 20 年後ドイツで興ったドイツ青年心理学を無視できない。Spranger (1924) や Bühler (1922/1967/1991), Tumlirz (1919/1925) などが当時の代表的青年心理学者とされる。そこでも Hall の疾風怒濤現象は踏襲されるが (cf. Spranger, 1924), ドイツで同じように論じられる青年の疾風怒濤現象は実にドイツ固有の歴史的・社会的現象に根ざしたものであった。これも岡路 (1973) が述べるように、当時 1920 年代のドイツというのは、第一次大戦の敗北をもって戦後の無秩序体制、社会の荒廃と経済的疲弊の真っ只中にいた。戦勝国にてこ入れ (1924 年～) で経済復興の兆しが見えた途端に世界大恐慌 (1929 年) が起こり、他国依存型のドイツ資本主義に壊滅的な打撃を与えた。戦後ドイツの異常な混乱と同様は、そのまま若者たちの混乱と動揺であった。何らの職業訓練も受けていない、戦争をすることより他に何も知らない多くの若者たちは、敗戦と革命でわきかえっているドイツの街頭に投げ出された。彼らが戦場から持ち帰ったものは、死と暴力の恐怖とそれへの脅迫であったが、現実のドイツ社会にはその傷を癒すすべははなはだしく乏しかった。失われた青春への悲しみと怒りと、それを取り戻そうとする焦燥のみがいたずらに大きくふくれあがった。彼らのうちの多くは、やがて市民的職業の中に生活する場所を辛うじて見出していったが、しかし異常な戦場生活の中で青春をねじ曲げられたために、どうしても市民生活に順応できない若者も多かった。こうした若者たちへの対策は、まさに戦後ドイツ社会の緊急にして困難な課題だったのであり、ドイツ青年心理学がこの時期勃興するのも、時代的・社会的文脈と密接につながったことなのであった。

青年期の定説「疾風怒濤」が、このようなアメリカとドイツの時代的・社会的文脈の中で語られたことを受けて、われわれはそれを、時代、社会を超えて議論することなどできるだろうか。疾風怒濤を、青年期固有の様相として普遍化・一般化することなどできるのだろうか。

疾風怒濤は、これまでの青年心理学研究においては、主に自尊心や自己評価を指標としてその変遷を調べる形で検証されてきた (cf. Lau, 1990; Noppe, 1983)。しかし、その結果を見ると、自尊心や自己評価は青年期全般を通して肯定的・安定だとする成果 (Bachman & O'Malley, 1977; Carlson, 1965; Dusek & Flaherty, 1981; Engel,

1959; McCarthy & Hoge, 1982; Monge, 1973; Offer, 1969; Savin-Williams & Demo, 1984) が一方にあるかと思えば、他方には、全くその逆の、青年期全般あるいは青年期前期・後期に特化して否定的になる、不安定になるとする成果が同じ程度の説得力であったりもする (Blyth, Simmons & Carlton-Ford, 1983; 伊藤, 1991; Jorgensen & Howell, 1969; 加藤, 1962; 1977; Katz & Zigler, 1967; Simmons, Blyth, Van Cleave & Bush, 1979; Simmons, Rosenberg & Rosenberg, 1973)。

しかし、上述のアメリカ・ドイツ青年心理学勃興の文脈を想起すれば、青年の生きる時代や社会の文脈、あるいは現場の根 (やまだ, 2002) との接続を無視して、これらのいずれかが正しくて、いずれかが正しくないという議論をすることなどおおよそ無意味であろう。われわれは、青年の内面世界を規定する時代や社会の様相が断ち切れることのないような形、必要であればその接続をある程度辿ることのできるような文脈主義的な方法論 (contextualism; Pepper, 1942) によって、青年の内面世界を検討せねばならないと考える。

### 第3節 これまでの青年心理学における自己研究の問題点 (2)

#### —自己感情・自己の諸相の測定—

そもそも、疾風怒濤を自己指標をもとに測定して検討するというが、そこで用いられてきた自己指標はきわめて多種多様である。結果を一方向に概括できないのは、上記の社会・時代的文脈の理由を除外しても、測定法の種々の問題から当然のことといえる。

#### (1) 「全体的自己—特定領域の自己」の関係

この問題は、1980年代頃から、自己の構成における「全体的自己 (global self) — 特定領域の自己 (selves in specific domains)」の関係の問題として収束化し、近年の自己研究における理論的・測定論的な最重要課題の1つとなっている (遠藤, 1992a; Harter, 1986; Hattie, 1992; Hoge & McCarthy, 1984; Marsh, 1986; 1993; Marsh,

Richards, & Barnes, 1986; Moretti & Higgins, 1990; Pelham & Swann, Jr., 1989; Rosenberg & Gara, 1985; ; Shavelson, Hubner & Stanton, 1976)。この観点は、青年の自己感情とそれを規定している自己の諸相を明らかにしたい本研究の問題意識と、次の2点で関連があるといえる。

①第1の関連は、自己感情の測定においてである。これまでの青年の自己感情研究は、必ずしも明示的であったとはいえないながらも、概して全体的自己における評価感情（自己満足感や優越感、劣等感など）を測定してきたと考えられる。そして、ある特定領域（学業領域や家族領域など）に限定された評価感情を測定してきたわけではなかったのだと考えられる。それでも、特定領域の自己がまったく関与しない全体的自己などあり得ないから、その意味で、自己感情の測定においてはその尺度構成上、「全体的自己ー特定領域の自己」との関係を、たとえ無自覚的であろうとも、何らかの見方のもと反映させなければならなかったといえる。

これまで多く用いられてきた自己感情尺度を、Blascovich & Tomoka (1991) にしたがって見てみよう。まず、Janis & Field (1959) の尺度 (Feeling of social inadequacy) を見ると、「9.あなたは、自分が他の人々とうまくやっていけるかについて、どの程度心配していますか？」(対人領域)、「10 あなたは、自分の仕事ぶりが批判されることをどの程度心配していますか？」(仕事や学業領域)など、項目の半分以上は対人場面や仕事・学業など、自己の特定領域が設定されている。また、Coopersmith (1967) の尺度 (Self-esteem inventory) を見ると、「1. 私は空想にふけることが多い。」(生活領域)、「13. 私は、いつも正しいことをする。」(行動領域)、「11.私は、誰かといっしょにいるのが楽しい。」(友人領域)、「15. いつも誰かに何かをいわれる。」(対人領域)、「14. 私は、勉強に自信をもっている。」(学業領域)、「5. 私は、両親と楽しくやっている。」(家族領域)、「8. 私は、もっと若ければよかったと思う。」(年齢領域)など、Janis & Field の尺度以上に、生活や行動、友人、対人場面といった自己の特定領域が設定されている。

このように、全体的自己の感情（自己感情）を測定するのに特定の領域が尺度内に設定されるのは、いうまでもなく、全体的自己の感情を左右する重要な領域が自己の

中に存在すると考えられてのことである。Coopersmith (1967) は次のように述べる。

自尊心 (self-esteem) は、いくつかの異なる経験領域にまたがって、そして性別や年齢、役制定義の状態にしたがって変化するだろう。このように、個人が自身を学生としてはとても価値ある存在だとみなしたり、テニス選手としては適度に価値ある存在だとみなしたり、しかし音楽家としてはまったく駄目な存在だとみなしたり、ということは考えられることである。思うに、個人の能力に対する全体的評価は、これらの領域を個人の主観的重要性にしたがって重みづけた結果なのであり、その結果が全体レベルにおける自尊心を喚起させているのである。このことはあり得ることでありながら、いまだ、一般的評価に至るほどの方法による客観的な証拠はほとんどない状態である。われわれは、このようなことから、主観的な自尊心を測定するわれわれのテストの中に、いくつかの異なる活動領域からなる質問を込めようと決心したのである。

(Coopersmith, 1967, p.6)

しかし、Harter (1986) が主張するように、重要な領域とは個人固有のものである。たとえ多くの者にとって対人関係領域や学業領域での評価が全体的自己の感情を左右するにしても、その領域での評価がすべての者の全体的自己の感情を左右するとは限らない。中には、他の領域における評価こそが、その人自身の全体的自己の感情を左右したりもする。

この点は、古く James (1890) が、自尊心が「成功／願望」の公式によって成り立っていると述べたことから明らかである。Harter (1986) が述べるように、この公式は個人にとっての重要な領域における成功こそがその個人の自尊心を上げたり下げたりするのであって、重要ではない領域でたとえ評価が低かろうと、その個人の全体的自己の感情は必ずしも低くはない（他にもこの考え方を示す者として、梶田, 1980/1988; Shepard, 1979; Snygg & Combs, 1949; Wylie, 1974; 山本・松井・山成, 1982などを参照）。Harter は、この主張の正しさを、彼女がそれまでおこなってきた子供の有能感研究の中で実証的に証明している (Fig.6-1, p.156)。そして、この主張

は、自己評価維持 (self-evaluation maintenance) の研究 (Tesser & Campell, 1983)、理想自己と現実自己とのズレの研究 (遠藤, 1992a; Moretti & Higgins, 1990) などにおいても重要な手続きとして踏まえられている。

それでは、自己感情の測定において「全体的自己－特定領域の自己」との関係はどのように反映させればよいのだろうか。この関係を暗にクリアーしていると筆者が考えるのは、Blascovich & Tomoka (1991) によって最頻度で使用されているとされる Rosenberg (1965) の自己評価尺度 (Self-esteem scale) である。そこでの特徴は、「2. 私はときどき、自分がてんでだめだと思う」や「5. 私にはあまり得意に思うことがない」といったように、何についてだめだとか何について得意ではないというように、自己の特定領域に迫る尋ね方にはなっていないことである。いい換えれば、Rosenberg の尺度は、全体的自己について直接尋ね、特定領域を取って調査者の視点 (外在的視点; 梶田, 1980/1988) で想定せず、全体的自己がどのような特定領域を指すか内包するかは被験者自身に自由に委ねている。Moretti & Higgins (1990) も、この方法の重要性を主張して研究をおこなっている。

他にも、調査者の視点で作成された自己感情項目を与え、それを被験者に重みづけをさせて、全体的自己の感情を測定するという方法も考えられる。実際、「全体的自己－特定領域の自己」との関係を徹底的に扱った Hoge & McCarthy (1984)、Marsh (1986; 1993)、Pelham & Swann, Jr. (1989) などの研究では、本研究と問題意識は違いながらも、方法論上ではこの方法を採用している。しかし、Hoge らの用いた方法における問題点は、被験者の重要性評定が異常に高くなるという点にある。つまり、被験者にとっては、特定領域を外在的に与えられて「どの程度重要ですか？」と程度評定を求められる。この際、重要であるか否かの程度はある程度答えられるにしても、重要ではないと答える項目がいったいどれだけ出てくるだろうか、という問題が生じる。事実、Marsh (1986) の調査は、“あまり重要ではない (very unimportant) (1)” ～ “とても重要だ (very important) (9)” の9件法による重要性評定を被験者に求め、そこでの結果のほとんどが6から8、9点の間であり高得点に偏るものであった (p.1235)。Hoge & McCarthy (1984) の調査でも、6件法 (1～6点、中央値3.5点) の重要性評定で平均点が5.07点と高得点を呈している。遠藤 (1992a) でも同様

の報告をしているし、尾崎 (2002) の生き方研究にいたっては、重要性評定を求める方法論では、個人にとって「生き方」が重要な領域であるか否か判断できなかったとさえ述べられる。

以上のことから、本研究は、全体的自己を直接被験者に与え、それが指し示す特定領域は被験者に暗に委ねるという方法論によって、自己感情尺度に「全体的自己ー特定領域の自己」との関係を反映させることができると考える。

②第2の関連は、自己の諸相の検討においてである。これまでの青年の自己研究では、自己の諸相は主に自己概念や自己像の研究として検討がなされてきた。そこでは、主に「あなたは誰ですか (Who are you ?)」(Bugental & Zelen, 1950)「私は誰ですか (Who am I ?)」(Kuhn & McPartland, 1954),「あなた自身のことを教えてください (Tell us about yourself)」 「あなたはどのような人か記述してください」 (Describe what you look like)」(McGuire & Padawer-Singer, 1976) などの被験者自身の視点 (内在的視点 ; 梶田, 1980/1988) による測定法を用いて、青年自身が見るさまざまな自己を表出させてきたのであった。

そして、方法論が微妙に異なることはあっても、一貫して、自己に関する特性的描写 (たとえば、明るい「私」、おっちょこちょいな「私」など) が加齢にともなって多くなることを見出してきた (遠藤, 1981; 藤井, 1984; 菊池, 1970; Montemayor & Eisen, 1977; Noppe, 1983; 山田, 1981, 1989)。このことは、青年期頃からあらわれはじめるとされる形式的操作の思考 (Piaget, 1967) が大きく影響を与えているとされている。すなわち、「私は誰ですか」と同じように尋ねても、抽象化して自己の特性を把握することのできる形式的な操作能力が十分に備わっていなければ、「身体的特徴」 (太っている「私」・やせている「私」・背が高い「私」) や「所有物」 (犬を飼っている「私」), 「所属・住所」 (京都に住んでいる「私」・〇〇小学校2年生の「私」) などの外見的・表面的・具体的カテゴリーの記述が表現の中心となる (cf. Montemayor & Eisen, 1977)。青年期は、このような結果をもって、自己に関心をもち始める時期だとされてきたのである。

しかしながら、青年の自己感情 (全体的自己の感情) との関連に一度目を向けると、

自己の諸相を扱う研究は、自己感情との関連をほとんど考慮することなくなされてきたという点において問題があるといえる。自己 (self) の世界に存在する「私」や「他者」「モノ」には、たとえば、田中太郎という「私」、京都に住む「私」、背の高い「私」、私の親友である「A君」、私の「お父さん」、私の「お母さん」、私の「妹」、私の「ジャガー」、私の「服」などさまざまなものがある。すなわち、特定領域の自己が多数あるということである（この関係については第2章で詳述）。これらは、自己の世界で同じように存在しているわけでは決してない。これは重要だがこれは重要ではないといったように、「私」や「他者」「モノ」には自己全体にとっての重要度が存在するのである（Harter, 1986; James, 1890; 1892; 梶田, 1980/1988; Shepard, 1979; Snygg & Combs, 1949; Wylie, 1974; 山本・松井・山成, 1982）。重要度は、全体的自己の感情や評価に影響を与える程度を意味する。この指摘は、いい換えれば、自己の諸相を明らかにする研究においても、「全体的自己ー特定領域の自己」との関係を何らかの形で反映させなければならないこととして受け止められる。青年の自己の諸相を何でもいからとらえようというだけなら問題のない話でも、自己感情との関連における自己の諸相を明らかにしたいということになると、筆者の考える限り、これまでの研究は方法論的に「全体的自己ー特定領域の自己」との関係をまったく考慮するものではなかったといえるのである。

総じて、青年の自己感情を明らかにする測定・量的研究、青年の自己の諸相を明らかにする研究は、相互に独立して研究がなされてきており、ほとんど両者の交流は見られなかったといえる。本研究の問題意識は、「全体的自己ー特定領域の自己」との関係を考慮して、この両者の橋渡し (bridge) をおこなおうとすることにある。

## (2) 自己感情と自己の諸相との橋渡し (bridge)

もっとも、ここで述べていることは多くの研究を概観していえる多勢の傾向であって、両者の橋渡しをしている研究がまったくないわけではないから、それをここでは見ておこう。たとえば、山本・松井・山成 (1982) や Hoge & McCarthy (1984) の研究は、青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相を扱った代表的研究といえるものである。

山本ら（1982）は、自己の諸領域として「社交」「スポーツ能力」「知性」など11を挙げ、どの程度そうした領域記述が自分に該当するかを評定させる。次いで、先に述べた Rosenberg（1965）の自己評価尺度を用いて自己感情を測定し、自己評価を基準変数、各領域の自己を説明変数とした重回帰分析をおこなっている（表1-1参照）。被験者は大学生である。それによると、男女共通して「優しさ」「容貌」「生き方」領域における自己の偏回帰係数が有意に高く、これらが大学生全体の自己感情を規定している自己の諸相であるとわかる。また、性差の分析をも検定でおこなった結果、男性は女性に比べて、「知性」領域における自己が自己感情を規定しており、女性は男性に比べて、「優しさ」や「家の経済力」領域における自己が自己感情を規定しているとわかる。同様の研究は、ほかにも森下（1985）、三田（1988）、遠藤・西（1993）などにも見られる。

表1-1 山本・松井・山成（1982）における自己評価を規定する自己の諸領域（重回帰分析結果）

説明変数	男性	女性	t検定
社交	.157**	.080	1.55
スポーツ能力	.009	.011	<1
知性	.173**	.025	3.15**
優しさ	.103*	.278**	4.42**
性	-.046	-.020	<1
容貌	.161**	.207**	<1
生き方	.197**	.161**	<1
経済力	.065	.162**	1.87
趣味や特技	.082	.117	<1
まじめさ	.078	.046	<1
学校の評判	.068	.064	<1
R2	.429**	.449**	

\*\* p<.01 \* p<.05

（注）男性・女性欄の数字は、偏回帰係数を示す。

これらの研究は、自己感情の研究と自己の諸相の研究との橋渡しをはやい時期から注目しておこなってきた点において評価されるが、それにしても、折角に扱う自己の世界が研究者の視点（外在的視点；梶田，1980/1988）によって一方的に設定されており、(1)で Janis & Field（1959）や Coopersmith（1967）の自己感情尺度について述べたことと結果的には同じ構造になってしまっている。この場合、(1) 青年一人一人のもつ豊かな自己の諸相をア・プリオリに排除してしまっている点、その結果、(2)



自己感情を規定する枠の堅い要因探し (factor finding) の研究になってしまっている点で残念だといえる。自己の諸相は、これまでの青年の自己研究がそうであったように、被験者自身の視点 (内在的視点) を重視して、質的に扱われる方がよい。質的に自己を扱うメリットは、一方で得られた記述から要因カテゴリーを作成し、その集計によって青年のある特徴を示すだけで終わる場合があるにしても、他方では、そこからもう一步踏み出て、青年の自己の世界を取り巻く文脈や意味構造を探究する研究の可能性をもち残している点にある。すなわち、場合によっては、表 1-1 と同じような結果で終わる場合があるにしても、そこからさらなる探究の可能性、それこそ第2節で述べた時代的・社会的文脈が扱えるような可能性、が残されているか否かが重要である。この違いは実に大きなものである。その意味では、山本ら (1982) の研究タイプは、あくまで自己感情を説明する自己の諸相は何かということだけを明らかにする研究になってしまっており、ここから先発展のさせようがない。

本研究は、自己感情との関連を意識した自己の諸相を明らかにすることを目的とするものであるが、その際には、自己を取り巻く文脈や意味構造までもう一步踏み込んで検討できるような方法論の開発をも目的とする。それは、本研究が、単に青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相を、時代や社会との文脈も考慮せず、普遍化・一般化されるものであるかのように提示するものではないことを示すものである。

### (3) 自己評価尺度の肯定性－否定性次元／社会－個人基準

これまでの青年の自己研究は、青年の自己感情の肯定性・否定性を、広い意味での「自己評価指標」を用いて検討してきた。細かく見ると、実際に用いられた指標は「自己評価尺度」や「自己受容尺度」「現実自己と理想自己とのズレ」「チェックリストによる受容・評価指数」「自己記述への評価」などきわめて多岐に渡っているが、青年の自己感情の肯定性・否定性を検討するのに自己評価の指標を用いてきたことはそう間違えた手続きではなかったように思われる。しかし、これまで用いられてきた自己評価指標には、上記で述べてきた「全体的自己－特定領域の自己」との関係の他に、次の2つの問題点が内在化していると考えられる。

第1に、これらの広い意味での自己評価指標のほとんどが、自己評価を高い－低い

という一次元スケールの両極でしか表現してこなかった点である。本研究のような青年の自己を扱う研究においてはとくに問題だといえる。というのも、下山（1981）が報告するような青年，すなわち，自己評価の単純な高低では見ていくことの難しいタイプが青年の中には少なからずいるからである。下山は次のように述べる。

（このタイプの青年は）全体の約半分を占める。・・・本実験を通してこのような青年が多いことの原因として次のようなことが考えられた。まず第一に、「自己評価の低いことを考え、自分を創造していく必要が何もない」ということがあげられる。多くの親は、一般的であること以上は子供に求めないし、大学へは行きなさい、就職後は好きなようにやりなさい、という形で物わかりがいい。友人関係では、目立っていいよりは、目立たない方がうまくやっていい。社会に対しても、反抗する理由が何もないわけで、むしろ、社会に対して意見をもっていない方が周囲から歓迎される。つまり、青年がそれにぶつかり、そこで自分を省るための外部から課せられた枠組（壁）がないわけである。また若者文化が大きな位置を占めており、青年が別に「自分」を創り、決定しなくても十分やっていける。その意味では、青年は、もはや境界人ではない。

（下山, 1981, pp.114-115）

このタイプの青年は、いい換えれば、「悪くなければそれでいい」式で青年期を過ごしている。自己評価が高いかどうかはわからないが、否定的になっていないことは確かである。なぜなら、否定的になる理由がないからである。逆に、自己を肯定的に支えるだけの誇りうる自己をもっているわけでもない。このような青年の自己評価を扱うには、自己評価の高い－低いだけを示す従来の指標では限界があり、自己評価の肯定性・否定性次元の高低を考慮する観点が必要だと考えられる。

多くの自己評価尺度が高い－低いだけを示す一次元スケールになっていた背景には、否定的次元の項目を逆転項目とみなし、肯定性次元へと反転して計算していたことがあげられる。すなわち、否定の否定は肯定だという考え方である（遠藤, 1992a）。もちろん、ある者にとっては、否定の否定が肯定であるだろう。しかし、近年適応の研

究では、たとえ肯定的側面が見出されずとも、否定的側面が否定されれば適応できるという知見が数多く提示されている (cf. Markus & Nurius, 1986; Ogilvie, 1987)。認知構造の研究では、古くに Peeters (1971) が、否定性次元は肯定性次元よりも複雑な認知構造を有しており、肯定性はそのまま「肯定性」と呼べるが、否定性はそのまま「否定性」となる場合もあれば、「肯定性の欠けた状態」「肯定性の対極」となる場合もあると述べた。これらの知見は、明らかに、肯定性次元と否定性次元との関係が対極同士、逆転関係にあるとは限らないことを主張する立場から発せられているものである。他にも、肯定性次元と否定性次元との関係を独立したものとして出発する考え方は、パーソナリティ研究や自己受容研究などの中に多く見られる (cf. 張・高木, 1991; 桑原, 1986; 高木・張, 1990)。従来の高い、低いの自己評価に加えて、高くもあり低くもあるような自己評価、あるいは低くなければそれでいい自己評価といったさまざまな自己評価に迫っていくことこそが、単純な高低の自己評価測定からの脱却点だといえる。

第2の問題点は、自己評価の「高い」「低い」に、Rosenberg (1965) がいうところの very good と good enough の自己評価基準が分別なく混在している点である。

Rosenberg が、他者との優劣比較による自己評価ではなく、個人が自身の内的価値基準に照らした上で自らをどうとらえるのかを測定したいと述べたことは有名である。彼はそれを、very good ([他者と比べて]とてもよい=社会基準) としての「私」ではなく、good enough ([自身の価値基準に照らして]これでよい=個人基準) としての「私」についての評価測定だとした。彼は、たとえ他者より優れていなくとも、自身内で良しとするか否かの自己評価を測定したかったわけである。したがって、Rosenberg の自己評価尺度には、他者の優劣比較を示すような社会基準の項目は削除され、個人の内的基準で自身の価値を判断するような個人基準の項目が用いられた。このこと自体に問題はない。

しかしながら、問題は、たとえ個人基準で評価するような項目を用意したにしても、その個人基準による自己評価項目が、ある者にとっては社会基準による自己評価項目でもあるという点である。つまり、自分を良しとするその背後に他者と比べて優越感を抱く自分がいたり、自分をダメだとするその背後に他者と比べて劣等感を抱く自分

がいたりするのである。もちろん、Rosenberg が good enough と呼んでイメージしたような、他者と比べてどうだというのではない自身の個人基準において自己を評価する者はいるだろう。しかし、個人基準＝社会基準による自己評価となる者も、決して無視できない数でいると考えられるのである。結果、全体の自己評価得点が、果たして Rosenberg の描いたような good enough の性質を有するものなのかはきわめて疑わしいのである。

とはいえ、Rosenberg の知見は、自己評価の高低に very good と good enough という2つの評価基準が内在化していることを提示した点で示唆的であった。問題は、これをどのように扱うかということである。筆者の意見では、この2つの自己評価基準は分別して測定されるべきである。すなわち、社会基準による自己評価尺度と個人基準による自己評価尺度を分別して作成し、その組み合わせによって自己評価タイプを作成するのである。そこでは、very good ではない good enough の自己評価も扱えるであろうし、very good でもあり good enough でもある自己評価をも扱えるだろうと期待される。

#### 第4節 本研究の構成

本研究は、次のように構成して進められる。

まず、本研究の検討に入る前に次の第2章で、「自己 (self)」に関する諸概念の包括的整理をおこなっておく。本章でも、「自己 (self)」や「私 (I or me)」, 「自己感情 (self-feeling)」, 「自尊心 (self-esteem)」や「自己評価 (self-evaluation)」, 「自己受容 (self-acceptance)」, 「自己概念 (self-concept)」などを暗に定義づけながら用いてきたが、元来、自己の研究で「自己」の概念使用が混乱していることは周知の事実である (Allport, 1943; Greenwald & Pratkanis, 1984; 梶田, 1980/1988; 北村, 1962)。北村 (1962) は、自己や自我の研究をおこなう者は、その概念使用の整理をおこなうことが、まず最初の課題であると述べるほどである。本研究が、心理学の中でも伝統と歴史のある自己研究を大きく発展させるものであると考えるだけに、その根底を支え

る自己に関する諸概念の整理を前もってしておくことは必須作業であると思われる。それは、単なる言葉使用の整理にとどまらず、筆者が自己の世界をどのように見ているかという自己への見方の提示でもある。

以上の作業をもって、第3章では青年の自己感情がいかなる状態にあるかを検討し、第4章では自己感情を規定する青年の自己の諸相を検討する。その際、第3章と第4章がともに橋渡しをして成果を見出すべく進められること、その際に方法論的な開発も同時におこなうことは、本研究の根幹部分であり大前提である。

また青年研究は、おおよそ10歳頃から22, 23歳頃の年齢幅を青年期初期、中期、後期に分け、それぞれの年齢ステージにおける諸相の違いを発達的に検討するものが多く見られるが、本研究では調査対象を青年期後期（大学生、18～22, 23歳）に限定し検討をおこなうこととする。その理由は、第1に、本研究が自己感情とそれを規定する自己の諸相を、両者の橋渡しを前提として明らかにする方法論の開発が中心となるからである。この検討だけでも膨大な量であり、これに発達の様相の検討を加えることは、本研究の焦点をぼやかすことになる。むしろ、発達の検討は本研究を踏まえての次の課題と考える。第2に、筆者は青年後期に属する大学生を扱う職場におり、まずもって大学生の自己の世界を解明することを急務としている。以上より、本研究の調査対象は全体として青年後期である大学生であり、本稿で単に「青年」という場合でも、それは青年後期としての大学生を具体的には指しているものとする。

第5章では、第2節で述べた問題点を具体的に検討するべく、両者の橋渡しを一步越えて、青年の自己感情を規定する青年独自の文脈(context)を明らかにする。それは、単に得られた質的記述から要因カテゴリーを作成し、その集計によって青年のある特徴を示すにとどまらず、青年の自己の世界を構成する文脈や意味構造へも探究の手を伸ばそうとするものである。それは本研究が、単に青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相を、取り巻く文脈をまったく考慮することもなく、普遍化・一般化されるものであるかのように提示するものではないことを示すものである。

## 第2章 自己関連の概念整理

### 第1節 はじめに

心理学では、自己関連の概念定義が混乱しているといわれる。というのも、英語でいえば self や ego, I, me などの分別が容易でないし、日本語でいえば自我や自己、「私」の分別が容易でないからである。しかし、自己関連の概念を扱おうとする者にとって、self や ego, I, me の分別、自我や自己、「私」の分別をどのようににはかるかということとは非常に重要な問題である。北村（1962）が、自我や自己の研究において、それらの言葉使用の整理をはじめることがまず最初の課題であるとするほどである。実際、北村の他にも、自我や自己について整理したものはいくつも見られる（Allport, 1943; Greenwald & Pratkanis, 1984; 梶田, 1980/1988; Neisser, 1988; 1993）。

「自己概念（self-concept）」や「自尊感情（self-esteem）」「自己評価（self-evaluation）」「自己受容（self-acceptance）」など、self（セルフ・ハイフン）に関する概念も混乱している。それらを尺度等で測定し、たとえばある者はそこで算出された得点を「自己概念得点」と呼び、別の者は「自尊心得点」と呼ぶ。この違いはいったい何なのかということになると、混乱はいっそう増してくる。Wylie（1961）が、自己評価や自己受容、自尊感情などそれぞれの意味は重要だとしながらも、結果的には分別できないとして、「自己尊重（self-regard あるいは self-regarding attitude）」とまとめてしまったのは有名である。しかし、まとめてしまっていいものかは慎重に議論をしなければならない。

さて、上記の整理されたものを見ると、いずれも1つの大きな問題が解決されていないことに気づく。それは、英語や日本語としての自我や自己の原義の問題であり、原義をふまえた英語と日本語との対応の問題である。簡単にいえば、なぜ self なのか。なぜ I なのか。なぜ self を自我あるいは自己とおくのか。そういう問題のことである。筆者の関心領域でよく目にする自我や自己の概念整理は、「主体＝自我（ego or I）」

「客体＝自己 (me or self)」である。これは、self には二重の側面があり、それぞれ、「知者としての自己 (I あるいは self as known)」「被知者としての自己 (me あるいは self as known)」に分けることができるという James (1892) の見解を受けてのことと思われる。しかし、なぜ I と me なのだろうか。客体の me は self として代替されることが多いが、me と self は同じなのか、違うのか、使い分けられるべきなのか。self が自我と訳されることもあるが (cf. Mead, 1934, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 青木書店, 1973 / 河野望訳, 人間の科学社, 1995), 自我は ego ではなかったのか。問題は挙げていけばきりがなくらいある。

筆者は、本章で self や ego, I, me, さらに自我や自己, 「私」などの概念を根本から検討しなおすつもりである。そして、第1章で暗に意味を込めて用いてきた「自己感情 (self-feeling)」「自己の諸相 (aspects of the self)」が、いったいどのような自己の世界を表現するものなのかを明らかにする。それには、語源と文法的な考察がまず必要であると考えられる。飯島 (1992) の『自己について』のように、言葉の概念規定を語源や文法的に検討してから論をすすめるのもあるが、そのような論攷はきわめて希であり、少なくとも心理学関連の著書ではほとんど目にしない。言葉をどのように用いるかという定義は、「私は××を○○と定義します」といったように、宣言をすればいいというものではない。言葉が生起するにはそれなりの文脈があるのであり、その文脈を考えずして定義をはかることはできない。しかも、自我や自己という概念は文法学と深いつながりの中で用いられているものである。われわれは、まず自我や自己の言葉のもつ語源的、文法的な考察をおこなわねばならない。そして、その上で心理学の場に戻ってこなければならぬ。以下、語源的な、あるいは文法的な資料を参照するところからはじめていこうと思う。

## 第2節 英語の I, me, self の相違

### (1) 語源的、文法的観点から見た I, me, self

言語文法で行為の主体は、主語と呼ばれる。主語は、英語で subject である。われわれが行為の主体 (subject) と呼ぶものは、文法上の主語と大いに関係がある。主語と

は、正確には主格 (nominative case) という人称代名詞第1格のことで、「○○は」「○○が」という形で示されるものである。ここでは第一人称「私」の主格が問題となっているから、英語では I、ドイツ語では ich、ラテン語では ego がこれに相当する。ego は、近代以降哲学用語として英語でも用いられてきた言葉であるが、それは名詞としての使用であり、文法的にいう主語としての機能をもつものではない。ここでいう ego は、まだ文法的な観点から見るラテン語としての ego である。

英語の me は、「～に」という与格 (dative case) と「～を」という対格 (accusative case) がいっしょになって、人称代名詞の目的格 (objective case) として単純化されたものである。前者は間接目的語と呼ばれ、後者は直接目的語と呼ばれる。語の機能としては、行為の対象・客体としての「私」、すなわち、到達点が「私」であることを表現する点にある (宮部, 1954)。

self は、I や me と違って、人称代名詞ではない。この意味は後で重要になってくる。self は、それ単体で用いられることは希で、oneself か self- (セルフ・ハイフン) として用いられることが一般的である。ここでは、それぞれについて見てみる。

self はもともと名詞を強調するために使われていたもので、古期英語 (Old English: 700-1100 年) では、たとえば、“He selfa hit segg (He himself says it) (彼がそう言った)” というように、名詞の後に同格として使われていた (江川, 1955)。後に、代名詞の所有格か目的格かを付けて複合形をとって, myself, yourself, himself, herself, itself, ourselves, yourselves, themselves という語形で示されるようになる。このように、強意として用いられる oneself は、基本的には名詞、代名詞を強調することがその役割である。たとえば、飯島 (1992) が挙げるように、“I myself think that... (私自身はこう思う)” という場合に強意の oneself は用いられる。この場合、文意を伝えるだけならば、“I think that...” でいいわけだが、ここで myself をわざわざ置くことで、「他の人はどうか知らないがこの私一身に関していうならば」ということを文意に含ませることが可能となる。すなわち、強意の oneself は、個体的な、そのものの一個の存在をとりたててクローズアップさせる、良くも悪くもそれ自体に焦点を当てる、そういう自他分別の文脈を、強意の対象となる言葉にもたせることができるのである。oneself が、「自身」とか「自体」と訳されるのはこのためである。



oneself には、もう一つ再帰用法もあるが、これは本研究ではあまり関係がないので省略する。

次に self (セルフ・ハイフン) である。self (セルフ・ハイフン) は、ギリシャ語の “*auto-*” に戻って考えてみるとわかりやすい。有名なソクラテスの句 “*Γνωθι σε αὐτον*” (Gnoti se auton / 汝自身を知れ) での「自身 (*αὐτον*)」は、*αὐτος* (*autos*) の変化形であるし、self (セルフ・ハイフン) は、ギリシャ語の *auto-* (*auto-*) が派生した言葉である。『ギリシャ語辞典』(古川編著, 1989) で調べると、自己研究に関連をもってくる *auto-* (*auto-*) の意味は、「自らの意志で」「独立して」である。すなわち、「他の誰でもない自分が」という自他分別の文脈の意であり、oneself の強意用法と同じと考えられる。この名残は今もあり、たとえば、*automobile* (*auto*+*mobile* / 自動車) は、「自ら(独力で)動く物」が点じて自動車の意となっているし、*autonomous* (*auto*+*nomos* [law 法] / 自治的な) も、「自らの法をもつ」ということが転じて「自治的な」の意となっている。*autonomous* や *autonomy* が「主体的な」「主体性」と訳されることがあるのもこのことからである。また、self (セルフ・ハイフン) のつく自己関連の概念、たとえば、「自尊心」は、『広辞苑 (第5版)』(新村編, 1955/1998) で「自ら尊大にかまえること。その気持ち」とあるが、尊大に構えるのは他の誰でもない自分自身だ、という意がそこには含まれている。

以上をまとめると、次のようになる。人称代名詞「私」の主格である I は行為の主体を示し、ドイツ語では *ich*, ラテン語では *ego* がこれに相当する。*me* は人称代名詞「私」の目的格であるから、「私」が行為対象、あるいは客体であることを意味する。*self* は、一般的には *oneself* と self (セルフ・ハイフン) の2つの形をとるが、いずれも人称代名詞ではない。*oneself* の用法には、強意用法と再帰用法があるが、自己の研究で問題になってくるのは強意用法の方である。強意用法は名詞と並列して用いられることから、self を用いることが結果としてその名詞に自他分別の文脈を与えることになる。self (セルフ・ハイフン) も、強意の *oneself* と同様、自他分別的な文脈のもと用いられる。

以上を踏まえ、自己関連の概念整理を行う。自己関連の概念整理は、次のとおりである。

自己関連の概念整理は、自己関連の概念整理を行う。自己関連の概念整理は、次のとおりである。

## (2) 人称代名詞がもつ関わりの文脈—格—

文法学的には、selfを除くIやmeのような人称代名詞が、他（「私」や他者、モノなど）との関係性を抜きには存在しないということが、Iやme, self, 自我や自己の問題を以下どのように用いていくか決定する大きな鍵となる。少々長いが、いろいろ見た限り飯島の説明がいちばんわかりやすいので、そのまま引用しようと思う。

「私」が単に「私」であるという状態では、「私」は主体でも客体でも何でもありません。「私」は「私」に過ぎない。この「私」が何かを見る、何かを作る、何かに対して関係をもつ、あるいは私自身考える、私自身をどうするといった具体に、「私」が「私」以外のもの、「私」を含めた他者と何がしかの関わりをもつときに、この関係において初めてこの「私」が主体という性格を帯びてきます。関係をしないところでは、「私」は主体でも何でもありません。主体というのは、主語になり得るものが客語との関係のなかに身をおいたとたんに、その関係のなかで主体という性格を帯びてくるものです。客体もまた然りです。「それ」は「そのもの」であって、「そのもの」以外の何ものでもない。「そのもの」が「私」にとって客体という性格を帯びるという関係にあります。

(飯島, 1992, pp.120-121)

つまり、Iやmeという言葉、あるいはラテン語のegoやドイツ語のichも含めて、これらの一人称代名詞は、「私」が他（「私」や他者、モノ）と何らかの関わりをもつときに、はじめて主格だ、目的格だ、あるいは主体（主語）だ、客体（客語）だなどといえるわけである。ここでいう関わりが生まれるためには、「私」が、飯島が挙げるような、「見る」とか「作る」「考える」といったように内的・外的に行為をしなければならない。いい換えれば、行為をする文脈でわれわれははじめてIやmeという言葉を用いることができるのである。行為のないところに、主体も客体もない。そして、この他への関わりを示す文法的機能こそが、「格」と呼ばれるものである。人称代名詞の第1格、第2格などは、この他への関わりの分類を示すものなのである。

Iやmeとselfは人称代名詞か否かで分別されることを第2節-(1)で述べたが、それ

はいいい換えれば、他との関わりを作る行為の文脈がその言葉にあるか否かという違いでもある。次節では、日本語における同様の検討をおこない、その上で I, me, self どの対応についての検討をおこなおうと思う。

### 第3節 日本語の自我、自己の相違

#### (1) 格のない日本語の人称代名詞

英語の人称代名詞には、「主格 (nominative case)」「所有格 (possessive case)」「目的格 (objective case)」といった「格」がある。ラテン語やドイツ語などでは、「属格 (Genitiv)」「予格 (Dativ)」「対格 (Akkusativ)」なども含まれてくる。前節ですでに述べたように、格というのは、ある言葉が他へ関わる、その関わり方を示す文法的機能である。そして、英語の人称代名詞はこの他との関わり方をもって言葉を変えるのであり、それ故にこの格を抜きには扱えないのである。

ところが、日本語の人称代名詞には格が存在しない。日本語の一人称代名詞には「私」「俺」「僕」「我」などがあるが、格は助詞で示すのが日本語の特徴である。格を示す助詞には「が」「の」「に」「を」「へ」「と」「より」「から」「にて」があり、それらは総称して格助詞と呼ばれる。「私」だけでは格をまったく判断することはできず、「私が」とか「私の」のように、格助詞をつけることによって、われわれは「私」の格が何であるかを判断することができる。よって、英語が I と me を明確な関係性のもと分別しているような感じで、対応する日本語をおくことは基本的には不可能である。

また、日本語はひらがな表記と漢字表記の両者が組合わさった言語体系をもっており、後で見るように、同じ「われ」であってもそれに当てる漢字が「我」なのか「吾」なのか判断の難しい場合がある。これは、問題を複雑・難解にしている欧米語にはない点である。

以下、確固たる形でいうことはできないのだが、ぎりぎりのところでどういう言葉を英語の I や me, self に当てていくかを考えていきたい。

## (2) 「わ」「われ」「おのれ」

日本語の文語文法では、一人称代名詞は「わ」「われ」「おのれ」として示される。また、口語文法では、一人称代名詞は「わたくし」「わたし」「ぼく」として示される。文語とは、文字通りいえば、文字で書かれた言語、読み書きに用いられる言語のことである。日本では、現代の口語に対して、特に平安時代語を基礎として発達・固定した言語の体系、またはそれにもとづく文体の総称を文語としている。心理学や哲学で問題になってくる自我や自己は、文語としての「わ」「われ」「おのれ」から考えられるものである。

「わ」「われ」から見てみよう。

爾に伊耶那岐命 詔りたまはく、「愛しき我がなに妹の命を、子の一つ木に易へ  
ここ いざなぎのみこと の うつく わ も みこと こ ひと け か  
 むと謂へや」とのりたまひて  
おも

(『古事記』上巻・伊耶那岐命と伊耶那美命より) 脚注3

(あとに残された伊耶那岐命は「いとしい私の妻を、どうして一人の子に代えよ  
いざなぎのみこと  
 うと思うか」とおっしゃって)

吾が身は成り成りて成り合はざる処 一処 在り  
わ ところ ひとつところ

(『古事記』上巻・伊耶那岐命と伊耶那美命より)

(私の身体はだんだん成り整ってきましたが、まだ整わないところが一カ所あります)

「わ」「われ」には、「我(わ・われ)」「吾(わ・われ)」を当てるのが一般的である。『新編大言海』(大槻, 1956/1982)によれば、「われ」の本語は「わ」であり、「れ」は添字であるから、「わ」と「われ」は本来同義である。「わが身」のように、「わ」という用い方は今でも残っている。また、『広辞苑(第5版)』(新村編, 1955/1998)によれば、代名詞から転じて、「その人自身」「自分」「おのれ」という名詞の意もある。たとえば、次の例は、語り手が第三人称を自身として「我」を用いている例である。

脚注3 この時代、実際には「我が(아가)」「吾が(아가)」と読まれていたが、ここでは「わが」に表記をなおし統一している。

我<sup>おほ</sup>も思しあはすることやあらむ、うちほほ笑みて、「その片かどもなき人はあら  
むや」とのたまへば、

(『源氏物語』帚木より)

(ご自身でも思いあたることがおありなのか、笑みを浮かべて「いま話の出たほんの一端の  
とりえさえもない人がいるのかしら」とおっしゃると)

次に、「おのれ」を見てみよう。

己<sup>おの いめ</sup>が夢に云はく、天照大神<sup>あまてらすおほみかみ</sup>・高木神二柱の神の命<sup>たかぎのかみふたはしら みこと</sup> 以ちて<sup>も</sup>

(『古事記』中巻・神武天皇より)

(私が夢に見ましたのは、天照大御神・高木神の二柱のご命令で)

「おのれ」には「己」を当てるのが一般的である。この例からもわかるように、「お  
のれ」も「わ」「われ」と同じ一人称代名詞である。『新編大言海』(大槻, 1956/1982)  
によれば、本語は「おの」であり、「れ」は添字である。これも「われ」と同じである。  
また、「自分自身」と名詞に転じて用いられることの多いのは、この己の方である。

弥彦<sup>いやひこ</sup> おのれ<sup>脚注4</sup> 神さび<sup>かむ</sup> 青雲の<sup>あをくも</sup> たなびく日すら 小雨そほ降る<sup>こさめ</sup>

(『萬葉集』十六より)

(弥彦のお山、そのお山は自<sup>おの</sup>ずと神々しくて、青空の広がる日でさえ小雨がばら  
やひこ

っている)

### (3) 「わ」「われ」「おのれ」と I, me, self との対応

以上、日本語には一人称を示す人称代名詞として「わ」「われ」「おのれ」があるこ  
とを、漢字ではそれらを「我」「吾」「己」と表記することを見てきた。それでは、英  
語の I や me, self などにはどのような漢字が当てられるべきなのだろうか。

『学研漢和大事典』(藤堂編, 1978)によれば、古く中国では、「吾」は主に主格・  
所有格、「我」は主に目的格に用いたとされる(他にも、中村, 1989)。しかし、後  
には「吾」と「我」の格は混同されて用いられるようになり、今日一概にどちらがど  
ちらとはいえなくなっている。いずれの格にも、「我」「吾」が用いられてよしともいえ

脚注4 原文では「於能礼(おのれ)」となっており、必ずしも「己(おのれ)」ではない  
のだが、ここでは同義として考えていけるものである。

る。よって、I には「我」とか me には「吾」などのように、厳密な対応をつけることはできない。そもそも、「我」「吾」は、語源的には一人称の流れをもたないものである。『漢字語源辞典』（藤堂，1965）によれば、「我」の甲骨文字はマサカリのような武器の象形とされるから、「我」（武器）の字を一人称代名詞の「われ」に当てるのは、まったくの仮借字としてである。「吾」もまったく同様である。「語」を原字とする吾の原義は、話し合うことである。よって、これも仮借字として「われ」に当てられたものといえる。

「我」「吾」に対して「己」は、self の議論とかみ合う場所を幾分もっている。「己」の語源には諸説があり定まった通説が見られるわけではないが、『新選漢和辞典（新版）』（小林編，1963 / 1982）は、「己」の成立について、「万物が隠れひそんでギクシヤクと曲がっている形。万物それぞれがはっきりした形をもっていて、見分けることができるということから、人と自分を区別する意味となる。」（p. 354）と述べている<sup>脚5</sup>。つまり、「己」の語源的な成立は、自他分別をはかろうとするところにあつたというのである。また、『国語語源辞典』（山中，1976）では、「己（おの）」は「各（おのおの）」と同義か、と述べられている。「おのが（己が）罪」というように、「おの」は名詞に転化されているので、人称を問わず「自身」の意として働く。すなわち「おのが罪」というのは、「私の罪」とか「我が罪」という一人称の範囲に限定されるものではなく、主語が一人称の我であろうと二人称の汝であろうと三人称の彼であろうと、人称に関わりなく、その人自身の罪を示す表現となる（飯島，1992）。「己」は、語源的、一般的な観点からして自他分別を文脈としてもつ self と非常に近い意味をもっているといえるのである。つまり、個体的な一個存在をとりたててクローズアップさせる、良くも悪くもそれ自体というものに焦点を当てる「自身」の意である。「我」にもそのような使い方が見られないわけではないが、「己」の方がより一般的である。

以上より、self には「己」を、I や me には「我」を当てていいかと思われる。現代における一般的な使用を見れば、「吾」よりは「我」の方が適切であるように思われる。ただし、「己」は格をもたない self に当てられた言葉であるからよいとしても、格を有

<sup>脚5</sup> 『漢字語源辞典』（藤堂，1965）では、己とは、「曲がった者が頭をもたげて伸びようとする様を示した指事文字である」と書かれてあり、自他分別の意はそこにはないようである。

する「我」には注意が必要である。「我」は、「己=self」の対応と違って、主格・主体としての I と目的格・客体としての me のどちらにも当てられている言葉である。よって、用いられる「我」が主体なのか客体なのかは扱う文脈で判断しなければならない。James の“Psychology: The briefer course”の翻訳が『心理学（上・下）』（今田寛訳，岩波文庫）として出版されており，そこでは，「主我（I）」「客我（me）」として邦訳されている（p.245）。このように，主体・客体を示しながら「我」を用いれば，「我」が I を示すのか me を示すのかがわかりやすい。なかなか適切な邦訳だといえる。

#### (4) 「我」を「自我」，「己」を「自己」と表記すること

心理学では，「我」や「己」が単独で用いられることよりも，「自我」「自己」として用いられることが多い。そして，上で導いてきた結論をふまえると，「自我」には I か me，「自己」には self が当てられるのではないかと思う。I といっても，ここでの I は主体としての I ではなく，主体としての特徴を兼ね備えて名詞化された I であるから，その意味でここでの I は，近代哲学でよく用いられたラテン語ベースの ego で代替されてよいものである。よって，自我には ego か I，me を当てるといい換えられる。一般的な心理学では，近代哲学の流れを受け継いで ego が当てられることが多い。さて問題は，自我に当てられる英語が一般的に ego（あるいは I）であり，me でないのはなぜか，ということである。『学研漢和大字典』（藤堂編，1978）によれば，人は出生の際鼻を先にして生まれ出るし，鼻は身体の最先端にある。よって後に「自」は，「〇〇から起こる」「〇〇から始まる」という起点をあらわす言葉になったと考えられている。これは，たとえば「亘古至今（古（いにしえ）より今に至るまで）」のような使い方確認される。この点をふまえると，自我という言葉は，単なる我とは違い，行為の主体，そしてそこから行為が発せられる，ということを文脈としてもった我ではないかと考えられる。一般的に，自我に行為の主体，行為の出発点を示す ego といった言葉を当てることが多いのは，自我という言葉にどうしても行為主体の動的なニュアンスが付随しているからではないかと考えられるのである。ここでの自我は，James の翻訳でいう「主我」に近

いものである。もちろん、自我に客体としての意味がまったくないということではない。上記の説明は、自我という言葉に行為主体としての動的なニュアンスが付随するのはなぜかということとなされる1つの説明に過ぎないものである。また、我がその到達点であることを示す一人称の客語としての me が、行為の出発点を示そうとする自我とはニュアンスが異なるということを説明するに過ぎないものである。よって、どうしても me を何らかの違った日本語で表現したいという場合には、自我ではなく、James の翻訳でもそうであったように、「客我」とする方がより適切なのかもしれない。

ここでは、我を自我と表記した際にズレが生じること、一般的な心理学では、自我は James でいう主我と非常に近いニュアンスで用いられていること、が理解されればいいのではないかと思う。

#### (5) 「私」や「自分」の扱いについて－「我」の代替としての「私」使用

飯島(1992)も同じことを述べているが、口語である一人称代名詞「私」や「自分」(『新編大言海』[大槻, 1956/1982]による)を、本節では、ego や I, me, self の対応を考える場所から除外して論をすすめた。一人称代名詞という意味では「我」と同義であるが、口語の一人称代名詞には、他者と接するところから生じる、人間関係の上下、尊卑の意識の意が独自にこめられている。つまり、単に「われ」「おのれ」という意にとどまらない言外の意味がそこにはある。このような使用は、英語には基本的でないものである。たとえば、自分の「分」とは、他者と分別、あるいは配分されて自らにあるもの、という意である。「身分をわきまえる」や「分際を知る」での分はそういう意味で用いられている。『国語語源辞典』(山中, 1976)によれば、「私(わたくし)」は「公(おおやけ)」に対する語のことで、公に対し自分一身(だけ)に関する事柄を指す場合に用いられる。『広辞苑(第5版)』(新村編, 1955/1998)では、うちの事柄とされている。

最近でも「我に返る」とか「我を忘れて」などの慣用句的な我使用はいまだ見られるが、「我」一語を単独で用いることはほとんどなくなってしまったように思われる。しかし、自我という言葉を用いなくて、一語で我としての意を表現せざるを得ない場



合はある。その際心理学でよく用いられているのは、「我」ではなく「私」である（cf. 岩田, 1998; 梶田, 1980/1988, 1998）。本節では、自我や自己、主我、客我のルーツを  
 探るため「我」の意を中心に見てきた。そして、「私」はその検討の対象外としてきた。  
 しかし、以下で「我」を単独で用いるときには、最近の慣例にならって「私」を同義  
 で用いていくこととする。これは、最近の一般的慣例にしたがってのことである。も  
 ちろんその場合でも、「私」が「我」には見られない意をもともと独自に込めて成立し  
 ていたことは念頭においておかねばならない。

#### 第4節 自己関連の概念の用いられる文脈と語源的、文法的な観点との相違

Allport (1943) が、自我 (ego) の復権とされる心理学会の講演で、混沌とした自  
 己関連の概念整理をおこなったことは有名である。ここでは、自己関連の概念が用い  
 られる文脈を Allport の説明にそって概観し、その後で、これまで見てきた語源的、文  
 法的な観点との関連を検討しようと思う。ただし、彼はすべての自己関連の概念を、  
 「自我 (ego)」という言葉で統一して整理している。よって、彼の説明の概観におい  
 ては彼にしたがって「自我 (ego)」という言葉をもそのまま用いていく。

##### (1) Allport による自我概念の整理－8つの自我－

###### ① 知者としての自我 (The ego as knower)

デカルトの有名な句 “Cogito, ergo sum (我思う、故に我あり)”，主語のあらわれて  
 くるフランス語で書かれた “Je pense, donc je suis” (Descartes, 1992) の主語 Je に  
 あたる部分である。他にもたとえば、Brentano (1955) は、心的現象（意識）は必ず  
 何らかの対象に関わる（指向的關係 [intentionale Beziehung]）というが、それに従  
 事する主体は知者としての自我である。James (1890) のいう「純粹自我 (pure ego)」  
 もそうである。Allport によれば、Brentano や James の指摘にもかかわらず、心理学  
 はこの知者としての自我を無視しがちであった。しかし、Husserl が「純粹な自我  
 (reines ego) とそれとの意識作用とが、世界－わたしがそれについていつも語ってお

り、また語ることでできる世界一の自然的存在に本来先立つ存在として、それに先行しているわけである」(Husserl, 1950, p.61)と述べるように、現象学的還元(Phänomenologische Reduktion)を考えると、「純粹自我」「先験的自我(transzendentes Ich)」の存在は必然的に前提となる。また、Locke(1959)やHume(1739)が人格的アイデンティティ(personal identity)の問題を考えたことは有名だが、そこでも誰がいったい人格を統合しているのかと考えてみれば(Moore, 1933)、結果的に主体、知者の概念設定がどうしても必要となる。

## ② 認識対象としての自我(The ego as object of knowledge)

「私が私を知る」というときの、「私を」に相当する客体としての自我である。経験や現実世界ということが問題になる場所(cf. Brentano, 1955; Lundholm, 1940; Rogers, 1951)で扱われているのはこの自我であるし、心理学の実証的な研究で扱われている自我もほとんどはこの自我である(cf. Allport, 1937; Amen, 1926)。James(1890, 1892)のいう「被知者としての自己(meあるいはself as known)」でもある。

## ③ 原初的利己心としての自我(The ego as primitive selfishness)

政治思想家のStirner(1995)やフランスの生物学者Le Dantec(1912)は、人間の本性として、あるいは社会成立の基盤として、利己心(egoism)や我欲(pure selfishness)、偽善(hypocrisy)を強調する。第一の自我が知る主体としての自我であったとするならば、ここでいわれるのは欲求主体としての自我である。原初的(primitive)としてあるから、個人が行動として見せる単なる独善やわがままのことではなく、人間が根源的にもっている我欲や偽善のことを指している。

## ④ 優越動因としての自我(The ego as dominance-drive)

第三の利己心としての自我と関連するが、ここでの自我は、他者への優越欲求や支配欲求などを指している。一定以上の地位を求める欲求や他者からの是認欲求などもこれに含まれる。さらに、否定的な状態や否定的な感情に陥ったとき、それを防衛する機制(defensive mechanism)や地位を回復しようとする欲求が働くことは、まさに自我がこの類の性質をもっている証である。

## ⑤ 心的プロセスの受動的体制としての自我(Ego as a passive organization of mental processes)

よく知られる Freud (1940) の自我で、人間の性質のベースを快楽主義とみなす立場からの考え方である。自我は、エス (Es) と呼ばれる衝動と超自我 (Über-Ich)、外的環境がぶつかりあう心的葛藤を自覚して受け身的に調整することが役割である。自身に力動的な力をもっておらず、三者の衝突する力をうまく鎮め舵を取るだけの存在である。Freud のこのような受動的体制の自我は、後に Hartmann (1958) をはじめとした Freud の後継者たちから批判されることになる。

#### ⑥ 目的追求者としての自我 (Ego as a “fighter for ends”)

目的追求者 (fighter for ends) とは、James (1890) が意識の性質として述べた言葉を、Allport が借りたものであり、自我を満足状態へと至らせるための、生体のさまざまな内面的、生物学的活動を目的論的にとらえた見方である。情緒を支配したり統制したりして自己尊重を追求する働き (McDougall, 1932) や、成功経験が要求水準を上げていく場合のような、自我を上方へと推進させる力 (Koffka, 1935)、また抑圧などの防衛機制 (Goldstein, 1951) などを指す。

#### ⑦ 行動システムとしての自我 (The ego as a behavioral system)

行動の場の一システムとして設置される自我であり、Koffka (1935) や Lewin (1936) などゲシュタルト心理学者の考え方からくるものである。そこでは、行動的環境 (behavioral environment) と呼ぶ現象的行動が問題として扱われる。たとえば、Koffka のあげるコンスタンツ湖の伝説は1つの例である。

冬のある日の夕暮れ時、強く吹きつける吹雪のなかを馬にのった一人の男が宿にたどり着いた。彼は、何時間もの間、一面の雪のために道も陸標もおおわれた風の吹き荒ぶ平原をやってきて、こうしてこの避難所にたどり着けたのは幸運であった。ドアの所へ出てきた主人は、驚きの眼差しでこのよそ者を眺め、そして彼にろこからやってきたのかを尋ねたのである。男は、宿とはまったく反対の方を指さしたが、すると主人は畏怖と脅威の声でいった。「コンスタンツ湖の上をやってきたことを知っているのですか。」それを聞いて、男はぱったりと倒れ、宿屋の主人の足下で息絶えた。

(Koffka, 1935, pp.27-28)

男にとっては、吹雪のなか平原を歩いてきただけに過ぎないのであるが、実際には湖の上を歩いてきたわけである。ゲシュタルト心理学は、実在の地理学的な行動ではなく、個人にとっての現象的な行動を、環境場の1つの体制化されたものとして扱う。そのためには、現象的行動をつくりだす自我を、環境場のなかに置いてやらねばならない (Koffka, 1935)。ここでの自我は、指向する単体としての自我ではなく、環境に対して何らかの関わりをもった場合にたてられる力 (force) としての自我である。環境場における自我や環境の境界を大きく変え、事態の流れを決定づける役割を担っている。

### ⑧ 文化の主観的体制としての自我 (Ego as the subjective organization of culture)

人は社会的な存在であり、社会的な存在である人間が集まっているが故に、社会や共同体が維持される。ここでの自我は、社会的に (広い意味では文化的に) 形成された人間として理解されるものである。Sherif & Cantril (1947) によれば、自我は生まれて以来存在する生得的なものではなく、発達とともに成長し、社会性 (社会的価値) を身につけていく存在である。社会性をうまく身につけることができ、かつその社会的な価値に自己を同一化させることができるならば、人は社会のなかで十全に生きることができる。ところが、反社会体制の暴徒のように、社会に反旗をひるがえす者たちもいる。彼らは、社会での運のなさに失望したり、社会から与えられるべき恩恵を十分に受けられなかったりして、十分な社会性を有していないなどの特徴をもっている (Cantril, 1941)。社会的な存在としての自我、広くいえば文化的な体制をもった自我があるからこそ、集団や社会の中での人の行動が説明できるわけであり、ここでの自我はそうした類の自我である。

### (2) Allport の自我論を「自我 (ego or I)」「客我 (me)」「自己 (self)」の観点から検討する

それでは、筆者なりの補足も加えながら見てきた Allport の8つの自我を、以下では、語源的、文法的な観点から導いた自我や自己の観点、すなわち、「私」の行為主体である「自我 (ego or I)」、 「私」の客語としての「客我 (me)」、自他分別的な文脈で「私」

の一個存在を示す「自己 (self)」から検討してみる。

まず、第一の知者としての自我は、文法的に言えば主格としての「私」である。James (1890) の「知る－知られる」の構図における「知る」にあたる行為主体でもあるから、ここでの自我は ego あるいは I であろう。Brentano や Husserl は時折 ego という言葉を用いながら、たいていは ego に相応する文法的な主格の ich を用いている。Oesterreich など Allport の挙げる現象学関連の2つの引用文献でも ich が用いられているが、いずれにしても、本質的には ego や I と同様に考えてよいものといえる。

第二の認識対象としての自我は、同じく James (1890) の「知る－知られる」の構図における「知られる」にあたる客体としての「私」であるから、ここでの自我は me である。しかし、実際の研究では、知られる「私」の内容を扱う場合には、self が客体として問題になっていると考えるようで、Amen (1926), Lundholm (1940), Rogers (1951) などすべての論文で self という言葉が用いられている。これは、冒頭でも述べたように、今日の心理学における一般的な使用ともなっている。

第三の原初的利己心としての自我であるが、利己心は、Allport の言葉では egoism ではなく selfishness となっている。自他のやりとりのなかで、self が強引に出過ぎる状態を selfishness というのだが<sup>脚注6</sup>、ここでは selfishness となる原因としての「私」の性質、すなわち、「私」のもつ無自覚的な selfishness の働き、根源的欲求のことを指している。これにどのような言葉をおくべきかを文法的な観点から一概にいうのは難しいが、心理学では、無自覚的な「私」の性質は ego の性質に帰して扱われることが多い。意識しない無自覚的な働きが、行為主体である「私」にはある、そういうふうに考えるのである。Stirner や Le Dantec も ego という表現を用いている。

第四の優越動因としての自我は、意識してそうしたいと思う欲求ではなく、意識しなくてもそういう欲求が人間にはあるというものである。これも、第三の自我と同様の考え方をとって、行為主体の ego について述べたものとされる。

第五の Freud の自我は、意識・無意識との関わりでも議論され (Freud, 1940), 論

<sup>脚注6</sup> Cooley (1902) は、egoism と selfish について言葉の上では違いはあるのだが、実際には、ともに非難に値する「でしゃばり (self-assertion)」行為を指すときに用いられているという。分別はできないと述べる。

を単純に整理することが難しい。とはいえ、エスや超自我、外的環境を調整する無自覚的な機能としての「私」を重視するならば、第三、第四の自我と同様、行為主体の ego について述べられたものといえる。Freud も Ich というドイツ語の主格人称代名詞を用いている。

第六の目的追求者としての自我も、第三、第四、第五の自我と同様、意識しておこなわれるような働きではなく、意識しなくてもおこなわれる働きが人間にはあるというものを指している。すなわち、行為主体の ego について述べられたものである。また、この働きを述べる際の Koffka や Goldstein の言葉は、いずれも ego となっている。

第七のゲシュタルト心理学の自我は、システムとしての一単位であり、行動の場（環境場）を説明するためになければならないとして置かれるものである。そして、そのシステムの中には、現象的行動を生起するのに関わった知覚や感覚、思考や意志など、すべての機能が事後的におかれることになる。ゲシュタルト心理学にとってもっとも重要なのは自我の説明ではなく場の説明である。ここでの自我は、場の力動を説明するために設置された存在、そして個人固有の経験を有する総体として他の場システムとは区別される一個存在である。よって、これは自他分別の文脈をもつ self であろうと思われる。しかしながら、Koffka や Lewin は ego という言葉を用いている。動作それ自体に着目すれば ego の方が適切であるが、行動の場を説明する概念として他のシステムとの関係の中で設置された一システムであることに着目するならば、self の方が適切である。おそらく、彼らは、第三～第六の自我と同様、知覚や感覚、思考や意志の行為主体としての意味を自我にもたせたかったのだろうと考えられる。

第八の文化の主体的体制としての自我は、人が社会や文化といった共同体のなかで集団を維持していけるのは、「私」にその社会や文化のもつ共同体独自の価値が内在化されているからだ、という文脈で用いられるものである。社会や文化が変わると、正常であることが異常であったりもする（Cantril, 1941）。このように、この「私」は、集団社会や社会運動を支えたりするメカニズムを説明するために要される概念であり、社会的、文化的な存在である個人を示すものである。これも、第七の自我と同様、文化や社会における人の行動を説明するために事後的に設定される社会や文化の中の一存在としての「私」である。よって、自他分別の文脈をもつ self が適切であろうと考

えられる。ところが実際には、「自我関与する (ego-involvement)」などといったように、社会的価値や規範を形成する行為主体的な視点で「私」を用いることが多い (cf. Sherif & Cantril, 1947)。第七の自我で述べた、ゲシュタルト心理学者の用い方の混乱と同じ構造である。文化や社会の視点から「私」をとらえるなら self がより適切であろうが、関わりを志向する行為主体的な「私」に視点の中心を移すならば、ego を用いる方が適切であろうともいえる。一概に ego, self とはいえないのが実際である。ちなみに、Sherif & Cantril (1947) は ego という言葉を統一して用いているようである<sup>脚注7</sup>。

### (3) 語源的、文法学的観点を超える心理学独自の「自我」「自己」概念の用いられ方

本章では、「私」の行為主体を「自我 (ego or I)」、客語としての「私」を「客我 (me)」<sup>8</sup>、自他分別の文脈をもつ「私」の一個存在を「自己 (self)」として用いる立場を、語源的、文法学的な観点から導いた。そして、それをもって従来から混沌とした心理学での自我・自己の実際の用いられ方を検討している。その結果、語源的、文法学的観点を越える2つの心理学独自の扱い方が見えてきたように思われる。

第1に、第二の認識対象としての自我のように、客体としての「私」を扱う場合には、心理学では「自己 (self)」を当てる場合が多いということである (飯島, 1992)。すでに述べたように、客体としての「私」には、文法学的には me が該当する。James (1890, 1892) も、me は客体としての「私」だと述べた。しかし、興味深いことに、後続の心理学者たちが客体としての「私」を扱うとき、はじめは me として James を引用しながらも、最終的には自分たちで self に置き換えて「私」を扱っている。なぜ、このようなことが起こるのだろうか。

直接的な言及ではないが、この点、M. Scheler の考え方が参考になる。Scheler は、人称代名詞である I と self がいかに分別されるべきかを説明している (Schutz, 1962)。Scheler によれば、「私は私の自己を知覚している (I am perceiving my Self)」という

<sup>脚注7</sup> ego-enhancement, ego-gratification といったように (Sherif & Cantril, 1947, p.350)、通常われわれが self (セルフ・ハイフン) で用いるような言葉にも ego を用いている。このことは、彼らが ego という言葉で統一して文章表記していることのアラわれともみなせる。

場合、その「私 (I)」は、単に話者が誰であるかを指示しているだけである。行為の主体である I は単にその場での表現であり、心的生の経験 (experience of psychical life) としての「私」を表現するものではない。I は、第一人称に呼びかける言語形式を特徴づけているに過ぎないのであり、「私」の関わり方 (主格、話者、行為主体) を示す格程度の存在でしかない。Scheler はこの点文法学の限界があると述べる。Scheler の考え方では、心的生の経験としての「私」は別に「自己 (Self)」として設置されなければならないのである。

この観点に立てば、me も同様の考え方で説明が可能である。すなわち、me も、行為の到達点が「私」であることを示すだけの存在であり、心的生の経験としての「私」を示す言葉ではない。心理学は、「私」が行為の到達点として客体化されているという状態だけでなく、もう一步踏み込んで、客体となった「私」の内容まで扱うことが多い。James 以降の心理学者の多くは、それを me ではなく self として表現してきた。その背景には、単なる「私」の客語的存在を越えて、心的生の経験を扱おうとした心理学独自の文脈があったからだと考えられる。

実際、主体としての知る「私」を I、客体としての知られる「私」を me と定義した James でさえも、心的生の経験としての「私」に踏み込むと、途端に不安定な見解を呈することになる。James は、「私」の構成要素に大きく3つの側面があることを述べる。すなわち、物質的 (material)、社会的 (social)、精神的 (spiritual) 側面である。ところが、James の1890年版の“The principles of psychology”では、これらを、“material self” “social self” “spiritual self” と、被知者としての「私」を self で統一して表現している。それに対して1892年版の“Psychology”では、“material me” “social me” “spiritual me” と、被知者としての「私」を me に修正して表現している。James においてさえ生じるこの混乱は、筆者の見解では、語源的、文法学的文脈を越えた「私」概念を使用する心理学固有の文脈から生起するものである。Scheler の立場に立脚すると、James のいい回しは、修正する前の1890年版の方が正しかったということになる。

第2に、無自覚的な「私」の性質や機能は、行為主体としての自我 (ego) が有するものとして考える、そういう暗黙の合意が心理学にはあるということである (飯島、



1992)。これには、上記で挙げた第三～第六の自我が該当する。そして、無自覚的な性質や機能を示す「私」を ego と表現することを好み、どちらかといえば I を使用することを嫌う。文法的な観点からいえば、Scheler の言からも明らかなように、ego や I という言葉自体が第三～第六のような心的な性質を有することは決してない。ego や I は、単なる主格、話者、行為主体程度の意味しかもたないものである。しかしながら、それを何らかの言葉で表現しなければならないところに心理学独自の文脈がある。心理学は、それを主に ego で表現してきた。日常的に馴染みのある I よりも、日常的には馴染みが薄く、かつ I と同義のものとして近代哲学で古くから用いられてきた ego を用いたのだと考えられる。ここでの ego は、単に行為主体として表現される「私」以上のものであり、人間の根元的な性質（原初的利己心、優越動因、目的追求者など）を備えた心理学的な実体概念とみなされるものである。

よって、上記で導いてきた自己関連の言葉の定義は、「私」の行為主体を「自我(ego)」、客語としての「私」を「客我(me)」、自他分別の文脈をもつ「私」の一個存在であり心的生の経験体を「自己(self)」とする、と修正されることになる。修正点は、「自我」から I を除いたことと、自他分別の文脈をもつ「私」の一個存在である self に「私」の経験内容を込めたことである。

## 第5節 self-（セルフ・ハイフン）における言葉使用の混乱

ego や I, me, self, 自我, 自己, 「私」の用いられ方は、ひとまず以上のように整理することが可能であると思われるが、後に述べるように、扱う現象が複雑になると、途端に言葉使用の限界や制限が出てくるのが実際である。それについては、次節以降であらためて述べる。

ここではその前に、混乱しているとされるもう1つの自己関連の言葉の使い方, self-（セルフ・ハイフン）について見ておく。それは、第1章で暗に用いた「自己感情(self-feeling)」についての問題でもある。

冒頭で述べたように、Wylie (1961) が、自己満足(self-satisfaction)や自己受容(self-acceptance)、自尊感情(self-esteem)、自己好意度(self-favorability)、理想

自己と現実自己の一致 (congruence between ideal self and self), 理想自己と現実自己のズレ (discrepancies between ideal self and self) といった、広く「自己感情」と総称できる概念が、文字通りでいえば同義ではないながらも、混乱して用いられている事実を指摘したことはあまりにも有名である。また、self-esteem, これも自己感情の1つであるが、それを自尊感情と訳すのか自己評価と訳すのか、ということも自己の研究をする者にとってはいつも問題となっていたことである (cf. 三田, 1988)。

しかし、これらの混乱は、主に測定をベースとした実証的研究の中で生じている点をまず押さえることができる。つまり、測定された自己感情をいかなる言葉で同定するかということが生じてくる混乱である。よって、self (セルフ・ハイフン) の言葉の問題は、実証的に得られるデータの性質との関係において考えられるべきであって、語源的あるいは文法学的資料から考察してきた前節までのものとは次元の異なる問題である。本研究では、Wylie の指摘する self (セルフ・ハイフン) の言葉の使用の混乱や self-esteem の翻訳の問題を次のようにして整理しようと思う。

第1に、本研究では、「自己感情 (self-feeling)」を測定したものを広く「自己評価 (self-evaluation)」と称していく。Wylie が述べるように、確かに、self-esteem と self-satisfaction, self-favorability などの自己感情は字義的には別物であり、かつ言葉に与えられる意味も微妙に固有なものをもっている。決して同じものだとはいえない。しかし、それらを実証的に扱う場合には、事情は別である。まず、測定されたデータで表現されるものは、言葉で self-esteem と self-satisfaction, self-favorability などと分別されるほどの細かさをもちあわせていない。実証的に扱われる self (セルフ・ハイフン) の概念は、日常自然に湧きあがる自己感情の同定から生起するものではなく、James (1890) の「知る—知られる」の構図で、被験者が言語報告 (評定も含む) した自己感情を仮説構成的に扱って産出される自己評価である。したがって、たとえ使用される言葉が別物であっても、測定されたもの、測定するステップは同じであるということが希ではない。自己感情は、それが自己への評価的感情であるということから、一般的には「自尊感情 (self-esteem)」として扱われる場合が多いが (Bachman & O'Malley, 1977; Blascovich & Tomaka, 1991; Coopersmith, 1959, 1967; Rosenberg, 1965), 測定では、自己の感情や自己の諸相を対象化して「評価

(evaluation)」を求めるというステップを取る。実証的研究で扱う自己感情は、その意味で、「自己評価 (self-evaluation)」という言葉で表現する方が適切だと考えるのが、筆者の本研究における立場である。もちろん、言葉上「自尊感情 (self-esteem)」を用いることも大きな問題ではない。実証的研究の場合、「自己評価 (self-evaluation)」や「自尊感情 (self-esteem)」といった言葉自体のもつ特徴から現象の同定をはかろうとすることよりも、測定された自己感情の特徴や性質を把握することと、それをどのような言葉で表現するかというその関連に留意することの方が重要であると考えられる。

第2に、本研究では、「自己評価 (self-evaluation)」という言葉で自己感情の測定概念として総称していくが、そのことはすべての自己感情を自己評価という言葉だけで称していこうということを必ずしも意味しない。測定内容によって、細かな自己感情の同定をしなければならない場合には、測定された内容をもとにその都度表現を考えることも重要なことである。

Wylie (1961) は、実証的な自己研究では、self-satisfaction, self-acceptance, self-esteem, self-favorability, congruence between ideal self and self, discrepancies between ideal self and self といったように、自己感情を表現する言葉が混乱して用いられている事実を指摘し、それらを「自己尊重 (self-regard or self-regarding attitude)」としてまとめることを提案した。この点は、筆者が自己感情を測定したものを「自己評価」と称していこうとすることと似ている。しかし、このようにまとめている場合も多いが、自己評価と自己受容のように、どうしても分けなければならない場合もある。それは、扱う研究のテーマや文脈による。本研究は、「自己評価 (self-evaluation)」という総称を大枠のベースとしながら、状況に応じて、細かな自己感情の表現をその都度設定するという立場ですすめる。

第3に、self-esteem を「自尊感情」と訳すのか「自己評価」と訳すのかという問題については、これだけで翻訳の是非を判断することはできないとする。本研究では、self-esteem とほぼ同義なものとして self-evaluation を用いるし、その邦訳には「自己評価」を当てる。これは、第1の立場ですでに述べた。日常で自己感情を表現したい場合には、「自尊感情 (self-esteem)」という言葉で当てる方が適切な場合が多いよ

うに思われるが、測定をベースとした実証的研究の場合には、どちらの翻訳がより適切かという議論は本質的ではない。何と翻訳しようと、測定されるものは同じだからである。本研究では、それを上記の理由で「自己評価 (self-evaluation)」と置いたに過ぎない。実証的には、自己感情の言葉は、実証的に得られるデータの性質との関係において当てられるべきだと考えるのが筆者の立場である。

## 第6節 ego, I, me, self の同時的使用—G. H. Mead の自己論—

第4節では、Allport (1943) の整理した自我概念とそこで扱われた研究をもとにしながら、自己関連の言葉を、次のように整理した。すなわち、「私」の行為主体としての「自我 (ego)」, 「私」の客語としての「客我 (me)」, 自他分別の文脈をもつ「私」の一個存在としての「自己 (self)」である。語源的、文法的な状況を逸脱することからくる心理学独自の状況を考慮して、客体としての自己には me ではなく self を、「私」の行為主体である自我には I ではなく ego を一般的に当てたと考えたのが、ここでの特徴である。

しかし、言葉の使用は、扱う現象によって決定されるという考え方もおさえておくことが必要である。現象が変われば、同じ対象にも違った言葉の当てられることが珍しくないし、言葉で現象を表現しようとするものの限界ともいえる点である。たとえば、上記のように自己関連の言葉が整理されようと、扱う現象が変われば、その適切さも変わることは否めない。実際、第七の行動システムとしての自我、第八の文化の主観的体制としての自我がそうであったように、静的に自己の概念を設定する研究であっても、そこにダイナミックな動きを想定せざるを得ない状況があるのが実際である。たとえば、Koffka (1935) は、行動の場を説明する一システムとして ego を設定した。この場合、他のシステムとの関係のもと設置された一システムという点に着目すれば、selfの方が適切だと考えられるが、行動に際して働いたとされる知覚や感覚、思考や意志の行為主体という点に着目すれば、egoの方が適切だということになる。着眼点が変われば、同じ対象を見ていても状況はすっかり変わってしまい、それに応じて、当てられる言葉の適切さも変わるのである。この場合、selfを当てるか egoを当てる

かという選択は、どちらの着眼点を優先するかによらざるをえない。

心的生の経験とされる「自己 (self)」は、どちらかといえば、静的である。それに対して、行為主体としての「自我 (ego)」は動的である。扱う現象が複雑になれば、この静と動が複雑に交錯するのが実際である。本研究が依拠する自己関連用語の定義は主に次節でおこなうが、そこでもこの静と動の交錯は前提とされる。ここでは、本研究の依拠する定義に入る前に、静と動の交錯を同時に扱おうとした G.H.Mead の自己論をまず参照しておこうと思う。いうまでもなく、Mead (1934) の “Mind, self, and society, from the standpoint of a social behaviorist” は、自我や自己研究者にとって代表的著作の一つである。

Mead 自己論が扱う代表的現象は、役割取得 (role taking) など他者との象徴的相互作用 (symbolic interaction) <sup>脚注8</sup>の過程にある。Mead の挙げる次の一例には、I, me, self の関係が集約されており、参考になる。

彼がある別の成員にボールを投げられるのも、チームの他の成員たちから彼に、そうしろという要求がなされているからである。これが、彼の意識の中で、彼にとって直接に存在している自己 (self) なのである。彼は、他の成員たちの態度をもち、彼らが何を望んでいるか、彼の行動の結果がどのようなものであるかを知っており、また、彼はこの状況に対して責任を感じている。今やこれらの態度の組織化された組み合わせの現存こそが、「I」としての彼が反応している「me」を構成する。

(Mead, 1934, p.175)

Mead (1934) にとって自己 (self) とは、社会的経験・社会的活動の過程のなかに生じる一個人の経験的存在である。他の諸個人に対する所与の関係の結果として、個人のなかで発展するとされる。me とは、個人が自ら想定する他者の態度の組織化された組み合わせとされる。他者の態度には、具体的な他者に対するもののみならず、組

<sup>脚注8</sup> 片桐 (1996) は、これを文脈の意から「象徴的相互行為」と言葉を変更している (p.11)。

組織化されることによって形成される「一般化された他者 (generalized others)」の態度も含まれる。そして、I は、このような me を受けて反応する行為主体である。ここでの行為は、一個人の世界で説明がつく行為というよりも、他者を介した、他者との相互行為を前提とする行為と考えていただければよい。

上記で導いた自己関連の言葉の定義から Mead の自己論を見ると、まず Mead の self は、他者との関係性のなかで個人としての独自性を担っていく存在、他者との関わりのなかで発展していく固有の存在とされている。これは、上記で定義した、自他分別の文脈を前提とする心的生の経験としての self とほぼ同様のものである。それは、単に、個体あるいは一個の人間を指してはいない。Mead は、self が生物学的有機体とは分別されること、身体 (body) とは分別されること、成長する存在であること、を述べている。そして、Mead の I は、組織化された他者の態度 (me) をもとに行為として反応する主体であるから、人称代名詞の主格、行為主体としての I である。ego は用いていないようであるが、ここまでは、上記で考えてきた思考の流れに沿うものとして理解できる。

それに対して、Mead の me に対する見方はやや難解である。me は、文法的には単なる「私」の客語、「私」が行為の到達点であることを示す程度の存在であるが、そこを越えて扱われようとするところに心理学独自の文脈がある。心理学では、客体とされる「私」の経験的内容に踏み込む場合には、me よりもむしろ self を客体とみなして扱うことが多かった。このことは、第4節ですでに述べた。

Mead の me は、行為主体としての I が、行動にうつす際に参照する他者の態度あるいは組織化された集合体としての態度のことである。行為主体である I は、自己意識 (self-consciousness) をもって、組織化された他者の態度 (me) を自覚し、それを受けて行為するのだとされる。「われわれは、われわれ自身を自覚し、状況が何であるかを自覚している」(pp.177-178) と Mead が述べるように、行動を起こす一瞬間前には、どのような態度が適切か、どうするべきかという行動を自覚しているのである (他にも Blumer, 1969)。ここでの me は、James (1890) の「知る-知られる」の構図における知られる「私」と考えられるものである。というのも、この me は、行為の一瞬間前に働く自己意識のもと自覚されるものだからである。しかし、Mead の me は、

単に客語としての「私」のみならず、「私」の経験的内容にまで踏み込むものである。従来であれば、これには一般的に self をおいてきたのであるが、Mead 自己論の場合、一個人の経験的存在を self としてすでに設定しているのだから、知られる「私」に self をおくことができない。me はこのような状況の中で、従来扱われてきた客体としての self とほぼ同義のものとして設定されているといえよう。

Mead 自己論で興味深いのは、静と動が複雑に交錯する問題状況の中で、言語使用の限界を露呈している点である。それは、行動にうつす際に me を参照する自己意識の構図においてである。Mead 自己論では、この構図において、自己意識の行為対象を me とするにもかかわらず、その行為主体に対する言及をできないでいる。James であれば、それは I となるのだが、Mead は me を受けての行動における行為主体、反応主体 (cf. ボールを投げる「私」) を I と先においてしまったので、自己意識の行為主体に I を置けないのである。Natanson (1956) は、Mead の自己意識の構図を取り出して検討するため、I とは別の認識主体 (自己意識の行為主体) として ego をわざわざ置き議論をすすめている。交錯する動と静を同時にうまく扱っているように見える Mead 自己論においても、Natanson のように着眼点を変えれば、言葉使用の限界を露呈せざるを得ない事実を容易に確認することができる。

## 第7節 H. J. M. Hermans の対話的自己論

1990年代に入って、Hermans, Kempen & van Loon (1992) による「対話的自己 (the dialogical self)」の理論が提唱される。これは、心理学における自己研究の出発点ともされる James (1890, 1892) の自己理論を踏襲しつつ、Bakhtin (1929/1973) の「多声性 (multivoicedness)」の概念を取り入れて考案された包括的理論である。もちろん、対話的自己の理論で迫ることのできる現象にも限界はある。しかし、この理論は、Mead 自己論も含めてこれまでの自己研究が抱えてきた自己関連の言葉の問題の多くを解決しており、今後の研究の発展可能性を提供するものでもあり、第1章で多用している「自己の諸相 (aspects of the self)」の捉え方をかなりの程度視覚的に提供するものでもある。

ここでは、本研究が依拠する自己論として、対話的自己の理論の定義およびそれによって明らかにされる自己の世界を概説する。その際には、対話的自己の理論が、これまでの自己研究の問題点をどのように解決するのかという点にも言及していく。

まず、Hermansらは、対話的自己の現象を、次のように描写している。

われわれは、想像上の世界における比較的主体的な「私 (I)」のダイナミックな多様性をにらみつつ、自己 (self) を概念化する。最大限簡潔に述べれば、この概念は、次のように公式化される。すなわち、「私 (I)」は、状況と時間の変化に応じて、あるポジションから他のポジションへと空間の中を移動することが可能である。「私 (I)」は、さまざまな、そして時には相反するポジションの間を行ったり来たりする。「私 (I)」は、想像の上においては、各ポジションに声を授ける力を有している。結果、両ポジション間には対話的な関係が生まれる。声は、物語における登場人物とやり取りをするかのように機能する。いったん登場人物が物語の中で動きを与えられると、その登場人物は独自の人生を帯びるようになり、語りを必要とするお膳立てができあがる。各登場人物は、独自のスタンスから経験について語るべき物語をもっている。これらの登場人物は、さまざまな声で、それぞれの「私 (Mes)」や世界についての意見を交換する。結果、そこには複雑な、語りによって構造化された自己の世界ができあがる。

(Hermans, Kempen & van Loon, 1992, pp.28-29)

自己の世界をこのように表現する対話的自己の理論には、大きく3つの特徴がある。その1つは、自己の世界を構成する基本的な要素、「私」「他者」「モノ」のすべての要素を同時に、かつ包括的に扱うことのできる点である。

自己の世界には、無数の「私」が存在している (Gergen, 1972; Rosenberg & Gara, 1985)。男である「私」、中学生1年生の「私」、元気な「私」、かわいい「私」、勉強をしない「私」、友だちの多い「私」など、いくらでも挙げることができる。また、現在の「私」だけでなく、そこには物理的距離の離れた「私」、過去や未来の「私」も存在する。たとえば、アメリカへ留学した「私」、明日は海に行く「私」、志望大学に入っ



た「私」、昨日 B 君と喧嘩した「私」などである。

自己の世界に存在するこれらの「私」は、Hermans ら (1992) が *me* と称するように、外部や第三者から客観的に見られる特徴のことではなく、「私 (I)」が「知る－知られる」の構図 (James, 1890) をもって得られる、知られる「私」のことである。よって、たとえば、ここで挙げられる男としての「私」はきわめて主観的な自己意識（あるいは自己態度や自己概念）を意味しており、生物学的に決定される性別とは別物である。場合によっては、生物学的には女性とされる者が、男としての「私」を抱くことも可能である。

また、物理的距離の離れた「私」や、過去や未来時制で示される「私」は、すべて「今」「ここ」(here and now) の場から解釈された「私」に過ぎないものである。たとえば、アメリカは物理的には距離が離れているが、人はアメリカでの出来事を語るとき、「ここ」の場からしかそれを語ってはいない。「ここ」の場は、個人の空想的な世界であるから (Hermans, 1996; Josephs, 1998; Watkins, 1986)、語るその場においては、アメリカが物理的にどこにあるかはまったく問題とならない。同様に、過去の出来事は、カレンダー上では過ぎ去った出来事である。しかし、人は過去の出来事を「今」の場からしか語ってはいない。当時は辛かった経験でも、「今」の場では思い出と化していることがよくある。それは、人が過去の出来事を、過去に経験したそのままの姿で再現して語ってはいないからである。たとえ過ぎ去った事実であろうと、人はそれを「今」の場で新たに経験しながらしか語ることができない。これらは、空間的・時間的志向を有する「私」が知られる「私 (me)」に過ぎないものであり、知る「私 (I)」が、「今」「ここ」の場から抱いた主観的な自己意識に過ぎないものであることを示唆している (Hermans, 1987; Hermans & Kempen, 1993; Josephs & Valsiner, 1998)。

自己の世界には、「他者」や「モノ」も存在する。たとえば、Becker (1971) は、新車のジャガーに腰をかけた変な男を、持ち主がみつけて射殺した話を紹介している。ここでの新車のジャガーは、持ち主にとって、どこでも見られる新車のジャガーとは異なるものである。客観的には同じものであっても、彼にとっては同じものではない。それは、そのジャガーが「私のジャガー」だからである。これは、明らかに James (1890,

1892)のいう「物質的(material)」自己の考え方から説明されるものである。Jamesが述べるように、私の服、私の妻や子供、私の先祖や友人、私の名声と仕事、私の土地や馬、ヨットに銀行口座は、多かれ少なかれ、人の自己感情や生活感情に影響を与える。それらは、総じて、「私の(my)」を前につけて表現されるものである。

自己の世界を構成する「私」「他者」「モノ」を同時に、包括的に扱うことの利点は、これら「私」や「他者」「モノ」同士の関係、あるいはそこから生じる意味を扱うことができる点である。これまでの自己の研究では、理想自己と現実自己とのズレ(Achenbach & Zigler, 1963; Butler & Haigh, 1954; Higgins, 1987; Katz & Zigler 1967; Markus & Nurius, 1986; Ogilvie, 1987; Rogers, 1951; Rogers & Dymond [eds.], 1954)や自己の複雑性(Linville, 1985, 1987; Rafaeli-Mor, Gotlib, & Revelle, 1999; Woolfolk, Novalany, Gara, Allen, & Polino, 1995)、自己の多面的・階層的構造(Marsh, Richards, & Barnes, 1986; Marsh & Yeung, 1998; Rosenberg & Gara, 1985; Shavelson, Hubner, & Stanton, 1976)などの代表的研究に見られるように、「私」同士の関係は扱ってはきたが、自己の世界に存在する「私」や「他者」「モノ」との関係は、ほとんど扱ってこなかった。対話的自己の理論は、理想自己と現実自己とのズレを扱うのと同じ形で、「私」と他者、「私」と「モノ」「他者」と「モノ」、ひいては「私」と「他者」「モノ」など、あらゆる関係への接近を可能にする。その意味で、対話的自己は、包括的な理論と呼べるものである。

第2の特徴は、自己の世界に存在する「私」「他者」「モノ」を、ポジション(positions)へと変換する点である。ポジションの概念は、Harré & van Langenhove (1991)が述べるように、人の心理学的な現象、社会的現実をダイナミックに解釈するための変換ツールである。とりわけ、そのような目には見えない現実を実体化する点に注目すべき点がある。それは、目には見えない自己の構成要素を、人工空間(cyberspace)のような目に見える形で扱うことを可能にする。そして、ポジションへと変換し実体化することのもう1つの利点は、時間・空間的志向を有する心理現象を、同じ「今」「ここ」の場で同等に扱うことのできる点である。先にも述べたように、心理現象は、物理的にあるいはカレンダー的に離れた空間的・時間的志向性を有していることがある。しかし、それらは「今」「ここ」の場においては同等の存在である。アメリカへ留学し

た「私」と昨日 B 君と喧嘩した「私」は、同等の存在として「今」「ここ」の場に存在しうるのである。それは、このような「私」が、「今」「ここ」の場から解釈される同じ「私 (me)」に過ぎないものだからである。ポジション変換は、異なる空間的・時間的志向性を有するさまざまな「私」を、同等の存在として位置づけるのに有用なのである。もちろん、異なる空間的・時間的志向性を有する「私」が同等の存在として位置づけられるからといって、すべての「私」が空間的・時間的に同じ情報を有しているわけでない。それらは、「今」「ここ」の場で「解釈される」という点で同等の存在であるに過ぎないのである。

第3の特徴は、自己の世界を構成するポジション（「私」「他者」「モノ」）が、主体にも客体にもなり得る可能性を有しながら実体化されているという点である。自己の世界の構成要素として考えられる「私」は、これまでの研究では、ほとんどといっていいほど me（あるいは客体としての self）であった。それは、そこで考えられる「私」が、知られる「私」（James, 1890, 1892）であり、「今」「ここ」の場から解釈される「私 (me)」であったからである。しかし、ポジションの概念を自己の世界に導入した別の理由は、「私」が力動的な性格を有するものとして設定されなければならなかったからである。Hermans ら（1992）は、あるポジションは、自己という空想的な対話的世界の中で、他のポジションに向かって動く存在であると述べる。すなわちポジションは、一方で、I としての「私」あるいは主体としての自己 (self as subject or agent)（James のいう「知る自己 self as knower」も含まれる）なのであり、他方で、それ自身の情報を有する me としての「私」あるいは客体としての自己 (self as object)（James のいう「知られる自己 self as known」も含まれる）なのである。ポジションは他のポジションに動き働きかけることによって、それ自身が有する me としての情報を交換しあう。Hermans らの言葉でいえば、情報の交換は「声 (voices)」(Bakhtin, 1929/1973) によってなされ、声のかけ合い (interaction) によって生まれるあるポジションと他のポジションとの合意や理解、反対や矛盾、疑問、あざけりが、ポジション同士の関係を作る（同様の議論は他にも Davies & Harré, 1990; Josephs, 1998; Josephs & Valsiner, 1998）。自己を構成するポジション（「私」「他者」「モノ」）に与えられる主体的性格にこそ、Hermans らの対話的自己の理論のきわめてユニークな点

があるといえる (Barresi & Juckers, 1997)。

すでに述べたように、I も me も、文法的には主語あるいは目的語としての機能しかもたないものである。すなわち、前者は行為の主体であり、話者が誰であるか示すだけの存在であり、後者は行為の到達点が「私」であることを示すだけの客体としての存在である。実体的な存在として概念化をおこなう心理学の研究では、前者は概して ego とされ、後者は概して self とされた。これが、第4節までの考察で得た結論であった。しかし、Hermans らの対話的自己の理論においては、ポジションは I と me という主体と客体の性質を有した実体化概念である。この点に、従来の考え方との大きな違いがある。この作業によって得られる自己関連の言葉使用における利点は、Mead (1934) 自己論と同様に、I や me という言葉を用いながらも、self を一個体のもつ心的生の経験として全体に設定できることである。

なお、「私」ポジションが英語で表現される場合には、I か me のいずれかを選択しなければならないから、I か me かを見ることでポジションが主体として扱われているのか客体として扱われているのかが瞬時でわかる。しかしながら、日本語の場合は、「私」だけでポジションが表記されるから、主体として扱われているのか客体として扱われているのかまったくわからない。日本語の場合には、この I と me で分別されるポジションの主体的・客体的性質を文脈によって判断せねばならない。

ところで、対話的自己論のもっとも大きな利点は、自己の世界に「私 (I)」がさまざまに存在することを理論的に示すことができる点である。一個の「自我 (ego)」が統合された状態をいつも形作り、一貫した行動や感情、存在を表現していると考えのではなく、それ自身固有の情報を有したさまざまな「私 (I)」の関係、ぶつかり合いが自己の行動や感情、存在を表現すると考えるのである。これまで扱われてきた自己の世界に存在するさまざまな「私 (me)」は、Hermans の対話的自己の理論によって、1つ1つが主体的な性格を帯びるものとなるのである。

Mead の自己論と比較すると、この点の意義がより理解されるように思われる。Mead 自己論では、I は me (組織化された他者の態度) を受けて反応する行為主体としての存在であった。me にはさまざまな状態、内容を想定できるが、I はそれを反動的に受けるだけの存在であった。よって、さまざまな me のあり方があるとしても、行

為をする際には適切な me が選択決定されなければならなかった。それが Mead のいう象徴的相互作用の過程、すなわち、他者のシンボルを自己内に内在化させ、それを自己内でリハーサル、検証するという過程であった (Mead, 1912)。しかし、人の行動は、選択決定された適切な me のもとで行動するとは限らないし、前の行動と一貫しない形で次の行動のあらわれる場合もある。分裂病患者や多重人格者の行動はこのような特徴を顕著に示しているが、それは分裂病患者や多重人格者に限られたものではない。Gergen (1972) が、多重アイデンティティ (multiple identities) としてわれわれの人格を概説するように、私たちの行動はまるで多重の人格に支配されているかのような形であらわれることが珍しくないのである。しかし、多重アイデンティティは、決して人格全体が分裂を来しているということではなく、全体としては1つの統合した自己や人格をもちながらも、その時、その時において突出化する「私 (I)」は違っていることもある、というだけのことなのである。対話的自己の理論はその現象を、人は統合された自己の中にもさまざまな独立した主体としての「私 (I)」、それぞれの「私 (I)」にともなう固有の情報 me をもっている、そして、1つ1つの「私 (I)」は独立して突出化し行動化することが可能である、として説明する。それが、結果的には、Gergen のいう多様な「私」のあらわれとなって見えるのである。

Hermans & Hermans-Jansen (in press) は、こうして構築される対話的自己の世界を、図 2-1 のように図式化して描く。これは、第1章で用いた「自己の諸相 (aspects of the self)」を視覚化したものともいえる。

まず、自己の世界は、大きく2つの円世界に分けられる。1つは内部ポジションと呼ばれ、そこでの点はさまざまな「私 (I or me)」の存在を示すポジションである。たとえば、父親としての「私」、野心的な労働者としての「私」、スポーツの大好きな「私」などである。もう1つは外部ポジションと呼ばれ、James のいう「私のもの (mine)」とでも呼ばれるべき「他者」や「モノ」、すなわち物質的自己がそこに相当する。たとえば、私の「子供」、私の「同僚」、私の「車」などがそうである。ここでの「子供」や「同僚」は、客観的な存在としての子供や同僚を意味しない。自己の世界で知覚され意味づけられている私の「子供」であり私の「同僚」なのである。以下では、「私」も含めて、カギカッコつきで示される「他者」や「モノ」は、自己の世界

を構成する、自己の世界に生息するものであることを示す。

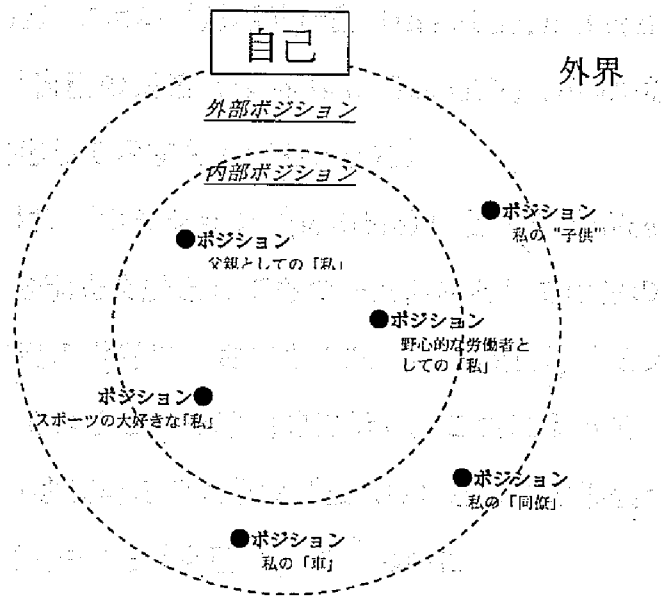


図 2-1 対話的自己における内部・外部ポジションと外界

(注) Hermans & Hermans-Jansen (in press), Figure 1 をもとに筆者が改編・翻訳。

## 第8節 まとめ

本章では、心理学で混沌とされている自己関連の概念の整理をおこなうことで、第1章で暗に用いた自己関連の用語の意味を明示しようとした。そして、語源的・文法的観点から、あるいは自我概念をはやくに整理した Allport (1943) の論考、心理学独自の用いられ方などを考察し、行為主体としての「私」には「自我 (ego)」, 客語としての「私」には「客我 (me)」, 自他分別の文脈をもつ一個存在の「私」には「自己 (self)」という言葉をあてることが妥当であることを導いた。それでも、動と静の複雑な交錯現象を扱うとなると、こうした定義が単純に当てはまらないことを、Koffka (1935) の論などをもとに示した。

第5節では、実証的研究の文脈において問題を混乱化させている self (セルフ・ハイフン) の問題を取り上げ、本研究における「自己感情 (self-feeling)」の測定概念についての筆者の考えをまとめた。すなわち、自己感情を測定したものは「自己評価 (self-evaluation)」と広く総称することとされた。

第6節では、静と動の交錯現象を扱おうとした Mead 自己論とその限界を概観し、その限界をうまく乗り越えていると考えられる包括的な自己理論, Hermans, Kempen & van Loon (1992) による「対話的自己 (the dialogical self)」の理論を第7節で概説した。それは、「自己の諸相 (aspects of the self)」がいかなる世界として捉えられるかを、より視覚化して示すものでもあった。

対話的自己論では、「ポジション (position)」と「声 (voice)」といった概念ツールを用いて、自他の分別を文脈としてもつ一個存在としての生の経験体を「自己 (self)」と置きつつも、自己の世界に、さまざまな「私」「他者」「モノ」が主体ともなり客体ともなって存在していることを理論的に示す。これによって、行為主体を一個の「自我 (ego)」,あるいは Mead のような「私 (I)」としてのみ表現してきたこれまでの自己論は、複数の行為主体を「自己 (self)」の中に「私 (Is)」として併せ持つ自己論へと姿を変える。複数の主体が仮定されるからといっても、それは分裂病患者のような個々バラバラの「私」、まとまりのない「自己」を意味するものではない。対話的自己の世界では、1つ1つの「私」は独立して突出化し行動することが可能でありながらも、全体としては有機的に結合され、1つの意味ある「自己」を作り上げていると考える。なお、Hermans らの対話的自己論によって表される日本語としての「私」は、英語でいう I でもあり me でもあり、それはポジションという実体化された概念を導入することによって扱いが可能となっている。しかし、日本語ではこの I, me の分別を文脈によって判断せねばならない。

青年の自己の世界を明らかにしようとする本研究は、「自己」や「私」といった言葉を多用するが、それらはすべて Hermans らによって提唱されたこの対話的自己論に依拠して用いられる。

【付記】

本章の主要な内容は、溝上 (1999), 溝上 (2001a) に収録されているが、ここで示すものはそれらを修正・加筆したものである。

good としての「私」(＝社会基準)と good enough としての「私」(＝個人基準)とがあることを述べた。従来の多くの自己評価研究がこの評価基準を考慮してきたように、本章でもこの評価基準を考慮に入れる。

本章では、上記の3つの観点を考慮した自己評価尺度を作成する。具体的には、項目に自己の特定領域が入らないよう留意しながら、肯定性次元における社会－個人基準の自己評価尺度、否定性次元における社会－個人基準の自己評価尺度を別々に作成する。そこでは、総じて4つの自己評価下位尺度(肯定性・社会基準尺度／肯定性・個人基準尺度／否定性・社会基準尺度／否定性・個人基準尺度)が作成されることになる。そして、この4下位尺度の特徴を活かすために、それぞれ算出される得点を組み合わせ「自己評価タイプ」を作成する。というのも、第1に、自己評価尺度における社会－個人基準の分別は、独立に測定される両基準の尺度を作成するだけでは十分ではないからである。それは、Rosenberg の自己評価尺度が陥ったことと同様の問題である(第1章第3節・(3)参照)。したがって、自己評価における両基準を扱う意義は、社会－個人基準による自己評価を分別して測定される2つの尺度得点を組み合わせ(たとえば、社会基準低群＋個人基準高群…very good ではないが good enough である自己評価)、自己評価をタイプとして考えることではじめてあらわになると考えられる。第2に、自己評価尺度における肯定性－否定性次元の分別も同様で、それも独立に測定される両次元の尺度を作成するだけでは十分ではない。したがって、自己評価における両次元を扱う意義は、肯定性－否定性次元による自己評価を分別して測定される2つの尺度得点を組み合わせ(たとえば、肯定性次元高群＋否定性次元高群…肯定的ではあるが否定的でもある自己評価)、自己評価をタイプとして考えることではじめてあらわになると考えられるのである。

このように考えて、本研究では、肯定性次元(社会－個人基準)と否定性次元(社会－個人基準)の自己評価下位尺度を4つ作成し、それらの組み合わせからなる自己評価タイプを検討することで、従来の問題点を克服する。その結果は、従来の主に一次元スケールで測定してきた高い－低いの自己評価研究を乗り越え、青年の自己評価の様相をより精緻に提示することにつながるだろうと考えられる。なお、4つの下位



## 第3章 青年の自己感情

### －肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己 評価尺度の作成－

#### 第1節 問題と目的

第1章で述べたように、本章では青年の自己感情の様相を検討する。具体的には、大きく以下の2点を検討することを目的とする。

第1に、青年の自己感情を見るための自己評価尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討することである。すでに考察したように、青年の自己感情を検討する場合、自己評価尺度を指標としておこなうことに問題はない。しかし、これまで用いられてきた自己評価尺度にはいくつかの問題点があり、その点を改善した尺度を作成することが必要である。第1章第3節で挙げた問題点を整理すると、改善すべき具体的な点は以下の3点である。

(1) 全体的自己(global self)を用いる・・・調査者が自己の特定領域を外在的に与えてその当てはまりを被験者に尋ねるのではなく、全体的自己を与えることによって被験者自身に重要な自己領域を暗に委ねる。

(2) 肯定性－否定性次元の考慮・・・第1章第3節-(3)からは、一次元スケールでいう高い－低いの自己評価だけでなく、高くもあり低くもある、あるいは低くなければそれでいいといったようなさまざまな自己評価を扱う必要性が論じられた。これらの自己評価を扱っていくためには、肯定性－否定性次元を別次元として測定する必要がある。従来の一次元スケールで測定されてきた自己評価高得点者・低得点者もこの中で扱えると考えられる。

(3) 社会－個人基準の考慮・・・同様に、Rosenberg (1965) が、自己評価には very

とされる自己評価を分別測定し、その組み合わせによるタイプ論で自己評価を検討することの是非については、調査における実際のデータを見て検証する。

本章で検討する第2の研究目的は、このようにして測定される青年の自己評価の様相を、青年期の自己感情の様相として示すことである。第1章第1節で述べたように、本研究は、青年期をア・プリアリに否定的様相を示すものとみなさない立場で出発した。本章で作成する肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度が、青年の自己感情をどのように浮き彫りにするか、それを示すのが本章の第2の目的である。

## 第2節 肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度の作成（調査1）

### 第1項 目的

第1節で述べた留意点をもとに、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度を作成することが本節の目的である。尺度の構成概念妥当性、信頼性（内的－一貫性、項目分析）の検討もあわせておこなう。

また、自己評価の検討を自己評価タイプによっておこなうことの是非についても検討をおこなう。とくに本節では、社会基準による自己評価と個人基準による自己評価との分別測定・その組み合わせによるタイプ論の考え方の是非について検討をおこなう。第1章第3節-(3)で述べたように、good enough としての自己評価（＝個人基準）として作成された Rosenberg（1965）の尺度は、全体的に very good としての自己評価（＝社会基準）となっていた可能性が指摘される。というのも、Rosenberg の自己評価尺度で測定された被験者の中には、個人基準による自己評価こそがそのまま社会基準による自己評価となっていた者が少なからずいたのではないかと考えられるからである。本節では、この点を実証的に検証することで、この問題点を克服する方法論的可能性がタイプ論にあることを示そうと考える。

### 第2項 方法

## (1) 調査内容

①自己評価尺度 従来の自己評価尺度や自己受容尺度を参考にして、肯定性次元における社会基準による自己評価と考えられる 16 項目（以下、SOCIAL）、個人基準による自己評価と考えられる 13 項目（以下、PERSON）、否定性次元における社会基準による自己評価と考えられる 14 項目（以下、SOCIAL-N）、個人基準による自己評価と考えられる 18 項目（以下、PERSON-N）、計 61 項目を用意した。なお、この項目選出は、筆者ともう一人の心理学を専攻する大学院生と合議しながらおこなった。評定は“全くあてはまる（5 点）”～“全くあてはまらない（1 点）”の 5 件法でおこなった。

②Rosenberg の自己評価尺度（以下、ROSEN） Rosenberg（1965）の自己評価尺度 10 項目（星野，1970 翻訳）。評定は，“あてはまる（4 点）”～“あてはまらない（1 点）”の 4 件法でおこなった。

## (2) 調査対象

関西の国公立・私立の大学生 561 名（男性 214 名，女性 347 名）。主に 2～3 回生である。

## (3) 調査時期

1995 年 9 月。

第3項 結果

## (1) 自己評価尺度の因子分析の仕方について

本研究では、肯定性次元と否定性次元の項目とをあらかじめ分別して因子分析をおこなう。一見奇異に思われるかもしれないが、こうした処理の仕方をおこなう理由は次の通りである。つまり、肯定性次元と否定性次元の項目をまとめて因子分析をおこなうと、本尺度作成の際に考慮したポイントの一つ、「否定性次元の否定が必ずしも肯定性次元にはならない」という前提を考慮することができない。否定性次元の項目であろうと、被験者全体としてマイナス的に肯定性次元の因子軸に高く負荷していれば、それは肯定性次元の項目と同じグループとしてまとめられる。しかし、たとえ全体的には否定の否定が肯定になろうとも、中にはそれが成り立たない者がいるだろうと考

えていくのが本尺度を作成する前提である。よって、肯定性次元と否定性次元は、たとえ全体の傾向がどうであろうと、別々に因子分析されなければならない。統計的に反転されては決してならないのである。この肯定性次元と否定性次元との関係は、統計的に反転されない形で、最後に組み合わせによるタイプによって検討されねばならない。それが本研究の目的を明らかにするためのステップである。このステップを経ても、否定の否定が肯定になる者も、否定の否定が肯定にならない者も、同時に扱えると考えられる。

## (2) 自己評価尺度の因子分析と構成概念妥当性

収集・測定した自己評価項目から肯定性次元、否定性次元とを分別し、別々に因子分析（主因子法・プロマックス回転）をおこなった。両次元ともに、社会基準—個人基準による自己評価の2因子が抽出された。社会基準、個人基準による自己評価としてあらかじめ設定した項目がすべてきれいにわかれたわけではないが、因子寄与の高い項目は大方きれいにわかれていたので、これで構成概念の妥当性は検証できたとした。

また、構成概念通りに因子寄与しなかった項目への対処も含めて、項目の決定を次のように定めた。1つに、あらかじめ設定した構成概念通りに因子負荷していること。2つに、両因子にまたがって高く負荷していないこと。この2つの基準を満たしつつ、4つの自己評価下位尺度（SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）の項目数がそろるように、因子負荷の高い項目から順次選んでいった。その結果、各6項目×4下位尺度の計24項目からなる自己評価尺度となった。

## (3) 項目分析

各自己評価下位尺度の総得点と各得点との相関係数を算出したところ、すべての項目において0.1%水準の相関を示した。またt検定によるG-P分析をおこなったところ、これもすべての項目において0.1%水準の有意差が見られた。これより、項目評定への信頼性は高いと判断された。

## (4) 内的一貫性の検討

自己評価下位尺度の内的一貫性（信頼性）をみるため、クロンバックの $\alpha$ 係数を算

表 3-1 肯定性次元（社会—個人基準）における自己評価尺度 12 項目の因子分析結果  
（主因子法／プロマックス回転後によるパターン行列）（調査 1）

No.	構成概念		因子 1	因子 2	共通性
[個人基準：PERSON] $\alpha=.817$					
B14	個人基準	私は、理想通りではないが、自分というものが好きです	0.722	0.013	0.532
B07	個人基準	私は、自分自身を受け入れ認めています	0.706	-0.180	0.403
B33	個人基準	私は、現在の自分に満足しています	0.682	0.002	0.467
B30	個人基準	私は、現在の自分が幸福だと思います	0.664	0.020	0.454
B23	個人基準	私は、自分に対して非常に肯定的です	0.588	0.185	0.490
B35	個人基準	私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思いません	0.560	-0.009	0.308
[社会基準：SOCIAL] $\alpha=.787$					
B49	社会基準	私は、自分のことを周囲の人とは異なるすぐれた存在だと思います	-0.240	0.865	0.596
B54	社会基準	私は、いろいろな点で人より優れていると感謝しています	0.079	0.667	0.505
B31	社会基準	私は、自分の知っている人々が、いつかは自分を尊敬の眼をもってあおぎみる日がくると確信しています	-0.097	0.632	0.347
B46	社会基準	私は、自分のいろいろな能力について自信をもっています	0.238	0.544	0.483
B52	社会基準	私は、自分自身を非常に頼もしい人間だと思います	0.180	0.522	0.400
B06	社会基準	私は、時々他の人たちからうらやましがられることがあります	0.200	0.281	0.176
分散 (%)			32.919	10.095	43.014

表 3-2 否定性次元（社会—個人基準）における自己評価尺度 12 項目の因子分析結果  
（主因子法／プロマックス回転後によるパターン行列）（調査 1）

No.	構成概念	項目	因子 1	因子 2	共通性
[社会基準：SOCIAL-N] $\alpha=.802$					
B56	社会基準	何かにつけて、自分は役立たない人間だと思います	0.823	-0.052	0.638
B04	社会基準	私は、社会のために何の役にもたない人間だと思います	0.742	-0.122	0.476
B40	社会基準	私は、自分が無力だと思っています	0.658	-0.007	0.428
B53	社会基準	自分には、自慢できるところがあまりありません	0.595	-0.066	0.320
B59	社会基準	私は、敗北者だと思うことがよくある	0.523	0.214	0.430
B50	社会基準	私は、いつも人から侮辱されているように感じます	0.445	0.111	0.259
[個人基準：PERSON-N] $\alpha=.746$					
B11	個人基準	私は、時々自分自身が嫌になるときがあります	-0.026	0.668	0.430
B48	個人基準	私は、自分自身の中に変えたい部分がたくさんあります	0.037	0.610	0.395
B19	個人基準	日によって、自分自身を好きになったり嫌いになったりします	-0.153	0.595	0.288
B08	個人基準	私は、今のままの自分ではいけないと思うことがあります	0.052	0.536	0.318
B21	個人基準	今の私ははがゆくて仕方がありません	0.202	0.526	0.422
B13	個人基準	私は、自分自身を非常によく責めるたちです	-0.055	0.508	0.234
分散 (%)			29.054	9.601	38.655

出したところ、SOCIAL ( $\alpha=.787$ ), PERSON ( $\alpha=.817$ ), SOCIAL-N ( $\alpha=.802$ ), PERSON-N ( $\alpha=.746$ )と満足いく値であった。これにより、尺度内の内的一貫性(信頼性)は高いと判断され、以後この24項目を自己評価尺度の項目と決定した(表3-1, 表3-2参照)。以後、得点は、合成得点を算出して用いることとする。

#### (5) 自己評価下位尺度間の相関

表3-3は、自己評価下位尺度間(SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N)の相関係数を示している。それを見ると、社会基準による自己評価は個人基準による自己評価と高い相関関係をもっていることがわかる(SOCIALとPERSONは $r=.467$ ,  $p<.01$ /SOCIAL-NとPERSON-Nは $r=.408$ ,  $p<.01$ )。SOCIAL-NとPERSONの相関になると、その値はさらに大きなものであった( $r=.604$ ,  $p<.01$ )。

#### (6) 自己評価下位尺度とRosenbergの自己評価尺度との相関

表3-3には、あわせて、自己評価下位尺度と尺度の内的一貫性が確認されたROSEN(クロンバックの $\alpha$ 係数=.864)との相関関係も示している。それを見ると、ROSENは個人基準による自己評価下位尺度であるPERSON, PERSON-Nと高い相関関係を示していたが(順に,  $r=.738^{**}$ ,  $r=.416^{**}$ )、それと同時に、very goodとしての「私」(社会基準)への評価であるSOCIAL, SOCIAL-Nとも高い相関関係を示していた(順に,  $r=.606^{**}$ ,  $r=.777^{**}$ )。

表3-3 自己評価の下位尺度間の相関係数

	SOCIAL	PERSON	SOCIAL-N	PERSON-N
SOCIAL	1.000			
PERSON	.467**	1.000		
SOCIAL-N	.450**	.604**	1.000	
PERSON-N	.191**	.440**	.408**	1.000
Rosenberg 自己評価尺度	.606**	.738**	.777**	.416**

(\*\*  $p<.01$ )

### 第4項 考察

本節は、従来の自己評価尺度で問題だと考えられた、(1)項目における特定領域、(2)肯定性－否定性次元との関係、(3)自己評価基準としての社会－個人基準、をどう扱うかということに焦点を当て、それらの問題点を克服するべく新たな自己評価

尺度を作成することを第1の目的とした。(1)については、特定領域を想定しない全体的自己(global self)の項目を与えることとし、(2)については、因子分析をおこなう前に分別をはかることで対処した。(3)については、肯定性－否定性次元それぞれの項目における構成概念妥当性として検討をおこなった。因子分析の結果は、各次元において社会－個人基準があることを確認するものであった。以上の結果から、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度は、各因子に負荷の高い6項目ずつを選出し、各6項目×4自己評価下位尺度(SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N)の計24項目となった。

ところが、4つの自己評価下位尺度間の相関を見ると、社会基準による自己評価と個人基準による自己評価の相関が非常に高いものであることがわかった。しかも、very good([他者と比べて]とてもよい／社会基準)としての自己評価ではなく、good enough([自身の価値基準に照らして]これでよい／個人基準)としての自己評価測定を目指して作成されたRosenberg(1965)の自己評価尺度は、一方で、個人基準の自己評価尺度であるPERSON, PERSON-Nと高い相関関係を示しながらも、他方で、社会基準の自己評価尺度SOCIAL, SOCIAL-Nとも高い相関関係を示していた。これらの結果は、第1章第3節(3)で述べたように、たとえ個人基準による自己評価項目を用意するにせよ、被験者の中にはその個人基準こそがまさに他者との優劣比較を通しての社会基準となる者が少なからずいた可能性を示唆しており、その結果が、社会基準による自己評価尺度と個人基準による自己評価尺度との高い相関関係であったのだろうと考えられる。

そして、これらの結果は、個人基準による自己評価得点(PERSONやPERSON-N)がそれ単独では、社会基準と個人基準がアンビバレントに交錯するような自己評価を表現できないことを示唆している。こうした自己評価は、社会基準による自己評価と個人基準による自己評価の分別測定・その組み合わせによる自己評価タイプの作成によって初めて扱えるものと考えられるのである。この点は、第4節で検討をおこなう。

### 第3節 自己評価尺度の再検査信頼性（調査2）

#### 第1項 目的

第2節で作成された肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度の安定性を見るため、本節では尺度のテスト－再テストを実施する（再検査信頼性の検討）。一定期間（2週間）を経て測定された2つの尺度得点間の相関係数が高いものであれば、尺度の安定性・信頼性はより保証されるといえる。

#### 第2項 方法

##### (1) 調査内容

**自己評価尺度** 第2節で作成された自己評価尺度。各下位尺度（SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）は6項目ずつで構成されており、計24項目の尺度である。評定は“全くあてはまる（5点）”～“全くあてはまらない（1点）”の5件法である。

##### (2) 調査対象

関西の私立K女子大学の女子大学生74名。ただし、1回目の調査、あるいは2回目の調査のみに参加した学生もあり、それらは分析上欠損値扱いとした。有効対象者数は55名であった。

##### (3) 調査時期

1999年12月に、2週間の間隔をあけておこなわれた。

#### 第3項 結果

##### (1) 自己評価の下位尺度項目におけるテスト－再テスト

第2節の因子分析結果で得られた下位尺度項目それぞれにおけるテスト－再テスト（再検査信頼性）、それにもとづく相関分析の結果を表3-4に示す。それを見ると、相関係数の範囲は $r=.282\sim.759$  ( $p<.05$ )であった。24項目のうち5項目（f20, f22, f23, f24, f25）は $r=.4$ 以下の相関係数であったが、それ以外の相関係数は概ね高いものであった。



表 3-4 自己評価の下位尺度、下位尺度項目におけるテスト-再テストの相関係数（再検査信頼性）

項目および下位尺度内容	<i>r</i>
[個人基準：PERSON]	.745**
f08 私は、理想通りではないが、自分というものが好きです	.676**
f15 私は、自分自身を受け入れ認めています	.437**
f12 私は、現在の自分に満足しています	.566**
f03 私は、現在の自分が幸福だと思います	.524**
f11 私は、自分に対して非常に肯定的です	.538**
f16 私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思いません	.670**
[社会基準：SOCIAL]	.608**
f21 私は、自分のことを周囲の人とは異なるすぐれた存在だと思います	.623**
f25 私は、いろいろな点で人より優れていると感謝しています	.282*
f13 私は、自分の知っている人々が、いつかは自分を尊敬の眼をもってあおぎみる日がくると確信しています	.591**
f19 私は、自分のいろいろな能力について自信をもっています	.578**
f23 私は、自分自身を非常に頼もしい人間だと思います	.315*
f02 私は、時々他の人たちからうらやましがられることがあります	.466**
[社会基準：SOCIAL-N]	.759**
f26 何かにつけて、自分は役立たない人間だと思います	.545**
f01 私は、社会のために何の役にもたない人間だと思います	.589**
f17 私は、自分が無力だと思っています	.563**
f24 自分には、自慢できるところがあまりありません	.341*
f28 私は、敗北者だと思えることがよくある	.641**
f22 私は、いつも人から侮辱されているように感じます	.305*
[個人基準：PERSON-N]	.744**
f06 私は、時々自分自身が嫌になるときがあります	.497**
f20 私は、自分自身の中に変えたい部分がたくさんあります	.372**
f09 日によって、自分自身を好きになったり嫌いになったりします	.589**
f04 私は、今のままの自分ではいけないと思うことがあります	.504**
f10 今の私ははがゆくて仕方がありません	.656**
f07 私は、自分自身を非常によく責めるたちです	.579**

(\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ )

## (2) 自己評価の下位尺度得点におけるテスト-再テスト

第1回目と第2回目の調査それぞれにおける SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N 項目の内的一貫性を調べるため、クロンバックの  $\alpha$  係数をそれぞれ算出した。結果は、第1回目の調査において SOCIAL ( $\alpha = .713$ ), PERSON ( $\alpha = .813$ ), SOCIAL-N ( $\alpha = .836$ ), PERSON-N ( $\alpha = .795$ ) で、第2回目の調査において SOCIAL ( $\alpha = .679$ ), PERSON ( $\alpha = .846$ ), SOCIAL-N ( $\alpha = .820$ ), PERSON-N ( $\alpha = .819$ ) であった。第2回目の SOCIAL の  $\alpha$  係数が .679 とやや低かったが、第1回目の SOCIAL の  $\alpha$  係数と比較して、十分であると判断した。他の  $\alpha$  係数は十分高いもので

あった。これより、そのまま合成得点を算出して以下の分析をおこなった。

算出された自己評価の下位尺度得点 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) のテスト-再テスト (再検査信頼性) における相関分析の結果を表 3-4 に示す。それを見ると、結果は、SOCIAL ( $r=.608$ ), PERSON ( $r=.745$ ), SOCIAL-N ( $r=.759$ ), PERSON-N ( $r=.744$ ) (いずれも  $ps<.01$ ) であり、いずれも高い相関係数を示していた。

#### 第4項 考察

本節の目的は、第2節で作成された肯定性-否定性次元/社会-個人基準を考慮した自己評価尺度の安定性を見るため、尺度のテスト-再テストを実施し、再検査信頼性を検討することにあった。その結果、項目ではいくつか相関係数の低いものが見られたが、概ね高い相関係数を示しており、全体的にはテスト-再テストの相関関係は高いと判断されるものであった。また、自己評価の下位尺度得点 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) のテスト-再テストの相関係数もきわめて高いもので、総じて自己評価尺度の再検査信頼性は高いと判断された。

### 第4節 自己評価尺度と YG 性格検査との関係 (調査3)

#### 第1項 目的

自己評価における個人-社会基準の考慮は、それぞれの分別測定・組み合わせによる自己評価タイプを作成することではじめて扱えるとした第2節での考察を受けて、本節では、4つの下位尺度 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) からなる自己評価尺度を用いた自己評価タイプの作成をおこなう。そして、自己評価測定における肯定性-否定性次元/社会-個人基準の分別が果たして実際に意味あるものなのか検討をおこなう。そこで見られる青年の自己評価タイプの組み合わせに何らかの特徴があるのかどうかも検討する。

さらに、自己評価タイプと YG 性格検査との関係を検討し、自己評価タイプの特徴

をYG性格検査の下位尺度得点から示す。周知のように、YG性格検査は、いろいろな状況下における行動や体験の特性を調べる120の質問と、さらに性格特性を測定する項目より構成されている。検査結果から、われわれは一定の状況に対する個人の反応傾向や興味傾向を知ることができ、かつ性格の多面的特性をとらえることが可能である。幅広く用いられてきた歴史ある代表的なパーソナリティ検査であるから、自己評価タイプの特徴を提示するには格好の指標であると考えられる。

## 第2項 方法

### (1) 調査内容

①自己評価尺度 第2節で作成された自己評価尺度。各下位尺度(SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N)は6項目ずつで構成されており、計24項目の尺度である。評定は“全くあてはまる(5点)”～“全くあてはまらない(1点)”の5件法である。

②YG性格検査 YG性格検査は、「抑うつ性」「回帰性傾向」「劣等感の強いこと」「神経質」「客観的でないこと」「協調的でないこと」「愛想の悪いこと」「一般的活動性」「のんきさ」「思考的外向」「支配性」「社会的外向」の12の性格特徴を示すように構成されている。本節では、自己評価タイプの特徴を示すのに有効だと判断される「抑うつ性(D)」「劣等感の強いこと」(以下、「劣等感(I)」)、「神経質(N)」 「協調的でないこと(CO)」 「一般的活動性(G)」 「社会的外向(S)」の計6次元、計60項目を用いることとした。評定は、手引き書にならって“はい(2点)” “どちらでもない(1点)” “いいえ(0点)”の3件法でおこなった。

### (2) 調査対象

関西の国公立・私立の大学生1025名(男性510名、女性511名、性別不明4名)。

### (3) 調査時期

1995年11月

## 第3項 結果

### (1) 自己評価尺度の因子分析

第2節同様に、自己評価尺度を肯定性次元の項目と否定性次元の項目とを分別して

因子分析（主因子法・プロマックス回転）をおこなった結果、ほぼ同様の結果が得られた。内的一貫性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数も満足のいく値であり（SOCIAL は $\alpha=.797$ , PERSON は $\alpha=.799$ , SOCIAL-N は $\alpha=.770$ , PERSON-N は $\alpha=.708$ ）、この尺度の安定性の高さがうかがえる。以下、下位尺度の合成得点を算出して分析をすすめていく。

## (2) 自己評価タイプの作成

自己評価の各下位尺度の得点を高群、低群に分け、その組み合わせによる自己評価タイプ（以下、SS）を作ることとした。高群、低群の分類の基準は、絶対得点の 50%

表 3-5 16 の自己評価タイプと該当度数（調査 3）

自己評価タイプ	SOCIAL	PERSON	SOCIAL-N	PERSON-N	度数 (%)
SS①	高	高	低	低	48 ( 5.0)
SS②	高	高	低	高	207 ( 21.5)
SS 3	高	高	高	低	6 ( 0.6)
SS 4	高	高	高	高	42 ( 4.4)
SS 5	高	低	低	低	2 ( 0.2)
SS 6	高	低	低	高	19 ( 2.0)
SS 7	高	低	高	低	2 ( 0.2)
SS 8	高	低	高	高	12 ( 1.2)
SS⑨	低	高	低	低	63 ( 6.5)
SS⑩	低	高	低	高	255 ( 26.5)
SS11	低	高	高	低	10 ( 1.0)
SS⑫	低	高	高	高	123 ( 12.8)
SS13	低	低	低	低	3 ( 0.3)
SS⑭	低	低	低	高	52 ( 5.4)
SS15	低	低	高	低	2 ( 0.2)
SS⑯	低	低	高	高	118 ( 12.2)
計					964 (100.0)

(注 1) 高 (50%点=18 点以上)、低 (50%点未満)

(注 2) 記入もれ等で欠損値扱いになった被験者は 61 名である。

点以上を高群基準、50%点未満を低群基準とした<sup>脚注9</sup>。つまり、自己評価の各下位尺度

<sup>脚注9</sup> 分類基準にあたっては、平均点 $\pm 1/2SD$ 以上（以下）を高群（低群）としたり、総体的な高得点者の 30%を高群、低得点者の 30%を低群としたりする研究が多いようである。しかし、これはデータ分布が正規分布の場合はよいが、分布が偏っている場合には結果の歪む危険性をもっている。たとえば、適応や人間関係などの肯定的な尺度では得点分布が高得点側に偏る傾向があるし、不適応や孤独感などの否定的な尺度では得点分布が低得点側に偏る傾向がある。自己評価データは、筆者のこれまで何度かとってきた経験では比較的正規分布をしているが、上記のような分布の偏った場合もあり、筆者は絶対得点で分類基準を設けていくべきだと考えている。また、それで

は6～30点のレンジをもつので、6～17点を低群、18～30点を高群とした。各下位尺度に2群（高・低群）ずつ存在することになるので、その組み合わせは、SOCIAL（2）×PERSON（2）×SOCIAL-N（2）×PERSON-N（2）の16通りとなる。この組み合わせによる自己評価タイプ（SS1～SS16）の該当者数は、表3-5に示している。

### （3）肯定性－否定性次元／社会－個人基準の分別測定の実際的意義

本項では、自己評価タイプの該当者数を見ることによって、自己評価測定における肯定性－否定性次元／社会－個人基準の分別が果たして実際に意味あるものなのか、検討をおこなう。

まず、自己評価測定における肯定性－否定性次元の分別意義の検討からはじめる。従来の一次元スケールで想定されてきた高い・低いだけを示す自己評価は、SS1（高高低低＝SOCIAL 高群＋PERSON 高群＋SOCIAL-N 低群＋PERSON-N 低群、以下この順で表記）とSS16（低低高高）で象徴的に示され则认为られるが、表3-5を見ると、青年の自己評価の様相が単純にそれだけで表現できるものでないことは一目瞭然である。たとえば、SS2（高高低高）は、肯定性次元の高い自己評価をもち合わせると同時に否定性次元の高い自己評価をももち合わせている。しかも、該当者数は自己評価タイプ全体の中で2番目に多く（N=207名、21.5%）、決して無視できない存在である。これらの事実から、自己評価の測定における肯定性－否定性次元の分別は実際的に意義あるものだといえる。

自己評価測定における社会－個人基準の分別についても同様で、たとえば、該当者数のもっとも多い自己評価タイプであるSS10（低高高低高）（N=255、26.5%）は、肯定性次元、否定性次元いずれにおいても社会基準低群＋個人基準高群の組み合わせから成り立っており、それが単純な肯定性次元の高群・低群あるいは否定性次元の高群・低群で表現できるものでないことを明らかにしている。また、一次元スケールの高群として象徴的に示される自己評価タイプSS1（高高低低）は、SOCIALの高低を除いてSS9（低高高低）と同じ組み合わせであり、両者ともに決して無視できない該当者

分析がおこなえるような被験者数を設定するべきだと考えている。

数を呈している (SS 1 : N=48, 5.0% / SS 9 : N=63, 6.5%)。逆に、一次元スケールの低群として象徴的に示される自己評価タイプ SS16 (低低高高) も、SOCIAL・Nの高低を除いて SS14 (低低低高) と同じ組み合わせであり、両者ともに決して無視できない該当者数を呈している (SS16 : N=118, 12.2% / SS14 : N=52, 5.4%)。これらの自己評価タイプの違いがどこにあるかは後に示すが、ここでは少なくとも、肯定性次元あるいは否定性次元における社会基準、個人基準の高低だけが異なる、結果として別の自己評価タイプが無視できない数で存在している事実を知ることができる。そして、これらの事実は、自己評価測定における社会—個人基準の分別が实际的に意義あるものであることを示唆している。

#### (4) 自己評価タイプの組み合わせの特徴

表 3-5 における該当者数を見ることによって、自己評価タイプの組み合わせの特徴を見てみよう。仮に全体の 1% 以下 (該当者数 10 人以下) を該当者数の少なかった自己評価タイプとして抽出すると、SS 3 (高高低低), SS 5 (高低低低), SS 7 (高低高低), SS11 (低高高低), SS13 (低低低低), SS15 (低低高低) が上がってくる。これらの自己評価タイプに共通するのは、SS13 をのぞいて、SOCIAL 高群+PERSON 低群、あるいは SOCIAL・N 高群+PERSON・N 低群の組み合わせをもっているという点である。

この知見は、該当者数の多かった自己評価タイプを見ることで、さらに検証できる。ここでは、仮に全体の被験者数の 5% 以上 (該当者数 48 人以上) を該当者数の多かった自己評価タイプとして抽出すると、該当するのは、SS 1 (高高低低), SS 2 (高高低高), SS 9 (低高高低), SS10 (低高高低), SS12 (低高高高), SS14 (低低低高), SS16 (低低高高) の計 7 つの自己評価タイプである。社会基準高群+個人基準高群ないしは社会基準低群+個人基準低群の組み合わせを除くと、いずれの自己評価タイプからも、先に見た SOCIAL 高群+PERSON 低群、あるいは SOCIAL・N 高群+PERSON・N 低群の組み合わせは見られないことがわかる。

また、SS 4 (高高高高) のように、肯定性次元も否定性次元もともに高いアンビバレントな自己評価タイプは少なからず見られるが (N=42, 4.4%), SS13 (低低低低)

のように兩次元ともに低いアンビバレントな自己評価タイプはほとんど見られない (N=3, 0.3%)。

もっとも該当者数の多かった自己評価タイプは, SS10 (低高低高) の 255 名 (26.5%) で, 次いで SS2 (高高低高) の 207 名 (21.5%) であった。PERSON 高群+SOCIAL-N 低群+PERSON-N 高群である組み合わせであることが共通しており, この2つのタイプで, 総被験者数の約半分近くを占めている (N=462, 48.0%)。ともに個人的には良いと思っているところと悪いと思っているところがアンビバレントに存在しながらも, かつ社会的には悪くないと思っているタイプである。

#### (5) YG 性格検査との関係

自己評価タイプの特徴を提示するために, YG 性格検査との関係を見る。すべての自己評価タイプを検討することができないので, ここでは, 先に示した全体の5%以上 (該当者数 48 人以上) を代表的な自己評価タイプとして抽出し検討をおこなうことにする。抽出される自己評価タイプは7つ (SS1, SS2, SS9, SS10, SS12, SS14, SS16) であり, これらの自己評価タイプに属する該当者数は全体の 89.9% に相当する。

分析にあたっては, 自己評価タイプを独立変数に, YG 性格検査の6つの下位尺度得点を従属変数とする一要因分散分析をおこなった。有意差がみられたときの多重比較検定は LSD 法を用いた。表 3-6~3-11 に示されるように, 分散分析の結果はすべて 0.1%水準の有意差が見られるものであった。

表 3-6 各自己評価タイプと抑うつ性 (D) との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS16 低低高高 (N=116)	SS12 低高高高 (N=119)	SS14 低低低高 (N=52)	SS10 低高低高 (N=249)	SS2 高高低高 (N=205)	SS9 低高低低 (N=62)	SS1 高高低低 (N=48)
平均値	17.05	14.76	14.00	11.33	10.62	7.39	6.17
標準偏差	3.41	4.61	5.18	5.19	5.30	5.39	5.00
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS16>SS12**; SS12>SS10**; SS14>SS10**; SS10>SS9**; SS2>SS9**						

(\*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$ )

a) タイプについては, 得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については, 一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 844) = 51.48, p < .001$

表 3-7 各自己評価タイプと劣等感 (I) との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS16 低低高高 (N=116)	SS12 低高高高 (N=117)	SS14 低低低高 (N=52)	SS10 低高高低 (N=249)	SS2 高高低高 (N=207)	SS1 高高低低 (N=47)	SS9 低高高低 (N=62)
平均値	15.47	13.73	12.65	10.77	8.62	6.64	6.58
標準偏差	4.11	4.18	4.65	4.66	4.32	4.11	4.04
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS16>SS12**; SS12>SS10**; SS14>SS10**; SS10>SS2**; SS2>SS1**						

(\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 843) = 57.67, p < .001$ 

表 3-8 各自己評価タイプと神経質 (N) との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS16 低低高高 (N=116)	SS12 低高高高 (N=118)	SS14 低低低高 (N=52)	SS2 高高低高 (N=207)	SS10 低高高低 (N=248)	SS1 高高低低 (N=48)	SS9 低高高低 (N=62)
平均値	14.83	13.27	11.77	10.50	10.47	8.00	7.29
標準偏差	4.37	4.61	4.81	5.02	4.78	4.61	4.52
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS16>SS12*, SS14**; SS12>SS2**; SS14>SS1**; SS10>SS1**						

(\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 844) = 27.64, p < .001$ 

表 3-9 各自己評価タイプと協調性のなさ (CO) との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS16 低低高高 (N=115)	SS14 低低低高 (N=52)	SS12 低高高高 (N=118)	SS2 高高低高 (N=205)	SS10 低高高低 (N=249)	SS1 高高低低 (N=48)	SS9 低高高低 (N=62)
平均値	13.77	11.88	11.69	9.63	9.04	8.08	7.32
標準偏差	4.13	3.66	4.18	4.47	3.79	4.17	4.33
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS16>SS14**; SS14>SS2**; SS12>SS2**; SS2>SS1*, SS9**; SS10>SS9**						

(\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 842) = 29.56, p < .001$



表 3-10 各自己評価タイプと一般的活動性 (G) との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS1 高高低低 (N=47)	SS2 高高低高 (N=206)	SS9 低高低低 (N=62)	SS10 低高低高 (N=249)	SS14 低低低高 (N=52)	SS12 低高高高 (N=118)	SS16 低低高高 (N=116)
平均値	15.28	13.87	13.42	12.04	9.54	9.25	7.97
標準偏差	4.44	4.71	4.37	4.65	5.34	4.88	5.47
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS1>SS9*, SS10**; SS2>SS10**; SS9>SS10*, SS14**; SS10>SS14**; SS12>SS16*						

(\*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05)

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注) F (6, 843) = 31.089, p &lt; .001

表 3-11 各自己評価タイプと社会的外向 (S) との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS1 高高低低 (N=47)	SS2 高高低高 (N=205)	SS9 低高低低 (N=62)	SS10 低高低高 (N=250)	SS14 低低低高 (N=52)	SS12 低高高高 (N=119)	SS16 低低高高 (N=115)
平均値	17.36	17.03	17.00	16.23	15.54	15.45	14.73
標準偏差	2.98	2.76	2.89	3.04	3.28	3.10	2.68
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS1>SS10*, SS14**; SS2>SS10**; SS9>SS14**; SS10>SS12*, SS16**						

(\*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05)

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について1記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注) F (6, 843) = 11.309, p &lt; .001

各自己評価タイプの特徴を示すべく、表 3-6～3-11 の結果を整理したものが表 3-12 である。そこでは、分散分析・多重比較の結果、有意に得点が「もっとも高かった」あるいは「もっとも低かった」自己評価タイプに「高」「低」がつけられ、それ以外の自己評価タイプには「中」がつけられている。

それを見ると、YG 性格検査・下位尺度における否定的特徴 (D, I, N, CO) の得点がもっとも低く、肯定的特徴 (G, S) の得点がもっとも高いのは SS1 (高高低低) である。逆に、否定的特徴 (D, I, N, CO) の得点がもっとも高く、肯定的特徴 (G, S) の得点がもっとも低いのは SS16 (低低高高) である。

SS9 (低高低低) は、「一般的活動 (G)」を除くすべての YG 性格検査・下位尺度で、SS1 (高高低低) と同じ特徴を有している。SS9 (低高低低) は、SOCIAL 以外の自己評価下位尺度の組み合わせが SS1 (高高低低) と共通している自己評価タイプ

である。ところが、中程度の否定的特徴（D, I, N, CO）を有しながらも、肯定的な特徴（G, S）においては高得点を示しているのはSS2（高高低高）である。否定的特徴（D, I, N, CO）をもたないという点ではSS9（低高低低）の方がSS2（高高低高）よりもSS1（高高低低）に近いが、肯定的特徴（G, S）を有しているという点ではSS2（高高低高）の方がSS9（低高低低）よりもSS1（高高低低）に近いといえる。

否定的特徴（D, I, N, CO）は中程度であるが、肯定的特徴（S）においては低得点を示しているのがSS12（低高高高）とSS14（低低低高）である。ここで扱っている7つの自己評価タイプの中では、どちらかといえば、SS16（低低高高）に近い自己評価タイプだといえる。

表 3-12 YG 性格検査の下位尺度から見た自己評価タイプの特徴

自己評価 タイプ	YG 性格検査					
	抑うつ性 (D)	劣等感 (I)	神経質 (N)	協調性の なさ (CO)	一般的 活動性 (G)	社会的 外向 (S)
SS1 (高高低低)	低	低	低	低	高	高
SS2 (高高低高)	中	中	中	中	高	高
SS9 (低高低低)	低	低	低	低	中	高
SS10 (低高低高)	中	中	中	中	中	中
SS12 (低高高高)	中	中	中	中	中	低
SS14 (低低低高)	中	中	中	中	中	低
SS16 (低低高高)	高	高	高	高	低	低

（注）この表で示される「高」「低」は、分散分析の結果、有意に得点が「もっとも高かった」あるいは「もっとも低かった」自己評価タイプにつけられている。それ以外の自己評価タイプには「中」がつけられている。

#### 第4項 考察

本節の目的の1つは、自己評価における個人基準、社会基準の考慮がそれらの分別測定・その組み合わせによる自己評価タイプを作成することではじめて扱えると考えられた第2節での考察を受けて、4つの下位尺度（SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）からなる自己評価尺度を用いた自己評価タイプの作成をおこなうことになった。そして、そこから、自己評価測定における肯定性－否定性次元／社会－個人

基準の分別の実際的意義について検討をおこなうことにあった。検討は、肯定性－否定性次元の分別の意義、社会－個人基準分別の意義、両側面からおこなわれた。結果は、これらの次元・基準の分別に実際的意義はあると結論づけられるものであった。

次に、自己評価タイプの組み合わせに見られる特徴を検討した結果、SOCIAL 高群＋PERSON 低群、あるいは SOCIAL-N 高群＋PERSON-N 低群の組み合わせは、ほとんど見られないことがわかった。このことは、肯定性次元の場合、社会基準による自己評価が高くて個人基準による自己評価が低いという自己評価タイプはあまり存在しないし、否定性次元の場合でも、社会基準による否定的自己評価が高くて個人基準による否定的自己評価が低いという自己評価タイプはあまり存在しないこととして解釈できる。第2章で述べたように、「自己 (self)」は個体的な一個存在に問題を焦点化する概念ではあるけれども、Cooley (1902) が述べるように、人は社会の中で生きる存在者である。よって、社会的に自分は良いと思う場合にはやはり個人的にも自分は良いと思うし、社会的に駄目だと思う場合には個人的にも自分は駄目だと思うのが一般的であるようである。しかし、社会的に自分を良いと思わない場合でも個人的には自分を良いと思う場合はあるし、逆に社会的に自分を駄目だと思わない場合でも個人的には自分を駄目だと思う場合はある。なぜなら、SOCIAL 高群＋PERSON 低群、あるいは SOCIAL-N 高群＋PERSON-N 低群の組み合わせはあまり見られなかったが、SOCIAL 低群＋PERSON 高群、あるいは SOCIAL-N 低群＋PERSON-N 高群の組み合わせは数多く見られたからである。これらの結果は、社会基準による自己評価の高さは個人基準による自己評価の高さに影響を及ぼすが、社会基準による自己評価の低さは個人基準による自己評価の低さに必ずしも影響を及ぼさないこととして理解することができる。そして、この組み合わせの特徴は、肯定性次元、否定性次元に関係なく見られる。

次に、自己評価タイプの特徴を、幅広く用いられている YG 性格検査の下位尺度の得点を用いて提示した。まず、青年にとって代表的な自己評価タイプを、全体の5%以上の該当者数を条件にして抽出した。その結果、7つの自己評価タイプが抽出された (SS1, SS2, SS9, SS10, SS12, SS14, SS16)。これら7つの自己評価タイプで占める割合は、全体の被験者数の約9割であり、すべての自己評価タイプを扱う

わけではないながらも、これら7つの自己評価タイプで全体の傾向を十分扱い得ると判断された。

YG 性格検査の下位尺度を用いて示される自己評価タイプの特徴は、以下の通りである。まず、肯定性次元高群と否定性次元低群の純粋な組み合わせであり一次元スケールの極に位置すると想定される自己評価タイプ SS1（高高低低）は、肯定的特徴（G, S）の得点がもっとも高く、否定的特徴（D, I, N, CO）の得点がもっとも低かった。逆に、肯定性次元低群と否定性次元高群の純粋な組み合わせであり一次元スケールの対極に位置すると想定される自己評価タイプ SS16（低低高高）は、肯定的特徴（G, S）の得点がもっとも低く、否定的特徴（D, I, N, CO）の得点がもっとも高かった。このことは、従来一次元スケールによって一般的に測定されてきた自己評価の高（低）群が、もっとも肯定的な（否定的な）性格を有していることを示唆している。

否定的特徴（D, I, N, CO）をもたないという意味で SS1（高高低低）にもっとも近い自己評価タイプは SS9（低高低低）であったが、肯定的特徴（G, S）をもつという意味で SS1（高高低低）にもっとも近い自己評価タイプは SS2（高高低高）であった。適応の議論は、元来、適応が何かということよりも、不適応を示すか示さないかを中心としてなされることが多かったように思われる。自己評価も適応指標の一つに数えられるものであるが、そう考えられるならば、自己評価の否定性次元（SOCIAL-N, PERSON-N）が完全に否定される SS9（低高低低）は、SS1（高高低低）にもっとも近い、適応的な自己評価タイプだといえる。

逆に、SS16（低低高高）に近い自己評価タイプを探してみると、SS1（高高低低）に SS2（高高低高）や SS9（低高低低）が近く位置していたほどの自己評価タイプは見られなかった。敢えて挙げるならば、肯定的特徴（S）をもたないという点で SS12（低高高高）と SS14（低低低高）が SS16（低低高高）にもっとも近く位置していたといえる。

## 第5節 自己評価尺度と適応意識との関係（調査4）

## 第1項 目的

○前節では、肯定性－否定性／個人－社会基準を考慮した自己評価尺度を用いて自己評価タイプを作成し、YG 性格検査の下位尺度による自己評価タイプの特徴を明らかにした。本節では、人生、生活、幸福感、憂うつといった適応意識を用いて、自己評価タイプの特徴をより明らかにすることを目的とする。

また第2節では、Rosenberg (1965) の自己評価尺度が good enough としての自己評価（個人基準）を測定するものではなく very good としての自己評価（社会基準）を測定するものであったことを、本研究で作成した自己評価の4つの下位尺度（SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）との相関関係を通して明らかにした。本節では、この点を自己評価タイプを用いてさらに検証する。その結果は、自己評価基準である社会基準と個人基準が分別して測定されなければならないこと、そしてその組み合わせによるタイプ作成を通して自己評価基準の問題をはじめて扱うことができること、をさらに明確化すると考えられる。

## 第2項 方法

### (1) 調査内容

①自己評価尺度 第2節で作成された自己評価尺度。各下位尺度（SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）は6項目ずつで構成されており、計24項目の尺度である。評価は“全くあてはまる（5点）”～“全くあてはまらない（1点）”の5件法である。

②適応意識 ここでは、人生次元、生活次元、個人次元の適応意識を取りあげた。質問とそれへの評価はそれぞれ、「あなたは、今生きている人生に満足していますか」（以下、人生に満足）に“非常に満足している”（5点）～“まったく満足していない”（1点）、「今の生活は充実していますか」（以下、生活が充実）に“非常に充実している”（5点）～“まったく充実していない”（1点）、「あなたは今幸せですか」（以下、幸福感）に“非常に幸せだ”（5点）～“まったく幸せではない”（1点）であった。また、否定的な適応意識として憂うつ意識を取り上げた。質問とそれへの評価は、「最近気が沈んで憂うつということがありますか」（以下、最近憂うつ）に“非常によくある”（5点）～“まったくない”（1点）であった。いずれも評価は、5件法でおこな

った。

③Rosenberg の自己評価尺度 (ROSEN) Rosenberg (1965) の自己評価尺度 10 項目 (星野, 1970 翻訳)。評定は, “あてはまる (4 点)” ~ “あてはまらない (1 点)” の 4 件法でおこなった。

## (2) 調査対象

関西の国公立・私立の大学生 2031 名 (男性 790 名, 女性 1241 名)。ただし, ROSEN に回答した者は, この中の 1093 名 (男性 650 名, 女性 443 名) であった。

## (3) 調査時期

1996 年 11 月 ~ 1997 年 7 月

# 第3項 結果

## (1) 自己評価タイプの作成

自己評価の下位尺度項目 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) の内的-一貫性を示すクロンバックの  $\alpha$  係数は満足 of いく値であり (SOCIAL は  $\alpha=.786$ , PERSON は  $\alpha=.852$ , SOCIAL-N は  $\alpha=.796$ , PERSON-N は  $\alpha=.791$ ), 前節までと同様, 下位尺度の合成得点を用いて分析をすすめた。

次に, 自己評価の各下位尺度を高群, 低群に分け, その組み合わせによる自己評価タイプ (SS) を作った。高群, 低群の分類の基準は, 調査 3 と同様で, 絶対得点の 50% 点以上を高群基準, 50% 点未満を低群基準とするものである。この組み合わせによる自己評価タイプ (SS1~SS16) の該当者数を表 3-13 に示している。

それを見ると, まず第 1 に, 前節の結果と同様, 自己評価タイプにおける SOCIAL 高群+PERSON 低群, あるいは SOCIAL-N 高群+PERSON-N 低群の組み合わせ (たとえば, SS 3, SS 5, SS 7 など) はほとんど見られないことがわかる。第 2 に, SS 4 (高高高高) のような, 肯定性次元も否定性次元もともに高いアンビバレントな自己評価タイプは少なからず見られるが ( $N=82$ , 4.2%), SS13 (低低低低) のように, 両次元ともに低い自己評価タイプはほとんど見られない ( $N=4$ , 0.2%)。この傾向も, 前節の結果と同様である。第 3 に, 該当者数のもっとも多い自己評価タイプを見ると, SS10 (低高低高) と SS 2 (高高低高) であり (SS10 :  $N=468$  人, 23.8% / SS 2 :

N=344 人, 17.5%), これも前節の結果と同じである。第4に, 代表的な自己評価タイプを前節同様の基準(全体の5%以上, 該当者数99人以上)で抽出すると, 抽出される自己評価タイプはSS1, SS2, SS9, SS10, SS12, SS14, SS16の7つであり, これも前節の結果と同様であった。この7つの自己評価タイプに属する該当者数は, 全体の92.0%に相当した。

表3-13 16の自己評価タイプと該当度数(調査4)

自己評価タイプ	SOCIAL	PERSON	SOCIAL-N	PERSON-N	度数(%)
SS①	高	高	低	低	193 ( 9.8)
SS②	高	高	低	高	344 ( 17.5)
SS3	高	高	高	低	4 ( 0.2)
SS4	高	高	高	高	82 ( 4.2)
SS5	高	低	低	低	2 ( 0.1)
SS6	高	低	低	高	25 ( 1.3)
SS7	高	低	高	低	0 ( 0.0)
SS8	高	低	高	高	26 ( 1.3)
SS⑨	低	高	低	低	156 ( 7.9)
SS⑩	低	高	低	高	468 ( 23.8)
SS11	低	高	高	低	13 ( 0.7)
SS⑫	低	高	高	高	239 ( 12.1)
SS13	低	低	低	低	4 ( 0.2)
SS⑭	低	低	低	高	112 ( 5.7)
SS15	低	低	高	低	1 ( 0.1)
SS⑯	低	低	高	高	300 ( 15.2)
計					1969 (100.0)

(注1) 高(50%点=18点以上), 低(50%点未満)

(注2) 記入もれ等で欠損値扱いになった被験者は62名である。

## (2) 適応意識との関係

ここでは, 4つの適応意識との関係を見ることによって, 自己評価タイプの特徴をより明らかにする。自己評価タイプと適応意識との関係の分析にあたっては, 自己評価タイプを独立変数に, 4つの適応意識を従属変数とする一要因分散分析をおこなった。有意差がみられたときの多重比較検定はLSD法を用いた。表3-14~3-17に示されるように, 分散分析の結果はすべて0.1%水準の有意差が見られるものであった。

表 3-14 各自己評価タイプと人生に満足との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS1 高高低低 (N=193)	SS9 低高低低 (N=156)	SS2 高高低高 (N=343)	SS10 低高低高 (N=467)	SS12 低高高高 (N=238)	SS14 低低低高 (N=112)	SS16 低低高高 (N=300)
平均値	4.01	3.74	3.52	3.43	3.12	2.37	2.35
標準偏差	0.71	0.74	0.92	0.84	0.91	0.82	0.91
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS1>SS9**; SS9>SS2*; SS2>SS12**; SS10>SS12**; SS12>SS14**						

(\*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 1802) = 119.07, p < .001$ 

表 3-15 各自己評価タイプと生活に充実との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS1 高高低低 (N=193)	SS9 低高低低 (N=156)	SS2 高高低高 (N=343)	SS10 低高低高 (N=467)	SS12 低高高高 (N=239)	SS14 低低低高 (N=110)	SS16 低低高高 (N=298)
平均値	3.93	3.74	3.55	3.46	3.21	2.75	2.57
標準偏差	0.80	0.87	0.96	0.92	0.95	1.05	0.97
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS1>SS2**; SS9>SS2*, SS10**; SS2>SS12**; SS10>SS12**; SS12>SS14**						

(\*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 1799) = 63.94, p < .001$ 

表 3-16 各自己評価タイプと幸福感との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS1 高高低低 (N=193)	SS9 低高低低 (N=156)	SS2 高高低高 (N=343)	SS10 低高低高 (N=467)	SS12 低高高高 (N=239)	SS14 低低低高 (N=112)	SS16 低低高高 (N=300)
平均値	4.12	3.94	3.84	3.78	3.61	2.93	2.86
標準偏差	0.73	0.69	0.72	0.72	0.71	0.89	0.87
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS1>SS9*, SS2**; SS9>SS10*, SS12**; SS2>SS12**; SS10>SS12**; SS12>SS14**						

(\*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 1803) = 93.06, p < .001$



表 3-17 各自己評価タイプと最近憂うつとの関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS16 低低高高 (N=298)	SS14 低低低高 (N=112)	SS12 低高高高 (N=239)	SS10 低高低高 (N=467)	SS2 高高低高 (N=342)	SS1 高高低低 (N=193)	SS9 低高低低 (N=156)
平均値	4.16	3.82	3.76	3.37	3.60	2.79	2.59
標準偏差	0.83	1.08	0.98	1.05	1.00	1.14	1.05
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS16>SS14**、SS14>SS2*、SS10**、SS12>SS10**、SS10>SS2**、SS2>SS1**						

(\*\* $p<0.01$ , \* $p<0.05$ )

(\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 1800) = 64.67, p < .001$ 

各自己評価タイプの特徴を示すべく、表 3-14～3-17 の結果を整理したものが表 3-18 である。表では、分散分析・多重比較の結果、有意に得点が「もっとも高かった」あるいは「もっとも低かった」自己評価タイプに「高」「低」がつけられ、それ以外の自己評価タイプには「中」がつけられている。

それを見ると、「人生に満足」「生活が充実」「幸福感」すべてにおいて高得点を示し、「最近憂うつ」において低得点を示したのは SS1（高高低低）であった。逆に、「人生に満足」「生活が充実」「幸福感」すべてにおいて低得点を示し、「最近憂うつ」で高得点を示したのは SS16（低低高高）であった。

「人生に満足」「幸福感」の得点は中程度ながらも、「生活が充実」では高得点を示し、「最近憂うつ」では低得点を示したのが SS9（低高低低）であった。また、「最近憂うつ」では中程度の得点を示したが、「人生に満足」「生活が充実」「幸福感」では低得点を示したのが SS14（低低低高）であった。他の自己評価タイプは、すべての適応項目において中程度の得点を示していた。

表 3-18 適応意識から見た自己評価タイプの特徴

自己評価 タイプ	適応意識			
	人生に 満足	生活が 充実	幸福感	最近 憂うつ
SS1 (高高低低)	高	高	高	低
SS2 (高高低高)	中	中	中	中
SS9 (低高低低)	中	高	中	低
SS10 (低高低高)	中	中	中	中
SS12 (低高高高)	中	中	中	中
SS14 (低低低高)	低	低	低	中
SS16 (低低高高)	低	低	低	高

(注) この表で示される「高」「低」は、分散分析の結果、有意に得点が「もっとも高かった」あるいは「もっとも低かった」自己評価タイプにつけられている。それ以外の自己評価タイプには「中」がつけられている。

### (3) 自己評価タイプと Rosenberg の自己評価尺度との相関

尺度の内的一貫性が確認された ROSEN (クロンバックの  $\alpha$  係数=.870) の得点 (平均値・標準偏差) を従属変数とし、7つの自己評価タイプを独立変数とした一要因分散分析をおこなった。その結果、0.1%水準の有意差が見られたので ( $F(6, 981) = 261.96, p < .001$ ), LSD 法による多重比較の検定をおこなった。その結果をもとにして、有意に得点が「もっとも高かった」あるいは「もっとも低かった」自己評価タイプに「高」「低」をつけ、それ以外の自己評価タイプに「中」をつけて整理したのが表 3-19 である。

それを見ると、ROSEN の得点がもっとも高いのは SS1 (高高低低) であり、もっとも低いのは SS16 (低低高高) であることがわかる。他の自己評価タイプは、いずれも、SS1 (高高低低) と SS16 (低低高高) の間に位置していた。

表 3-19 各自己評価タイプと ROSEN との関係と分散分析結果

(多重比較は LSD 法)

自己評価タイプ	SS 1 高高低低 (N=115)	SS 2 高高低高 (N=215)	SS 9 低高低低 (N=102)	SS10 低高低高 (N=255)	SS12 低高高高 (N=99)	SS14 低低低高 (N=67)	SS16 低低高高 (N=135)
平均値	34.84	31.58	30.93	28.70	24.89	24.48	20.54
標準偏差	3.37	3.23	3.30	3.02	3.02	4.54	4.03
特徴	高	中	中	中	中	中	低
差のない群の集合							
群間差 <sup>b)</sup>	SS1>SS2**; SS2>SS10**; SS9>SS10**; SS10>SS12**; SS12>SS16**; SS14>SS16**						

(\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ )

a) タイプについては、得点の高い方から順に記載した。

b) 群間差については、一番得点間の小さいところにおいてみられた群間差について表記した。そのタイプより得点差の大きいタイプとの間には同水準で有意差がみられた。

(注)  $F(6, 981) = 261.96, p < .001$ 

#### 第4項 考察

本節の分析に先立って、前節までと同様のステップで自己評価・下位尺度項目 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) の内的一貫性 (信頼性) を検討したが、前節までとほぼ同様の結果を得ることができた。また、前節の結果から示された自己評価タイプの組み合わせの特徴、各自己評価タイプへの該当者の分布、7つの自己評価タイプで全体の傾向を十分扱い得ることもほぼ同様のものであり、これらのことは、本研究で作成している肯定性-否定性次元/社会-個人基準を考慮した自己評価尺度の安定性の高さを示しているといえる。

さて、本節の目的の1つは、前節に引き続いて、自己評価タイプの特徴を人生、生活、幸福感、憂うつといった適応意識の得点から明らかにすることであった。その結果、肯定的な適応意識「人生に満足」「生活が充実」「幸福感」すべてにおいて高得点を示し、かつ否定的な適応意識「最近憂うつ」で低得点を示したのは SS 1 (高高低低) であった。逆に、肯定的な適応意識すべてにおいて低得点を示し、否定的な適応意識で高得点を示したのは SS16 (低低高高) であった。この結果は、前節で見た YG 性格検査の下位尺度との関係と同様のものであった。すなわち、そこでは、SS 1 (高高低低) は、YG 性格検査・下位尺度の肯定的特徴 (G, S) でもっとも高い得点を示し、否定的特徴 (D, I, N, CO) でもっとも低い得点を示した。逆に SS16 (低低高高) は、肯定的特徴 (G, S) でもっとも低い得点を示し、否定的特徴 (D, I, N, CO) でもっとも高い得点を示した。これらの結果は、性格特徴であろうと適応意識であろ

うと、もっとも肯定的な得点を示す自己評価タイプは、従来一般的に用いられてきた一次元スケールの極に位置すると想定される自己評価タイプ SS1（高高低低）であり、もっとも否定的な得点を示す自己評価タイプは、その対極に位置すると想定される SS16（低低高高）であることを示唆している。他の自己評価タイプは、この SS1（高高低低）と SS16（低低高高）の間に位置するといえる。

ところで、不適応を示すか示さないかで適応をとらえる場合、否定的な適応意識である「最近憂うつ」で低得点を示した自己評価タイプは SS1（高高低低）と SS9（低高高低）であり、高得点を示したものは SS16（低低高高）であった。この結果は、前節の YG 性格検査・下位尺度を通して検討した結果とまったく同じものである。すなわち、SS1（高高低低）と SS16（低低高高）は、性格特徴や適応意識において肯定の両極に位置する自己評価タイプだと上述したが、適応の観点で考える場合には、否定性次元（SOCIAL-N, PERSON-N）が完全に否定される SS9（低高高低）は SS1（高高低低）と同様の位置を得るといえる。

逆に、肯定的な適応意識の得点が低いという点で SS16（低低高高）にもっとも近い自己評価タイプは SS14（低低低高）であった。前節の結果では、YG 性格検査・下位尺度の肯定的特徴（S）において SS16（低低高高）、SS14（低低低高）、SS12（低高高高）が低得点を示したが、本節の結果では、SS12（低高高高）は低得点を示さなかった。これより、SS14（低低低高）は SS12（低高高高）よりも、性格特徴、適応意識の肯定的な側面をもたないという点において、SS16（低低高高）に近い自己評価タイプだといえる。

本節のもう一つの目的は、Rosenberg（1965）の自己評価尺度が、good enough としての自己評価（個人基準）を測定するものではなく very good としての自己評価（社会基準）を測定するものであることを、自己評価タイプとの関係を通してさらに検証することであった。その結果、ROSEN の得点がもっとも高かった自己評価タイプは SS1（高高低低）であり、もっとも得点の低かった自己評価タイプは SS16（低低高高）であった。very good ではないが good enough ではあると考えられる自己評価タイプ SS9（低高高低）が SS1（高高低低）よりも有意に得点が低いこともあわせて考えると、第2節で見た結果と同様、Rosenberg（1965）の自己評価尺度は、一方で

は good enough としての自己評価を測定するものでありながら、他方では、同時に very good としての自己評価を測定するものであったことをこれらの結果は示唆している。何度も述べるように、このような結果になる背景には、Rosenberg のように、たとえ個人基準による自己評価項目を用意するにしても、人によっては、その個人基準こそがまさに他者との優劣比較を通しての社会基準となっていたことが考えられるのである。

そして、これらの結果は、本研究でおこなわれている自己評価タイプの研究の妥当性をより確認するものといえる。なぜなら、社会基準による自己評価と個人基準による自己評価の意義は、それぞれの単独の尺度得点では示すことができず、それらを分別して測定し、その組み合わせによる自己評価タイプを作成することによってはじめて示せるものといえるからである。

## 第6節 自己評価の指標から見た青年の自己感情の様相（調査5）

### 第1項 目的

本節では、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度、それによって作成される自己評価タイプとその特徴から、青年の自己感情の様相を示す。なお、本研究の調査対象が青年期後期の中でもとりわけ大学生に特化していることから、本節では、青年の自己感情の様相を男女別・全体に分けて示すのみならず、大学の学年別もあわせて示すこととした。

なお、学年別の検討に際しては、対象を大学生の1～3回生にしぼることとした。4回生を検討対象から外した理由は、4回生という時期が、就職活動の最中であったり終了したりしていて、生活世界の個人差が他の学年に比べてあまりに大きすぎるからである。4回生の検討は、場所を改めておこなう方が望ましいと考えられた。

### 第2項 方法

#### (1) 調査内容

**自己評価尺度** 第2節で作成された自己評価尺度。各下位尺度 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) は6項目ずつで構成されており、計24項目の尺度である。評定は“全くあてはまる (5点)”～“全くあてはまらない (1点)”の5件法である。

なお、調査では、ほかにも別の尺度や自由記述に対する回答を被験者に求めているが、本節の検討目的には関係がないので、ここでは記述を省略した。

## (2) 調査対象

主に関西の国公立・私立の大学生1171名。この中には、短大生、二部学生、4回生学生、海外の大学在住学生が含まれており、彼らを欠損値として処理したので、分析対象となったのは1130名 (男性435名、女性695名) であった。なお、他の質問項目との関係でインタビュー形式での調査<sup>脚注10</sup>となったが、ここで用いるデータはインタビューによって得られたデータではなく、インタビューの後被検者に求めた調査用紙への記入データである。

## (3) 調査時期

1998年7月～1999年5月

# 第3項 結果

## (1) 自己評価タイプの作成

自己評価の下位尺度項目 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) の内的-一貫性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は満足 of いく値であり (SOCIAL は $\alpha=.763$ , PERSON は $\alpha=.840$ , SOCIAL-N は $\alpha=.774$ , PERSON-N は $\alpha=.779$ ), 前節までと同様、下位尺度の合成得点を用いて分析をすすめていく。

次に、自己評価の下位尺度を高群、低群に分け、その組み合わせによる自己評価タイプ (SS) を作った。高群、低群の分類の基準は調査3と同様で、絶対得点の50%点以上を高群基準、50%点未満を低群基準とするものである。この組み合わせによる自己評価タイプ (SS1～SS16) の該当者数を表3-20に示している。

<sup>脚注10</sup> インタビュー調査は、筆者を含む心理学を専門とする8名の教官、大学院生と、訓練を受けた129名の大学生 (心理学を専攻としない者も含む) で半構造化面接の形でおこなった。一人あたりのインタビュー所要時間は、平均2時間であった。この調査をインタビュー形式でおこなった事情は、第4章第5節で述べられる。

代表的な自己評価タイプを前節までと同様の基準（全体の5%以上、該当者数57人以上）で抽出すると、抽出される自己評価タイプはSS1, SS2, SS9, SS10, SS12, SS14, SS16の7つであった。前節までの結果とまったく同様である。なお、この7つの自己評価タイプに属する該当者数は、全体の93.2%に相当した。

表3-20 16の自己評価タイプの組み合わせと該当者数（調査5）

自己評価タイプ	SOCIAL	PERSON	SOCIAL-N	PERSON-N	度数(%)
SS①	高	高	低	低	84( 7.5)
SS②	高	高	低	高	234( 20.8)
SS3	高	高	高	低	1( 0.1)
SS4	高	高	高	高	44( 3.9)
SS5	高	低	低	低	0( 0.0)
SS6	高	低	低	高	19( 1.7)
SS7	高	低	高	低	0( 0.0)
SS8	高	低	高	高	3( 0.3)
SS⑨	低	高	低	低	67( 6.0)
SS⑩	低	高	低	高	353( 31.4)
SS11	低	高	高	低	7( 0.6)
SS⑫	低	高	高	高	121( 10.8)
SS13	低	低	低	低	4( 0.4)
SS⑭	低	低	低	高	58( 5.2)
SS15	低	低	高	低	1( 0.1)
SS⑯	低	低	高	高	129( 11.5)
計					1125(100.0)

（注）高（50%点=18点以上）／低（50%点未満=18点以下）

## (2) 大学の学年別・男女別・全体で見た青年の自己評価タイプの分布とその特徴

青年の自己評価タイプの分布を、大学の学年別と全体（表3-21）、男女別と全体（表3-22）で示している。 $\chi^2$ 検定の結果、学年間に有意差は見られなかったが（ $\chi^2(14)=19.97$ , n.s.），男女間には1%水準で有意差が見られた（ $\chi^2(7)=48.78$ ,  $p<.01$ ）。残差分析の結果、SS1（高高低低）、その他は男性が女性に比べて有意に多かったが、SS10（低高低高）、SS12（低高高高）は女性が男性に比べて有意に多かった。

度数の多い自己評価タイプに並び替えた表3-22を見ると、男性でもっとも多く見られた自己評価タイプはSS2（高高低高）であり、次いでSS10（低高低高）であった。調査3、調査4の結果で、7つの自己評価タイプのうち、もっとも否定的な性格特徴、否定的な適応意識を示したSS16（低低高高）は3番目に多く、逆にもっとも肯定的な性格特徴、肯定的な適応意識を示したSS1（高高低低）は、SS16（低低高高）に次いで4番目に多く位置していた。

他方、女性でもっとも多く多く見られた自己評価タイプはSS10(低高低高)であり、次いでSS2(高高低高)であった。男性に比べてSS12(低高高高)の有に多かった女性では、SS12(低高高高)が、SS16(低低高高)、SS1(高高低低)の間に割って入り、3番目に位置していた。

表 3-21 学年別、全体で見た青年の自己評価タイプの分布

度数 (%)

1回生	SS10	SS2	SS16	SS12	SS1	SS9	SS14	その他	合計
	93(24.3)	84(21.9)	52(13.6)	44(11.5)	30(7.8)	27(7.0)	26(6.8)	27(7.1)	383(100.0)
2回生	SS10	SS2	SS16	SS12	SS1	SS9	SS14	その他	合計
	160(35.3)	86(19.0)	50(11.0)	50(11.0)	33(7.3)	25(5.5)	21(4.6)	28(6.2)	453(100.0)
3回生	SS10	SS2	SS16	SS12	SS1	SS9	SS14	その他	合計
	100(34.7)	64(22.2)	27(9.4)	26(9.0)	21(7.3)	15(5.2)	11(3.8)	24(8.4)	288(100.0)

(注)  $\chi^2$ 検定の結果、学年間に有意差は見られなかった ( $\chi^2(14)=19.97, n.s.$ )。

表 3-22 性別、全体で見た青年の自己評価タイプの分布

度数 (%)

男性	SS2	SS10	SS16	SS1	SS12	SS9	SS14	その他	合計
	103(23.7)	97(22.3)-	52(12.0)	45(10.3)+	36(8.3)-	32(7.4)	24(5.5)	46(10.6)+	435(100.0)
女性	SS10	SS2	SS12	SS16	SS1	SS9	SS14	その他	合計
	256(36.8)+	131(18.8)	85(12.2)+	77(11.1)	39(5.6)-	35(5.0)	34(4.9)	33(4.7)-	690(100.0)

(注1)  $\chi^2$ 検定の結果、男女間に有意差が見られた ( $\chi^2(7)=48.78, p<.01$ )。表中の+、-は残差分析の結果、5%水準以上で「有意に多かった(+)」「有意に少なかった(-)」ことを示している。

(注2) 表は、 $\chi^2$ 検定後、度数の多いものから順(左から右)に並べ替えをした結果である。

#### 第4項 考察

本節の目的は、前節まで検討を重ねてきた肯定性-否定性次元/社会-個人基準を考慮した自己評価尺度、それによって作成される自己評価タイプとその特徴を利用して、青年の自己感情の様相を、大学の学年別・男女別・全体に分けて検討することにあった。その結果、学年差は見られなかったが男女差は見られたので、以下では男女の特徴が明確になるよう考察をすすめることとした。

男性において、出現率のもっとも高かった自己評価タイプはSS2(高高低高)であり、SS10(低高低高)がそれに次いでいた。女性では、SS10(低高低高)の出現率をもっとも高く、SS2(高高低高)、SS12(低高高高)がそれに次いでいた。この3つの自己評価タイプは、自己評価タイプの組み合わせとして肯定性・否定性次元の高低が混在している点に特徴がある。いずれも中程度の適応を示す自己評価タイプである。SS10(低高低高)、SS12(低高高高)の出現率が男性に比べて有意に高かった分、女性では中程度の適応タイプが男性に比べて全体の中でより多勢を占めていたといえる



(女性では  $SS10 + SS2 + SS12 = 67.8\%$ 、男性では  $SS2 + SS10 = 46.0\%$ )。なお、第4節～第5節での結果からは、 $SS2$  (高高低高) と  $SS10$  (低高低高)・ $SS12$  (低高高高) は、適応の観点ではほぼ同様の位置を示すが、性格特徴の観点では、 $SS2$  (高高低高) の方が  $SS10$  (低高低高)・ $SS12$  (低高高高) よりも肯定的であることがわっている。しかし、残差分析の結果では、 $SS2$  (高高低高) の出現率に男女差は見られなかったもので、総じて、男性も女性も割合に違いはあれども、中程度の適応を示す自己評価タイプが青年全体の中で多勢を占めていると結論づけられる。そして、この点は自己評価の単純な高低では見ていくことの難しい青年が大半を占めると示唆した下山 (1981) の結果を支持している。

さて、第4節～第5節の結果からは、もっとも肯定的な性格特徴、もっとも肯定的な適応意識を示す自己評価タイプは  $SS1$  (高高低低)、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な適応意識を示す自己評価タイプは  $SS16$  (低低高高) であることが明らかにされている。自己評価タイプの組み合わせを見るとわかるように、 $SS1$  (高高低低) と  $SS16$  (低低高高) は、肯定性次元高群と否定性次元低群、あるいはその逆の純粋な組み合わせであり、これまでの自己評価研究で多く用いられてきた自己評価の高低だけを見ようとする一次元スケール (cf. Rosenberg の自己評価尺度) の両極 (高群、低群) に位置すると考えられる自己評価タイプである。本節の結果では、全体での順序に男女差が見られながらも、 $SS16$  (低低高高) の出現率が  $SS1$  (高高低低) より高い点に男女共通した点が見られる。総じて、男女ともに、適応高群 ( $SS1$ ) よりも適応低群に属する自己評価タイプ ( $SS16$ ) の方が青年全体としては出現率が高いといえるようである。

今後、総務庁のおこなっている青少年調査のような標本抽出のしっかりした調査での結果を期待したいが、以上を端的にまとめると次のようになるだろう。すなわち、自己評価の指標から見た青年の自己感情の様相は、男性では、中程度の適応を示す自己評価タイプ ( $SS2$ ,  $SS10$ ) がもっとも多勢であり、性格特徴、適応意識の点でもっとも否定的な自己評価タイプ ( $SS16$ )、性格特徴、適応意識の点でもっとも肯定的な自己評価タイプ ( $SS1$ ) がこれらに次ぐ。総じて、中程度 ( $SS2$ ,  $SS10$ ) → 低群 ( $SS16$ ) → 高群 ( $SS1$ ) の様相を示しているといえる。これに対して、女性では、同じく中程

度の適応を示す自己評価タイプ（SS10, SS2, SS12）がもっとも多勢であり、男性同様、性格特徴、適応意識の点でもっとも否定的な自己評価タイプ（SS16）、性格特徴、適応意識の点でもっとも肯定的な自己評価タイプ（SS1）がこれらに次ぐ。総じて、中程度（SS2, SS10, SS12）→低群（SS16）→高群（SS1）の様相を示しているといえる。以上より、自己評価タイプの出現率や全体の中でのその順序には男女差は見られながらも、中程度→低群→高群の順で青年の自己感情の様相が読みとれる点は共通していえる。

いうまでもなく、学年差が見られなかったからといって、それは個人が3年間ずっと同じ自己評価タイプを維持するということを意味していない。はじめはある自己評価タイプであった者が、あることを契機に自己評価を高めたり低めたりして、別の自己評価タイプへと変わっていくことは十分あり得ることである。ここでは、男女別に見た青年の自己評価の様相が上記のようにとらえられること、そしてそこに大きな大学の学年差が見られないこと、をおさえられればそれでいいように思われる。

## 第7節 まとめ

本章は、青年の自己感情がいかなる状態にあるかを検討するために、まず新たな自己評価尺度を作成するところからはじめた。その尺度作成にあたっては、（1）全体的自己（global self）を用いること、（2）肯定性－否定性次元を考慮すること、（3）社会－個人基準を考慮すること、に留意した。新たな尺度は、従来の自己評価尺度や自己受容尺度を参考にして、肯定性次元における社会基準、個人基準を示すと考えられる項目、否定性次元における社会基準、個人基準を示すと考えられる項目を用意して、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮する自己評価尺度とされた。こうして作成された自己評価尺度は、まず因子分析によって構成概念妥当性が確認された。そして、項目分析や内的一貫性の検討もおこない、尺度の信頼性も確認されたとした。2週間を隔てた尺度の再検査信頼性も十分妥当な結果であった。しかし、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮する自己評価は、各下位尺度の得点をそのまま用いては十分にその特徴を表現できないと考えられ、それは各下位尺度の組み合わせからな

る自己評価タイプによって検討がなされるべきだとされた。

4つの下位尺度のそれぞれの得点を高群、低群に分割し、その組み合わせによって自己評価タイプを作成すると、その数は16になる。しかし、第4節～第6節の調査結果によると、多数の該当者数をもつ自己評価タイプは、SS1（高高低低）、SS2（高高低高）、SS9（低高低低）、SS10（低高低高）、SS12（低高高高）、SS14（低低低高）、SS16（低低高高）と7つにすぎなかったが、それらで占める全体の割合はおおむね9割前後であった。すなわち、それら7つの自己評価タイプは青年を代表する自己評価タイプであった。

このような自己評価タイプの特徴を見るにあたって、YG 性格検査の下位尺度（抑うつ性（D）や劣等感（I）など）と適応意識（人生に満足や生活に充実など）との関係を検討した。その結果、もっとも肯定的な性格特徴、もっとも肯定的な適応意識を示す自己評価タイプはSS1（高高低低）であり、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な適応意識を示す自己評価タイプはSS16（低低高高）であることが明らかにされた。SS1（高高低低）とSS16（低低高高）は、肯定性次元高群と否定性次元低群あるいはその逆の純粋な組み合わせであり、これまでの自己評価研究で多く用いられてきた自己評価の高低だけを見ようとする一次元スケールの両極（高群、低群）に位置すると考えられる自己評価タイプである。

他の自己評価タイプ（SS2、SS9、SS10、SS12、SS14）は、YG 性格検査の下位尺度、適応意識との関係において、すべてこのSS1（高高低低）とSS16（低低高高）との間に位置していた。その中でも、SS1（高高低低）にもっとも近く位置していた自己評価タイプはSS2（高高低高）とSS9（低高低低）であった。しかし、否定的な性格特徴・否定的な適応意識をもたないという点ではSS9（低高低低）がSS1（高高低低）にもっとも近く、肯定的特徴をもっているという点ではSS2（高高低高）がSS1（高高低低）にもっとも近く位置していた。従来適応とは「不適応を示さない」

「否定的な自己感情をもたない」ということで論じられがちであった。その適応観から見るならば、SS1（高高低低）にもっとも近い自己評価タイプは、肯定性次元を完全に肯定してはいるけれども否定性次元を完全に否定できないSS2（高高低高）ではなく、肯定性次元で完全に肯定できなくとも否定性次元を完全に否定することのでき

るSS9（低高低低）であった。

逆に、SS16（低低高高）に近い自己評価タイプを探してみると、SS1（高高低低）にSS2（高高低高）やSS9（低高低低）が近く位置していたほどの自己評価タイプは見いだされなかった。しかし、敢えて挙げるならば、肯定的な性格特徴をもたない、肯定的な適応意識が低いという点で、SS14（低低低高）がSS16（低低高高）にもっとも近く位置していたといえる。

最後には、以上のように検討された肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度、それによって作成される自己評価タイプとその特徴を用いて、青年の自己感情の様相を大学の学年別・男女別・全体に分けて検討した。その結果、学年差は見られなかったが、男女差は見られた。すなわち、自己評価の指標から見た男子青年の自己感情の様相は、中程度（SS2, SS10）→低群（SS16）→高群（SS1）の様相であり、女子青年の様相は、中程度（SS2, SS10, SS12）→低群（SS16）→高群（SS1）の様相であった。総じて、青年全体の自己感情の様相は、自己評価タイプの出現率や全体の中でのその順序に男女差が見られながらも、共通して中程度→低群→高群の順で分布していると結論づけられた。

#### 【付記】

本章の主要な内容は溝上（1999）、水間・溝上（2001）に収録されているが、ここで示すものはそれらを再分析、再検討したものである。

## 第4章 青年の自己の諸相

### －WHY答法の開発－

#### 第1節 問題と目的

第3章では、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度を作成し、青年の自己感情の様相を自己評価指標を通して見た。本章では、青年の自己の諸相を検討することが目的である。

第1章第3節-(1)ですでに述べたように、自己の諸相を扱う研究は、これまで主に自己概念や自己像の研究としてなされてきた。しかし、本章で明らかにしたいことは、青年の自己感情（自己評価）を規定するという限定付きの自己の諸相である。青年の自己の諸相であればどんなものでもいいというわけではない。この点、従来の自己概念や自己像の研究とは異なる。いうまでもなく、自己感情を念頭におきその関連において重要となってくる自己の諸相を扱おうとするのは、青年の自己感情を検討した第3章を受けての流れである。

本章では、青年の自己感情を規定する自己の諸相を実証的に扱うために、「WHY答法（WHY is it test）」を開発する。それは、自己評価測定を第1ステップとしておこない、第2ステップとして、それを規定する自己を「それはなぜですか」という複数の問いにしたがって自由に表出させる技法である。

以下では、まず、WHY答法の理論的構造を示し、次いで、WHY答法が上記のような実証的目的に耐えうる技法であるのか、その妥当性を検証する。最後には、WHY答法を用いて、青年の自己感情を規定する自己の諸相を明らかにする。

#### 第2節 WHY答法の理論的構造 脚注11

脚注11 WHY答法は、自己評価のテーマに限定されず、どんなテーマにも適用可能である（cf. 溝上, 1995）。しかし、本章では、本研究のテーマである自己評価をとくに念

次の文を読んで、もっともあてはまる方に○をつけて下さい。

私は、全体的には自分自身に満足しています。

(      ) はい /そう思います

(   ○   ) いいえ /そうは思いません

(注) 必ずどれかに答えて下さい。

あなたは、どうして「はい/そう思います」または「いいえ/そうは思いません」と答えたのでしょうか？以下の問いに続けて、その理由を思いつく限り答えて下さい。

1. それはなぜですか。

毎日楽しくないから。

2. それはなぜですか。

あまり勉強しないから。

3. それはなぜですか。

人に思ったことが言えないから。

4. それはなぜですか。

将来何がしたいかぜんぜん見えないから (考えようもしない)。

5. それはなぜですか。

図 4-1 自己評価をテーマとするWHY答法の一例

自己評価をテーマとして扱われるWHY答法の実例を、図 4-1 に示す。ここで表出されるものは「自己評価を規定する自己の諸相」であるが、それを扱うWHY答法に

頭において、WHY答法がどのような理論的構造をもつかを明らかにする。よって、WHY答法の一般的理論を明らかにするように論じられている場合でも、それは、常に自己評価をテーマとすることを前提として論じられている点に注意していただきたい。

は次の2つの技法的視点が込められていると筆者は考えている。すなわち、1つは自己の諸相を表出させる際の「内在的視点」であり、もう1つは「自己評価を規定する」自己の諸相を表出させるための「なぜ」という問いである。本章は、2つの技法的視点について概説をし、WHY答法の構造を理論的に示すところからはじめる。

### (1) 自己を理解する視点としての内在的－外在的視点

「内在的視点 (inside point of view)」とは、梶田 (1980/1988) において、自己概念や自己意識の研究を整理する視点として提出されたものである。それまで、内容的にも方法論的にも混沌としていた自己概念や自己意識の研究は、多くの者によって概念整理され (Allport, 1943; 今田, 1956)、あるいは、整理するためのさまざまな視点が提供されてきた (Gergen, 1971; 北村, 1962)。しかし、梶田は、それらの重要性を認めながらも、視点の広すぎる点を指摘し、次の2点に注目して自己概念や自己意識の問題を整理することを提案している。

- ①主我－客我の視点…認識や行動の主体として考えられるものか、それとも認識の対象として考えられるものか。
- ②内在的－外在的視点…内在的視点から主体の実際の意識体験として現れるものであるのか、それとも、外在的視点からその主体の意識や行動を統一的に理解するために要請されるものであるのか。

①主我－客我の視点は、James (1892) の述べる、認識主体としての「私 (I or self as knower)」と認識対象としての「私 (me or self as known)」のこと、あるいは第2章第4節でまとめた行為主体としての「私 (ego)」と「客我 (me)」のことである。本章で重要なのは、②の内在的－外在的視点である。

簡単にいえば、内在的視点とは個人 (被験者) 自身がつもつ内側の視点のことであり、外在的視点とは個人 (被験者) 以外の第三者 (調査者など) がもつ視点のことである。これらは、自己を理解するときに、個人自らの視点で理解するのか (内在的視点)、第三者の視点で理解するのか (外在的視点) という違いで使い分けられるものであり、

その使い分けが調査をおこなうときに求められる。たとえば、ある学生に、将来の生き方を自由に答えるよう尋ねるとする。彼は、「医者になりたい」とか「人を助ける仕事をしたい」などと答える。これは、彼自身の視点、すなわち内在的視点から将来の生き方をイメージして出てきた表象像である。ところが、調査者がこの学生に、「君は結婚もしたいと思っているのだろうか?」と尋ねると、「それも確かにある」というように答えることがある。彼は、将来の生き方として「医者になりたい」とか「人を助ける仕事をしたい」しか挙げなかったが、彼の将来の生き方はけっしてそれらだけで説明されはしない。こうして第三者から尋ねられると、他にも、彼の将来の生き方を構成するものはいろいろと出てくる。これは、第三者の視点、すなわち外在的視点から将来の生き方を理解したものとされる。

## (2) 内在的－外在的視点による方法

内在的－外在的視点を用いると、自己に関する実証的研究の方法論は、内在的視点を重視した方法（以下、内在的視点による方法）と、外在的視点を重視した方法（以下、外在的視点による方法）との2つに整理することができる。

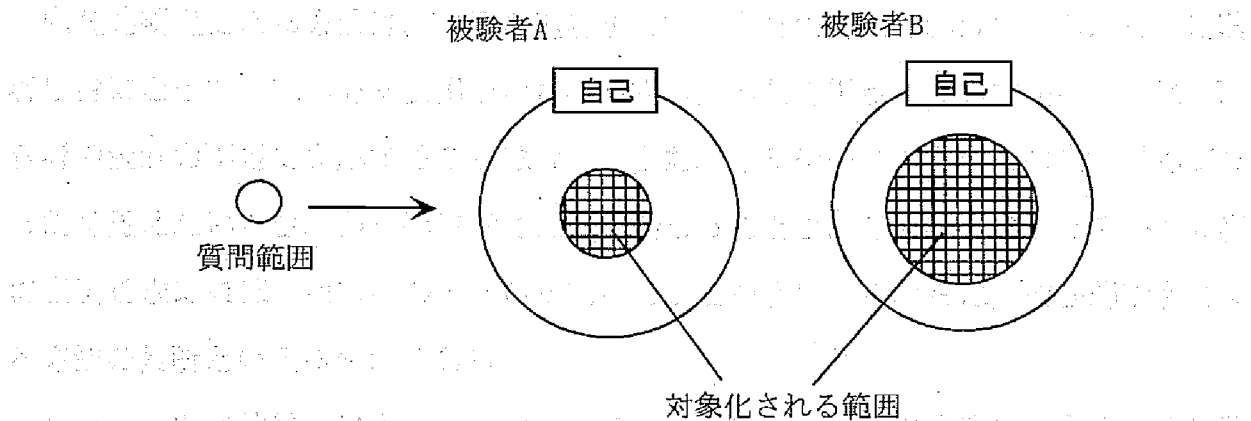
「内在的視点による方法」は、方法論的には、簡単な問い（刺激文）を与えて被験者に自由に記述を求めるものである。作文や日記はもちろんのことながら、文章完成法、20 答法などの技法もそこに含まれる。質的データと呼ばれるものは、この方法によって産出される。問いの出所は第三者によるものであり、問いによって記述の方向性がある程度制限を受けるわけであるから、厳密な意味で「内在的視点による方法」と呼べるわけではないことはもちろんのことである。しかし、これは、調査をおこなう主体が外在的存在である調査者にあることからやむを得ないことである。調査とはそういうものである。ここでは、被験者にとって自由度の高い自己理解・表出を求められるという点で、これを「内在的視点による方法」と呼んでいるにすぎない。

それに対して、「外在的視点による方法」は、調査者の用意した質問項目に対してのみ被験者に反応を求めるものである。被験者は、与えられた項目の内容についてのみ自己を対象化すればいいわけで、それ以外については何をすることも求められない。それは、調査者が与える項目だけで被験者の自己を理解できるとしているからである。

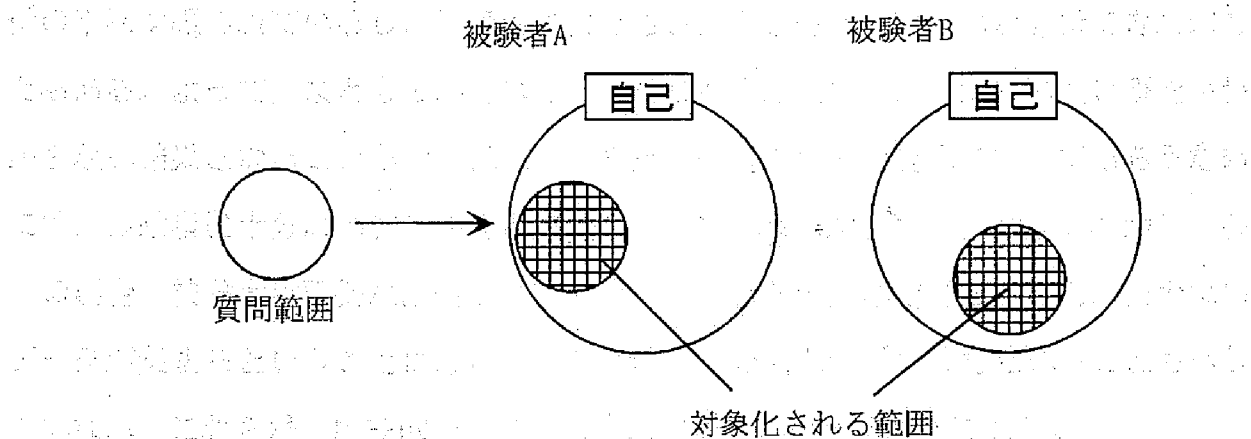


ここでは、項目の内容が調査者の視点から選出・作成されているという点で、これを「外在的視点による方法」と呼んでいる。量的データと呼ばれるものは、この方法によって産出される。

調査者の質問範囲と被験者の対象化する範囲との関係を図に示すと、図4-2のようになる。内在的視点による方法では、調査者が被験者に与える質問の範囲はわずかなものである（たとえば、「私は誰ですか」）。しかし、被験者の自己を対象化する範囲は個人さまざまで、まったく被験者に委ねられる。なぜなら、被験者は、わずかな質問にもとづいて自己を対象化し、何らかの自分を自由に、そして自発的に見出さねばなら



内在的視点による方法



外在的視点による方法

図4-2 内在的・外在的視点による方法の質問範囲と対象化の範囲との関係

らないからである。見出しにくい場合には、被験者 A のように、対象化される範囲は狭いものとなるし、いろいろと思ひ浮かぶ場合には、被験者 B のように、対象化される範囲は広いものとなる。被験者 A は、質問に見合った自分がうまく表出できず苦しんでいるだろうと想像される。それに対して、外在的視点による方法では、調査者が質問項目として与える範囲と、被験者が自己を客体として対象化する範囲とがまったく一致している。というのも、被験者は、与えられた質問項目の範囲に限定して自己を対象化すればいいからである。

このようにして分類される内在的・外在的視点による方法は、それぞれ長所と短所がある。実際には、それをもって使い分けられているといえる。

内在的視点による方法は、自己の理解を被験者自身に委ねるわけであるから、被験者自身にとって意味のある表出がなされやすい。外在的視点による方法のように、調査者の洞察力不足で失敗することはない。また、あるテーマのもと人の内面世界がまったく見えないとき、あるいは考えに行き詰まったとき、この視点によって多くの者に表出を求めれば、何らかの突破口が開けることが多い。これらは、内在的視点による方法の長所といえるものである。

しかし、内在的視点による方法は、多くの場合自由記述、自由表出であるから、分析が非常に面倒である。被験者にとって重要な意識を自由に表出してもらったことはいいのだが、混沌としすぎて整理できないということもある。時間のかかるわりに分析の手法は限られているし、調査者がまとめる視点をもっていないと分析できないこともある。よって、まとめ方が悪いと、ただまとめただけの、何がしたい研究かわからない結果となることも希ではない。また、自己について自由に書いてもらうためには、被験者に十分な内省の態度と労力を求めなければならない。時間もかかる。多くの場合、被験者は面倒な調査を嫌うので、調査者が十分な配慮を怠ると、質の悪いデータが集まるということになる。なかには、半分以上白紙だったということも珍しくはない。これらは、内在的視点による方法の短所といえるものである。

それに対して外在的視点による方法は、内在的視点による方法のように、被験者が自分の枠組みで勝手に自己を表出するということがない。調査者は、自身のねらいのもと項目を用意し、その項目に対してのみ反応（該当）を求める。これは、項目への

反応を通して、数多くの被験者を「統一的に理解」(梶田, 1980/1988) するためである。また、人は自己についてすべてを意識化できるわけではなく、実際に意識化しているものはわずかではない。しかし、意識化されにくい自己が個人のあり方に影響を及ぼしていることは、Freud や Jung の無意識論をもち出すまでもなく事実である。内在的視点による方法は、個人の意識化された範囲のみをデータとするしかないので、時としてこの方法では、不十分な結果しか得られないことがある。個人のあり方は、意識化されない自己まで含めて検討されなければならないので、これは、外在的視点による方法によって扱われることが一般的である。さらに、内在的視点による方法と比べると、外在的視点による方法は被験者にとって労力が少ないので、同じ調査をするなら外在的視点による方法の方が被験者には喜ばれやすい。これらは、外在的視点による方法の長所といえるものである。

外在的視点による方法は、調査者の人を見る洞察とそれを反映する調査項目や尺度がうまくかみ合ったときにはじめて成功するものである。洞察の力は、誰もが同じようにもっているものではないし、教えられてできるようなものでもない。よって、調査者の洞察の程度によっては、項目が被験者にとってまったく的はずれだと感じられる場合が少なくない。また、洞察が的を射たものであっても、それに見合う調査項目や尺度を用意できるとは限らない。洞察だけが優れていても駄目であるし、調査項目や尺度だけが優れていても駄目である。両者のバランスが、外在的視点による方法には必要とされる。これらは、外在的視点による方法の短所といえるものである。

### (3) 内在的視点による方法の特徴—自己概念、自己意識研究から—

内在的視点による方法の特徴を、自己概念や自己意識研究における方法論を整理することによって提示呈示しようと思う。

Burns (1979) の分類にしたがうと、自己概念や自己意識研究の測定技法は、①評定法 (cf. Bills, Vance & McLean, 1951; Engel & Raine, 1963; Fey, 1954; 長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1966, 1967), ②チェックリスト法 (Gough, Lazzari & Fioravanti, 1978; Lazzari, Fioravanti & Gough, 1978; Trent, Fernandez-Marina & Maldonado-Sierra, 1960), ③Q分類法 (Graham & Barr, 1967; Gruen, 1960; Hanlon,

Hofstaetter & O'Conner, 1954; Rogers & Dymond [eds.], 1954; Turner & Vanderlippe, 1958), ④自由記述法 (Bugental & Zelen, 1950; Kuhn & McPartland, 1954; Weigel & McKinney, 1971) に大別して見ることができる<sup>脚注12</sup>。これらを、内在的・外在的視点の観点を用いて整理すると、次のようになる。すなわち、①評定法、②チェックリスト法、③Q分類法は、調査者があらかじめ質問を用意し、その質問の意味する範囲においてのみ被験者に反応（該当）を求めるという点で、外在的視点による方法によるものである。それに対して、④の自由記述法は、簡単な問い（たとえば「私は誰ですか」）をもとに被験者に任意の範囲で表出を求めるという点で、内在的視点による方法によるものである。

従来の自己概念、自己意識の研究では、Burns の分類でいう4つのタイプの技法は、区別されることなく用いられてきた。どのタイプの技法が用いられるかは、個人の好みであったといってもいい過ぎではない。しかし、遠藤(1981)のように、20 答法(Kuhn & McPartland, 1954)と評定法(Self-Differential 法: 長島ら, 1966)を同時に用いて比較検討したものもある。筆者の分類でいう内在的視点による方法と外在的視点による方法の混合調査である。どう違うのかが明言化されてはいないが、何かしら違うものを測定しているという理解があったことを暗に示唆している。

ところで、技法の分類にとどまらない測定技法の違いを明確に指摘したのは、McGuire を中心とする一派であった (McGuire & McGuire, 1980, 1988; McGuire, McGuire, Child & Fujioka, 1978; McGuire & Padawer-Singer, 1976)。McGuire らは、20 答法などの自由記述で自ら表出する自己概念を、調査者の用意した評定の次元に回答するものではなく被験者自身が重要だとする次元を選択する余地のあるもの、選択的に知覚されたものであり、現在の動機や価値、さまざまな自己の中でも比較的強度なものと関わりをもつものだと述べる (McGuire & Padawer-Singer, 1976)。そして、この自ら表出する自己概念を、評定法やチェックリスト等で測定される自己概念と区別し、「自ら表出する自己概念 (spontaneous self-concept)」と名づけたのである。

McGuire らの提唱する自ら表出する自己概念などの自己概念・自己意識は、内在的

<sup>脚注12</sup> Burns は、この他にも投影法、インタビューまで含めて、自己概念や自己意識研究の測定技法を計6つにまとめている。しかし、投影法とインタビューは、ここでの議論に必要ないと判断し、上記では含めなかった。

視点によって表出される自己である。それに対して、評定法やチェックリストなどで扱われる自己概念・自己意識は、外在的視点によって反応を求められる自己である。McGuire らの知見をもとにすると、内在的視点によって表出される自己は、自己感情に大きな影響を及ぼす「個人にとっての」重要な自己であるといえる。

#### (4) 「自己評価を規定する自己の諸相」を表出させる「なぜ」という問い

##### —物語的説明—

しかし、以下に示す Snygg らの知見は、内在的視点によって表出される自己が、自己感情に影響を及ぼすとは必ずしも限らないことを示唆している。

Snygg & Combs (1949) が人の知覚する自分、すなわち「現象的自己 (phenomenal self)」を描くとき、自己感情に影響を及ぼす自己と影響を及ぼさない自己とを二分したことはよく知られている。現象というのは、モノや人、自分を対象化した際に脳裏に現れる表象のことを指すから、現象的自己には、自分に関わるあらゆる知覚、すなわち、「私」の性格、行動から「私」に関わる「他者」や「モノ」(友人の A くん、愛車のジャガーなど) まで無数に存在することになる (第1章第7節参照)。しかし、それらは無秩序に存在しているわけではない。足の小指が小さな「私」は、多くの場合、自己感情を揺さぶるような「私」ではないだろうが、逆に太っている「私」や背が低い「私」は、多くの場合自己感情を揺さぶる。現象的自己は、主体によって意味づけられた経験の中で体制化され秩序立って存在している。よって、意味が大きければ自己感情に大きく影響を及ぼす自己だということになるし、意味が小さければ自己感情に影響を及ぼさない自己だということになる。ちなみに、この違いは、その人自身が生まれて以来培ってきた、その人固有の内在化された価値を基準として生じる。個人固有といっても、価値は社会的価値と密接に関わりながら形成されるから、社会で重要視されている価値がそのまま多くの個人に内在化されていることも希ではない<sup>脚注13</sup>。

さて、現象的自己とは、個人の内側の視点、内在的視点をもって脳裏に表象されるものを指すが、Snygg らが述べるように、内在的視点による表出をもってしても、そ

<sup>脚注13</sup> Combs が副題を変えて改訂版 “Individual behavior: A perceptual approach to behavior” を 1959 年に出しているが (Combs & Snygg, 1959)、現象的自己への基本的な考え方はそのまま踏襲されているようである。

ここには自己感情に大きく影響を及ぼすものと及ぼさないものがある。内在的視点によって表出される以上、どちらも個人にとって重要なものには違いないだろうが、本章の目的のように、「自己評価を規定する」という意味での自己の諸相を扱いたい場合には、内在的視点による方法を用いつつも、「自己評価を規定する自己」を表出させるためのもう一工夫が必要である。ここでは、それを、自己評価の高低を説明させる「なぜ」の問いによって解決しようと思う。以下では、「なぜ」という問いが、どのような特徴をもっているのか概説しようと思う。

「なぜ」という問い (why question) を正面から扱った心理学の理論は、いうまでもなく、帰属理論 (attribution theory) である。帰属理論は、Heider から出発したといわれる。Heider (1944, 1958) は、「因果の推論 (causal reasoning)」を取り上げ、行為を原因に帰する認知過程を「帰属 (attribution)」と呼んだ。たとえば、ある社員が上司から援助を受けたとする。この援助は、何に由来するのかと彼は思いをめぐらすことだろう。そして、「やさしい上司だから」とか「部下にゴマをすろうとして」という考えを思い浮かべるかもしれない。こうして、同じ「援助」という行為は、「やさしさ」とか「部下に対する自分の高い地位」を提示するという違った原因に帰属される。帰属された原因の違いによって、行為から生じる心理的感情が変わることは、その後多くの研究で明らかにされている (cf. Dweck, 1975; Kistner, Osborne, & LeVerrier, 1988; Thibaut & Riecken, 1955; Weiner, Heckhausen, Meyer, & Cook, 1972)。

ところで、近年、物語論や会話論の立場からは、物語や会話で作成される因果性が、実際に起こった出来事の因果性に必ずしももとづいていないことが明らかにされている (cf. Hilton, 1990; Polkinghorne, 1988; 大山, 2001; やまだ, 2000a, 2000b)。たとえば、ある学生の「私は、親に言われましたので、この大学を受けました」という説明では、「親にこの大学を受けるように言われた」が原因となって、「(この大学を) 受けた」が結果となっている。明らかに、この因果性は語り手自身 (学生) によって作られている。ここで重要なのは、そこでの原因-結果の説明が実際の出来事にもとづく因果的説明なのではなく、いくつもある可能性の中から選択的に作り上げられた物語的説明だということである。親は、実際にはそんなことを言ってはいないかもし

れないし、「この大学は世間でいい大学だといわれているよ」といった程度のことを言っただけかもしれない。しかし、実際どうであったかは彼の世界ではどうでもいいことである。重要なのは、彼が、「親にこの大学を受けるように言われた」を原因として設定し、「(だからこの大学を)受けた」をその結果として配列し物語を作成したということである。これによって、彼は、親のいうがままに人生を歩んでいると思ひこみ、自己の感情を否定的に喚起させている。そのようなことは十分にあり得ることである。物語こそが人を動かすのである (Gergen & Gergen, 1988; 杉浦, 2001; Vitz, 1990)。

Hilton (1990) が述べるように、帰属行為は、因果的志向性をもつ「選択」的説明行為である。そこでは、もっとも「適切な」説明を見出すべく関連のない要因は排除され、もっとも関連のある要因が選択される。こうして行為は、意味を与えるべく、もっとも関連のある要因と結びつけられていく (cf. Bamberg & Marchman, 1991; Bruner, 1997)。その結果が、行為にともなう心理的感情である。このような選択的説明行為を促しているのは、「なぜ」という問い (why question) である (Hilton, 1990)。つまり、「なぜ」という問いは、ある行為を説明するにあたって、関連のない要因を排除し、できるだけ関連のある要因を結びつける力をもっているのである。

この知見を、「自己評価を規定する」自己の諸相を表出させるための示唆ととらえると、われわれは、自己評価の肯定性・否定性をまず決定した上で、それを規定する自己を「なぜ」の問いによって説明させればよいことがわかる。そこでの説明は、自己評価に関連のあるものが選択されることによってなされるから、「自己評価を規定する」という条件はこれによって満たされることとなる。WHY答法は、このように、「内在的視点」と「なぜ」という2つの技法的視点をもとに開発された「自己評価を規定する自己の諸相」を扱う技法なのである。

#### (5) 自己評価を規定する「集団にとっての」重要な自己

最後に、これまでの代表的な自己評価研究としてなされてきた、自己評価を規定する「集団にとっての」重要な自己を扱う研究を紹介しておきたい。これと対比することによって、内在的視点による方法を利用したWHY答法が、自己評価を規定する「個人にとっての」重要な自己を扱う技法であることがより明らかになるだろうと考えら

れる。これまでの研究を振り返ると、自己評価を規定する重要な自己の研究は、たとえば、第1章第3節-(2)ですでに見た山本・松井・山成（1982）の研究に典型的に見ることができる（表1-1を参照）。そこで山本らは、自己の諸領域として「社交」や「スポーツ能力」「知性」など11を挙げ、どの程度そうした領域記述が自分に該当するかを評定させた。次いで、Rosenberg（1965）の自己評価尺度を用いて自己評価を測定し、自己評価を基準変数、各領域の自己を説明変数とした重回帰分析をおこなったのであった。被験者は大学生である。それによると、男女共通して「優しさ」「容貌」「生き方」領域における自己の偏回帰係数が有意に高く、これらが青年全体の自己評価を大きく規定していることがわかった。また、性差の分析をも検定でおこなった結果、男性は女性に比べて、「知性」領域における自己が自己評価を大きく規定しており、女性は男性に比べて、「優しさ」や「家の経済力」領域における自己が自己評価を大きく規定していることがわかった。「スポーツ能力」や「性」領域における自己は、男女とも自己評価を規定していなかった。

他にも、森下（1985）の小学生・中学生・青年を対象にした研究や、遠藤・西（1993）の小学生・中学生を対象にした研究、三田（1988）の高校生・青年を対象にした研究などが同様の研究として位置づけられる。海外における、中学1年生から高校2年生までの学生を対象にした Hoge & McCarthy（1984）の研究も同様である。

これらの研究は、用いられる尺度に違いはあっても、いずれも特定領域における自己を説明変数とし、自己評価を基準変数として重回帰分析をおこない、自己評価を規定するとみなされる重要な自己、あるいはその領域（山本らの研究でいえば「優しさ」や「容貌」「生き方」など）を抽出しようとするものである。重要だとされる自己やその領域は、調査者の視点（外在的視点）によってあらかじめ用意されたものである点の特徴であり、被験者は独自の重要な自己やその領域を見いだせない可能性を秘めつつ、外側から用意された視点に依っていかねばならない。

外在的視点による方法が、集団全体を「統一的に理解」しようとねらうものであること（梶田, 1980/1988）から明らかなように、この方法によって扱われる重要な自己は、「集団にとって」の重要な自己である。Hoge & McCarthy（1984）も、自分たち



の研究が被験者全体で自己評価を規定している自己概念、すなわち、「集団にとって重要な自己概念 (important specific self-concept for the group)」を見出そうとする作業であったと自覚的に述べる (p.407)。

本研究で扱おうとしている自己評価を規定する自己は、個々人にとって重要だと判断される自己であり、それは個人の適切さの判断に委ねられてあらわれてくるものである。集団全体では、「優しさ」や「容貌」「生き方」領域における自己が自己評価の高低を規定するにしても、ある者にとっては、将来の目標を見出せないことが自己評価の高低を規定したりする。「個人にとっての」重要な自己は、集団全体を必ずしも規定するとは限らないが、個人にとっては重要だという前提の中で扱われるものなのである。

#### (6) WHY答法—自己評価を規定する自己の諸相の表出—

本研究では、青年個々人にとっての自己評価を規定する自己の諸相を、被験者自らの視点「内在的視点」による表出と自己評価の高低を説明するための「なぜ」という問いによって構成される「WHY答法 (Why is it test)」によって検討をおこなう。

ここでいうWHY答法とは、図 4-1 で示したように、自己評価測定を第1ステップとしておこない、第2ステップとして、それを規定する自己の諸相を「それはなぜですか」という複数の問いにしたがって表出させる技法である。「それはなぜですか」を複数個設定するのは、自己評価を規定する自己が1つに限定されるものではないだろうと考えるからである。自己評価を規定する自己は、複数個該当する場合もあるだろうし、大きくは1つの自己でも、具体的・抽象的に、あるいはさまざまな角度から多様に記述されることもある。WHY答法で表出される自己が「自己の諸相 (aspects of the self)」であるために、このような「それはなぜですか」を複数個設定する配慮も必要としている。

ところで、第1に決定されるべき自己評価は、どんな自己評価でもいいというわけではないから、その点への注意は必要である。第1章第3節・(1)でも述べたように、自己評価の測定は「全体的自己 (global self)」への評価とされねばならない。というのも、ある自己の特定領域 (対人領域や学業領域など) が特別に取り上げられて扱われ

る場合には、それを重要としない個人が出現することとなる。個人にとっての重要な自己の領域は、個人によってのみ判断されるのであり、個人に委ねられるべきものである。特定領域を含まない全体的自己への評価は、そのような重要な領域を個人に暗に委ねる概念なのである。

そして、全体的自己とは、無数の自己像の単純な加算モデルではなく、概念化できない暗黙の自己まで含めた個人にとって重要性の高い「私」や「他者」「モノ」を中心に体制化された自己の全体存在のことである（遠藤, 1992b; 水間, 1998）。人は、自己評価を求められる際、全体的自己を暗に対象化し評価しながらも、潜在的には、その個人にとって重要な「私」や「他者」「モノ」を集約させながら評価している<sup>脚注14</sup>。よって、全体的自己評価の測定によって得られる個人の肯定性および否定性は、個人にとっての重要な自己をとらえる第1ステップとして有効と考えられる。WHY答法は、個人の肯定性、否定性を暗に規定する重要な自己を、「それはなぜですか」という質問文を第2ステップとして複数に投げかけ、顕在化、表出化させる技法なのである。

次節以降では、このWHY答法を実際に用いてデータを収集し、この技法が果たしてそのような自己を表出させることができるのかどうか、検証をおこなっていく。

### 第3節 WHY答法における「それはなぜですか」の設定個数と分析カテゴリーの検討（調査6）

#### 第1項 目的

本節では、2つのことを検討する。

第1に、青年に集団調査でWHY答法を実施することを前提として、WHY答法における「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係を検討する。具体的には2群を設定し、一方には、10個の「それはなぜですか」を与え、それに対して自由に記述を求める（制限非教示群）。他方には、同じく10個の「それはなぜですか」を与

<sup>脚注14</sup>（全体的）自己の世界に見られる「私」「他者」「モノ」の構成関係は、第2章第7節の Hermans, Kmepen & van Loon (1992) の対話的自己論に依拠している。理論的詳細はそちらを参照のこと。

え、「3個以上書くように」との制限の教示を設けて記述を求める（制限教示群）。これは、被験者の自発的な表出が集団調査でどこまで見込めるかを見定める作業である。

第2に、「それはなぜですか」に対して表出された記述のカテゴリー化についてである。実際にカテゴリーを作成して分析をおこない、以後の調査におけるカテゴリー作成への示唆を得ようとする。

## 第2節 方法

### (1) 調査内容

**WHY答法** WHY答法は、図 4-1 に示すような形で被験者に与えられた。それは、次の2段階ステップでおこなわれる点に特徴がある。

①自己評価センテンス:「私はいろいろ不満や反省がないわけではないが、基本的には今のままの自分でいいと思っています」（自己評価センテンス）を与え、被験者にはそれに対して“はい／そう思います”（以下、Yes 群），“いいえ／そうしません”（以下、No 群）の回答を強制二択法で求める。この自己評価センテンスは、自己受容的な、また良い意味での自己満足的な評価を広く内包させた全体的自己（global self）を指す刺激文として作成されている。

②「それはなぜですか」:自己評価センテンスにどうして“はい／そう思います”または“いいえ／そうしません”と答えたのか、複数の「それはなぜですか」という問いに答える形で自由に記述させる。本調査では、設定個数と表出個数との関係を検討するため、まずは10個の「それはなぜですか」を設定する。

また、実施群を2群設け、そのうちの1つの群（制限教示群）には、「それはなぜですか」に対する表出を3個以上として制限を設けた。これは、すでに述べたように、集団調査である一定以上の表出個数を促す制限教示が必要かどうかを検討するためである。

### (2) 調査対象

制限非教示群として、関西のO女子大学の女子学生443名。制限教示群として、関西のK大学、O大学の学生332名（男性149名、女性183名）を対象とした。前者は女性のみデータであり、後者は男性、女性の混在するデータであるが、本調査の

目的には支障がないと判断した。いずれも、授業担当者による教示のもと一斉におこなわれた。

### (3) 調査時期

制限非教示群の調査は1994年11月におこなわれ、制限教示群の調査は、1994年6月と1995年3月の2回にわけておこなわれた。

## 第3項 結果

### (1) 「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係

表4-2に、制限非教示群と制限教示群における「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係を示す。それによると、両群の平均点に有意差は見られなかったが( $t = -0.398, df = 772.21, n.s.$ ), 制限教示個数の3個未満の表出者と3個以上の表出者との割合には、 $\chi^2$ 検定の結果1%水準の有意差が見られた( $\chi^2(1) = 66.76, p < .01$ )。また両群ともに、およそ80%の者が5個以内の表出で回答をやめていることもわかった(制限非教示群80.0%, 制限教示群84.6%)。

表4-2 制限非教示群と制限教示群における

「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係

「それはなぜですか」 の表出個数	制限非教示群	制限教示群
1	53 (12.0)	20 (6.0)
2	106 (23.9)	14 (4.2)
3	62 (14.0)	132 (39.8)
4	80 (18.1)	80 (24.1)
5	53 (12.0)	35 (10.5)
6	18 (4.1)	16 (4.8)
7	27 (6.1)	16 (4.8)
8	18 (4.1)	7 (2.1)
9	0 (0.0)	1 (0.3)
10	26 (5.9)	11 (3.3)
N=	443 (100.0)	332 (100.0)
平均値(S.D.)	3.92 (2.40)	3.98 (1.86)

(注1) 表中の数字は「度数 (%)」である。

### (2) WHY答法のカテゴリー分析

制限非教示群では、35.9%の者が1～2個の記述しか表出しなかった。しかし、ここでの記述内容は「いいから」とか「毎日が楽しいから」「五体満足だから」といった表面的なもの、分析をおこなう上で困るものが多かった。ここでは、「3個以上書くよ

うに」と教示を求めた制限教示群のデータを用いて、記述のカテゴリー分析をおこなう。なお、制限教示群で「3個以上書くように」との指示があるにもかかわらず、1～2個の記述しかしていない者は、ここでは欠損値扱いとしてカテゴリー分析の対象からは除外した（332名中34名、10.2%）。

カテゴリー分析をおこなうため、全体の記述を通読して、以下のカテゴリーを作成した。すなわち、Yes群では、「自己評価(Y)」（自信がある、自分が好きだ）、「性格(Y)」、「欲求行動(Y)」（やりたいことをやっている）、「人間関係(Y)」、「他者評価(Y)」（自分を認めてくれる人がいる）、「生き方人生(Y)」、「未来(Y)」、「過去(Y)」（今までよく頑張ってきた）、「生活(Y)」（今の生活に満足している）、「生活感情(Y)」（楽しい、充実している）、「生活行動(Y)」（やることはやっている、何事も一生懸命やっている、前向きである）、「学校(Y)」（学校生活に満足している）、「家族(Y)」（すばらしい家族をもてて幸せだ）、「身体(Y)」（背が高い）、「能力(Y)」、「健康(Y)」（五体満足だから）、「認知的対処(Y)」（自分を肯定的にとらえようとしている）、「欲求不満のなさ(Y)」、「運の良さ(Y)」の19カテゴリーを作成した（以上、カテゴリーのわかりにくいもののみに代表的な例を挙げた）。これらのカテゴリーに該当しないとみなされる記述は「その他(Y)」（たとえば、言い訳、人生論など）にカテゴライズされる（計20カテゴリー）。またNo群では、「自己評価(N)」（自信がない、自分が嫌いだ）、「性格(N)」、「欲求行動(N)」（やりたいことが見つからない）、「人間関係(N)」（友達づきあいがうまくいかない）、「対人行動(N)」（思っていることを人に言えない、人に冷たくあたってしまう）、「生き方(N)」、「未来(N)」（夢がない）、「過去(N)」（今まで良いことがなかった、受験に失敗した）、「生活(N)」、「生活感情(N)」（無気力だ、毎日が楽しくない）、「生活行動(N)」（毎日だらだらしている、やることをやらない、実行力がない）、「学校(N)」（学校がおもしろくない、勉強をしない）、「家族(N)」、「身体(N)」（顔が悪い、太っている）、「能力(N)」（頭が悪い、運動音痴）、「健康(N)」、「可能性追求(N)」（現状に満足してはダメだ、もっと良い自分になれる可能性がある）、「考え方(N)」（すぐ悲観的になる）の18カテゴリーを作成した。これらのカテゴリーに該当しないとみなされる記述は、Yes群同様、「その他(N)」（たとえば、人生論など）にカテゴライズされる（計19カテゴリー）。「可能性追求(N)」のカテゴリーのみ、ポジティブな様相をうかがわせる。

なお、基本的に1人の被験者における複数の「それはなぜですか」に対する記述はそれに対応する複数のカテゴリーにカテゴライズされるが、場合によっては、5個記述をしていてもカテゴライズされるカテゴリーは1つという場合もある。それは、カテゴリー的には同じ記述だと判断される場合である。また、実際のカテゴライズは、筆者を含む3人の心理学を専攻する者によっておこなわれた。若干の練習をおこなってカテゴリーの同定する内容を確認しあい、独立してカテゴライズをおこなった。3人で一致しないものは最後にまとめて合議をおこなった。合議で納得されたものまで含めた3人のカテゴライズの一致率は、Yes 群 93.4%，No 群 87.5%，平均 91.4%で

表 4-3 Yes 群における自己評価を規定する自己カテゴリーの表出率

出現順位	カテゴリー	度数(%)
1	その他(Y)	119 ( 65.7)
2	自己評価(Y)	49 ( 27.1)
3	生活感情(Y)	41 ( 22.7)
4	人間関係(Y)	40 ( 22.1)
5	生活(Y)	26 ( 14.4)
6	他者評価(Y)	25 ( 13.8)
7	生活行動(Y)	24 ( 13.3)
8	欲求行動(Y)	21 ( 11.6)
9	認知的対処(Y)	16 ( 8.8)
10	学校(Y)	15 ( 8.3)
11	健康(Y)	14 ( 7.7)
12	欲求不満のなさ(Y)	13 ( 7.2)
13	生き方人生(Y)	13 ( 7.2)
14	過去(Y)	10 ( 5.5)
15	性格(Y)	10 ( 5.5)
16	未来(Y)	9 ( 5.0)
17	家族(Y)	9 ( 5.0)
18	身体(Y)	4 ( 2.2)
19	運の良さ(Y)	4 ( 2.2)
20	能力(Y)	3 ( 1.7)
		N= 181 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-4 No 群における自己評価を規定する自己  
カテゴリーの表出率

出現順位	カテゴリー	度数(%)
1	生活行動(N)	54 ( 46.2)
2	自己評価(N)	45 ( 38.5)
3	対人行動(N)	31 ( 26.5)
4	性格(N)	24 ( 20.5)
5	可能性追求(N)	22 ( 18.8)
6	考え方(N)	18 ( 15.4)
7	未来(N)	17 ( 14.5)
8	学校(N)	14 ( 12.0)
9	生活(N)	13 ( 11.1)
10	その他(N)	13 ( 11.1)
11	人間関係(N)	12 ( 10.3)
12	欲求行動(N)	9 ( 7.7)
13	生き方(N)	8 ( 6.8)
14	生活感情(N)	7 ( 6.0)
15	身体(N)	5 ( 4.3)
16	過去(N)	4 ( 3.4)
17	能力(N)	4 ( 3.4)
18	健康(N)	3 ( 2.6)
19	家族(N)	2 ( 1.7)
N=		117 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

あった。

Yes 群, No 群におけるカテゴリー分析の結果を, 表 4-3 に示す。Yes 群では, 「その他(Y)」を除き, 「自己評価(Y)」(27.1%), 「生活感情(Y)」(22.7%), 「人間関係(Y)」(22.1%) の表出率をもっとも高かった。また No 群では, 「生活行動(N)」(46.2%), 「自己評価(N)」(38.5%), 「対人行動(N)」(26.5%) の表出率をもっとも高かった。Yes 群の「その他(Y)」は 65.7% と非常に高い表出率であったが, No 群の「その他(N)」は Yes 群のそれほど高い表出率を示さなかった (11.1%)。

#### 第4項 考察

本節では, 青年に集団調査でWHY答法を実施することを前提として, 第1に, WHY答法における「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係を検討すること, そして, WHY答法の記述から作成されるカテゴリーを検討すること, の2つの検討を目的とした。

前者のついては2群を設定して検討をおこなった。すなわち, 10個の「それはなぜですか」を与えることを共通設定とし, 「3個以上書くように」という教示を設けるか

否か（制限非教示群と制限教示群）で表出個数の関係を見ようとした。その結果、全体的に記述された平均個数に2群の有意な差は見られなかったが、3個以上を書くか否かでは両群に有意な差が見られた。

3個という数字の設定は恣意的ではあるが、筆者はこの程度の表出個数が集団調査で見込めるならば、表出個数の制限教示はおこなった方がいいのではないかと考える。その理由は、カテゴリー分析の箇所（第3項-(2)）で述べたように、1～2個しか記述しなかった者の内容の多くが、「いいから」とか「毎日が楽しいから」「五体満足だから」といった表面的なもの、分析に困るものであったからである。もちろん、1～2個しか記述しなかった被験者の中には、本当にその程度しか記述できなかった者がいたことだろう。そうした被験者に「3個以上書くように」という制限教示は、無理矢理なものを表出させるだけで苦痛以外のなにものでもなかったかもしれない。そして、そのような者が同じだと思っている内容を違った表現で3個以上書いたことも十分考えられることである。しかし、たとえ同じような内容がWHY答法で複数記述されていたとしても、カテゴリー分析では結果的に1つないしは2つのカテゴリーに同定されるということがある。無理矢理に記述されたものが分析に支障を来すということはない。それよりもむしろ、不十分な量の記述しかなされずに、分析が十分にできないということの方が問題である。その意味で、制限教示によって分析に有用な記述がより多く出現するのであるのならば、たとえ苦痛を感じながら3個以上記述する者がいるにしても、「3個以上書くように」の制限教示は設けた方がいいと筆者は考える。

また、「それはなぜですか」の設定個数についてであるが、両群ともに8割以上の者が5個以下の「それはなぜですか」で記述をやめていることが特徴的であった。集団調査であることも考慮に入れば、「それはなぜですか」の設定個数は5個程度が適当なのではないだろうかとも考えられる。

次に、WHY答法の記述を集約するカテゴリーの作成についてである。本節では、WHY答法によって得られた記述から、Yes群では「その他(Y)」を含めて20カテゴリー、No群では19カテゴリーを作成した。その結果、Yes群で表出率の高かったカテゴリーは、「自己評価(Y)」「生活感情(Y)」「人間関係(Y)」であり、No群では「生活行動(N)」「自己評価(N)」「対人行動(N)」であった。ここでは、どのカテゴリーが青年



の自己評価をもっとも規定するのかということを考えることよりも、作成されたカテゴリーそれ自体について考察をおこないたい。

まず、カテゴリー分析の結果で、Yes 群、No 群ともに高い表出率を呈していると考えられたカテゴリーを見ると、「自己評価(Y)」「自己評価(N)」は同じカテゴリーの裏返しであるが、その他のカテゴリーは Yes 群、No 群では異なっている。しかし、全く異なるカテゴリーかといえば、それは微妙である。すなわち、Yes 群の「生活感情(Y)」、No 群の「生活行動(N)」は同じ生活次元に関する事象を問題としたカテゴリーであるし、Yes 群の「人間関係(Y)」、No 群の「対人行動(N)」も、同じ他者との関わり次元に関する事象を問題としたカテゴリーである。広くは同じ次元の問題でも、扱われるカテゴリーの名称は異なっているというのが、ここでの問題である。

これは、次のような問題を引き起こしているといえる。すなわち、広くは同じ次元を示す事象でも、このようなカテゴリー分析のもとでは、一つ一つが独立して扱われ、相互の関連が見えにくくなるということである。たとえば、Yes 群における「生活(Y)」と「生活感情(Y)」「生活行動(Y)」、あるいは No 群における「生活(N)」「生活感情(N)」「生活行動(N)」は、同じ生活次元の事象であるが、このような分析のもとでは、それぞれが独立したものとならざるを得ない。それらが同じ生活次元の事象であることは、解釈の中で任意にとらえられるだけである。相互の関連を意識したカテゴリーとなるためには、全体的な大枠から位置づけるための上位次元が設定されねばならないと考えられる。つまり、「生活(Y)」「生活感情(Y)」「生活行動(Y)」を包括する上位次元カテゴリー「生活(Y)」がたとえば設定されるならば、独立したカテゴリー(「生活(Y)」「生活感情(Y)」「生活行動(Y)」)を扱いながらも、それら相互の関係をも意識したカテゴリー分析をおこなえと考えられるのである。

また、本節でのカテゴリーは、WHY 答法によって得られた記述を参考にして作成されたものであるが、この方法でカテゴリーが作成されると、次のような問題も生起する。すなわち、Yes 群に見られるカテゴリーが No 群で見られなかったり、No 群で見られるカテゴリーが Yes 群で見られない、という問題である。たとえば、No 群で突出している「対人行動(N)」や「可能性追求(N)」は Yes 群では作成されていないし、逆に、「認知的対処(Y)」は Yes 群にしか見られない。これらのカテゴリーは、Yes 群固

有あるいはNo群固有のカテゴリーの存在を示す上では有用であるが、先にも述べた、全体的な大枠から見た位置づけが不明である点を払拭できない。たとえば、Yes群の「認知的対処(Y)」とNo群の「可能性追求(N)」がともに「自己や世界への関わり方」を述べているカテゴリーと見て取ることができるならば、これら2つのカテゴリーは、Yes群、No群固有のカテゴリーとして位置を表明しつつも、全体的な大枠の中で位置づけられることが可能である。

このようなカテゴリーの次元の問題は、決して本節の調査に限られるものではなく、これまでの研究を振り返っても同様に見られるものである。すなわち、自己や自己概念をどのようなカテゴリーで整理して見ていくのかという場合の議論である。たとえば、James (1890) が、自己の構成要素を「物質的」「社会的」「精神的」と3つに分けたことはよく知られているし、Harter (1982) は、自己概念の種類として「認知的」「社会的」「身体的」「一般的」を挙げている。Piers & Harris (1964) は「一般的地位と学業的地位」「行動」「不安」「人望」「幸せと満足」「外見と特徴」の6種類を挙げているし、Fitts (1981) は、「全体的」「アイデンティティ」「自己満足」「行動」「身体的」「道徳」「人格的」「家族」「社会的」の9種類を挙げている。

他にもかなり多くのカテゴリーが提唱されており挙げていけばきりが無いが、それらに特徴的なのは、上述したことと同じく、カテゴリーのまとまりに一定の次元が見出せないことである。重要だとみなされるカテゴリーが無秩序的に並べられているようにも見える。たとえば、Harterのカテゴリーは、一般的レベルと社会的、身体的といったやや具体的なレベルとが同じ次元でまとめられているし、Piers & HarrisやFittsのようにカテゴリーの多いものは、様々な機能をもったカテゴリー（特徴や価値、感情、評価）が同列に混在している。混在していることそのことは問題ではないが、なぜそれらが同列におかれるのかということへの説明が見当たらない。このようなさまざまなレベルの自己をわかりやすくまとめるためには、まとめる際のカテゴリーのもつ次元に最大限の注意をはらわねばならないと筆者は考える。全体を整理した形で見るために是非とも必要な視点だと考えられ、この視点こそが、われわれのこれまでのカテゴリー分析に欠けていたもの、今後のカテゴリー分析に必要なものと考えられるのである。

## 第4節 WHY答法の妥当性の検討と上位次元－下位次元カテゴリーの2段階階層による分析（調査7）

### 第1項 目的

本節では、自己評価をテーマとしたWHY答法のさらなる検討をおこなう。前節での結果を受けて、WHY答法の構成を次のように修正することとした。すなわち、「それはなぜですか」の設定個数を5個とし、「3個以上書くように」との制限教示を設けることである。本節の調査では、この条件のもとで集団調査における被験者の自発的表出を一定程度見込めると判断し、それによるWHY答法における「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係をあらためて検討する。

また本節では、前節で検討できなかったWHY答法の妥当性について検討をおこなう。ここでは、次の2点の検討をおこなう。1つは、自己評価センテンスの妥当性についてである。WHY答法の自己評価センテンスは一文で個人の自己満足度を訪ねる形式になっているが、この一文が果たして自己評価を測定しているのかどうか、という検討である。もう1つは、3～5個の「それはなぜですか」に対する回答記述を要求するWHY答法で、被験者の自己評価をどの程度説明できているのか、という「それはなぜですか」の妥当性の検討である。

最後には、前節で示されたように、大枠の次元設定をおこなったWHY答法のカテゴリー分析をおこなう。本節では大枠として、どのような上位次元カテゴリーが設定されるべきか、という点を理論的に検討する。そして、収集された記述がそれら上位次元カテゴリーの下でどのような下位次元カテゴリーとしてまとめられるのかを検討する。こうしてなされたカテゴリー分析の結果を、前節のものと比較することが本節の最後の検討課題である。

### 第2項 方法

#### (1) 調査内容

**WHY答法** WHY答法は、次の2段階ステップでおこなわれた。

①自己評価センテンス：前節の調査では、自己評価センテンスは、「私はいろいろ不満

や反省がないわけではないが、基本的には今のままの自分でいいと思っています」として被験者に与えたが、一文がダブル・ミーニングになっていること、一部の学生から意味がわかりにくいと指摘があったことを考慮して、本節の調査では「私は全体的には自分自身に満足しています」とすることにした。「全体的に」という言葉は、第1章第3節-(1)で述べた全体的自己 (global self) を考慮してのものである。被験者は、自己評価センテンスに対して、“はい／そう思います” (以下, Yes 群), “いいえ／そう思いません” (以下, No 群) のいずれかで回答する。

②「それはなぜですか」: 自己評価センテンスにどうして“はい／そう思います”または“いいえ／そう思いません”と答えたのか、複数の「それはなぜですか」という問いに答える形で自由に記述させる。本節の調査では、前節の結果を受けて、5個の「それはなぜですか」、「3個以上書くように」との制限教示を設けた。

**WHY答法による自己評価の説明率** WHY答法への記述終了後、「1～5で答えた理由は、あなたが今の自分に満足している／満足していない、をどの程度説明したと思いますか？あてはまるところに○をつけて下さい。」という教示文を与え、それに対して“非常によく説明している (5点)” “まあまあ説明している (4点)” “多くは説明していないが、大事なところは説明している (3点)” “少し説明しているだけで、大事なところは説明していない (2点)” “まったく説明していない (1点)” の5件法で評定を求めた。なお、この問いには、「他人にこれを読ませて理解できるかではなくて、あくまで自分の意識の中でどの程度説明したと感じられるかをここでは問題にしています。」という但し書きをつけ加えた。

**Rosenberg の自己評価尺度 (以下, ROSEN)** Rosenberg (1965) の自己評価尺度 10項目 (星野, 1970 翻訳)。評定は、“あてはまる (4点)” ～ “あてはまらない (1点)” の4件法でおこなった。

**肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度** 第3章で作成した肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度。4下位尺度 (SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N) から成り立っており、各下位尺度には6項目ずつ含まれている (項目内容は表 3-1, 3-2 を参照)。計 24 項目の尺度である。評定は、“全くあてはまる (5点)” ～ “全くあてはまらない (1点)” の5件法である。

## (2) 調査対象

関西の国公立・私立の大学生 2031 名（男性 790 名，女性 1241 名）。ただし，ROSEN に回答した者は，この中の 1093 名（男性 650 名，女性 443 名）であった。ここでの被験者は，調査 4（第 3 章第 5 節）と同一である。

## (3) 調査時期

1996 年 11 月～1997 年 7 月

## 第3項 結果

## (1) 「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係

表 4-5 に，本節の条件，すなわち，5 個の「それはなぜですか」「3 個以上書くように」との制限教示，のもと施行された WHY 答法の表出個数を示している。前節の調査における制限教示群でも，「3 個以上書くように」との教示を無視して，「それはなぜですか」に 1，2 個しか表出しなかった者は 10.2% いた。本節の調査でも同様に，1981 名中 151 名（7.6%）の者が，教示を無視した表出をおこなっていた。

本節では，「それはなぜですか」の全体の個数を，前節の 10 個から 5 個に減らした。その結果，3 個の表出でやめる者が前節の 39.8% から 58.8% となった。しかし，確実に 9 割以上の者（92.6%）を 3～5 個の「それはなぜですか」に記述させることはできた。

表 4-5 「それはなぜですか」の表出個数

「それはなぜですか」の表出個数	度数 (%)
1 個	67 ( 3.4)
2 個	84 ( 4.2)
3 個	1165 ( 58.8)
4 個	357 ( 18.0)
5 個	308 ( 15.5)
N=	1981 (100.0)
平均(S.D.)	3.38 ( 0.91)

(注) WHY 答法にまったく回答していない者 50 名は欠損値扱いとされた。

## (2) 自己評価センテンスの妥当性

自己評価センテンスの妥当性を検討するため，本節では，Yes 群，No 群における Rosenberg (1965) の自己評価尺度 (ROSEN) 得点，第 3 章で筆者が作成した肯定性

—否定性次元／社会—個人基準を考慮した自己評価尺度（下位尺度：SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）得点との関連を見た。Rosenberg の自己評価尺度との関連結果を表4-6に、自己評価下位尺度との関連結果を表4-7, 表4-8に示す。

それによると、ROSEN 得点との関連においては、Yes 群は No 群に比べて有意に得点が高かった ( $t(911.23)=19.16, p<.001$ )。また、自己評価下位尺度との関連においても、肯定性次元である SOCIAL, PERSON では Yes 群が No 群に比べて有意に得点が高く（それぞれ  $t(1807)=17.32, p<.001$  /  $t(1759.87)=40.69, p<.001$ ）、否定性次元である SOCIAL-N, PERSON-N では No 群が Yes 群に比べて有意に得点が高かった（それぞれ  $t(1808.29)=-20.56, p<.001$  /  $t(1661.83)=-21.97, p<.001$ ）。

Yes 群・No 群と自己評価タイプとの関連を見るため、 $\chi^2$  検定をおこなった。その結果、1%水準で有意差が見られた ( $\chi^2(6)=593.07, p<.01$ )。残差分析の結果、SS1, SS2, SS9 の Yes 群の該当率が5%水準で有意に多く、SS12, SS14, SS16 の No 群の該当率が5%水準で有意に多いことがわかった。SS10 では、有意に多いセルは見られなかった。

残差分析で有意差の見られた自己評価タイプの該当率を見ると、もっとも肯定的な性格特徴、もっとも肯定的な適応意識を示す自己評価タイプ SS1（高高低低）の94.5%が Yes 群であり、逆に、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な適応意識を示す自己評価タイプ SS16（低低高高）の97.0%が No 群であることがわかった。また、SS1（高高低低）に適応としてもっとも近い SS9（低高低低）、そして肯定的な性格特徴としてもっとも近い SS2（高高低高）の7割以上は Yes 群であった（SS9 の75.7%, SS2 の72.8%）。以上より、自己評価センテンスの妥当性は確認されたといえる。

表4-6 Yes 群, No 群における ROSEN 得点の比較（t 検定の結果）

自己評価センテンスへの回答	N	ROSEN の平均値(標準偏差)	t 検定の結果
Yes 群	547	31.07 (4.22)	$t(df=911.23) = 19.16, p<.001$
No 群	467	25.42 (5.04)	

表 4-7 Yes 群, No 群における自己評価下位尺度得点の比較 (t 検定の結果)

自己評価下位尺度 の得点	平均値(標準偏差)		t検定の結果
	Yes 群 (n=884)	No 群 (n=932)	
SOCIAL	17.5(4.0)	14.2(4.1)	t(df = 1807) = 17.32**
PERSON	24.4(3.1)	17.6(3.9)	t(df = 1759.87) = 40.69**
SOCIAL-N	13.2(4.0)	17.3(4.5)	t(df = 1808.29) = -20.56**
PERSON-N	19.3(4.8)	23.8(3.7)	t(df = 1661.83) = -21.97**

(\*\* p&lt;.01)

(注) 欠損値を分析ごとに除外しているため、自己評価下位尺度ごとに被験者数は若干異なる。

表 4-8 Yes 群, No 群における自己評価タイプの該当率 ( $\chi^2$  検定の結果)

自己評価 タイプ	SS1	SS2	SS9	SS10	SS12	SS14	SS16	合計
組み合わせ	高高低低	高高低高	低高低低	低高低高	低高高高	低低低高	低低高高	
Yes 群	172( 94.5)+	228( 72.8)+	106( 75.7)+	220( 51.2)	74( 35.9)-	2( 2.0)-	8( 3.0)-	810( 49.4)
No 群	10( 5.5)-	85( 27.2)-	34( 24.3)-	210( 48.8)	132( 64.1)+	98( 98.0)+	261( 97.0)+	830( 50.6)
合計	182(100.0)	313(100.0)	140(100.0)	430(100.0)	206(100.0)	100(100.0)	269(100.0)	1640(100.0)

(注1) 表中の数字は、「度数 (%)」である。

(注2)  $\chi^2$  検定の結果は 1 % 水準で有意であった ( $\chi^2(6)=593.07, p<.01$ )。表中の+, - は残差分析の結果, 5 % 水準以上で「有意に多かった (+)」「有意に少なかった (-)」ことを示している。

### (3) 「それはなぜですか」の妥当性

表 4-9 を見ると、「それはなぜですか」に対する記述によって自身の自己評価を最低限以上説明したと感じていた者は、「非常によく説明している」「まあまあ説明している」「多くは説明していないが、大事なところは説明している」をあわせた数字から判断して、全体の 73.4% いることがわかった。

同様に「それはなぜですか」の表出個数を考慮して自己評価の説明の程度を見ると、自己評価を説明できたと感じる者は、1~2 個しか回答しなかった者の 61.1%, 3~5 個回答した者の 74.4% 見られた。t 検定をおこなったところ、3~5 個の群が 1~2 個の群に比べて有意に自己評価の説明の程度の平均点が高かった ( $t(158.09) = -3.106, p<.01$ )。

以上の結果は、「それはなぜですか」に対する記述によって、被験者は自身の自己評価を最低限以上説明できたと感じていたことを示唆している。そしてその傾向は、教示通り 3 個以上の「それはなぜですか」に回答した者の方がより顕著である。これらは、「それはなぜですか」の妥当性を示すものといえる。

表 4-9 「それはなぜですか」による自己評価の説明の程度

「それはなぜですか」による説明の程度	「それはなぜですか」の表出個数(%)		
	1-2 個	3-5 個	全体
非常によく説明している	14 ( 9.7)	142 ( 7.8)	156 ( 8.0)
まあまあ説明している	23 (16.0)	452 (25.0)	475 (24.3)
多くは説明していないが、大事なところは説明している	51 (35.4)	753 (41.6)	804 (41.1)
少し説明しているだけで、大事なところは説明していない	34 (23.6)	413 (22.8)	447 (22.9)
まったく説明していない	22 (15.3)	50 ( 2.8)	72 ( 3.7)
	N= 144 (100.0)	1810 (100.0)	1954 (100.0)
	平均値(S.D.) 2.81 (1.17)	3.12 (0.94)	3.09 (0.98)

(注1) 表中の数字は「度数(%)」である。

(注2) 両群の平均差をt検定によって調べた結果、0.1%水準で有意差が見られた( $t(158.09) = -3.106, p < .01$ )。

#### (4) 上位次元カテゴリーの作成

前節で分析をおこなったWHY答法のカテゴリーは、得られた記述から単純に作成されたものであった。しかし、それではカテゴリー間の関連を考慮できないこと、全体の太枠から見たカテゴリーの位置づけが不明であること、などの問題が生じることとなった。

そこで本節では、上位次元に視点の中心をおき、上位次元カテゴリーを理論的に設定しつつ、WHY答法で得られた記述から作成されるカテゴリーを下位次元カテゴリーとして設置し、上位次元-下位次元の2段階階層によるカテゴリー分析をおこなうこととした。Lau(1990)の言葉を借りれば、“multiple(多数)”から“multidimensional(多次元)”への作業である。いうまでもなく、上位次元は下位次元より抽象的であり、さまざまなレベルの自己をきわめて大局的に理解するための最低限必要とされるものである。ここでは、「自己」「人生」「他者との関わり」「生活」の4領域のカテゴリーを上位次元として設定し、分析をおこなうこととする。その理由について以下述べていく。

Hermans & Hermans-Jansen (1995) で述べられるように、「自己」「他者との関わり」の2カテゴリーで人のあり方を大きく見ていくことは、これまでの哲学や心理学でよくなされてきた作業である。Hermans (1987, 1988) はこの考え方にもとづいて、自己対面法(self-confrontation method)と呼ばれる技法で表出された自己を、「自己(自己高揚 self-enhancement)」と「他者との関わり(他者との接触と結合 contact and union with others)」の2つの基本カテゴリーで解釈していく。また、アイデンテ



アイデンティティ研究で有名な McAdams (1988) も、アイデンティティに関わる主題領域の中心には、「自己 (力 power)」と「他者との関わり (親密性 intimacy)」が常につきまとうとしている。扱われるテーマが異なれば、主体それ自体のあり方 (前者) と他者や環境との関わりにおける主体のあり方 (後者) の二分法で人間存在を論じていく者は他にも数多くいる (cf. Angyal, 1965; Bakan, 1966)。もちろん、二分法では単純すぎるということで、カテゴリーを増やしていくことも可能である。しかし、ここでは、青年の自己記述を大局的に理解するために最低限必要な上位次元カテゴリーを検討している。細かなカテゴリーは、この上位次元カテゴリーにもとづいて下位次元で設定されればよいとするのが筆者の考えである。

このように、「自己」と「他者との関わり」は、人のあり方を大局的に見ていく上で、真っ先に候補に挙げられる代表的な上位次元カテゴリーである。そして、筆者は、この「自己」と「他者との関わり」では表現できない上位次元カテゴリーとして「人生」と「生活」の2カテゴリーを挙げ、この2つに追加しようと思う。以下、それぞれについて見ていきたい。

ゲシュタルト学派の流れをくむ Lewin (1936) が、行動や心的活動(B)は人(P)と環境(E)との相互作用のもと生ずるとして、 $B = f(P, E)$  の公式を提唱したことは有名である。Lewin は、P と E の相互作用をする心理的な空間を「生活空間 (life space)」と呼び、後に物理学の「場」という言葉を借りてそれを「心理的な場 (psychological field)」と呼んでいく (Lewin, 1946/1954)。

しかし、Lewin は、この心理学的な場が物理学の場とは違って、過去や未来の時間軸を同時に内在させる点に厄介な点、ひいては心理学独自の点があると述べる (同時存在の原理: Lewin, 1936)。時間的展望の定義でよく知られる次の文章は、彼の場理論におけるこの時間の問題を発展させてのものである。

L.K.Frank の用語にしたがって、われわれは、現実水準やさまざまな非現実水準における心理的過去、および心理的未来を内包する時間的展望について言及する。

ある一定時に存在する時間的展望は、人のもつ要求水準や気分、構成度やイニシアティブのような多くの問題に対して非常に重要であることがこれまで示され

てきた。たとえば Farber が示すように、囚人の苦痛の量は、現在の仕事の快不  
快より、5年後の釈放に関する期待に左右されるのである。

（Lewin, 1943, p.303）

このように、人は、自分が現在に置かれている状況に、過去の経験や未来の

カレンダー的には距離をもつ過去や未来の事象でありながら、それらが現在の心理  
的場で同時存在的に影響を及ぼす例として、Lewin (1936) は、「今」「ここ」の神経  
症の原因を個人史に求めた精神分析、そして未来事象が現在に影響を及ぼすと仮定す  
る W.Wundt の目的論を挙げる。他にも、過去事象が「今」「ここ」のあり方において  
のみ意味をもつとした現存在分析で有名な Binswanger (1957) は、過度な過去への  
こだわりが否定的様相を支配し、かつ未来展望をも疎外し、自殺するに至ったエレン・  
ウエストという女性の事例を報告しているし、Tellenbach (1961/1983) の報告する過  
去への過度のとらわれ（罪責体験）も同様のものである。また、未来に希望をもてな  
い、生きる意味を感じ取れないで死んでいく報告は、Frankl (1947) のアウシュビッ  
ツの体験報告で有名であるし、Erikson (1950/1963, 1959) の述べる青年期のアイデ  
ンティティ危機も、未来が見えないで「今」「ここ」を苦しむ青年の姿であった。

このような人の行動や心的活動に影響を及ぼす時間の問題は、Lewin の検討した「生  
活空間」「場」というきわめて抽象的な概念においても基本法則とされ、かつ重要な要  
素として強調される。人のあり方における時間の問題は「人生」の問題ともいえ、上  
述した「自己」「他者との関わり」とは独立した一つの上位次元カテゴリーとして扱わ  
れるべきだと考えられる。

さて、自己評価を直接の指標としたものではないが、自己評価を規定する基本的な  
枠組み（上位次元）として「生活」要因が重要であることを実証的に示しているもの  
がある。1976 年以来おこなわれている関西学院大学のカレッジ・コミュニティ調査の  
第4回目の調査結果<sup>脚注15</sup>を再分析した遠藤 (1987) では、「心理的不適応得点」を基準  
（従属）変数に、学生の属性（学部、学年など7変数）、正課活動（出席講時数、ゼミ  
ナール活動など6変数）、課外活動（クラブ・サークル、アルバイト、2変数）、教師

<sup>脚注15</sup> 関西学院大学総合教育研究室『われわれの大学をよりよく理解するために (IV)  
～第4回カレッジ・コミュニティ調査基本報告書』（1985年）

との接触時間（6変数）、学内施設の利用（コンピュータなど3変数）、学生生活（学生生活の充実感、本学[\*関学]在学への有用性、2変数）、大学環境への認知（実用性、共同性など3変数）、計29の項目を説明変数にした数量化Ⅰ類の分析をおこなっている。その結果、もっとも高いカテゴリースコアを呈したのは、「学生生活の充実感」における「全然充実していない」「あまり充実していない」と、次いで「本学在学への有用性評定」の「ほとんど+大して役立たない」（2つの評定を合算で分析）であった。これらはいずれも「学生生活」という変数群に属するから、学生生活に何らかの意味で消極的態度をもつことが学生の心理的不適応を規定するのだろうと遠藤は解釈している。充実していないから心理的不適応だ（前者）、在学に有用性を感じないから心理的不適応だ（後者）という実に当たり前の結果のようにも見えるが、本研究において「生活」が自己評価のきわめて基本的な次元だとするの、まさにそのくらい当然のことであると考えられる。「毎日が楽しい」「充実している」「やるべきことをしっかりやっている」「生活が乱れている」「毎日を同じように繰り返し過ごしているだけだ」といった大きく「生活」とカテゴライズされるそのあり方は、実はその背景に「自己」や「他者との関わり」の密接に関わっていることが多いのだが、現象的には「生活」それ自体が問題となって自己評価に重要な意味を与えている。自己評価と適応感の高い相関関係にあることをこれまでの多くの研究が示してきたが（cf. Patton, 1991; Strauss, Forehand, Frame, & Smith, 1984; Teri, 1982）、それらは、自身のあり方が生活環境の中でうまく順応し機能しているか否かを示していたともいい換えることができるのである。

このように、人の自己評価の世界を見ていくにあたって、「自己」や「他者との関わり」が直接の問題ではない、あるいは過去や未来を意味する「人生」が直接の問題ではない、「生活」そのものが表だって重要だということがある。その意味においてこの「生活」カテゴリーは、3つの上位次元カテゴリーと並べて必要不可欠なものだといえる。また、この「生活」カテゴリーは、3つの上位次元カテゴリーと並べて必要不可欠なものだといえる。ところで、「“家族”は上位次元カテゴリーとして是非とも必要だ」とか「“アイデンティティ”も独立させるべきだ」などの見方をもって、上位次元のカテゴリーを増やしていくあり方も考えられないわけではない。しかし筆者は、どうしても設定せざ

るを得ない最低限必要な上位次元カテゴリーとして、「自己」「他者との関わり」「人生」「生活」の4つを挙げる。この4つの上位次元カテゴリーが、心理学研究のどんなトピックにも適用される万能なものでないこともいうまでもない。それらは、個々人の自己評価を規定する自己の諸相を扱おうとする本研究の目的を念頭において設定されるにすぎないものである。本節でのカテゴリー分析は、これらの上位次元カテゴリーと、次項で上位次元の下に割り当てられる下位次元カテゴリーの2段階階層でおこなわれるものである。

#### (5) 下位次元カテゴリーの作成と留意点

ここでは、WHY答法で得られた記述が、上記で設定した4つの上位次元カテゴリー、「自己」「他者との関わり」「人生」「生活」の下位次元として、どのように位置づけられカテゴリー化されるのかを検討する。これまでおこなわれてきた研究や前節でのカテゴリーを参考にすると、下位次元カテゴリーは表4-10（Yes群）、表4-11（No群）のように作成される。

下位次元カテゴリーの作成とカテゴライズに際して留意した点を、以下述べておきたい。

第1に、下位次元のカテゴリー名称は、Yes群とNo群とで統一したことである。これは、Yes群とNo群とをできるだけ同じ地平で比較しながら検討していくためである。Yes群の場合には「自己の特徴(Y)」、No群の場合には「自己の特徴(N)」のようにしてその見分けがつくよう配慮している。

第2に、下位次元カテゴリーの下に、「性格」「能力」「行動」などの「記述カテゴリー」と称するより具体的なカテゴリーを列記している。これは、下位次元カテゴリーがどのような具体的な記述から成り立っているのかを把握するためである。たとえば、下位次元カテゴリーである「家族」は、「家族の存在」「家族との関係」「家族からの愛情」「家族への態度」「家庭環境」という5つの記述カテゴリーに相当する記述を内包している。われわれは、「家族」というカテゴリーを見るときに、どのような内容がそこに該当するのかをかなりの細かさで把握することができる。

表 4-10 上位次元-下位次元にもとづくWHY答法の分析カテゴリー (Yes 群)

上位次元 カテゴリー	下位次元 カテゴリー	記述 カテゴリー	記述例
自己(Y)	自己の特徴 (Y)	性格	個性的だ/明るい/素直だ/好き嫌いがはっきりしている/よく笑う
		能力	頭がいい/運動ができる/目標をクリアーできる力がある/やりたい事の才能がある
		行動	思い通りに行動できる/やるときめたことに対して努力できる/自立心がある
		知識	知識がある/博識だ
		生き方・価値観 ・考え方	自分なりの生き方をもっている/自分なりの価値観をもっている/多様な見方ができる/常識がある
		身体	背が高い/顔がいい/細い/太ってない
		特技	料理が得意/ピアノが弾ける/ワープロを打つのがはやい
		性	男(女)だ/男(女)に生まれてよかった
	自己理解(Y)	自己認識・確立	自分が何者かわかっている/好きなことがはっきりしてきた/自分のスタンスがわかっている/自分の弱いところを知っている
		変化・成長の認識	嫌な自分から変わることができた/以前に比べ成長していると感じる
	自己・世界 への 関わり方(Y)	自己洞察	自分についてよく考える
		熟考	何事もよく考える/考えるのが好きだ
		成長意欲	前向きに生きている/向上心をたえずもつようにしている/嫌な部分は変えようと努力している
		ポジティブな思考	何でも良いように考えている/不満はもたないようにしている/嫌なことがあっても忘れるようにしている
		楽天的思考	物事を深く考えない/あまり深刻にならない/何とかかなと思っている
他者との 関わり(Y)	人間関係(Y)	他者存在	多くの友だちがいる/何でも話せる友人がいる/いろいろな人と友だちになれた/尊敬できる人がある
		人間関係	人間関係がうまくいっている/友だちと仲良くやっている
		恋人	彼氏・彼女がいる/好きな人がある/恋人から愛されている
		異性	もてる
		他者からの 承認・理解	自分を認めてくれる人がある/自分を理解してくれる友人がある/困ったときに助けてくれる/真剣に心配してくれる
	他者への態度 (Y)	他者への態度	人に優しくできる/人の意見を尊重することができる/社交的だ/後輩の面倒がよい
		友人作り	友だちをつくるのは得意だ
	家族(Y)	家族の存在	大事な家族がいる/家族が皆元気だ
		家族との関係	家族とうまくやっている/両親と仲良くやっている
		家族からの愛情	愛されている/理解してくれている
		家族への態度	家族を大事にしている
		家庭環境	良い家庭で育った/家庭環境がいい
人生(Y)	過去(Y)	過去の人生	これまで頑張ってきた/志望大学に入ることができた/順調にやっていた/挫折がない
		運命	運がいい/運命的な出来事が多かった
		達成・成功	イベントを成功させた
	未来(Y)	将来の目標・展望	将来の目標がある/夢がある
		未来への可能性	自分にいろいろな可能性を感じる/将来有望だと感じる/今やっていることが将来につながる
		将来を考える	将来についていろいろ考えている
生活(Y)	日々の生活 (Y)	日々の生活	毎日しっかりと生活ができている/規則正しい生活をしている/経済的に困ってない
		生活への満足	生活に満足している/青年活に満足している
		生活感情	毎日が楽しい/充実している
		生活環境	生活環境がいい/親の仕送りが十分だ/大学の教授陣・設備が整っている/自由な青年活だ/時間がある
		学業	授業にしっかりと出ている/学びたいことを学んでいる
		クラブ・サークル	クラブ・サークル活動をしている/クラブ・サークルが楽しい
		アルバイト	アルバイトをしている/バイトが楽しい/バイトでかなりの仕事ができる
		その他活動	ボランティアをやっている/バンドを組んでいる
		趣味	趣味がある/やりたいことがある
		遊び・旅行	友だちと楽しく遊んでいる/旅行に行くことができる
	健康(Y)	健康	健康だ/五体満足だ
	所有(Y)	物の所有	車をもっている/良い服をもっている/車の免許をとった
		お金	お金に困ってない/アルバイトしてお金がある

表 4-11 上位次元-下位次元にもとづくWHY答法の分析カテゴリー (No 群)

上位次元 カテゴリー	下位次元 カテゴリー	記述 カテゴリー	記述例
自己 (N)	自己の特徴 (N)	性格	性格が気に入らない/すぐ落ち込む/短気である/ひねくれている/気が小さい/飽きやすい
		能力	頭が悪い/知性がない
		行動	要領が悪い/やってみようとは思っているが口だけだ/主体性がない/行動に移せない/親から自立していない/初志貫徹できない/人に依存的だ/人に影響されやすい
		知識	知識が足りない/知識がなさすぎる
		生き方・価値観・考え方	自分独自の価値観がない/自分の意見をもっていない/自分の考えに矛盾がある
		身体	容姿が悪い/太っている/ブスだ/身長が低い/髪型が気に入らない
		特技	特技が何も無い/歌が下手だ
	自己理解 (N)	自己認識・確立	自分がよくわからない/これだけはという自分の価値を見つけれない/何が見たいのか分からない
		変化・成長の認識	高校に比べて成長している気がしない
	自己・世界 への 関わり方 (N)	自己洞察	自分について考えようと思わない
		熟考	深く物事を考えない/深く考えることを避けている
		マイナス思考	物事を否定的にとらえてしまう
		意欲・向上心の なさ	やる気がまったくおこらない/頑張ろうと思えない
		満足しないことへの 価値	満足したら成長できない/もっとやれるはずだ/まだまだ自分は伸びる
他者との関わり (N)	人間関係 (N)	他者存在	友だちがいない/友だちが少ない
		人間関係	人間関係がきびしい/先輩とうまくいかない/バイト仲間とうまくやれない/友だちが本音で話してくれているとは思えない/人づきあいが下手
		恋人	好きな人がいない/恋人がいない
		異性	もてない/周囲に女の子(男の子)がいない
	他者からの評価	他者からの評価	頼りないと言われる/欠点を指摘された/人の反応が気になって仕方がない
		他者への態度	はっきり物を言い過ぎる/他人を思いやれない/人見知りする/他人の悪いところを探してしまう/心の底から人を好きになれない
	家族 (N)	家族との関係	親とうまくいっていない/親の言いなりになってきた
		家族からの心配	親に心配かけている
		家族への態度	家族に何でも話せない/親に迷惑をかけている
		家庭環境	家庭環境に問題がある
人生 (N)	過去 (N)	過去の人生	挫折が多かった/過去にこだわりすぎている/過去の方が良かった/これまで続いているものが何もない/志望の大学に入れなかった
		運命	運が悪い/運がない
		成果・達成のなさ	何かをやりとげたということがない/努力しても満足する結果が出たことがない
	未来 (N)	将来の目標・展望	将来の目標がない/目標が見つけれない/先が見えない/人生観が欠如している
		未来への不安	きっとこのままじゃやっていけないと思う/将来に不安がある/目標はあるがやっていけるか不安
		将来について考えていない	将来について考えていない/考えようと思わない
生活 (N)	日々の生活 (N)	日々の生活	毎日だらだらと過ごしている/時間を有効に使っていない/自活できていない/朝起きられない/経済的に困っている
		生活への不満足	生活に満足していない/青年活に満足できない
		生活感情	充実感がない/毎日楽しくない/生活に張りがない/単調だ
		生活環境	通学時間が長すぎる
		学業	勉強していない/講義がつまらない/やりたいことと違う勉強をしている
		クラブ・サークル	クラブがしんどい
		アルバイト	アルバイトしていない/アルバイトがづらい/やめたい
		趣味	趣味がない/楽しみがない
	遊び・旅行	遊び・旅行	やらないといけないことがあるのに友だちと遊んでしまう/遊んでばかりだ/遊んではいるが中途半端だ/クラブで忙しくて旅行に行けない
		健康	病気がちだ/体力がない/疲れやすい/冷え性だ
所有 (N)	所有 (N)	物の所有	車をもっていない/資格をとっていない

第3に、表に見られる「記述カテゴリー」のカテゴリライズはおこなっていないことである。この点もっとも誤解の生じやすいところかもしれない。従来の研究は、概して、カテゴリー分析の結果だけをもって、全体の特徴から細かな特徴までのすべてを同じ次元で欲張って述べようとしてきたように思われる。結果、カテゴリー間の独立性が十分でなく (Harter, 1986), ある記述はカテゴリーAに分類され、実際には同じ現象を指す別の記述がカテゴリーBに分類されるということが平気でおこなわれてきた。本研究のような全体的自己から、その評価を規定する個人にとっての重要な自己を記述させるような研究では、何度も述べるように、さまざまな次元の、さまざまな種類の自己が表出される。まさに混沌とした記述から、いかにして全体を把握しようかとするのが、まず目指されなければならない。上位次元ー下位次元の2段階階層カテゴリー化は、まさにこのためのものである。そして、筆者は、文脈も表現できない一言語の記述カテゴリーで、文脈を内包する細微な現象を表現できるとは考えていないから、それは稿を改めて再分析する道を想定している。そこでは、現象を固有のものにする文脈をいかに拾いつつ、現象を同定していくかという道が模索される。ここでのカテゴリー分析は、上位次元、下位次元ともに、Harter が述べるようなカテゴリー間の独立性が最低限保証されるようなレベルでの抽象度において設定され、その上で全体の大きな傾向が読みとれるように考えられてなされるものである。

第4に、下位次元カテゴリー「日々の生活」を、種々の活動内容で分割しないことである。「日々の生活」には、「生活への満足」から「生活環境」「学業」・・・「遊び・旅行」まで多様な要素が同時に内包されている。学業やアルバイト、旅行などと活動内容でカテゴリーを分別していくことも不可能ではないが、具象性のより高い記述を得ると、それらは、活動内容そのものが重要なのではなく、多くの場合それとともに付随して書かれる日々の生活、あるいはそこから派生する自己などが重要であることを伝えてくる。自己評価や人の生きる世界においては、学業やアルバイトそれ自体が重要なのではない。個人史的な関わりをもって、学業やアルバイトがどのように意味づけられているかが重要である。ここでは、非常に抽象的な形で、その意味づけが「日々の生活」として同定できることだけを示している。そして、先に述べたことと同様に、

たとえば学業がどのように青年の自己評価の世界に関わっているのかを調べたいのであれば、それは、このようなカテゴリー分析ではなく、文脈をひろえるような形で分析がなされなければならない。この点は、本稿で扱う問題から外れるものであり、別稿で検討をおこなおうと考えているものである。

第5に、表4-10、4-11は、WHY答法におけるすべての記述をカテゴライズするべく用意されたカテゴリーではない、ということである。本節での分析は、上位次元カテゴリーと、上位次元カテゴリーに内包される下位次元カテゴリーとをセットで用い、WHY答法による自己記述を包括的に理解しようとする点に特徴がある。かなりの記述は、これらの上位・下位次元カテゴリーで扱い得ていると思われるが、表4-12のような記述をカテゴライズの対象から外したことは述べておかねばならない。すなわち、記述の中には、「自分はこんなもんだと思っている」「自分が好きだから」「自分が嫌いだから」といった「自己評価(Y)」「自己評価(N)」、「人間とは満足して生きていく生き物だから」「自分で自分をいいと思うのは自然な感情」といった人間論・一般論を含む「はずれた記述(Y)」「はずれた記述(N)」、「不満なところが見つからない」「特に満足できる点が見つからない」といった「悩み不満のなさ(Y)」「満足のなさ(N)」が見られた。これらの記述は、前節のカテゴリー分析では、「自己評価(Y)」や「その他(Y)」としてカテゴライズしてきたものである。しかし、本章でWHY答法を用いて明らかにしたいことというのは、自己評価を規定する要因ではなく、自己評価を規定する自己である。すなわち、どのような自己が自己評価を規定しているのだろうか、あるいは、どのような自己や世界への関わり方（認知的対処や可能性追求など）が自己評価を規定しているのだろうか、ということを知りたいわけである。「自己評価」や「その他」は、自己への満足・不満足を説明する記述としてははずれたものではないが、それらは個々人の自己評価を規定する自己の姿を示すものではない。個人の内在的視点に立って自由に内面世界を表出してもらうWHY答法の性格上、このような自己評価を違った形で説明する記述や、適切な理由が思い浮かばずそう表出せざるを得ない記述が出てくるのは、むしろ自然なことといえるが、ここではこのような記述を本分析の対象からははずしたことを述べておく。



表 4-12 分析対象から外したWHY答法の記述

	記述カテゴリー	記述例
Yes 群	自己評価(Y)	自分はこんなもんだと思っている、自分が好きだから
	はずれた記述(Y)	人間とは～だから（人間一般論）、前の記述からの連想（（一つ前の記述に対して）やっぱり～が一番だ）
	悩み不満のなさ(Y)	不満なところが見つからないから／悩みがないから
No 群	自己評価(N)	自分が嫌いだから、満足しているときと満足していない時とがある
	はずれた記述(N)	人間とは～だから（人間一般論）、前の記述からの連想（（一つ前の記述に対して）やっぱり～が一番だ）
	満足のなさ(N)	特に満足できるものがない

第6に、Yes 群における回避的記述 (avoidant descriptions) を、そのまま反転させてカテゴライズの対象としたことである。WHY 答法の記述の中には、「友だちがいな  
いわけでもない」のように、ここがいいとはいえないが悪くなければそれでいいとい  
った間接肯定の形態が時折見られる。これは、「接近 (approach)」「回避 (avoidance)」  
の形態として位置づけられる。詳しい検討は別途必要であるが、この特徴は、自己評  
価の低い者が自己評価センテンスに“はい／そう思います”と答える場合にとくに顕  
著であるように思われる。このような回避的な要因のもつ意味は、ここ 10 数年数多く  
報告されるようになってきているが (cf. Elliot & Harackiewicz, 1996; Higgins,  
Roney, Crowe & Hymes, 1994; Markus & Nurius, 1986; Ogilvie, 1987), 本節での分  
析はこの違いを弁別するほど精緻な作業ではないと筆者は考えているので、ここでは  
回避的記述の意味をとくに考慮せず、反転させてカテゴライズをおこなうこととした  
(たとえば、上記の例は「人間関係(Y)」としてカテゴライズされる)。

#### (6) 上位次元ー下位次元カテゴリーの2段階階層によるWHY答法のカテゴリー分析

WHY 答法のカテゴリー分析をおこなうにあたって、「3個以上書くように」という  
制限指示にしたがった Yes 群 (N=889), No 群 (N=941) の被験者から、ランダムに  
300 人ずつを抽出してその記述をカテゴライズすることにした。カテゴライズする際  
に用いられるカテゴリーは、前項で述べた表 4-10, 表 4-11 の下位次元カテゴリーであ  
る。上位次元カテゴリーの表出率は、下位次元カテゴリーをカウントすることによっ  
て算出される。

また、実際のカテゴライズは、筆者を含む2人の心理学者によっておこなわれた。  
若干の練習をおこなってカテゴリーの同定する内容を確認しあい、独立してカテゴラ

イズをおこなった。2人で一致しないものは最後にまとめて合議をおこなった。合議で納得されたものまで含めた2人のカテゴリーの一致率は、Yes群で87.9%，No群で82.9%，全体で85.9%であった。この一致率の算出には、表4-12のような分析対象から外すか否かのものも含まれている。

表4-13 Yes群における上位次元カテゴリーの表出率

出現順位	上位次元カテゴリー	度数(%)
1	生活(Y)	203 (67.7)
2	自己(Y)	174 (58.0)
3	他者との関わり(Y)	163 (54.3)
4	人生(Y)	91 (30.3)
N=		300 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴリズされている。

表4-14 No群における上位次元カテゴリーの表出率

出現順位	上位次元カテゴリー	度数(%)
1	自己(N)	262 (87.3)
2	生活(N)	142 (47.3)
3	他者との関わり(N)	105 (35.0)
4	人生(N)	59 (19.7)
N=		300 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴリズされている。

表4-15 Yes群における下位次元カテゴリーの表出率

出現順位	下位次元カテゴリー	度数(%)
1	日々の生活(Y)	183 (61.0)
2	人間関係(Y)	139 (46.3)
3	自己の特徴(Y)	126 (42.0)
4	自己・世界への関わり方(Y)	67 (22.3)
5	未来(Y)	63 (21.0)
6	家族(Y)	52 (17.3)
7	健康(Y)	43 (14.3)
8	自己理解(Y)	34 (11.3)
9	過去(Y)	34 (11.3)
10	所有(Y)	20 (6.7)
11	他者への態度(Y)	15 (5.0)
N=		300 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴリズされている。

表 4-16 No 群における下位次元カテゴリーの表出率

出現順位	下位次元カテゴリー	度数(%)
1	自己の特徴(N)	243 (81.0)
2	日々の生活(N)	134 (44.7)
3	他者への態度(N)	63 (21.0)
4	自己・世界への関わり方(N)	51 (17.0)
5	人間関係(N)	44 (14.7)
6	未来(N)	42 (14.0)
7	自己理解(N)	30 (10.0)
8	所有(N)	19 (6.3)
9	過去(N)	19 (6.3)
10	家族(N)	9 (3.0)
11	健康(N)	7 (2.3)
		N= 300 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-13～表 4-16 は、こうして作成される Yes 群、No 群それぞれにおける上位次元、下位次元カテゴリーの表出率の結果である。これらの結果から、以下 3 つの大きな特徴を見て取ることができる。

第 1 に、上位次元カテゴリーの結果を見ると、青年の自己評価を規定する自己は、Yes 群では「生活(Y)」領域にもっとも多く (67.7%)、No 群では「自己(N)」領域にもっとも多い (87.3%) ということである。そして、表 4-10 に見られるように、Yes 群の上位次元カテゴリーである「生活(Y)」には、「日々の生活(Y)」「健康(Y)」「所有(Y)」の下位次元カテゴリーが内包されている。表 4-15 を見ると、これらの表出率は順に 61.0%、14.3%、6.7%となっている。このことから、Yes 群における上位次元カテゴリー「生活(Y)」の主に意味するところは「日々の生活(Y)」であることがわかる。同様に、表 4-11 に見られるように、No 群の上位次元カテゴリーである「自己(N)」には、「自己の特徴(N)」「自己理解(N)」「自己・世界への関わり方(N)」の下位次元カテゴリーが内包されている。表 4-16 を見ると、これらの表出率は順に 81.0%、10.0%、17.0%となっている。このことから、No 群における上位次元カテゴリー「自己(N)」の主に意味するところは「自己の特徴(N)」であることがわかる。これらのことは、青年の肯定的な自己評価の世界が、生活のあり方、とくに健康やモノの所有ではなく、日々の生活のうまくいっている状態と密接に関連していること、同時に、否定的な自己評価の世界は、私自身の否定的なあり方、とくに自己を理解していないことや自己や世界への関わり方がうまくできていないことではなく、自己の否定的な特徴 (自己像) と密接に関連していることがわかる。

第2に、上位次元カテゴリーの結果を見ると、「人生」は他のカテゴリーに比べて高い表出率を見せていないということである（Yes 群 30.3%，No 群 19.7%）。きわめて抽象的な形ではあっても、「人生」の要因が多くの青年の自己評価にとって、大きく働きかけるものではなかったことは注目に値する。過半数以上の該当率をもって、青年の自己評価を大きく規定する自己の基準とみなすならば、Yes 群は人生軸をはずした「自己(Y)」「他者との関わり(Y)」「生活(Y)」の3上位次元カテゴリーによって、No 群は「自己(N)」の上位次元カテゴリーで説明されるといえる。

第3に、上位次元カテゴリー「他者との関わり」の中で重要となる下位次元カテゴリーが、Yes 群と No 群では異なるということである。とくに、「人間関係」と「他者への態度」との関係が注目に値する。というのも、Yes 群では、「人間関係(Y)」の表出率が 46.3%もあるのに対し、「他者への態度(Y)」の表出率はわずか 5.0%にしかすぎない。これに対して No 群では、この表出率の関係が大きな差ではないながらも逆転している（「他者への態度(N)」が 21.0%、「人間関係(N)」が 14.7%）。他者との関わりにおいて、Yes 群では「人間関係(Y)」が重視されるのに対して、No 群では「他者への態度(N)」が重視されるといえる。

#### 第4項 考察

本節の目的は、1つに、WHY答法における「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係をあらためて検討することにあった。本節で用いたWHY答法の設定条件は、前節での結果を受けたもので、5個の「それはなぜですか」、「3個以上書くように」の制限教示を与えるというものであった。結果は、3個の「それはなぜですか」で記述をやめる者が前節の結果より増えながらも、確実に9割以上の者を3～5個の「それはなぜですか」に記述させることができるというものであった。3～5個に全体の7割程度の者が集中し（74.4%）、若干名の者が6～10個に広く分散している前節の結果と比べれば、9割以上が分散の小さい3～5個に該当している本節の結果の方が、分析にも好都合であるように思われる。少なくとも、青年に集団調査でWHY答法を実施するには、適切な設定条件であったと考えられる。

本節の2つ目の目的は、WHY答法の妥当性について検討することであった。まず、

「私は全体的には自分自身に満足しています」に“はい／そう思います”“いいえ／そう思いません”程度で回答する自己評価センテンスが、果たして自己評価を測定するものになっていたのか、を検討した。検討にあたっては、Blascovich & Tomaka (1991) によって、自己評価研究で最頻度で使用されており代表的な尺度とされた Rosenberg (1965) の自己評価尺度と、第3章で筆者が作成した肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度を用いた。結果は、全体的に、自己評価センテンスに“はい／そう思います”と答えた者の自己評価は高く、“いいえ／そう思いません”と答えた者の自己評価は低いというものであった。このことは、自己評価センテンスの妥当性を確認するものであると同時に、Yes 群、No 群を厳密な意味で、「自己評価高群」「自己評価低群」と呼んでいくことが可能であることをも示唆している。すなわち、自己評価センテンスに対する回答は、それ自体「自分自身に満足している」に対する“はい／そう思います”“いいえ／そう思いません”という自己満足評定であるが、本質的、大局的には、自己評価の高低ともみなしていけるものなのである。

次に、「それはなぜですか」に対する記述がどの程度自己評価を規定するものであるのかを検討するため、被験者に「それはなぜですか」に対する記述によってどの程度自身の自己評価を説明できたと感じるかを尋ねる質問をおこなった。その結果、多くの者は最低限以上の説明をできたと感じていることが明らかにされた。しかもその傾向は、「3個以上書くように」との制限教示を守った者により顕著であった。これによって、「それはなぜですか」の妥当性は確認されたとした。総じてWHY答法は、自己評価を規定する個人にとっての重要な自己の諸相を表出させる技法として有効であるといえる。

本節の最後には、前節でおこなわれたカテゴリー分析での考察を受けて、上位次元－下位次元カテゴリーの2段階階層によるカテゴリー分析をおこなうこととした。まず、理論的に上位次元カテゴリーを4つ、「自己」「他者との関わり」「人生」「生活」として設定した。そして、WHY答法で得られた記述を参考にして、上位次元カテゴリーの下に配置される下位次元カテゴリーを作成した。Yes 群、No 群で分析カテゴリーを統一させること、すべての記述をカテゴライズしようとしめないこと、も前節のカテゴリー分析とは異なる点である。

このようにして得られたカテゴリー分析の結果を見ると、青年の自己評価の世界は次のように理解される。1つに、自己評価の高さを規定する自己は、自己評価の低さを規定する自己の裏返しでは必ずしもなく、両者ともに独自の領域における自己が機能して自己評価を肯定的にしたり否定的にしたりしているということである。自己評価を規定する自己を明らかにするこれまでの研究では、表4-1の山本ら(1982)の研究結果が象徴的に示すように、自己評価の高さ、あるいは低さのいずれかを全体として規定する自己の諸領域が示されるにすぎなかった。しかし、表4-3、表4-4で示される前節のWHY答法のカテゴリー分析の結果を見ても、そして本節の結果を見てもわかるように、自己評価を規定する自己あるいはその領域は、自己評価の高い者と低い者とでは実際異なるのである。本節の調査結果は、それが、Yes群では「日々の生活(Y)」として描かれる自己であり、No群では「自己の特徴(N)」として描かれる自己であることを示した。自己評価が高いからといって、それは「自己の特徴」や「自己理解」「自己・世界への関わり方」といったような自己に目を向けた結果のものばかりとは限らないのである。しかし、自己評価が低い場合には、人は自己に目を向けているようである。これは、自己への注意が、否定的な精神状態のときに多くなされるという坂本(1998)の知見を支持するものともいえる。

このような違いは、実は上位次元カテゴリーの「他者との関わり」として示される部分にもあらわれている。上位次元カテゴリーの「他者との関わり」における下位次元として、ここではとくに「人間関係」と「他者への態度」が問題とされている。しかし、結果を見ると、自己評価を規定する「他者との関わり」は、Yes群では主に「人間関係(Y)」であったのに対し、No群では主に「他者への態度(N)」であった。No群では、「人間関係(N)」も「他者への態度(N)」に近い表出率で見られるが、Yes群で「他者への態度(Y)」はほとんど見られない。ここで注目すべき点は、「人間関係」が他者との関係性それ自体を問題としたものであるのに対し、「他者への態度」は他者との関係から生起する自己の態度を問題としたものだということである。他者との関わりを問題にする場合でも、自己評価が低い場合には、人は自己へ注意が向くといえるようである。そして、このような結果は、上位次元(「他者との関わり」)と下位次元(「人間関係」「他者への態度」「家族」)をセットで扱うことによってはじめて見えてくるも

のと考えられる。ところで、本研究が調査対象としている大学生は、一般的に青年期後期に属する学生のことを指す。青年期は、子どもと大人の狭間に住むマージナルな存在であり(Lewin, 1943)、過去の経験を統合・再統合する形での将来や人生の事柄が問題となりやすい時期である(Erikson, 1950/1963)。しかし、結果は、そのような人生軸に関わる自己が青年の自己評価をあまり規定していないことを示すものであった。このことは、1つに、社会に出る一歩手前である青年期で人生の問題が叫ばれようとも、それが自己評価と密接に結びつく者の数は、さほど多くないということを示している。また2つ目に、人生の問題は、「日々の生活」や「自己の特徴」などと結びつく形で自己評価の世界に位置づけを与えられているとも考えられる。すなわち、未来や過去それ自体が焦点化されて適応や自己評価に影響を与えているのではなく、「日々の生活」や「自己の特徴」などの背後に位置づけられて自己評価に影響を与えているとも考えられるのである。今後検討すべき課題である。

最後に、本節での分析を通して感じたカテゴリ分析のさらなる問題点を1つ述べておきたい。それは、WHY答法における記述の説明度とカテゴリズについてである。たとえば、自己評価を高めている理由の一つとして、「毎日が楽しい」という記述があるとする。これは、ここでは「日々の生活(Y)」としてカテゴリズされる。しかし、「友だち関係がうまくいっている」という記述になると、「人間関係(Y)」としてカテゴリズされる。もしかすれば、前者の「毎日が楽しい」という記述も、その背景には同様の「友だち関係がうまくいっている」があったかもしれない。しかし、「毎日が楽しい」という記述の背景に何があるのかは、われわれ調査者には見えてこない。われわれはこの場合、「日々の生活(Y)」としかカテゴリズできない。また、自己評価を高めている理由に、「明るい性格だ」というのがよく見られるが、何をもって「明るい」としているのか記述からだけではまったく判断できないことがある。くよくよ悩まないことを「明るい」とする者もいるし、友だちと笑いあえ人間関係がうまくいっていることを「明るい」とする者もいる。後者の記述が、「友だちに明るく振る舞え人間関係がうまくいっている」とやや具体的に書いてあれば、この記述は「人間関係(Y)」にカテゴリズされることになる。

このようなことが生じる原因としては、WHY答法における「それはなぜですか」に対する記述が、人によっては非常に情報豊かなものなのだが、人によっては非常に抽象的でごく短い言葉であったりすることが挙げられる。すなわち、記述のもつ説明度が、被験者の任意によって決定されていたわけである。筆者は、WHY答法のカテゴリ分析をおこなってきてもある種の葛藤を覚えてきたが、それは、カテゴリ化する前段階のWHY答法の記述における説明度が統制されていなかったからではないかと思われるのである。これは、WHY答法の記述に限られた問題ではない。文章完成法や20答法、自由記述などのあらゆる質的な記述調査にもあてはまることである。

前節や本節でのWHY答法のカテゴリ分析結果は、このような問題点を抱えた状態で出されたものとみなすべきであり、それを改善した結果との比較が次節の課題といえよう。

## 第5節 記述における説明度を上げたWHY答法のカテゴリ分析—青年の自己評価を規定する自己の諸相—（調査8）

### 第1項 目的

本節では、前節で指摘されたWHY答法の問題点を改善し、WHY答法のさらなる検討をおこなう。また、本章最後の研究として、改善されたWHY答法のデータを用いた、青年の自己評価を規定する自己の諸相を提示する。

WHY答法の問題点を改善するにあたっては、WHY答法における記述をより詳細に、より具体的にするような教示を追加すればよいと考えた。具体的には、WHY答法の、一般的に抽象的で短い「それはなぜですか」に対する各記述に対して、より詳細により具体的に説明を求める「補足欄」を設けるのである。もちろん、「それはなぜですか」に対する記述以上のものを書けないという者もいるだろう。このような場合には、書けないこと確認するために、補足欄に「終わり」と書いてもらえばいい。この「終わり」の文字によって、われわれは補足欄に記述しようとした被験者の意志を確認することができる。



しかし、集団調査の場合、概してこのような分量の多い記述式の調査は被験者に面倒がられてしまう。そこで、本節の調査では、集団ではなく face to face のインタビューで調査をおこなうことにした。調査者と被験者とのラポールを前提とするインタビューであれば、多少面倒な調査でも被験者は快くこちらの要請に応じてくれるように思われる。

これにともなって本調査では、WHY 答法における「それはなぜですか」の設定個数を5個から20個に、制限教示を3個から5個に増やすことにした。というのも、インタビュー調査は、被験者にとって参加動機の高い状況である。筆者は、この機会を利用して、青年の自己評価を規定する自己を徹底的に記述させる方向での調査をおこなおうと考えた。そして、その結果を前節のものと比較しようとしたのである。この設定個数と表出個数との関係は結果で示すこととする。

さらに、自己評価センテンスへの回答を2択法（“はい／そう思います” “いいえ／そう思いません”）から3択法（“はい／そう思います” “どちらともいえない” “いいえ／そう思いません”）へと修正変更することにした。“どちらともいえない”を加えたことが新たな点である。この理由は、これまでのWHY 答法を用いた調査で、“はい／そう思います” “いいえ／そう思いません” のどちらかに回答することが難しいと言ってきた学生への配慮からでもあるが、もう1つ、次の理由を考えての処置でもある。すなわち、これまでのWHY 答法は、自己評価センテンスに対して“はい／そう思います” “いいえ／そう思いません” のどちらかで回答するのが難しいと感じる学生に、無理矢理“はい／そう思います” か“いいえ／そう思いません” のいずれかに回答させてきた。このことは、これまでの調査が結果として、Yes 群（“はい／そう思います”）、No 群（“いいえ／そう思いません”）の質を鈍化させてきたことを意味する。本節は、本章最後の調査として、Yes 群、No 群の質を純化させた上で見いだされる青年の自己評価の世界を、前節の結果と比べて提示するものである。なお、これにともなう自己評価センテンスの妥当性は、第3章で作成した肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度を用いて再度検討をおこなう。

## 第2項 方法

## (1) 調査内容

**WHY答法** WHY答法は、次の2段階ステップでおこなわれた。

①自己評価センテンス：「私は全体的には自分自身に満足しています」（自己評価センテンス）を与え、被験者はそれに対して“はい／そう思います”（以下、Yes 群），“どちらともいえない”（以下、Neither 群）“いいえ／そうしません”（以下、No 群）のいずれかで回答する。

②「それはなぜですか」：自己評価センテンスにどうして“はい／そう思います”“どちらともいえない”または“いいえ／そうしません”と答えたのか、複数の「それはなぜですか」という問いに答える形で自由に記述させる。本節の調査では、インタビュー調査であることを考慮して、20個の「それはなぜですか」、「5個以上書くように」との制限教示を設けた。

③補足欄：「それはなぜですか」に対するそれぞれの記述に対して、「抽象的な記述が具体的になるまで答えてください。具体的な記述にならない場合は、「終わり」と書いてください。」という教示を与えた。より詳細に、より具体的にというのが補足欄を設ける目的であるが、教示においては、「具体的に」という言葉でおこなうこととした。これは、「具体的に」という教示が「詳細に」を内包すると考えたからである。

**肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度** 第3章で作成した肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度。4下位尺度（SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）から成り立っており、各下位尺度には6項目ずつ含まれている。計24項目の尺度である（項目内容は第3章の表3-1、表3-2を参照）。評定は、“全くあてはまる（5点）”～“全くあてはまらない（1点）”の5件法である。

## (2) 調査対象

主に関西の国公立・私立の大学生1171名である。青年の自己を量的にとらえようとした第3章の最終節（第5節）では、分析対象を1～3回生の大学生（ただし、短大生、二部学生、海外の大学在住学生は除く）に限定しておこなっている。本章の最終節である本節の分析においてもこれにあわせ、4回生を分析対象から外すこととする。こうして、短大生、二部学生、4回生学生、海外の大学在住学生を欠損値として処理

し、1130名（男性435名、女性695名）が本節の分析対象となった。

なおインタビュー調査は、筆者を含む心理学を専門とする8名の教官、大学院生と、訓練を受けた129名の青年（心理学を専攻としない者も含む）でおこなった。インタビュー調査は2段階で構成されており、前半は半構造化面接、後半はインタビューでの問いを構造化して作成された調査用紙への記入である。ここで用いるデータは、後半部で得られたものである。一人あたりのインタビュー所要時間は、調査用紙への記入時間も含めて平均2時間程度であった。ここでの被験者は、調査5（第3章第6節）と同一である。

### (3) 調査時期

1998年7月～1999年5月

## 第3項 結果

### (1) 「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係

表4-17に、本節の条件、すなわち、20個の「それはなぜですか」「5個以上書くように」との制限教示、のもと施行されたWHY答法の表出個数を示している。表を見ると、インタビュー調査であるから微々たる割合ではあるが、前節までと同様、「5個以上書くように」との教示を無視した者（1～4個の表出個数）が1.9%いることがわかる。全体的に5～7個の表出個数が目立っており、平均表出個数は7.60（S.D.=3.42）であった。この結果は、前節までの調査結果より多くの自己情報を被験者が提供したことを示唆している。

表 4-17 「それはなぜですか」の表出個数

「それはなぜですか」 の表出個数	度数(%)
1 個	7 ( 0.6)
2 個	5 ( 0.4)
3 個	4 ( 0.4)
4 個	6 ( 0.5)
5 個	365 (32.4)
6 個	148 (13.1)
7 個	193 (17.1)
8 個	86 ( 7.6)
9 個	83 ( 7.4)
10 個	67 ( 6.0)
11 個	32 ( 2.8)
12 個	31 ( 2.8)
13 個	22 ( 2.0)
14 個	12 ( 1.1)
15 個	10 ( 0.9)
16 個	13 ( 1.2)
17 個	9 ( 0.8)
18 個	7 ( 0.6)
19 個	4 ( 0.4)
20 個	22 ( 2.0)
N= 1126 (100.0)	
平均値(S.D.)	7.60 (3.42)

(注) WHY 答法にまったく回答していない者 4 名は  
欠損値扱いとされた。

## (2) 自己評価センテンスの妥当性

自己評価センテンスの妥当性を検討するため、本節では、Yes 群、Neither 群、No 群における肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度（下位尺度：SOCIAL, PERSON, SOCIAL-N, PERSON-N）得点との関連を見た。その結果を表 4-18、表 4-19 に示す。

表によると、肯定性次元である SOCIAL, PERSON では Yes 群は No 群に比べて有意に得点が高かった（それぞれ  $F(2, 1103)=82.76, p<.01$  /  $F(2, 1103)=433.79, p<.01$ ），否定性次元である SOCIAL-N, PERSON-N では No 群が Yes 群に比べて有意に得点が高かった（それぞれ  $F(2, 1102)=100.24, p<.01$  /  $F(2, 1103)=146.07, p<.01$ ）。Neither 群は、いずれにおいても Yes 群、No 群の中間に位置していた。

次に、Yes 群、Neither 群、No 群と自己評価タイプとの関連を見るため、 $\chi^2$  検定をおこなった。その結果、1%水準で有意差が見られた（ $\chi^2(12)=402.99, p<.01$ ）。残差分析の結果、SS1, SS2, SS9 の Yes 群、SS10 の Neither 群、S14, SS16 の No 群

の該当率が5%水準で有意に多いことがわかった。

残差分析で有意差の見られた自己評価タイプの該当率を見ると、もっとも肯定的な性格特徴、もっとも肯定的な適応意識を示す自己評価タイプSS1(高高低低)の81.0%がYes群であり、逆に、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な適応意識を示す自己評価タイプSS16(低低高高)の80.6%がNo群であった。また、中程度の性格特徴、中程度の適応意識を示すSS10(低高低高)の51.0%はNeither群であった。そして、Yes群、No群への該当率もほぼ半数程度ずつであった(Yes群26.3%、No群22.7%)。以上より、自己評価センテンスの妥当性が確認されたといえる。

表4-18 Yes群、Neither群、No群における自己評価下位尺度得点の比較  
(分散分析の結果)

自己評価下位尺度 の得点	各群における平均値(標準偏差)			分散分析 F値	群間差
	Yes群 (n=341)	Neither群 (n=432)	No群 (n=330)		
肯定性/社会基準自己評価	21.3(4.7)	19.2(4.2)	16.9(4.6)	F(2, 1103)=82.76**	Yes>Neither>No
肯定性/個人基準自己評価	29.5(3.3)	24.8(3.9)	20.3(4.8)	F(2, 1103)=433.79**	Yes>Neither>No
否定性/社会基準自己評価	15.5(4.3)	17.8(4.3)	20.5(5.1)	F(2, 1102)=100.24**	No>Neither>Yes
否定性/個人基準自己評価	21.8(5.4)	25.8(4.5)	27.7(3.9)	F(2, 1103)=146.07**	No>Neither>Yes

(\*\* p<.01)

(注1) 表中の数字は、「平均値(標準偏差)」である。

(注2) 欠損値を分析ごとに除外しているため、自由度は異なる。

(注3) 分散分析で有意差が見られた場合における群間差の分析についてはTukey法を用いた。

表4-19 Yes群、Neither群、No群における自己評価タイプの該当率  
( $\chi^2$ 検定の結果)

	SS1	SS2	SS9	SS10	SS12	SS14	SS16	合計
Yes群	68(81.0)+	99(42.3)+	41(62.1)+	93(26.3)-	27(22.3)-	0(0.0)-	0(0.0)-	328(31.4)
Neither群	15(17.9)-	99(42.3)	22(33.3)	180(51.0)+	53(43.8)	18(31.0)	25(19.4)-	412(39.4)
No群	1(1.2)-	36(15.4)-	3(4.5)-	80(22.7)-	41(33.9)	40(69.0)+	104(80.6)+	305(29.2)
合計	84(100.0)	234(100.0)	66(100.0)	353(100.0)	121(100.0)	58(100.0)	129(100.0)	1045(100.0)

(注1) 表中の数字は、「度数(%)」である。

(注2)  $\chi^2$ 検定の結果は1%水準で有意であった( $\chi^2(12)=402.99$ ,  $p<.01$ )。表中の+、-は残差分析の結果、5%水準以上で「有意に多かった(+」「有意に少なかった(-)」ことを示している。

### (3) 補足欄への記述率

本調査では、「それはなぜですか」に対する記述の説明度をあげるため、「それはな

「それはなぜですか」に対する記述をさらに具体的に説明する「補足欄」を設けた。表 4-20 は、補足欄を教示通り記述した者の割合を示すものである。それによると、90.2%の被験者はすべての「それはなぜですか」に対する記述に対して補足欄を記述したことがわかる。教示を無視して補足欄をまったくの空欄で提出した者は 3.0%で、他の者は補足欄を記述したりしなかったりする形で調査に回答していたといえよう。全体的に、「それはなぜですか」に対する補足欄はしっかり記述されたといえ、「それはなぜですか」に対する記述の説明度は上がったといえる。

表 4-20 「それはなぜですか」に対する記述と補足欄との関係

補足欄への記述率	度数(%)
0.0	34 ( 3.0)
0.0-0.2	5 ( 0.4)
0.2-0.4	10 ( 0.9)
0.4-0.6	11 ( 1.0)
0.6-0.8	17 ( 1.5)
0.8-1.0	33 ( 2.9)
1.0	1016 ( 90.2)
N= 1126 (100.0)	

(注1) 記述率は、「それはなぜですか」に対する記述数÷それに対する補足欄への記述で算出している。よって、1.0はすべての

「それはなぜですか」に対する記述に対して補足欄を記述したことを示す(ただし、補足がないという場合の「終わり」を含む)。

(注2) 0.0-0.2に0.0(左端の数字)は含まれない。

#### (4) カテゴリーに際して

前節と同様にして、上位次元-下位次元2段階階層カテゴリー(表 4-10, 4-11 参照)を用いて分析をおこなうこととした。下位次元カテゴリーの作成とカテゴリーに際して留意した点はほぼ同様に踏襲しており、分析から「自己評価(Y/N)」や「はずれた記述(Y/N)」「悩み不満のなさ(Y)」(あるいは「満足のなさ(N)')といった記述を除外したことも同様である。ここでは、前節のカテゴリーでは問題にならなかった本節特有のカテゴリーの留意点だけ述べておく。本節では、WHY答法に補足欄を新たに設けているので、カテゴリーに際してその関係をどのように扱うかを述べておく必要がある。

ここでは2点を述べる。第1に、カテゴリーは、「それはなぜですか」に対する理由と補足欄をセットにして一つのカテゴリーにあてはめるのではなく、そこから複数の記述を抜き出し複数のカテゴリーでカテゴリーをおこなったということである。

しかし、第2に、自己評価を直接規定する記述となっていないと判断される自己は、カテゴライズの対象から外している。これには、カテゴリー作成上の留意点の第5の点で述べた「自己評価(Y/N)」や「はずれた記述(Y/N)」「悩み不満のなさ(Y)」(あるいは「満足 of なさ(N)」)が該当するし、補足欄で見られることの多い次のような事例が該当する。

＜事例＞経済学部3年生／男（自己評価センテンスに対して“はい／そう思います”）  
 気の合う仲間がたくさんいるから。

\*自分自身楽天的な性格であり、そのような気の合う友だちが身近にいたという  
 幸運があったから。

この例では、補足欄において、「楽天的な性格だ」「幸運だ」といった、なぜ「気の合う仲間がたくさんいる」のかをさらに説明する記述がなされている。たしかに、「気の合う仲間がたくさんいる」を補足する説明には違いないが、「私は自分自身に満足しています(満足していません)」に対する直接の理由を示すものとはいえない。補足欄は、「それはなぜですか」に対する記述を具体的に補足説明するものとして設置されているが、中にはこのような記述も少なからず見られた。本章での分析は、自己評価を直接規定するとみなされる理由を、青年の自己評価を規定する自己の諸相として抽出することを目的としている。よって、この目的からはずれこれらの記述は、本分析ではカテゴライズの対象外とした。

また、補足欄をもうけインタビューで調査でおこなった本調査では、その表現されたものの豊かさから、多くの場合1つの記述が数行にわたることも希ではなかった。よって、前節までのカテゴリー分析のように、1つの「それはなぜですか」に対する記述に1つのカテゴリーを当てていくという作業はきわめて困難であった。よって、用意されているカテゴリーに該当する記述があるかないかという方法で分析をおこなうべく、豊田・前田(1994)の自由記述意見の分析例を参考にして、以下のステップでカテゴライズをおこなうこととした。なお、筆者と心理学を専門とする博士課程の大学院生との2人でおこなったことは前節までと同様である。

①カテゴリーが同定する内容をお互い一致させるため、若干の練習課題をおこなう。

②記述を1人分ずつ読みあげ、両者独立してカテゴリズをおこなう。その際、上記のカテゴリズの際の留意点に注意して、自己評価を直接規定している記述にアンダーラインを引く。次いで、それが表4-10、4-11のカテゴリのいずれに該当するかを判断する。該当するカテゴリがあればそのカテゴリに1を与える。そして最後に、該当しなかったカテゴリに0を与えていく。同じカテゴリが1人の回答に複数回見られる場合でも、1人の被験者に与えられるそのカテゴリのカウントは1回だけである。こうして、1人分の記述のカテゴリズが終わった際には、Yes群、No群ともに11のカテゴリに対して0-1型のデータ行列ができあがっていることとなる。

③両者独立しておこなった0-1型データ行列を見比べて、両者の一致しないカテゴリについては合議して両者の結果をあわせる。その際、カテゴリズのもととなるアンダーラインが参考になる。

④②、③のステップを全被験者分繰り返し、全被験者の0-1型データ行列を作成する。

このような手続きにしたがって、Yes群で341人分×11下位次元カテゴリの0-1型データ行列、Neither群で425人分×11下位次元カテゴリ、No群で329人分×11カテゴリの0-1型データ行列が作成された。なお③において、合議して意見の一致をみるところまで含めたカテゴリズの一致率は84.9%であった。カテゴリズに要した時間は、延べ200時間程度であった。

#### (5) 上位次元-下位次元カテゴリの2段階階層によるWHY答法のカテゴリ分析 —学年別・男女別・全体で見た青年の自己評価を規定する自己の諸相—

Yes群、Neither群、No群における上位次元、下位次元カテゴリの表出率の結果を、学年別と全体（表4-21～表4-26）、男女別と全体（表4-27～表4-32）に示す。

表4-21 学年別、全体で見た上位次元カテゴリの表出率（Yes群） 度数（%）

全体		1回生		2回生		3回生	
生活(Y)	294 ( 86.2)	生活(Y)	98 ( 86.7)	生活(Y)	121 ( 88.3)	生活(Y)	75 ( 82.4)
他者との関わり (Y)	261 ( 76.5)	自己(Y)	90 ( 79.6)	他者との関わり (Y)	109 ( 79.6)	他者との関わり (Y)	65 ( 71.4)
自己(Y)	249 ( 73.0)	他者との関わり (Y)	87 ( 77.0)	自己(Y)	101 ( 73.7)	自己(Y)	58 ( 63.7)
人生(Y)	125 ( 36.7)	人生(Y)	47 ( 41.6)	人生(Y)	41 ( 29.9)	人生(Y)	37 ( 40.7)
N= 341 (100.0)		N= 113 (100.0)		N= 137 (100.0)		N= 91 (100.0)	

（注）被験者は複数のカテゴリにわたってカテゴリズされている。



表 4-22 学年別, 全体で見た上位次元カテゴリーの表出率 (Neither 群) 度数 (%)

全体		1回生		2回生		3回生	
自己(N)	352 (82.8)	自己(N)	128 (86.5)	自己(N)	141 (82.9)	自己(N)	83 (77.6)
生活(N)	250 (58.8)	生活(Y)	84 (56.8)	生活(N)	104 (61.2)	生活(N)	70 (65.4)
生活(Y)	242 (56.9)	生活(N)	76 (51.4)	生活(Y)	92 (54.1)	生活(Y)	66 (61.7)
自己(Y)	209 (49.2)	自己(Y)	73 (49.3)	他者との関わり (Y)	87 (51.2)	自己(Y)	51 (47.7)
他者との関わり (Y)	208 (48.9)	他者との関わり (Y)	72 (48.6)	他者との関わり (N)	87 (51.2)	他者との関わり (N)	50 (46.7)
他者との関わり (N)	203 (47.8)	他者との関わり (N)	66 (44.6)	自己(Y)	85 (50.0)	他者との関わり (Y)	49 (45.8)
人生(N)	122 (28.7)	人生(N)	43 (29.1)	人生(N)	43 (25.3)	人生(N)	36 (33.6)
人生(Y)	86 (20.2)	人生(Y)	39 (26.4)	人生(Y)	35 (20.6)	人生(Y)	12 (11.2)
N= 425 (100.0)		N= 148 (100.0)		N= 170 (100.0)		N= 107 (100.0)	

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-23 学年別, 全体で見た上位次元カテゴリーの表出率 (No 群) 度数 (%)

全体		1回生		2回生		3回生	
自己(N)	300 (91.5)	自己(N)	100 (93.5)	自己(N)	126 (91.3)	自己(N)	74 (89.2)
生活(N)	234 (71.3)	他者との関わり (N)	77 (72.0)	生活(N)	102 (73.9)	生活(N)	59 (71.1)
他者との関わり (N)	211 (64.3)	生活(N)	73 (68.2)	他者との関わり (N)	82 (59.4)	他者との関わり (N)	52 (62.7)
人生(N)	116 (35.4)	人生(N)	30 (28.0)	人生(N)	51 (37.0)	人生(N)	35 (42.2)
N= 328 (100.0)		N= 107 (100.0)		N= 138 (100.0)		N= 83 (100.0)	

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-24 学年別, 全体で見た下位次元カテゴリーの表出率 (Yes 群) 度数 (%)

全体		1回生		2回生		3回生	
日々の生活(Y)	283 (83.0)	日々の生活(Y)	95 (84.1)	日々の生活(Y)	117 (85.4)	日々の生活(Y)	71 (78.0)
人間関係(Y)	232 (68.0)	人間関係(Y)	80 (70.8)	人間関係(Y)	96 (70.1)	人間関係(Y)	56 (61.5)
自己の特徴(Y)	212 (62.2)	自己の特徴(Y)	75 (66.4)	自己の特徴(Y)	91 (66.4)	自己の特徴(Y)	46 (50.5)
家族(Y)	88 (25.8)	未来(Y)	31 (27.4)	家族(Y)	42 (30.7)	未来(Y)	23 (25.3)
未来(Y)	86 (25.2)	家族(Y)	27 (23.9)	健康(Y)	34 (24.8)	健康(Y)	21 (23.1)
健康(Y)	81 (23.8)	健康(Y)	26 (23.0)	未来(Y)	32 (23.4)	過去(Y)	21 (23.1)
自己・世界への 関わり方(Y)	73 (21.4)	過去(Y)	26 (23.0)	自己・世界への 関わり方(Y)	31 (22.6)	自己・世界への 関わり方(Y)	20 (22.0)
自己理解(Y)	72 (21.1)	自己理解(Y)	24 (21.2)	自己理解(Y)	28 (20.4)	自己理解(Y)	20 (22.0)
過去(Y)	62 (18.2)	自己・世界への 関わり方(Y)	22 (19.5)	他者への態度 (Y)	26 (19.0)	家族(Y)	19 (20.9)
他者への態度 (Y)	58 (17.0)	他者への態度 (Y)	15 (13.3)	過去(Y)	15 (10.9)	他者への態度 (Y)	17 (18.7)
所有(Y)	39 (11.4)	所有(Y)	13 (11.5)	所有(Y)	13 (9.5)	所有(Y)	13 (14.3)
N= 341 (100.0)		N= 113 (100.0)		N= 137 (100.0)		N= 91 (100.0)	

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-25 学年別, 全体で見た下位次元カテゴリーの表出率 (Neither 群) 度数 (%)

全体	1回生	2回生	3回生
自己の特徴(N) 317 (74.6)	自己の特徴(N) 116 (78.4)	自己の特徴(N) 127 (74.7)	自己の特徴(N) 74 (69.2)
日々の生活(N) 239 (56.2)	日々の生活(Y) 83 (56.1)	日々の生活(N) 101 (59.4)	日々の生活(Y) 64 (59.8)
日々の生活(Y) 234 (55.1)	日々の生活(N) 74 (50.0)	日々の生活(Y) 87 (51.2)	日々の生活(N) 64 (59.8)
自己の特徴(Y) 166 (39.1)	自己の特徴(Y) 58 (39.2)	自己の特徴(Y) 67 (39.4)	自己の特徴(Y) 41 (38.3)
人間関係(Y) 162 (38.1)	人間関係(Y) 57 (38.5)	人間関係(Y) 65 (38.2)	人間関係(Y) 40 (37.4)
他者への態度 (N) 123 (28.9)	自己・世界への 関わり方(N) 44 (29.7)	他者への態度 (N) 53 (31.2)	他者への態度 (N) 29 (27.1)
自己・世界への 関わり方(N) 111 (26.1)	他者への態度 (N) 41 (27.7)	人間関係(N) 43 (25.3)	自己・世界への 関わり方(N) 28 (26.2)
人間関係(N) 94 (22.1)	人間関係(N) 31 (20.9)	自己・世界への 関わり方(N) 39 (22.9)	未来(N) 28 (26.2)
未来(N) 84 (19.8)	自己・世界への 関わり方(Y) 28 (18.9)	未来(N) 31 (18.2)	人間関係(N) 20 (18.7)
自己・世界への 関わり方(Y) 73 (17.2)	過去(Y) 28 (18.9)	他者への態度 (Y) 29 (17.1)	自己・世界への 関わり方(Y) 17 (15.9)
過去(Y) 60 (14.1)	未来(N) 25 (16.9)	自己・世界への 関わり方(Y) 28 (16.5)	過去(N) 13 (12.1)
他者への態度 (Y) 59 (13.9)	過去(N) 22 (14.9)	過去(Y) 21 (12.4)	自己理解(N) 13 (12.1)
過去(N) 49 (11.5)	他者への態度 (Y) 18 (12.2)	家族(Y) 19 (11.2)	他者への態度 (Y) 12 (11.2)
自己理解(N) 41 (9.6)	家族(Y) 17 (11.5)	未来(Y) 17 (10.0)	所有(N) 12 (11.2)
家族(Y) 40 (9.4)	自己理解(N) 15 (10.1)	過去(N) 14 (8.2)	過去(Y) 11 (10.3)
家族(N) 35 (8.2)	家族(N) 15 (10.1)	家族(N) 14 (8.2)	自己理解(Y) 9 (8.4)
未来(Y) 32 (7.5)	未来(Y) 14 (9.5)	自己理解(N) 13 (7.6)	家族(N) 6 (5.6)
所有(N) 29 (6.8)	所有(N) 9 (6.1)	自己理解(Y) 9 (5.3)	所有(Y) 6 (5.6)
自己理解(Y) 24 (5.6)	自己理解(Y) 6 (4.1)	所有(N) 8 (4.7)	家族(Y) 4 (3.7)
所有(Y) 18 (4.2)	健康(Y) 5 (3.4)	所有(Y) 8 (4.7)	健康(Y) 3 (2.8)
健康(Y) 14 (3.3)	所有(Y) 4 (2.7)	健康(Y) 6 (3.5)	未来(Y) 1 (0.9)
健康(N) 3 (0.7)	健康(N) 2 (1.4)	健康(N) 1 (0.6)	健康(N) 0 (0.0)
N= 425 (100.0)	N= 148 (100.0)	N= 170 (100.0)	N= 107 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-26 学年別, 全体で見た下位次元カテゴリーの表出率 (No 群) 度数 (%)

全体	1回生	2回生	3回生
自己の特徴(N) 285 (86.9)	自己の特徴(N) 93 (86.9)	自己の特徴(N) 118 (85.5)	自己の特徴(N) 74 (89.2)
日々の生活(N) 225 (68.6)	日々の生活(N) 67 (62.6)	日々の生活(N) 101 (73.2)	日々の生活(N) 57 (68.7)
他者への態度 (N) 178 (54.2)	他者への態度 (N) 66 (61.7)	他者への態度 (N) 65 (47.1)	他者への態度 (N) 47 (56.6)
未来(N) 86 (26.2)	自己・世界への 関わり方(N) 25 (23.4)	未来(N) 37 (26.8)	未来(N) 28 (33.7)
自己・世界への 関わり方(N) 72 (22.0)	未来(N) 21 (19.6)	自己・世界への 関わり方(N) 35 (25.4)	人間関係(N) 16 (19.3)
人間関係(N) 64 (19.5)	人間関係(N) 21 (19.6)	人間関係(N) 27 (19.6)	健康(N) 13 (15.7)
過去(N) 47 (14.3)	過去(N) 17 (15.9)	過去(N) 19 (13.8)	自己・世界への 関わり方(N) 12 (14.5)
健康(N) 39 (11.9)	健康(N) 13 (12.1)	家族(N) 15 (10.9)	過去(N) 11 (13.3)
家族(N) 27 (8.2)	自己理解(N) 7 (6.5)	健康(N) 13 (9.4)	自己理解(N) 5 (6.0)
自己理解(N) 23 (7.0)	家族(N) 7 (6.6)	自己理解(N) 11 (7.9)	家族(N) 5 (6.0)
所有(N) 8 (2.4)	所有(N) 2 (1.9)	所有(N) 4 (2.9)	所有(N) 2 (2.4)
N= 328 (100.0)	N= 107 (100.0)	N= 138 (100.0)	N= 83 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-27 男女別、全体で見た上位次元カテゴリーの表出率 (Yes 群)  
度数 (%)

全体	男性	女性
生活(Y) 294 (86.2)	生活(Y) 118 (86.8)	生活(Y) 176 (85.9)
他者との関わり (Y) 261 (76.5)	自己(Y) 94 (69.1)	他者との関わり 168 (82.0)
自己(Y) 249 (73.0)	他者との関わり (Y) 93 (68.4)	自己(Y) 155 (75.6)
人生(Y) 125 (36.7)	人生(Y) 50 (36.8)	人生(Y) 75 (36.6)
N= 341 (100.0)	N= 136 (100.0)	N= 205 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-28 男女別、全体で見た上位次元カテゴリーの表出率 (Neither 群)  
度数 (%)

全体	男性	女性
自己(N) 352 (82.8)	自己(N) 112 (76.2)	自己(N) 240 (86.3)
生活(N) 250 (58.8)	生活(N) 96 (65.3)	生活(Y) 158 (56.8)
生活(Y) 242 (56.9)	生活(Y) 84 (57.1)	生活(N) 154 (55.4)
自己(Y) 209 (49.2)	他者との関わり (Y) 66 (44.9)	自己(Y) 147 (52.9)
他者との関わり (Y) 208 (48.9)	他者との関わり (N) 64 (43.5)	他者との関わり (Y) 142 (51.1)
他者との関わり (N) 203 (47.8)	自己(Y) 62 (42.2)	他者との関わり (N) 139 (50.0)
人生(N) 122 (28.7)	人生(N) 47 (32.0)	人生(N) 75 (27.0)
人生(Y) 86 (20.2)	人生(Y) 30 (20.4)	人生(Y) 56 (20.1)
N= 425 (100.0)	N= 147 (100.0)	N= 278 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-29 男女別、全体で見た上位次元カテゴリーの表出率 (No 群)  
度数 (%)

全体	男性	女性
自己(N) 301 (91.5)	自己(N) 124 (91.9)	自己(N) 177 (91.2)
生活(N) 235 (71.4)	生活(N) 94 (69.6)	生活(N) 141 (72.7)
他者との関わり (N) 212 (64.4)	他者との関わり (N) 78 (57.8)	他者との関わり (N) 134 (69.1)
人生(N) 117 (35.6)	人生(N) 40 (29.6)	人生(N) 77 (39.7)
N= 329 (100.0)	N= 135 (100.0)	N= 194 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-30 男女別、全体で見た下位次元カテゴリーの表出率 (Yes 群)  
度数 (%)

全体	男性	女性
日々の生活(Y) 283 (83.0)	日々の生活(Y) 113 (83.1)	日々の生活(Y) 170 (82.9)
人間関係(Y) 232 (68.0)	人間関係(Y) 86 (63.2)	人間関係(Y) 146 (71.2)
自己の特徴(Y) 212 (62.2)	自己の特徴(Y) 79 (58.1)	自己の特徴(Y) 133 (64.9)
家族(Y) 88 (25.8)	健康(Y) 37 (27.2)	家族(Y) 60 (29.3)
未来(Y) 86 (25.2)	未来(Y) 34 (25.0)	未来(Y) 52 (25.4)
健康(Y) 81 (23.8)	自己・世界への 関わり方(Y) 28 (20.6)	自己理解(Y) 51 (24.9)
自己・世界への 関わり方(Y) 73 (21.4)	家族(Y) 28 (20.6)	自己・世界への 関わり方(Y) 45 (22.0)
自己理解(Y) 72 (21.1)	過去(Y) 23 (16.9)	健康(Y) 44 (21.5)
過去(Y) 62 (18.2)	自己理解(Y) 21 (15.4)	他者への態度 (Y) 41 (20.0)
他者への態度 (Y) 58 (17.0)	他者への態度 (Y) 17 (12.5)	過去(Y) 39 (19.0)
所有(Y) 39 (11.4)	所有(Y) 17 (12.5)	所有(Y) 22 (10.7)
N= 341 (100.0)	N= 136 (100.0)	N= 205 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-31 男女別、全体で見た下位次元カテゴリーの表出率 (Neither 群)  
度数 (%)

全体	男性	女性
自己の特徴(N) 317 (74.6)	自己の特徴(N) 97 (66.0)	自己の特徴(N) 220 (79.1)
日々の生活(N) 239 (56.2)	日々の生活(N) 90 (61.2)	日々の生活(Y) 154 (55.4)
日々の生活(Y) 234 (55.1)	日々の生活(Y) 80 (54.4)	日々の生活(N) 149 (53.6)
自己の特徴(Y) 166 (39.1)	人間関係(Y) 54 (36.7)	自己の特徴(Y) 120 (43.2)
人間関係(Y) 162 (38.1)	自己の特徴(Y) 46 (31.3)	人間関係(Y) 108 (38.8)
他者への態度 (N) 123 (28.9)	人間関係(N) 36 (24.5)	他者への態度 (N) 92 (33.1)
自己・世界への 関わり方(N) 111 (26.1)	自己・世界への 関わり方(N) 35 (23.8)	自己・世界への 関わり方(N) 76 (27.3)
人間関係(N) 94 (22.1)	未来(N) 32 (21.8)	人間関係(N) 58 (20.9)
未来(N) 84 (19.8)	他者への態度 (N) 31 (21.1)	自己・世界への 関わり方(Y) 56 (20.1)
自己・世界への 関わり方(Y) 73 (17.2)	過去(Y) 24 (16.3)	未来(N) 52 (18.7)
過去(Y) 60 (14.1)	過去(N) 22 (15.0)	他者への態度 (Y) 41 (14.7)
他者への態度 (Y) 59 (13.9)	他者への態度 (Y) 18 (12.2)	過去(Y) 36 (12.9)
過去(N) 49 (11.5)	自己・世界への 関わり方(Y) 17 (11.6)	家族(Y) 35 (12.6)
自己理解(N) 41 (9.6)	自己理解(N) 17 (11.6)	過去(N) 27 (9.7)
家族(Y) 40 (9.4)	所有(N) 16 (10.9)	未来(Y) 24 (8.6)
家族(N) 35 (8.2)	自己理解(Y) 14 (9.5)	自己理解(N) 24 (8.6)
未来(Y) 32 (7.5)	家族(N) 11 (7.5)	家族(N) 24 (8.6)
所有(N) 29 (6.8)	未来(Y) 8 (5.4)	所有(N) 13 (4.7)
自己理解(Y) 24 (5.6)	所有(Y) 8 (5.4)	自己理解(Y) 10 (3.6)
所有(Y) 18 (4.2)	家族(Y) 5 (3.4)	健康(Y) 10 (3.6)
健康(Y) 14 (3.3)	健康(Y) 4 (2.7)	所有(Y) 10 (3.6)
健康(N) 3 (0.7)	健康(N) 2 (1.4)	健康(N) 1 (0.4)
N= 425 (100.0)	N= 147 (100.0)	N= 278 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 4-32 男女別、全体で見た下位次元カテゴリーの表出率 (No 群)  
度数 (%)

全体	男性	女性
自己の特徴(N) 286 (86.9)	自己の特徴(N) 116 (85.9)	自己の特徴(N) 170 (87.6)
日々の生活(N) 226 (68.7)	日々の生活(N) 89 (65.9)	日々の生活(N) 137 (70.6)
他者への態度 (N) 179 (54.4)	他者への態度 65 (48.1)	他者への態度 114 (58.8)
未来(N) 86 (26.1)	自己・世界への関わり方(N) 31 (23.0)	未来(N) 60 (30.9)
自己・世界への関わり方(N) 72 (21.9)	人間関係(N) 27 (20.0)	自己・世界への関わり方(N) 41 (21.1)
人間関係(N) 64 (19.5)	未来(N) 26 (19.3)	人間関係(N) 37 (19.1)
過去(N) 48 (14.6)	過去(N) 18 (13.3)	過去(N) 30 (15.5)
健康(N) 39 (11.9)	健康(N) 18 (13.3)	家族(N) 22 (11.3)
家族(N) 27 (8.2)	自己理解(N) 6 (4.4)	健康(N) 21 (10.8)
自己理解(N) 23 (7.0)	家族(N) 5 (3.7)	自己理解(N) 17 (8.8)
所有(N) 8 (2.4)	所有(N) 4 (3.0)	所有(N) 4 (2.1)
N= 329 (100.0)	N= 135 (100.0)	N= 194 (100.0)

(注) 被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表を見ると、Yes 群、No 群における青年の自己評価を規定する自己の特徴は、前節の結果と比べてさほど変わらないものであった。大学の学年差、男女差も見られなかった。

すなわち第1に、上位次元カテゴリーの結果の全体を見ると、青年の自己評価を規定する自己は、Yes 群では「生活(Y)」(86.2%)にもっとも多く(表 4-21 参照)、No 群では「自己(N)」(91.5%)にもっとも多い(表 4-23)。そして、表 4-10に見られるように、Yes 群の上位次元カテゴリーである「生活(Y)」には、「日々の生活(Y)」「健康(Y)」「所有(Y)」の下位次元カテゴリーが内包されている。表 4-24を見ると、これらの表出率は順に 83.0%、23.8%、11.4%となっている。このことから、Yes 群における上位次元カテゴリー「生活(Y)」の主に指すところは「日々の生活(Y)」であることがわかる。同様に、表 4-11に見られるように、No 群の上位次元カテゴリーである「自己(N)」には、「自己の特徴(N)」「自己理解(N)」「自己・世界への関わり方(N)」の下位次元カテゴリーが内包されている。表 4-26を見ると、これらの表出率は順に 86.9%、7.0%、22.0%となっている。このことから、No 群における上位次元カテゴリー「自己(N)」の主に指すところは「自己の特徴(N)」であることがわかる。

第2に、上位次元カテゴリーの結果(表 4-21、表 4-23)の全体を見ると、「人生」は他のカテゴリーに比べて高い表出率を見せていないということである(Yes 群 36.7%、No 群 35.4%)。より詳細に、より具体的に補足説明を入れさせた本節の調査において

も、前節と同様の結果が見られたといえる。ここでも、過半数以上の表出率をもって、青年の自己評価を大きく規定する自己の基準とみなすならば、Yes 群、No 群ともに、人生軸をはずした「自己(Y)」(あるいは「自己(N)」)、「他者との関わり(Y)」(あるいは「他者との関わり(N)」)、「生活(Y)」(あるいは「生活(N)」)の3上位次元カテゴリーによって説明されるといえる。前節では、No 群を大きく説明するのは「自己(N)」だけであったが、ここではYes 群と同様となっている。

第3に、上位次元カテゴリー「他者との関わり」の中で重要となる下位次元カテゴリーが、Yes 群とNo 群とでは異なるということである。すなわちYes 群では、「人間関係(Y)」の表出率が68.0%もあるのに対し、「他者への態度(Y)」の表出率はわずか17.0%にしかすぎない。これに対してNo 群では、この表出率の関係が前節の結果以上にクリアーに逆転している(他者への態度(N) 54.2%, 人間関係(N) 19.5%)。他者との関わりにおいて、Yes 群では「人間関係(Y)」が重視されるのに対して、No 群では「他者への態度(N)」が重視されるといえる。

ところでNeither 群の特徴は、表出率の高い項目はNo 群のものにきわめて近かった。すなわち、上位次元カテゴリーの結果(表4-22)の全体を見ると、「自己(N)」(82.8%)の表出率もっとも高く、「生活(N)」(58.8%)がそれに次いでいた。また、下位次元カテゴリーの結果(表4-25)の全体を見ると、「自己の特徴(N)」の表出率もっとも高く(74.6%)、「日々の生活(N)」がそれに次いでいた。同様の結果は、大学の学年別、男女別においてもおおむね確認できる。表4-25の1回生の箇所に見られるように、「自己の特徴(N)」(78.4%)、「日々の生活(Y)」(56.1%)と多勢を占めるカテゴリーが異なるように見える場合でも、すぐその後に「日々の生活(N)」が控えており(50.0%)、全体の共通した特徴を覆すほどのものではない(表4-31の女性も同様)。いうまでもなく、Neither 群は自己評価の中間形態を示すものであるから、基本的には肯定的なカテゴリー、否定的なカテゴリーが混在している。上位次元カテゴリー「他者との関わり」が下位次元で示す「人間関係」「他者への態度」などの表出率の様相は、むしろYes 群に近いものである。「自己の特徴(N)」「日々の生活(N)」といった否定的なカテゴリーが突出していようとも、それと同時に「日々の生活(Y)」「自己の特徴(Y)」のような、日々の楽しさや充実感、肯定的な自己の特徴を示すカテゴリーをももって

いるのである。この点では「それはなぜですか」としてはかきいれなかったとしても、改めて、自己評価の理由を記述する必要がある「それはなぜですか」としてはかきいれなかったとしても、改めて、自己評価の理由を記述する必要がある。

#### 第4項 考察

本節の目的は、記述の説明度に留意したWHY答法を実施し、改めて上位次元—下位次元カテゴリーの2段階階層による分析をおこなうことにあった。具体的な改善措置として、自己評価センテンスへの回答を2択法から“どちらともいえない”を加えた3択法へとしたこと、WHY答法における「それはなぜですか」の設定個数を5個から20個に増やしたこと、補足欄を新たに設けたこと、集団調査ではなく face to face のインタビュー調査でおこなったこと、が挙げられる。こうした改善措置の理由は概して、前節までの集団調査でWHY答法を用いた調査結果を、本章の最終節で、より質の純化された、より質の高いデータのもとで得られた結果と比べようとしたからである。このような改善措置が、WHY答法の実施して、新たな改善措置がどのように反映されたのかを検討した結果、以下3つの点が明らかにされた。

WHY答法を実施して、新たな改善措置がどのように反映されたのかを検討した結果、以下3つの点が明らかにされた。第1に、「それはなぜですか」の表出個数はこれまでの集団調査によるものと比べ、かなり増加したことがあげられる。これは、「それはなぜですか」の設定個数が20個であったことと、本節の調査が face to face のインタビューでなされたことが理由として考えられる。第2に、本節の調査は、自己評価センテンスへの回答が3択法でなされたが、結果は Neither 群がいずれの検討においても Yes 群、No 群の中間に位置することを示すものであった。それ故、本調査で Neither 群が設定されたことは、前節までの Yes 群、No 群に比べて本節の Yes 群、No 群の質がより純化したことを意味している。第3に、分量の多い調査にも関わらず、ほとんどの被験者が調査者の要求に応じて、補足欄をしっかりと記述した。これも、本節の調査が face to face のインタビューでなされたからだと考えられる。そして、以上の3点は、本節で扱うWHY答法の記述データがより質の高いものであったことを示すものといえる。

このように本節では、より質の純化された、より質の高いデータを用いて、前節と同様の分析をおこなったわけだが、結果は、概してほとんど同じものであった。しかも、大学の学年差、男女差もほとんど見られなかった。すなわち、第1に、自己評価

の高さを規定する自己は「日々の生活」として描かれるものであり、逆に、自己評価の低さを規定する自己は「自己の特徴」として描かれるものであったことである。自己評価の高さを規定する自己は、自己評価の低さを規定するものの裏返しとは限らないのである。第2に、上位次元カテゴリーの「他者との関わり」として示される下位次元カテゴリー（とくに、「人間関係」「他者へ態度」）の重みが、自己評価の高い者と低い者とでは逆転していたことである。すなわち、自己評価の高い者にとっては「他者への態度」よりも「人間関係」の方が自己評価を規定する自己として重要であり、自己評価の低い者にとっては「人間関係」よりも「他者への態度」の方が自己評価を規定する自己として重要であった。第3に、人生軸に関わる自己は、青年の自己評価をあまり規定していなかったことである。

本節における前節までと異なる点は、自己評価の肯定・否定が混在する Neither 群を検討したことである。WHY答法から見た Neither の特徴は、No 群にきわめて近いものであった。しかし、それは突出してくる特徴であって、決して無視できない数字で、肯定的な日々の生活感情をもあわせもっていることが明らかにされた。表向きは否定的でありながらも、どこかで肯定感情にも支えられている自己評価の姿、それが Neither 群の特徴であるといえるようである。

## 第5項 全体的考察

最後に、前節までの結果も交えた本研究全体の考察をおこなう。

第1章第1節で述べたように、本研究の大きな特徴は、青年への否定的な見方からいったん脱却しようとした点にある。すなわち、青年期に属する青年は、概して「疾風怒濤」といった否定的な感情の生起しやすい時期として説明がなされてきた（cf. Hall, 1904）。本研究が、疾風怒濤やアイデンティティ危機といった否定的な概念から出発せず、全体を鳥瞰することのできる「自己（self）」の概念を用いて出発しようとしたことは、本研究が青年をア・プリオリに否定的なまなざしで見ることから脱却したかったからに他ならない。

それにも関わらず、結果的には、青年の自己の様相は全体的に否定的なものであった。第3章第6節の結果によれば、自己評価の観点から見た青年の自己感情は、若干



の男女差は見られながらも、概して中程度（SS2, SS10, [女性のみ SS12]）→低群（SS16）→高群（SS1）の順で分布していた。一見、自己評価の中程度の青年が全体で多勢を呈しているように見える。しかし、その見解は本節の結果から覆されることとなる。青年の自己の様相を鳥瞰図的にとらえる上で重要となる本節の結果は、Neither 群の自己の特徴が表面上否定的だったということであり、No 群の自己の特徴にきわめて近かったということである。すなわち、「表面的には」という限定つきではあるが、その限りでは、自己評価の中程度の学生が全体で多勢を占め、かつそれに自己評価の低群が次いでいる青年の自己の様相は、全体的に否定的だということである。

この鳥瞰図は、やや細かな分析とはなるが、表 4-19 を該当率の高い順に並び替えた表 4-33 を見ても支持されるように思われる。表を見ると、上位 3 つを占めるのは Neither 群と No 群の自己評価タイプ SS10, SS16, SS2 であり、それに次いで Yes 群の自己評価タイプ SS2 と SS10 が 4 番目と 5 番目に位置している。肯定・否定が混在する自己評価タイプ SS10 や SS2 の中にも、Yes 群に属する者は少なからずいるが、それでも青年全体の中で多勢を占めるのは、Neither 群や No 群に属する SS10 であり SS2 である。

表 4-33 表 4-19 を該当率の高い順に並び替えた結果

順位	自己評価タイプ	自己評価センテンスへの回答		
		度数(%)	累積度数(%)	
1	SS10	Neither	180( 17.2)	17.2
2	SS16	No	104( 10.0)	27.2
3	SS2	Neither	99( 9.5)	36.7
4	SS2	Yes	99( 9.5)	46.2
5	SS10	Yes	93( 8.9)	55.1
6	SS10	No	80( 7.7)	62.8
7	SS1	Yes	68( 6.5)	69.3
8	SS12	Neither	53( 5.1)	74.4
9	SS12	No	41( 3.9)	78.3
10	SS9	Yes	41( 3.9)	82.2
			1045 ( 100.0)	100.0

本研究は、疾風怒濤やアイデンティティ危機のような、否定的な概念から出発して青年を見ることに批判的な立場であったが、それでも青年の突出して見えてくる多くの自己の様相は、上記のような構造から否定的であると結論づけられる。われわれが

青年をいつも見ていて、何かしら不満げな、否定的な様相に覆われていると感じていたのは、このような構造からだったのではないかと考えられるのである。もっとも、何度も述べるように、再頻度の出現率である肯定・否定の自己評価タイプ SS2や SS10などは、否定的な自己が表面上突出していようとも、その背後は日々の楽しさや充実感、肯定的な自己などによって支えられている。今後は、鳥瞰図的にとらえられる青年の自己の様相だけでなく、このような肯定・否定の補償作用的な構造までおさえた自己の様相を明らかにしていかなければならないと考えられる。

## 第6節 まとめ

本章は、青年の自己の諸相を、「自己評価を規定する」という条件つきでとらえることを目的とした。具体的な第1の検討は、この自己評価を規定する自己の諸相を表出させる「WHY答法（WHY is it test）」を開発することにあった。それは、自己満足度（自己評価センテンス）を第1ステップとして与え、第2ステップとして、それを規定する自己を「それはなぜですか」という複数の問いにしたがって表出させる、という技法であった。本章では、まず「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係、それに及ぼす制限教示の影響が検討され、集団調査でWHY答法が実施される場合には、5個の「それはなぜですか」、「3個以上書くように」との制限教示を設ける方がのぞましいと結論づけられた。ほかにも、自己評価センテンスの妥当性、「それはなぜですか」の妥当性が検討され、総じて、WHY答法は自己評価を規定する自己の諸相を表出させる技法であることが確認された。

本章では、WHY答法で表出される記述をどのようなカテゴリーでまとめていくかについても検討がなされた。その結果、無秩序なカテゴリーが同列に並べられて分析するというのではなく、カテゴリー次元を上位・下位と秩序立てて、カテゴリー間の関係が明確になるようカテゴリーを作成し、それによってカテゴリー分析がなされることが重要であると考えられた。こうして、上位次元カテゴリーとしては「自己」「他者との関わり」「人生」「生活」が設けられ、「自己の特徴」や「人間関係」「家族」「日々の生活」などの下位次元カテゴリーは、4つの上位次元カテゴリーのいずれかに下位

として属するよう割り振られた。

本章の第2の検討は、このようにして作成された上位次元－下位次元カテゴリーを用いて、青年の自己評価を規定する自己の特徴を明らかにすることにあつた。分析の結果、明らかとなったのは大きく以下の3つである。

- (1) 青年の自己評価の高さを規定する自己は「日々の生活」として描かれるものであり、逆に、自己評価の低さを規定する自己は「自己の特徴」として描かれるものであつた。自己評価の高さを規定する自己が、自己評価の低さを規定する自己の裏返しとは必ずしも限らなかった。
- (2) 上位次元カテゴリー「他者との関わり」の内容が、自己評価の高い者にとっては「人間関係」を意味するのに対し、自己評価の低い者にとっては他者との関係から生起する他者に対しての自己態度、すなわち「他者への態度」であつた。
- (3) 本研究の対象が一般的に青年期後期を過ごす大学生でありながら、彼らの重要な自己に時間軸を内包する「人生」のカテゴリーは多く見られなかった。

そして、これらの特徴は、徹底的な記述を求めたインタビュー調査によっても同様に確認された。また、自己評価の高いとも低いともいえない自己評価の中間群の特徴は、表向きは自己評価の低い者の特徴をベースとした否定的な様相を示しながら、その背後は肯定的な生活感情に支えられている、というものであつた。

本章の最後には、前章までの結果も交えて考察をおこなつた。本研究は、疾風怒濤やアイデンティティ危機などのような否定的な概念から出発して青年を見ることに批判的な立場であつたが、それでも青年の突出して見えてくる多くの自己の様相は、概して否定的であると結論づけられた。

#### 【付記】

本章の主要な内容は、溝上・水間(1997)、溝上(1997, 1999)、水間・溝上(2001)に収録されているが、ここで示すものはそれらを再分析、再検討したものである。

## 第5章 自己の世界を取り巻く 大学生固有の文脈

### 第1節 はじめに

第4章では、青年の自己評価を規定する自己の諸相がいかなるものかを示した。しかしながら、それらはきわめて抽象度の高い結果であり、他の世代の大人や小学生、中学生などでも十分見られる可能性のあるものでもあった。

本研究は、単に青年の自己評価とそれを規定する自己の諸相を、それを取り巻く文脈をまったく考慮することなく、普遍化・一般化されるものであるという立場にはない。本研究の調査対象が青年期後期に属する大学生であったことを考えれば、本研究の結果は現代大学生固有の文脈に根ざしていたはずであり、それは第1章第2節で述べた Hall や Spranger, Bühler の時代のそれとは明らかに異なっていたはずである。また、現代の中でも、中学生や大人のそれとは異なっていたはずである。筆者は、その違いまで明らかにして本研究の成果としたい。

第1章第3節-(2)で述べたように、第4章のような質的データを扱う研究の場合、得られた記述から要因カテゴリーを作成し、その集計によって青年のある特徴を示すのは一般的なステップである。実際、そのような研究は多い。しかし、一方でこのような研究がおこなわれながらも、他方では、そこからもう一步踏み出て、その結果を取り巻く文脈や意味構造を探究する研究をおこなうことも重要である。

文脈は、意味ある形で結合している心理現象（たとえば自己評価の高低）との関係を壊さない形で明らかにされねばならない。図としての心理現象は、その背後に Sampson (1993) が述べるような、地としての文脈が複雑に絡んで固有のものとなっている。文脈は、ある現象の意味を固有のものにする一つの要素（文脈要素）であり、われわれは、意味を追求すると実にさまざまな文脈に出会うのである（田中、1996）。さまざまな経験事象を個々バラバラに測定し、統計的技法によってそれらをつなぐこ

とに従事してきた心理学の伝統は、この結合のもつ意味をかなりの程度見えにくくしている。

この意味ある結合は、理論的には、意味とは何かという議論の中で見えてくる。意味の復権は、近年盛んに唱えられているが、意味とは何かという議論は意外と少ない。それを本章では、第2章第7節で紹介した Hermans らの対話的自己 (the dialogical self) の理論を援用して、ポジションの結合状態として明らかにする。筆者の考えでは、個人の中におけるポジション同士の結合が心理現象の意味を作り上げているのであり、結合されたポジションを通してその心理現象に関わる文脈が見えてくる。

本章では、意味とは何かという議論を中心におこなう中で、Hermans らの対話的自己の理論を援用したポジション結合の考え方が文脈に迫る実証的視点を与えることを概説し、最終節では、それを用いて第4章の結果を支えていた大学生固有の文脈を明らかにすることを目的とする。

## 第2節 意味構造に迫るために

本節では、意味とは何かを明らかにするために、「語り」あるいは「物語 (narrating or storytelling / narrative or story)」の概念を取り上げ、その特徴を概説する。近年心理学では、語りや物語の概念が急速に広まりつつある。それは、語りや物語の概念抜きに意味世界へ入っていくことの難しさに、人々が気づきはじめてからだろうと考えられる。どのような現象であろうと、それが物語になっていれば、人は、その現象の生起する意味を理解することができる。語りや物語の概念は、ある現象の意味を扱う実証的視点を提供してくれる大きな鍵といえるものである。

### (1) 語りは意味の表現

自己や人生について語ることは、それらの意味を表現する行為である。それは、個人的な観点から、独自の物語をつくるかのようになされる点に特徴がある (Bestgen & Costermans, 1994 ; Bruner, 1990)。Hermans (1992) が述べるように、聞き手やカウンセラーがそばにいれば、この傾向はさらに強まる。そして、語りは、何も口述ば

かりとは限らない。一定程度以上の文章記述を求める自由記述的な調査データであれば、少なからず、語りの特徴を有することになる。本調査で扱われたWHY答法（第4章）のデータも例外ではない。大学生は、われわれ調査者の発した問いを通して、彼らのもつ自己や人生の意味を語ってくれたのである。Bruner（1990）の言葉を借りれば、語る状況というのは、人がその意味を容易に理解できない、あるいは疑問を発する「特別な」状況でなされるものともいえる。被験者は、そうした問いに対して、「意味ある形」で答えようとしてくれる（Hilton, 1990）。当然のことであるが、意味ある形でそれらが語られてはじめて、われわれはその意味を知ることができるのである。人々の語る、あるいは記述する行為それ自体が、意味の表現につながるのである。

## （2）語りは「今」「ここ」の場における意味構築の作業

自己や人生を語るその内容には、時間空間的な志向のともなうことがきわめて多い（cf. Hermans, 1987; Polkinghorne, 1988）。時間空間的な志向とは、「アメリカに行ったこと」や「プールで泳いで遊んだこと」「山へドライブに行ったこと」といった空間的な志向や、「私が高校生だったとき」「結婚をする前」「将来医者になったら」といった時間的な志向のことである。しかし、ここで重要なのは、これらの時間空間的な内容が、「今」「ここ」の場（here-and-now field）において新たに経験され、「今」「ここ」の場での意味を構築しながら語られているという事実である（cf. Hermans, 1987; Josephs & Valsiner, 1998）。たとえば、アメリカは物理的には距離が離れているが、人はアメリカでの出来事を語る時、「ここ」の場からしかそれを語ってはいない。「ここ」の場は、個人の空想的な世界であるから（Hermans, 1996; Josephs, 1998; Watkins, 1986）、語るその場においては、アメリカが物理的にどこにあるかはまったく問題とならない。同様に、過去の出来事は、カレンダー上では過ぎ去った出来事である。しかし、人は過去の出来事を「今」の場からしか語ってはいない。当時は辛かった経験でも、「今」の場では思い出と化していることがよくある。それは、人が過去の出来事を、過去に経験したそのままの姿で再現して語ってはいないからである。たとえ過ぎ去った事実であ

るうと、人はそれを「今」の場で新たに経験しながらしか語ることができないのである。これらはいずれも、人生の出来事が、「今」「ここ」の場との意味ある関係において構築・再構築されていることを示している。

これまでの心理学の知見を振り返ってみると、語りにおける「今」の場のもつ意味は、数多く議論されていることがわかる。まず第一に、ナラティブ分析におけるデータの取り扱われ方から、われわれは、人生の語りが「今」の場においてのみ発現されたものであることを知ることができる。そこでは、語られた人生の物語の時間的な変遷過程を明らかにするために、通時的な編成がおこなわれる。すなわち、「赤ん坊の生まれる前」「離婚した後」「だんだん自分のことがよくわかるようになってきています」などにおける「～の前」「～の後」「だんだん」「～の間」といった時間的な変遷を示す前置詞や接続詞に注目して、物語の再編成をおこなうのである（cf. Tappan, 1989）。人は、人生を時間的な情報に考慮しながら作り上げ、語ろうとする。しかし、語り手がそこで、時間的な前置詞や接続詞をどうしても置かざるを得ないのは、過去や未来の出来事が、「今」の場ではカレンダー上の時間的な順序を失い同時存在しているからである。語り手は、時間的な順序に注意しながら、人生のイベントを配列しなおし、相手に伝えなければならないのである。この事実は、自己や人生の語りが時間的な志向性を有していること、「今」の場において構築されていることを示す確かな証拠である。

同様の知見は、古く Lewin によってすでに提唱されていた。すなわち、Lewin (1936) は、場の理論において、「今」の場における過去や未来の同時存在の原理が存在することを述べていた。その例として彼は、囚人の苦痛の量が、現在の仕事の快不快よりも、5年後の釈放に関する期待に左右される事実を挙げる（Lewin, 1943）。囚人たちにとって、5年後の釈放は、彼らの「今」の場において経験されている事実である。実際に5年後どうなるかは、誰も分からない。しかし、彼らが5年後の釈放を「今」の場において期待しているがゆえに、彼らの「今」の苦痛の量は軽減する。それが、Lewin のいう過去や未来の同時存在の原理であった。時間的展望や目標の研究には、将来起こるであろうと予測される出来事と現在どのカレンダー上の時間的長さを測定し、現在の生活感情や適応との相関を見ようとする研究がある。しかし、それらは、将来予

想される出来事が、「今」の場においてのみ意味をなすという事実を無視したものである。カレンダー上で何年先かということは、意味を作り出す「今」の場においてはまったく重要ではない。重要なのは、「今」の出来事ではない事象が、「今」の場で意味をなしているか否かである。

「今」「ここ」の場において語りがなされるという事実は、語られた内容が、「ある時点」において構築された一時的産物であることをも示している (Hermans, 1989)。たとえ同じ事実を同じ解釈で何度語ることがあろうとも、本質的に各回の語りは新しいものである。よって、場合によっては、解釈が変わることも自然なことである。パーソナリティや自己概念は、一定時経っても内容の変わらない安定した産物としてとらえられることが多い (cf. Brownfain, 1952; Engel, 1959)。しかし、それらは内容が変わらないのではなく、自己を解釈する強固なフレームが「今」「ここ」の場で成立しているがゆえに、解釈が同じものとして更新されているだけなのである (溝上, 2000)。

### 第3節 文脈に実証的に迫る視点—ポジション結合が意味を作る—

#### (1) 語りがなぜ意味構築につながるのか

前節で筆者は、自己や人生の語りこそがそれらの意味の表現につながることを述べてきた。物語こそが、現象の意味を知る大きな鍵であるとも述べた。実際、ナラティブイストのきわめて多くは、語りあるいは物語作成が意味構築の作業であることを唱えている。しかし、意味が何かと議論しているものはきわめてわずかである。われわれは、なぜ語りや物語が意味構築につながるのか、その構図をいまだ明確に自覚していない。筆者が上記で述べてきたこと、それは、語りや物語作成が意味の表現であり、意味構築の作業であるということだけである。なぜそうなのかということについては、まだ一言も述べていないのである。

第2章第7節で見た Hermans の対話的自己 (the dialogical self) の理論は、自己の語りが声によるポジション同士の対話的關係によって誘発されることを明らかにしていた。それは、語りあるいは物語がいかにして生まれるかを、きわめて図式的に描



くことに成功している。本節では、意味とは何かというその構造を、Hermans らの対話的自己の理論を援用して明らかにする。

## (2) 結合こそに意味がある

Jerome Bruner は、意味とは何かということを直接議論している代表的な一人である(田中, 1998)。Bruner (1997) は、「意味は適切さにある。適切さは文脈に依存している。文脈は、それが適合される物語のことである」(p.284) と述べる。彼の知見における重要な点は、「適切さ (appropriateness)」が語り、あるいは物語を作るということである。

いうまでもなく、語りが連続した一続きの作品になるためには、複数のポジションがつながなければならない (Gergen & Gergen, 1986; Tappan & Brown, 1989; やまだ, 2000a; 2000b)。Hermans, Kempen & van Loon (1992) によれば、それは、あるポジションから次のポジションへと声を発することによって、ポジション同士の関係を作っていくことともいえる。そして、Bamberg & Marchman (1991) が述べるように、ポジション同士をつなぐときには、どけられるポジションが同時に存在するということでもある。人は、語りを作成するのに必要なポジションを、自覚的、無自覚的に、選び取っているわけである。

しかし、そこでの選出を決定する判断基準は何だろうか。それが Bruner のいう「適切さ」である。一続きの語りとなるためには、あるポジションが適切かどうか判断されなければならない。そして、ポジション同士をつなぐ際のこの主観的な適切さの感覚こそが「意味」なのである。筆者が上記で繰り返し述べてきた「意味ある形で」という表現は、実は、ポジションの「つなぐ」「つながない」を決定する適切さを示していたのである（他にも、やまだ、2000a; 2000b 参照）。

ポジション同士の結合こそに意味があるという知見は、意味が一つのポジションそれ自体をみるだけでは明らかにされない事実を考えてみれば、一層明らかである（cf. Bestgen & Costermans, 1994; Grimes, 1975）。たとえば、ある学生が毎日熱心に授業に出てくる。われわれは、この事実だけをいくら見ても、この学生にとってこの行動がどのような意味をもっているのか、まったく知ることはできない。しかし、同じ学

生が、授業に出ていないと単位がもらえないのでは、と強度の不安を抱いていると知ったらどうだろうか。われわれは、このとき、この学生がなぜ毎日授業に熱心に出てくるのかを理解することだろう。なぜ理解できるのか。それは、彼の学業行動とそれにまつわる強度の不安とが結びつけられ、一つの物語を構成したからである。それは、学生の自己の世界では、ポジション1（熱心に授業に出る「私」）とポジション2（不安にかられる「私」）とが結びつけられた状態を示す。ポジション1の意味は、それ自体から喚起されるものなのではなく、ポジション2との結合によって喚起されるものである。

他のポジションとの結合は、あるポジションが相対化されたことをも意味する（cf. Harré & van Langenhove, 1991）。「相対化されたポジション（relativized position）」は、他の結合されたポジションとの関係において、その位置を明らかにし、意味をあらわにする。そして、先のポジション1、ポジション2に、ポジション3（今までの人生何においても失敗ばかりしてきた「私」）がつながられるとき、ポジション1の意味はさらに深まることになる。このように、結合されたポジションの数が多ければ多いほど物語は長くなり、あるポジションはより相対化されていく。それは、より個性化された状態へ、あるいはより個人的な物語の作成へと導かれるものだともいうことができる。

### (3) ポジション分析—結合されたポジションを探す—

ある現象が何らかの意味を喚起している場合、われわれは、その現象に関わるさまざまな結合関係を通して、その意味構造を知ることができる。これは、文脈に迫る実証的方法への示唆である。

冒頭で述べたように、さまざまな経験事象を個々バラバラに測定し、統計的技法によってそれらをつなぐことに従事してきた心理学の伝統は、意味が結合によって生じるという事実を見えにくくしている。結果、そこでは、統計的技法でつながれた諸変数間の意味を、研究者が憶測で述べなければならない。筆者は、統計的技法によってつながれたものを、われわれ自身が現象とはなれたところで勝手に意味づけるのではなく、被験者自身がつないだ意味ある結合をそのまま実証的に利用していくことを提

案する。もちろん、心理学のすべての研究がそうあらねばならないというのではない。また、統計的技法を頭から批判しているわけでもない。というのも、筆者の経験では、統計的結果は、われわれの目では見えにくいポジション同士の関係の可能性を、示唆してくれることが実に多いからである。

しかし、そこを一步越えて心理現象の意味に迫らねばならない研究に対しては、筆者の提案は何かしらの示唆を与えるだろう。すなわち、前項(2)で述べた「結合こそに意味がある」という考え方を頼りにして、心理現象に結合したポジションを探することで心理現象の意味に迫るということである。以下、これを「ポジション分析」と称していく。それは、語り手自身が作り出す意味あるポジション同士の構成力を利用して、現象の意味を見ていくものともいえる。

#### 第4節 ポジション分析によって垣間見える大学生固有の文脈

##### (1) WHY答法の記述に垣間見る大学生固有の文脈

われわれは第4章で、通常の分析スタイルにしたがって大学生の自己評価を規定する自己の諸相を明らかにした。しかしながら、冒頭で述べたように、そこでの結果はきわめて抽象度の高いレベルにおいてのもので、われわれは何の文脈をも垣間見ることができなかった。つまり、それらは、大学生のものでなくともいいものだったのである。しかしながら、実際の記述には、さまざまな文脈が姿をのぞかせている。この部分をいかにして実証的に扱うかというのが、本章での問いである。

ここでは、次節で扱われる大学生固有の文脈がWHY答法の記述の中にどのようにあらわれてくるかを、ポジション分析によって示しておく。

##### <事例1>法学部2回生/女(WHY答法「いいえ」)

頭が悪い。

\* 他人が大学名を言うと自分の大学と比べて落ち込んでしまう。

(注) 上段の記述が「それはなぜですか」についての回答であり、\*に続く記述がそれぞれの回答についての補足説明である(以下、同様)。

事例1は、WHY答法の記述から、大学生固有の文脈の見える事例として選んだも

のである。ここでの「図」は自己評価を規定する自己それ自体であり、「地」となるのが大学生固有の文脈である。WHY答法の分析カテゴリーを用いると(表4-11参照)、事例1における自己評価を規定する自己「頭が悪い」は、「自己の特徴(N)」とされる。しかし、この「頭が悪い」という自己の特徴は、何も大学生でなくてもいいものである。われわれは、第4章でこのレベルでの結果を示したわけである。

しかし、補足欄におけるさらなる説明を見ると、それが、「他人が大学名を言うと自分の大学と比べて落ち込んでしまう」とことと密接に関わっていることがわかる。われわれは、ここに大学のもつ偏差値序列が、彼女を苦しめていることを知る。彼女のいう「頭が悪い」は、小学生が、あるいは中学生が発するそれとは明らかに意味が異なる。彼女のいう「頭が悪い」は、偏差値が低いと世間でいわれる大学に自分がいることを強く意識して生じる、大学生固有の否定的な自己に対するラベルである。われわれはこうして、WHY答法における彼女の「頭が悪い」という記述に大学事情を垣間見るのである。

偏差値が高い・低いという大学事情が、社会に存在することは確かである。それが、実質的に意味のあるものかどうかは別として、どこかで確実な数字として作られている事実は疑いのないものである。自分の大学がどの程度の偏差値をもつものなのか、知らない学生はいない。しかし、それがどのように意味づけられるかは個人さまざまである。数字の上では偏差値の低い大学の学生でも、その大学にいることを誇らしげに語る者はいるし、偏差値の高い大学の学生でも、こんな大学は最低だと自己嫌悪する者はいる。大学のもつ偏差値が個人とどのように関わって意味づけられるのかは、もはや個人史によってしか説明が不可能である。事例1は、偏差値が否定的に意味づけられ、そのことが学生の自己評価に影響を与えていることを示唆しているのである。

この事例は、ポジション分析によって図5-1のように描かれる<sup>脚注16</sup>。否定的な自己

<sup>脚注16</sup> 図の描き方について、若干補足しておく。第2章第7節では、図2-1のように、Hermans, Kempen & van Loon (1992)の対話的自己のモデル図を用いてポジションの構図を描いたが、ここでは、内円・外円を取り払っている。外枠が、丸から四角に変更されているのは、とくに意味はない。もちろん、Hermansらの図でもとくに大きな問題があるわけではない。しかし、ポジション分析において重要なのは、1つに「今」「ここ」の場を平面上で示すこと、2つにその場に各現象を各ポジションとして変換すること、3つにそれらのポジションを意味ある形でつなぐこと、である。よって、

評価を規定しているのは、ポジション1（頭が悪い「私」）である。それは、ポジション2（大学名をいう「他者」）、それに反応して生じるポジション3（他人の大学と自分の大学とを比べてしまう「私」）との結合によって意味づけられている。われわれは、ポジション2、ポジション3から大学事情を垣間見ることができるのであり、その意味において、問題となっているポジション1は、ポジション2、ポジション3との結合によって大学生固有のものとなっているといえる。

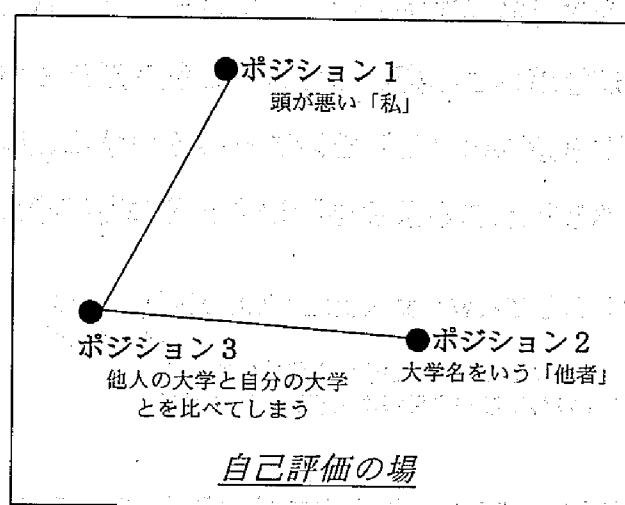


図 5-1 事例のポジション構造

もう1つ事例を見ておこう。第4章のWHY答法の分析カテゴリーを用いると（表4-11 参照），事例2で自己評価を規定する自己「知識がない」も「自己の特徴（N）」とされる。そして，この「知識がない」という自己の特徴は，何も大学生でなくてもいいものである。われわれは，このポジション（知識がない「私」）に結合されている他のポジションを見るか否かで，ポジションを大学生固有のものにも一般的なものにもすることができる。

補足欄を見ると，このポジションは，ポジション2（指定校推薦で大学に入学してきた「私」）とポジション3（一般入試で頑張って入学してきた人と比べて劣等感を感じる「私」）と結びついて，大学生固有の意味を喚起させていることがわかる。そこで

内円・外円は，ポジション分析をおこなう上ではとくに必要とされない。あってもかまわないが，なくてもかまわない。場合によっては，内円と外円との区別が，議論をややこしくするかもしれないと考えた。

は、ポジション2、ポジション3が大学入試制度という大学事情をあらわにしている。周知のように、近年ではとくに、個性豊かな人材をさまざまな方法で獲得すべく、大学入試のあり方が多様化している。一般入試をはじめとする、指定校推薦、センター試験利用、スポーツ推薦、帰国子女、社会人枠、商業高校等の一般推薦などの各入試は、それを物語っている。そして、事例2の学生は、この大学受験制度を否定的に受け止めている者の一人である。すなわち、彼女は、この指定校推薦制度を利用して大学に入学してきたわけであるが、それは大学に入学した後、否定的に意味づけられる結果となった。それは、一般入試で入学してきた他の学生と話をしていて、自分の知識のなさを強く感じることから喚起された意味であった。われわれはこの事例から、単に知識がないといって悩む「私」のみならず、その背後にある大学事情を、そしてその大学事情の及ぼす影響をも見ることができるのである。

＜事例2＞法学部1回生／女（WHY答法「いいえ」）

知識がない

\*実は大学受験の勉強をしていないため（指定校推薦）、一般入試で頑張って入学してきた人に比べて劣等感、引け目を感じているから。又時々自分の知識の無さを痛感することがある。

## (2) ポジション分析をおこなう上でのWHY答法の補足欄の構造

第4章第5節において、われわれは、WHY答法の補足欄設置の理由を次のように述べた。すなわち、それは、WHY答法の「それはなぜですか」における回答記述の抽象性を、より具体的な記述にするためであり、かつ、具象度の高い記述から抽象度の高い上位－下位次元の階層カテゴリーへとうまくカテゴライズするためであった。

しかし、補足欄を設置したもう1つの理由は、大学生固有の文脈を補足欄の記述を通してひろおうとしたからである。この点がポジション分析をおこなう上でどのような意義をもつものなのかを、次節の分析に入る前に簡単に述べておきたい。

第3節(2)で述べたように、ポジション分析の基本的な前提は、あるポジションの意味が他のポジションとの結合によって作られるというものである。この結合ポジションがないときに、われわれがもとのポジションの意味を見出しにくいことは、これまでさまざまに述べてきた。結合ポジションがない場合には、意味が見出しにくいのみならず、大学生固有のポジションであるかどうかさえ明らかにされなかった。

補足欄は、この観点に十分に迫るべく設置されたものである。それは、自己評価を

規定する自己の意味をわれわれに明らかにするべく、彼ら被験者に意味ある他のポジションを結合するよう要求するものである。われわれは、この意味あるさらなる結合の中に、意味の深化と文脈を垣間見ようとしたのである。

## 第5節 分析：自己の諸相を支える大学生固有の文脈

### 第1項 目的

ポジション分析を用いて、第4章第5節のWHY答法のデータを再分析する。ここでの目的は、第1に、大学生の自己評価を規定する自己がどのような大学生固有の文脈をもっていたかをカテゴリーによって明らかにし、第2に、それが第4章第5節で分析した自己評価を規定する自己をどのように支えていたかを明らかにすること、の2点である。なお、大学生固有の文脈を実証的に導く方法論的検討が本章の主目的であるから、Neither 群のデータ分析、並びに男女別、学年別の分析はここではおこなわなかった。

### 第2項 方法・調査対象・調査時期

第4章第5節に同様。

### 第3節 結果と考察

#### (1) カテゴリー作成

WHY答法の記述データを見ながら、大学生固有の文脈カテゴリーを作成した。大学生固有の文脈は、表5-1および表5-2に示すように、大きく2つのカテゴリーから成り立っていた。1つは、大学生の従事するイベントや活動で、それには「大学受験」や「学業」「クラブ・サークル活動」「キャンパス外活動」「アルバイト」「個人的読書」「就職あるいは大学院進学」が含まれる。もう1つは、大学生であることから生じる諸事情であり、それには「大学生の身分」「自由なキャンパスライフ」「下宿や寮での一人暮らし」が含まれる。

この他にもWHY答法の記述からは、「列車通学」「女性の化粧」「長期休暇」「試験」などの大学生事情を示すもの、「学部や学科構成」「教養科目」「偏差値序列」などの大学事情を示すものも見られた。しかし、頻度がそれほど多く見られなかったので、分析の対象からははずすこととした。自己評価とは別の研究テーマになると、それらは突出して重要な大学生固有の文脈となるかもしれない。また、「偏差値序列」などのナイーブな大学事情については、さらなる結合ポジションを慎重に探索していかないと、被験者から引き出すことは難しいかもしれない。ここで扱われなかったカテゴリーが、自己評価には影響を与えない大学生固有の文脈であるとは決していえない。しかし、少なくともこのような事情から、表面上での影響は見えにくいとはいえることができる。今後のさらなる検討課題である。また、「キャンパス外活動」には、その範疇からすると、アルバイトも含まれるべきである。しかし、大学生にとってのアルバイトの意味はそれ自体大きなものであり、ここではカテゴリーを分けて扱うこととした。

表 5-1 分析に用いられる大学生固有の文脈カテゴリー (Yes 群)

大学生固有の文脈カテゴリー		WHY答法における記述例
<大学生の従事するイベントや活動>		
1	大学受験	希望する大学に入学した／大学に合格した／受験に向けて一生懸命勉強した
2	学業	授業やゼミを受けている／レポートを書く／専門の勉強を一生懸命やる／大学での勉強はおもしろい
3	クラブ・サークル活動	クラブ活動（サークル活動）が楽しい／クラブでサッカーをやっている
4	キャンパス外活動 （ただし、アルバイトは除く）	ボランティア活動をやっている／私は障害児ボランティアのリーダーだ／社会的な知識を増やすために講演会に積極的に参加している／資格を取るための学校に行っている
5	アルバイト	アルバイトをしている／アルバイトが楽しい／アルバイトを通して社会のいろいろなことを学んでいる
6	個人的読書	大学時代は何でも好きな本を読むことができる／自分を磨くために読書は重要だ
7	就職あるいは大学院進学	希望する職業に就けるよう勉強している／卒業後になりたいものをもっている／大学院に進んで今やっている勉強をさらに深めていきたい
<大学生であることから生じる諸事情>		
8	大学生の身分	社会は私を大学生だとみなす／経済的な理由で大学に行けない人があるというのを聞く。私は何の問題もなく大学に行くことができ感謝している／大学生というだけで許されることがいろいろある
9	自由なキャンパスライフ	大学生活は自由だ／毎日どう過ごすかは自分で決めることができる
10	下宿や寮での一人暮らし	一人暮らしをしている／一人暮らしは自分の好きなように過ごすことができる／とても楽しい



表 5-2 分析に用いられる大学生固有の文脈カテゴリー (No 群)

大学生固有の文脈カテゴリー		WHY 答法における記述例
<大学生の従事するイベントや活動>		
1	大学受験	受験に失敗した／希望しない大学に入った
2	学業	やらなければいけないとはわかっているが勉強していない／一生懸命勉強しているが、身についている気がしない
3	クラブ・サークル活動	クラブ活動（サークル活動）が楽しくない／クラブ内での人間関係が面倒だ／新入生の頃積極的に情報を集めなかったのでクラブに入り損ねた
4	キャンパス外活動 (ただしアルバイトは除く)	ボランティア活動をやってみたいとは思っているが、思っているだけ／留学とか資格をとるとか人はいろいろやっているが、自分は何もしていない
5	アルバイト	何かアルバイトをしなければとは思っているが、実際には何もしていない／アルバイト内での人間関係が悪い／働くのはイヤだ、しかし金はない
6	個人的読書	大学生になったらたくさん本を読もうと思っていたのに、まったく読んでいない。
7	就職あるいは大学院進学	卒業後のビジョンがない／将来何をしたいか見えない
<大学生であることから生じる諸事情>		
8	大学生の身分	私はまだ学生だ、はやく一人前の大人になりたい
9	自由なキャンパスライフ	大学は何をやれともいわないので、毎日何をしたいかわからない／大学があまりに自由すぎて、日々だれた生活を過ごしている
10	下宿や寮での一人暮らし	一人暮らしなので、食事がむちゃくちゃだ／一人暮らしで誰も何もいわないので、昼まで寝ていたりする

## (2) カテゴリーの留意点

カテゴリーに関しては、大きく次の4点を留意した。1つ目は、WHY 答法における「それはなぜですか」に対しての回答記述、およびそれについての補足欄、すべての記述をカテゴリーの対象としたことである。2つ目は、そこでは、第4章第5節でカテゴリーされた、自己評価を規定する自己の諸相に直接関わる大学生固有の文脈に限って、カテゴリーの対象としたことである。よって、補足欄で話が違う方向に展開し、自己評価を規定する自己の諸相と直接関わらない大学生固有の文脈がそこであらわれたとしても、それはカテゴリーの対象とされていない。3つ目は、2つ目の条件を満たす場合には、一人の被験者の記述に見られる複数の大学生固有の文脈をすべてカテゴリーの対象としたことである。よって、総じて見れば、一人の者がいくつかの大学生固有の文脈を抱えていることもある。4つ目は、記述から大学あるいは大学生事情が見えてくることをもって、大学生固有の文脈としてカテゴリーしたということである。「受験に向けて一生懸命勉強した」のように、それ自体大学受験における結果や経験を意味するものでなくとも、大学受験という大学生固有の文脈を垣間見ることのできる記述は、すべて本節でのカテゴリーの対象とした。

表 5-3 自己評価を規定する自己の諸相と大学生固有の文脈のクロス結果 (Yes 群)

大学生的文脈	度数(%)	自己評価を規定する自己のあり方					
		自己の特徴	自己理解	自己・世界への関わり方	人間関係	他者への態度	家族
大学入試	77(22.6)	14 ( 6.6)	2 ( 2.8)	0 ( 0.0)	4 ( 1.7)	0 ( 0.0)	3 ( 3.4)
学業	137(40.2)	20 ( 9.4)	5 ( 6.9)	1 ( 1.4)	14 ( 6.0)	0 ( 0.0)	1 ( 1.1)
クラブ・サークル活動	96(28.2)	19 ( 9.0)	7 ( 9.7)	2 ( 2.7)	24 (10.3)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
キャンパス外活動	41(12.0)	9 ( 4.2)	3 ( 4.2)	1 ( 1.4)	5 ( 2.2)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
アルバイト	95(27.9)	14 ( 6.6)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	15 ( 6.5)	1 ( 1.7)	5 ( 5.7)
個人的読書	23( 6.7)	3 ( 1.4)	1 ( 1.4)	1 ( 1.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
就職あるいは大学院進学	65(19.1)	4 ( 1.9)	2 ( 2.8)	1 ( 1.4)	5 ( 2.2)	0 ( 0.0)	1 ( 1.1)
大学生の身分	15( 4.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	5 ( 5.7)
自由なキャンパスライフ	40(11.7)	1 ( 0.5)	0 ( 0.0)	2 ( 2.7)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
下宿や寮での一人暮らし	43(12.6)	5 ( 2.4)	0 ( 0.0)	1 ( 1.4)	3 ( 1.3)	0 ( 0.0)	6 ( 6.8)
合計 N=	341(100.0)	212 (100.0)	72 (100.0)	73 (100.0)	232 (100.0)	58 (100.0)	88 (100.0)

大学生的文脈	度数(%)	自己評価を規定する自己のあり方			
		過去	未来	日々の生活	健康
大学入試	77(22.6)	47 (75.8)	5 ( 5.8)	15 ( 5.3)	0 ( 0.0)
学業	137(40.2)	9 (14.5)	15 (17.4)	123 (43.5)	1 ( 1.2)
クラブ・サークル活動	96(28.2)	4 ( 6.5)	0 ( 0.0)	72 (25.4)	3 ( 3.7)
キャンパス外活動	41(12.0)	4 ( 6.5)	6 ( 7.0)	25 ( 8.8)	1 ( 1.2)
アルバイト	95(27.9)	0 ( 0.0)	1 ( 1.2)	77 (27.2)	0 ( 0.0)
個人的読書	23( 6.7)	0 ( 0.0)	1 ( 1.2)	19 ( 6.7)	0 ( 0.0)
就職あるいは大学院進学	65(19.1)	0 ( 0.0)	53 (61.6)	16 ( 5.7)	0 ( 0.0)
大学生の身分	15( 4.4)	1 ( 1.6)	0 ( 0.0)	9 ( 3.2)	0 ( 0.0)
自由なキャンパスライフ	40(11.7)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	39 (13.8)	0 ( 0.0)
下宿や寮での一人暮らし	43(12.6)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	34 (12.0)	0 ( 0.0)
合計 N=	341(100.0)	62 (100.0)	86 (100.0)	283 (100.0)	81 (100.0)

(注) 自己評価を規定する自己のあり方、大学生的文脈いずれにおいても、被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

表 5-4 自己評価を規定する自己の諸相と大学生固有の文脈のクロス結果 (No 群)  
数 (%)

大学生的文脈	度数(%)	自己評価を規定する自己のあり方					
		自己の特徴 (否)	自己理解(否)	自己・世界へ の関わり方 (否)	人間関係(否)	他者への態度 (否)	家族(否)
大学入試	45( 13.7)	16 ( 5.6)	2 ( 4.0)	1 ( 1.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 3.7)
学業	138( 39.5)	67 ( 23.4)	3 ( 6.0)	6 ( 8.3)	5 ( 7.8)	1 ( 0.6)	1 ( 3.7)
クラブ・サークル活動	45( 13.7)	23 ( 8.0)	2 ( 4.0)	3 ( 4.2)	4 ( 6.3)	2 ( 1.1)	1 ( 3.7)
キャンパス外活動	22( 6.7)	8 ( 2.8)	1 ( 2.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
アルバイト	70( 21.3)	28 ( 9.8)	1 ( 2.0)	2 ( 2.8)	1 ( 1.6)	2 ( 1.1)	1 ( 3.7)
個人的読書	11( 3.3)	4 ( 1.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
就職あるいは大学院進学	85( 25.8)	20 ( 7.0)	6 ( 12.0)	3 ( 4.2)	0 ( 0.0)	1 ( 0.6)	0 ( 0.0)
大学生の身分	5( 1.5)	2 ( 0.7)	1 ( 2.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
自由なキャンパスライフ	11( 3.3)	1 ( 0.3)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
下宿や寮での一人暮らし	16( 4.9)	4 ( 1.4)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	1 ( 1.6)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
合計 N=	329(100.0)	286 (100.0)	50 (100.0)	72 (100.0)	64 (100.0)	179 (100.0)	27 (100.0)

大学生的文脈	度数(%)	自己評価を規定する自己のあり方			
		過去(否)	将来(否)	日々の生活 (否)	健康(否)
大学入試	45( 13.7)	14 ( 29.2)	10 ( 11.6)	14 ( 6.2)	1 ( 2.6)
学業	138( 39.5)	2 ( 4.2)	11 ( 12.8)	73 ( 32.3)	0 ( 0.0)
クラブ・サークル活動	45( 13.7)	1 ( 2.1)	0 ( 0.0)	21 ( 9.3)	0 ( 0.0)
キャンパス外活動	22( 6.7)	2 ( 4.2)	1 ( 1.2)	12 ( 5.3)	0 ( 0.0)
アルバイト	70( 21.3)	2 ( 4.2)	1 ( 1.2)	39 ( 17.3)	0 ( 0.0)
個人的読書	11( 3.3)	0 ( 0.0)	1 ( 1.2)	6 ( 2.7)	0 ( 0.0)
就職あるいは大学院進学	85( 25.8)	1 ( 2.1)	45 ( 52.3)	23 ( 10.2)	0 ( 0.0)
大学生の身分	5( 1.5)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	2 ( 0.9)	0 ( 0.0)
自由なキャンパスライフ	11( 3.3)	1 ( 2.1)	0 ( 0.0)	9 ( 4.0)	0 ( 0.0)
下宿や寮での一人暮らし	16( 4.9)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	11 ( 4.9)	0 ( 0.0)
合計 N=	329(100.0)	48 (100.0)	86 (100.0)	226 (100.0)	39 (100.0)

(注1) 自己評価を規定する自己のあり方、大学生的文脈いずれにおいても、被験者は複数のカテゴリーにわたってカテゴライズされている。

(注2) 表 4-26 では被験者総数が N=328 となっており、本表の総数と異なる。これは、表 4-26 で学年情報の欠損が1人みられ欠損値扱いでデータ処理されているからである。

## (3) 自己の諸相を支える大学生固有の文脈

表 5-3, 表 5-4 は, 前項で作成した大学生固有の文脈カテゴリーと第4章第5節における自己評価を規定する自己カテゴリー(表 4-24, 表 4-26 の全体)とをクロスさせた結果である。この表は, 各自己評価を規定する自己の諸相をどのような大学生固有の文脈が支えているかを示すものであり, 第4章第5節の抽象的な結果を大学生固有のものにする作業である。

表を見ると, Yes 群, No 群ともに, もっとも表出率の高い5つの大学生固有の文脈は, 「大学受験」「学業」「クラブ・サークル活動」「アルバイト」「就職あるいは大学院進学」であることがわかる。これらは, われわれが大学生について論じる場合の代表的なトピックであり, 経験的にも納得のいくものである。また, それらの特徴は, 「大学受験」「就職あるいは大学院進学」が, 大学生イベントの入り口と出口であるのに対し, 「学業」「クラブ・サークル活動」「アルバイト」はその間の代表的な大学生の活動であるという点にある。入り口と出口, その間の活動が, 大学生の自己評価には重要であるといえる。また, これら5つの大学生固有の文脈は, 大学生の自己評価の世界で, 肯定的な文脈にも否定的な文脈にもなり得るものとしてとらえられる。

しかし, 出現率を見ると, 各文脈の重みは Yes 群と No 群とで異なっている。Yes 群でもっとも出現率の高い3つの文脈カテゴリーは, 出現率の順に, 「学業」(40.2%), 「クラブ・サークル活動」(28.2%), 「アルバイト」(27.9%) であるのに対して, No 群では, 「学業」(39.5%), 「就職あるいは大学院進学」(25.8%), 「アルバイト」(21.3%) である。「学業」が, Yes 群, No 群いずれにおいても, 最も出現率の高いことがここでの大きな特徴である。すなわち, 学業は, Yes 群, No 群ともに, 大学生の自己評価の世界に関わるきわめて大きな大学生固有の文脈だということである。外山・桜井(1999)や田邊・堂野(1999)の調査結果に見られる大学生のストレス経験値を見ても, 学業はほとんど上位の項目として位置している。大学生といえば, 勉強をしないとかクラブ, アルバイトばかりをしているなどと大学生のダメ論争が繰り広げられているが(新堀編, 1985), 大学生の実に多くは, 学業を何らかの形で自己評価に影響を及ぼすものとしてとらえていることがここから明らかである。

ところで, 表 4-24 の Yes 群で最も出現率の高かったカテゴリー, 「日々の生活 (Y)」

「(83.0%)」に大きく関わっている大学生固有の文脈は、「学業」(43.5%),「アルバイト」(27.2%),「クラブ・サークル活動」(25.4%)であった。先ほど高い出現率で見られた文脈である「大学受験」(5.3%)や「就職あるいは大学院進学」(5.7%)は、「日々の生活 (Y)」というカテゴリーにはほとんど関わっていない。この結果は、大学生の肯定的な自己評価の世界に最も関わる大学生固有の文脈が、日々の活動の文脈であって、入り口、出口の文脈ではないことを示唆している。

また、同様の Yes 群で「日々の生活 (Y)」に次いで出現率の高かったカテゴリーは、「人間関係 (Y)」(68.0%)であった(表 4-24)。表 5-3 で、「人間関係 (Y)」とクロスする最も高い出現率を示す文脈カテゴリーは「クラブ・サークル活動」(10.3%)であった。人間関係は、クラブやサークル活動で作るという大学生が多いようだが、この結果は、そのような一般的な見方を支持するものである。ただし、「日々の生活 (Y)」に学業やアルバイト、クラブ・サークル活動の文脈が関わる程度と比べると、ずっと少ない数字である。なお、Yes 群で3番目に出現率の高かったカテゴリー、「自己の特徴 (Y)」(62.2%)(表 4-24 参照)には、ほとんど大学生固有の文脈が関わっていないようである。

No 群についても同様に見てみると、No 群で最も出現率の高かったカテゴリー、「自己の特徴 (N)」に大きく関わっている大学生固有の文脈は「学業」(23.4%)だけであった。Yes 群における「日々の生活」と同様、「大学受験」(5.6%)や「就職あるいは大学院進学」(7.0%)はさほど関わっていない。この結果は、大学生の否定的な自己評価の世界に最も関わる大学生固有の文脈もまた、日々の活動、とくに学業なのであって、入り口、出口の文脈ではないことを示唆している。

第4章第5節の考察において、「人生」の上位次元カテゴリーが、意外と Yes 群、No 群ともに自己評価を直接規定していないことを述べた(表 4-21, 4-23 参照)。そして、ここでの結果、すなわち、Yes 群、No 群ともに入り口、出口の大学生固有の文脈が自己評価を規定する自己とあまり関わっていないという結果もまた、そこでの結果を支持しているといえる。それにも関わらず、表 5-3、表 5-4 全体を見渡すと、最も出現率の高いセルが Yes 群において、「過去 (Y)」(自己評価を規定する自己)と「大学受験」(大学生固有の文

脈)の組み合わせ(75.8%),そして、「未来(Y)」「自己評価を規定する自己」と「就職あるいは大学院進学」(大学生固有の文脈)の組み合わせ(61.6%)であることがわかる。また、No群においては、「将来(N)」「自己評価を規定する自己」と「就職あるいは大学院進学」(大学生固有の文脈)の組み合わせ(52.3%)であることがわかる。入り口の大学生固有の文脈が過去に関する自己と、そして出口の大学生固有の文脈が未来に関する自己と深く関わるのは至極当然のことである。しかし、ここで重要だと考えられるのは、大学生の過去に関わる大学受験のもつ大きさ、未来に関わる就職あるいは大学院進学のもつ大きさである。過去や未来といっても、われわれは、大学受験について言及しなさいとか就職や大学院について言及しなさいとは一言も述べていない。それにも関わらず、このような高い出現率で彼らは、大学受験や就職、大学院進学について言及してくる。われわれは、大学生が過去や未来について言及する場合、その多くが、彼らの入り口と出口の議論であることをここから知るのである。尾崎(2001)では、大学生が「将来の見通し」という場合に、その8割弱が卒業後の就職を指すことを明らかにしているが、それはここでの結果をさらに支持するものといえる。その中で何が言いたかったのか、

## 第6節 まとめ

本章では、大学生固有の文脈に実証的に迫るべく、結合こそに意味があるとする考えを頼りにして、心理現象に結合したポジションを探することで心理現象の意味に迫ることができる「ポジション分析」を導入した。そこでは文脈は、あるポジションの意味を構成する他の結合ポジションを見ていくことによって扱えるとされた。これによって、大学生の自己評価を規定する自己の諸相に、いかなる大学生固有の文脈が垣間見えるかを検討することができるとされた。

第4章第5節のWHY答法の再分析の結果、大学生の自己評価を規定する自己の諸相を支えている大学生固有の文脈は、自己評価高群、低群ともに、「大学受験」「学業」「クラブ・サークル活動」「アルバイト」「就職あるいは大学院進学」であることがわ

かった。その中でも、「学業」は両群ともにもっとも出現率が高く、大学生の自己評価を考える上できわめて重要な文脈であることが明らかにされた。また、第4章第5節で大学生の自己評価を大きく規定していた自己評価高群における「日々の生活（Y）」、および自己評価低群における「自己の特徴（N）」が、大学生の入り口、出口の文脈である「大学受験」「就職あるいは大学院進学」とさほど関わっていないことも明らかにされた。しかし、自己評価を規定する自己として「過去」や「未来」をもつ場合には、入り口と出口の文脈はきわめて深く関わっていることが明らかにされた。大学生の場合、過去と未来の文脈は、多くの場合、大学受験と就職あるいは大学院進学のことを指しているようである。

本章の結果は、以上のように、文脈のまったく見えなかった第4章第5節での結果がいかに大学生固有の文脈に支配されるものであったかを示すものであった。

[illegible][illegible]

## 第6章 まとめと今後の課題

### 第1節 本研究のまとめ

本研究は、後期青年に焦点を当てて、青年の「自己感情 (self-feeling)」とそれを規定している「自己の諸相 (aspects of the self)」について検討をおこなったものである。本研究が、青年の内面世界を「自己 (self)」を主軸として見ていこうとするのは、これまでの青年心理学が青年期を疾風怒濤とかアイデンティティの危機などと、ア・プリオリに見ていたことを反省するためであり、いったんそこから脱却をしつつ青年の全体像を鳥瞰図的に見るためであった。

自己を主軸に青年の内面世界を見ていく際に、これまでの研究を概観して、大きく2つの問題点が指摘された。1つは、文脈の視点が欠けていたことである (第1章第2節)。青年期は時代の産物であるから、疾風怒濤やアイデンティティの危機などといっても、現代青年期の様相は、Hall の見ていた 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのアメリカ社会、1920 年代に勃興した Spranger, Bühler, Tumlriz を代表とするドイツ青年心理学者の見ていたドイツ社会とはまったく異なっており当然である。そうした時代的・社会的文脈や、現代青年の生きる現場の根を無視して、青年の内面世界を解明しようとしても、そこには自ずと無理がある。これまでのこのような研究の問題点を踏まえて、後期青年の中でもとりわけ大学生を調査対象とした本研究は、「大学生固有の文脈」をいかに踏まえて青年の内面世界を明らかにするかを課題の1つとした。

もう1つの問題点は、青年の内面世界を自己を主軸において測定していく際に生じる方法論的問題点である (第1章第3節)。大きく3点指摘され、その1つは、全体的自己＝特定領域の自己の関係をどのように自己感情の測定、すなわち自己評価尺度の中に反映させるのかという問題、そして、特定領域の自己の諸相のみを扱いがちであったこれまでの研究を乗り越えて、いかに全体的自己との関係をもった特定領域の自



己を扱うかという問題であった。2つ目は、これまであまりなされていなかった自己感情の研究と自己の諸相の研究との橋渡しをいかにするかという問題であった。3つ目は、自己感情を自己評価尺度として測定していく際に生じる肯定性－否定性次元、ならびに社会－個人基準といった自己評価基準をどのように自己評価尺度に反映させるかという問題であった。本研究は、これら方法論的問題点を解決することを第2の問題意識と踏まえ、その上で青年の内面世界を自己を主軸として明らかにすることを目的としたのであった。

この研究の目的は、自己感情の研究と自己の諸相の研究との橋渡しをいかにするかという問題であった。2つ目は、これまであまりなされていなかった自己感情の研究と自己の諸相の研究との橋渡しをいかにするかという問題であった。3つ目は、自己感情を自己評価尺度として測定していく際に生じる肯定性－否定性次元、ならびに社会－個人基準といった自己評価基準をどのように自己評価尺度に反映させるかという問題であった。本研究は、これら方法論的問題点を解決することを第2の問題意識と踏まえ、その上で青年の内面世界を自己を主軸として明らかにすることを目的としたのであった。

さて、実証的課題に取り組む前に、本研究は、自己関連用語として自己研究に混乱を与えている英語の self や ego, I や me, あるいは日本語の自我や自己, 我, 私, 主我や客我といった言葉の整理をおこなった。語源的、文法学的な観点から考察したところ、自己関連用語は、「私」の行為主体を「自我 (ego)」, 客語としての「私」を「客我 (me)」, 自他分別をもつ「私」の一個存在であり心的生の経験体を「自己 (self)」というように整理することができた。「我」は、今日的には「私」で代替される傾向にあることも述べられた。しかしながら、こうした自己関連用語の整理も、扱う現象が変われば、同じ対象にも違った言葉が当てられることが珍しくない事実も指摘され、言葉で現象や対象を表現しようとするには限界があるともされた。その上で、本研究が依拠する自己論として、Hermans の「対話的自己論 (the dialogical self)」が紹介された。それは、自己の諸相がいかなる世界として捉えられるかを、より視覚化して示すものとして有効だとされた。対話的自己論とは、「ポジション (position)」と「声 (voice)」といった概念ツールを用いて、自他の分別を文脈としてもつ一個存在としての生の経験体を「自己 (self)」と置きつつも、その自己の世界に、さまざまな「私」「他者」「モノ」が主体ともなり客体ともなって存在していることを理論的に示すものである。これによって、行為主体を一個の「自我 (ego)」, あるいは Mead のような「私 (I)」としてのみ表現してきたこれまでの自己論は、複数の行為主体を「自己 (self)」の中に「私 (Is)」として併せ持つ自己論へと姿を変える。複数の主体が仮定されるからといっても、それは分裂病患者のような個々バラバラの「私」, まどまりのない「自己」を意味するものではなく、対話的自己の世界は、1つ1つの「私」が

独立して突出化し行動することが可能でありながらも、全体としては有機的に結合され、1つの意味ある「自己」を作り上げていると考えられるものなのである。

このような問題意識、本研究の主軸となる自己関連用語の整理を踏まえて、第3章では青年の自己感情の様相を明らかにすることを目的とした。そこでは、まず上述したこれまでの自己評価測定の問題点を克服するべく、新たな自己評価尺度を作成するところからはじめた。その尺度作成にあたっては、(1) 全体的自己 (global self) を用いること、(2) 肯定性－否定性次元を考慮すること、(3) 社会－個人基準を考慮すること、に留意した。新たな尺度は、従来の自己評価尺度や自己受容尺度を参考にして、肯定性次元における社会基準、個人基準を示すと考えられる項目、否定性次元における社会基準、個人基準を示すと考えられる項目を用意して、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮する自己評価尺度とされた。こうして作成された自己評価尺度は、まず因子分析によって構成概念妥当性が確認された。そして、項目分析や内的－貫性の検討もおこない、尺度の信頼性も確認されたとした。2週間を隔てた尺度の再検査信頼性も十分妥当な結果であった。しかし、肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮する自己評価は、各下位尺度の得点をそのまま用いては十分にその特徴を表現できないと考えられ、それは各下位尺度の組み合わせからなる自己評価タイプによって検討がなされるべきだとされた。

4つの下位尺度のそれぞれの得点を高群、低群に分割し、その組み合わせによって自己評価タイプを作成すると、その数は16になる。しかし、多数の該当者数をもつ自己評価タイプは、SS1 (高高低低)、SS2 (高高低高)、SS9 (低高低低)、SS10 (低高低高)、SS12 (低高高高)、SS14 (低低低高)、SS16 (低低高高)と7つにすぎなかったが(第4節～第6節)、それらで占める全体の割合はおおむね9割前後であった。すなわち、これら7つの自己評価タイプは青年を代表する自己評価タイプであるとされた。

このような自己評価タイプの特徴を見るにあたって、YG性格検査の下位尺度(抑うつ性(D)や劣等感(I)など)と適応意識(人生に満足や生活に充実など)との関係を検討した。その結果、もっとも肯定的な性格特徴、もっとも肯定的な適応意識を示

す自己評価タイプはSS1（高高低低）であり、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な性格特徴、もっとも否定的な適応意識を示す自己評価タイプはSS16（低低高高）であることが明らかにされた。SS1（高高低低）とSS16（低低高高）は、肯定性次元高群と否定性次元低群あるいはその逆の純粋な組み合わせであり、これまでの自己評価研究で多く用いられてきた自己評価の高低だけを見ようとする一次元スケールの両極（高群、低群）に位置すると考えられる自己評価タイプである。

他の自己評価タイプ（SS2, SS9, SS10, SS12, SS14）は、YG性格検査の下位尺度、適応意識との関係において、すべてこのSS1（高高低低）とSS16（低低高高）との間に位置していた。その中でも、SS1（高高低低）にもっとも近く位置していた自己評価タイプはSS2（高高低高）とSS9（低高低低）であった。しかし、否定的な性格特徴・否定的な適応意識をもたないという点ではSS9（低高低低）がSS1（高高低低）にもっとも近く、肯定的特徴をもっているという点ではSS2（高高低低）がSS1（高高低低）にもっとも近く位置していた。従来適応とは「不適応を示さない」

「否定的な自己感情をもたない」ということで論じられがちであった。その適応観から見るならば、SS1（高高低低）にもっとも近い自己評価タイプは、肯定性次元を完全に肯定してはいるけれども否定性次元を完全に否定できないSS2（高高低高）ではなく、肯定性次元で完全に肯定できなくとも否定性次元を完全に否定することのできるSS9（低高低低）であった。

逆に、SS16（低低高高）に近い自己評価タイプを探してみると、SS1（高高低低）にSS2（高高低高）やSS9（低高低低）が近く位置していたほどの自己評価タイプは見いだされなかった。しかし、敢えて挙げるならば、肯定的な性格特徴をもたない、肯定的な適応意識が低いという点で、SS14（低低低高）がSS16（低低高高）にもっとも近く位置していたといえる。

最後には、以上のように検討された肯定性－否定性次元／社会－個人基準を考慮した自己評価尺度、それによって作成される自己評価タイプとその特徴を用いて、青年の自己感情の様相を大学の学年別・男女別・全体に分けて検討した。その結果、学年差は見られなかったが、男女差は見られた。すなわち、自己評価の指標から見た男子青年の自己感情の様相は、中程度（SS2, SS10）→低群（SS16）→高群（SS1）の

様相であり、女子青年の様相は、中程度（SS2, SS10, SS12）→低群（SS16）→高群（SS1）の様相であった。総じて、青年全体の自己感情の様相は、自己評価タイプの出現率や全体の中でのその順序に男女差が見られながらも、共通して中程度→低群→高群の順で分布していると結論づけられた。

第4章では、青年の自己の諸相を、「自己評価を規定する」という条件つきでとらえることを目的とした。それは、自己感情との関連で青年の自己の諸相を捉えたいという第3章との関連を意識した結果であり、かつ、第1章第3節で上げたこれまでの自己感情研究と自己の諸相研究との橋渡しを念頭においたものでもあった。

第1の検討は、この自己評価を規定する自己の諸相を表出させる「WHY答法(WHY is it test)」を開発することであった。それは、自己満足度（自己評価センテンス）を第1ステップとして与え、第2ステップとして、それを規定する自己を「それはなぜですか」という複数の問いにしたがって表出させる、という技法であった。本章では、まず「それはなぜですか」の設定個数と表出個数との関係、それに及ぼす制限教示の影響が検討され、集団調査でWHY答法が実施される場合には、5個の「それはなぜですか」、「3個以上書くように」との制限教示を設ける方がのぞましいと結論づけられた。ほかにも、自己評価センテンスの妥当性、「それはなぜですか」の妥当性が検討され、総じて、WHY答法は自己評価を規定する自己の諸相を表出させる技法であることが確認された。

WHY答法で表出される記述をどのようなカテゴリーでまとめていくかについても検討がなされた。その結果、無秩序なカテゴリーが同列に並べられて分析するというのではなく、カテゴリー次元を上位ー下位と秩序立てて、カテゴリー間の関係が明確になるようカテゴリーを作成し、それによってカテゴリー分析がなされることが重要であると考えられた。こうして、上位次元カテゴリーとしては「自己」「他者との関わり」「人生」「生活」が設けられ、「自己の特徴」や「人間関係」「家族」「日々の生活」などの下位次元カテゴリーは、4つの上位次元カテゴリーのいずれかに下位として属するよう割り振られた。

第2の検討は、このようにして作成された上位次元ー下位次元カテゴリーを用いて、

青年の自己評価を規定する自己の特徴を明らかにすることにあつた。分析の結果、明らかとなったのは大きく以下の3つである。(1) 青年の自己評価の高さを規定する自己は「日々の生活」として描かれるものであり、逆に、自己評価の低さを規定する自己は「自己の特徴」として描かれるものであつた。自己評価の高さを規定する自己が、自己評価の低さを規定する自己の裏返しとは必ずしも限らなかった。(2) 上位次元カテゴリー「他者との関わり」の内容が、自己評価の高い者にとっては「人間関係」を意味するのに対し、自己評価の低い者にとっては他者との関係から生起する他者に対しての自己態度、すなわち「他者への態度」であつた。(3) 本研究の対象が一般的に青年期後期を過ごす大学生でありながら、彼らの重要な自己に時間軸を内包する「人生」のカテゴリーは多く見られなかった。そして、この特徴は、徹底的な記述を求めたインタビュー調査によっても同様に確認された。また、自己評価の高いとも低いともいえない自己評価の中間群の特徴は、表向きは自己評価の低い者の特徴をベースとした否定的な様相を示しながら、その背後は肯定的な生活感情に支えられている、というものであつた。

最後には、前章までの結果も交えて考察をおこなつた。本研究は、疾風怒濤やアイデンティティ危機などのような否定的な概念から出発して青年を見ることに批判的な立場であつたが、それでも青年の突出して見えてくる多くの自己の様相は、概して否定的であると結論づけられた。

第5章では、本研究の調査対象が後期青年の中でもとりわけ大学生に特化していたことを受けて、青年の自己感情と自己の諸相とを支える大学生固有の文脈に迫ることを目的とした。そこでは、文脈に実証的アプローチするために、第2章第7節で見たHermansらの対話的自己(the dialogical self)の理論を援用し、結合こそに意味があることを利用した「ポジション分析」が紹介された。そこでは文脈は、あるポジションの意味を構成する他の結合ポジションを見ていくことによって扱えるとされた。これによって、大学生の自己評価を規定する自己の諸相に、いかなる大学生固有の文脈が垣間見えるかを検討することができるとされた。

第4章第5節のWHY答法の再分析の結果、大学生の自己評価を規定する自己の諸

相を支えている大学生固有の文脈は、自己評価高群、低群ともに、「大学受験」「学業」「クラブ・サークル活動」「アルバイト」「就職あるいは大学院進学」であることがわかった。その中でも、「学業」は両群ともにもっとも出現率が高く、大学生の自己評価を考える上できわめて重要な文脈であることが明らかにされた。また、第4章第5節で大学生の自己評価を大きく規定していた自己評価高群における「日々の生活 (Y)」および自己評価低群における「自己の特徴 (N)」が、大学生の入り口、出口の文脈である「大学受験」「就職あるいは大学院進学」とさほど関わっていないことも明らかにされた。しかし、自己評価を規定する自己として「過去」や「未来」をもつ場合には、入り口と出口の文脈はきわめて深く関わっていることが明らかにされた。大学生の場合、過去と未来の文脈は、多くの場合、大学受験と就職あるいは大学院進学のことを指しているようであった。これらの結果は、文脈のまったく見えなかった第4章第5節での結果がいかに大学生固有の文脈に支配されるものであったかを示すものであったといえる。

以上のように、本研究は、後期青年を対象とした青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相を明らかにした。それは、方法論的には、自己感情研究と自己の諸相研究とをそれぞれに発展させるものであったし、その橋渡し、ひいてはそれらを取り巻く文脈を方法論的に探究したことも、自己研究全体の発展に大きく寄与するものであったと考えられる。そして、このような方法論的発展の上に明らかにされた青年の内面世界は、結果的には従来のわれわれの青年観を踏襲するものであったが、その構造やそれを取り巻く文脈は、これまでの理解とはまったく異なるものとして提示されたと考えられる。

次節では、今後の研究に向けて、本研究で扱えなかった課題、本研究をおこなうことで生じた課題を述べて、本研究の締めとしたい。

## 第2節 今後の課題

本研究では、後期青年を対象とした青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相を明らかにした。それは、方法論的には、自己感情研究と自己の諸相研究とをそれぞれに発展させるものであったし、その橋渡し、ひいてはそれらを取り巻く文脈を方法論的に探究したことも、自己研究全体の発展に大きく寄与するものであったと考えられる。

## (1) 青年期の発達の検討を文脈を踏まえておこなう

本研究は、青年期後期に焦点を当てて研究をおこなったが、青年期研究全体から概観すれば、今後は本研究の成果をもとに、青年期前期から後期にかけての発達のプロセスを示すことも必要だといえよう。

とりわけ青年期問題は、教育の時期、教育問題などと密接に関連しているから、そのような文脈を踏まえて本研究を発展させようとするならば、わが国の高校から大学への接続問題は、青年心理学研究における大きな課題となって立ち現れてくると考えられる。つまり、高校から大学への移行過程といえば、一見教育問題のように聞こえるが、実はその中に含まれる親離れ、下宿、自立といった高校から大学への受け身から主体への生活様式の転換問題は、長年青年心理学が扱ってきた重要トピックでもあったのである。

単純に青年期後期といっても、大学生の中で下宿や寮で独り暮らしをする者と親のいる自宅から通学する者とでは、自ずと構築する青年期の生活世界が異なってくる。下宿や寮での独り暮らしをともなう中学校や高校がもっとあってもよさそうなものだが、一般的に、それは一部の私立学校に限られているのがわが国の社会的文脈である。逆に、大学になると、下宿や寮での独り暮らしが当たり前のものとなり、親元を離れた大学に行くことが珍しくなくなる（加藤，1983）。

あるいは、高校生の時期には、門限にうるさかった女性の親が、大学生になったら、親元を離れることもしぶしぶ認めることは、よくある話である。親元から大学に通う場合でも、門限をうるさくいう親の数は大学生になるとずっと減る。なぜ、高校生と大学生の間には、これほどまでに大きな差があるのか。西平（1990）は、思春期の特徴とされる第二次反抗期、多分に親からの心理的離乳につながる反抗期から、敢えて大学生あたりの時期を焦点化し、そこに親からの物理的離乳を加えている。これらの事実を見ると、おそらく、親離れ、とくに物理的離乳という形での発達の課題が、下宿や寮での独り暮らしという大学生事情の存在を可能にしているのだろうと考えられる。あるいは、もともと「自立心」が強く、親からの離れが早い人種なのかもしれない。

このようなことは、もっと青年心理学の中で、青年心理学の問題として扱われてもよいのではないだろうかと筆者には思われる。これまでの青年心理学が扱ってきた問

題や課題を踏襲しながらも、それらを現代的文脈の中で再構築していく点は今後の課題とすべきところである。『であつた』というところを改定し、改題した『あつた』という改題が、改題の意図を十分に表現できているように思われる。『あつた』という改題は、改題の意図を十分に表現できているように思われる。『あつた』という改題は、改題の意図を十分に表現できているように思われる。

## (2) 大学生にとっての学業

第5章の結果からは、「学業」が、大学生の自己感情を規定している大きな大学生固有の文脈であることが示された。大学生といえば、勉強をしないとかクラブ・サークル、アルバイトばかりなどと世の中からは嘆かれること頻りであるが、実際に学業を自身の生活世界の中でうまく位置づけられず悩んでいるのは、当の大学生自身だったのである。最近の研究を見ても (cf. 田邊・堂野, 1999; 外山・桜井, 1999), 大学生が学業問題に関してストレスを高く感じていることが示されており、本研究の結果もここから支持されているといえる。しかし、このことは、学業をしっかりとやっていれば大学生の自己感情が高まるということを意味しない。学業をしっかりとやっているようでも、やっているだけであったり、それが自分にとって何になるのかわかっていなかったり、将来の目標とは違うことをやっていると感じながらやっていたり、そのあり方にはさまざまなものがある。「学業をやっていること」それ自体が、大学生や青年の自己感情にとって重要ではないのである。この示唆は、これまでの心理学研究が概しておこなってきた要因研究への批判でもある。学業要因を見出したのが第5章の成果だとしても、われわれはそれを単純に学業要因を何とかすればよいととらえてはいけないのである。

われわれは、学業要因が大学生や青年の自己の世界でどのように構造化されて意味を発現しているかということを追求しなければならない。要因の解明を一步進めて、その要因こそが意味を発現しているその意味構造を追求するのである。つまり、勉強することが将来の目標とつながっていたり、勉強する内容に興味・関心を感じていたり、あるいは勉強をすることは義務程度にしか感じていないが、他のクラブやアルバイトなどの活動とともにその人の生きる世界全体の調和を作り出していたり、といったように、勉強をすることが他の何かしらのものとつながって、人は勉強をすること自体に何かしらの意味を与えているのである。こうしてはじめて、人は学業による自己感情を高めることができるのである。何度も述べるが、勉強をする行為それ自



体に意味はないのである。第5章の結果は、主に学業期である青年にとって、いかに学業を位置づけるかが重要であるかということを教えてくれたが、われわれは今後、青年が学業をどのように意味づけて自己感情の高まりを見せているのか、ということ調べていかねばならない。

意味の構造は、本研究の第5章第3節で、結合こそに意味があるという考え方のもとで扱われた。そこでは、ポジション結合を辿ることである心理現象の意味構造を見ていくことができるとされた。ここで示されるような学業の問題に関する意味構造を見ていきたければ、われわれは、青年の学業問題の先に何がつながっているかという結合ポジションを探せばよい。そのつながっている先のポジションの内容によっては、青年の自己感情は高まってもいるだろうし低まってもいるだろう。この結合関係を明らかにしていく作業は、今後の検討課題である。

## 参考文献

日本古典文学全集 1970 源氏物語 (一). (阿部秋生・秋山虔・今井源衛注解). 小学館.

日本古典文学全集 1973 古事記・上代歌謠. (荻原浅男・鴻巣隼雄注解). 小学館.

日本古典文学全集 1975 萬葉集 (四). (小島憲之・木下正俊・佐竹昭広注解). 小学館.

## 引用文献

Achenbach, T., & Zigler, E. 1963 Social competence and self-image disparity in psychiatric and nonpsychiatric patients. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 197-205.

Allport, G. W. 1937 *Personality: A psychological interpretation*. London: Constable.

Allport, G. W. 1943 The ego in contemporary psychology. *Psychological Review*, 50, 451-478.

Amen, E. W. 1926 An experimental study of the self in psychology. *The Psychological Monographs*, 35, No.165.

Angyal, A. 1965 *Neurosis and treatment: A holistic theory*. New York: The Viking Press.

Arnett, J. J. 1999 Adolescent storm and stress, reconsidered. *American Psychologist*, 54 (5), 317-326.

Bachman, J. G., & O'Malley, P. M. 1977 Self-esteem in young men: A longitudinal analysis of the impact of educational and occupational attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 365-380.

Bakan, D. 1966 *The duality of human existence*. Chicago: Rand-McNally.

Bakhtin, M. 1973 *Problems of Dostoevsky's poetics*. (R. W. Rotsel. Trans.). Ann Arbor, MI: Ardis. (Original work published in 1929).

- Bamberg, M., & Marchman, V. 1991 Binding and unfolding: Towards the linguistic construction of narrative discourse. *Discourse Processes*, 14, 277-305.
- Bandura, A. 1964 The stormy decade: fact or fiction? *Psychology in the Schools*, 1, 224-231.
- Barresi, J., & Juckes, T. J. 1997 Personology and the narrative interpretation of lives. *Journal of Personality*, 65, 693-719.
- Becker, E. 1971 *The birth and death of meaning: An interdisciplinary perspective on the problem of man*. New York: Free Press.
- Bestgen, Y., & Costermans, J. 1994 Time, space, and action: Exploring the narrative structure and its linguistic marking. *Discourse Processes*, 17, 421-446.
- Bills, R. E., Vance, E. L., & McLean, O. S. 1951 An index of adjustment and values. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 257-261.
- Binswanger, L. 1957 *Schizophrenie*. Pfullingen. (新海安彦・宮本忠雄・木村敏訳『精神分裂病 (改訂増補版)』みすず書房, 1959)
- Blascovich, J., & Tomaka, J. 1991 Measures of self-esteem. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes*. New York: Academic Press. Pp.115-160.
- Blos, P. 1962 *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.
- Blumer, H. 1969 *Symbolic interactionism: Perspective and method*. New jersey: Prentice-Hall.
- Blyth, D. A., Simmons, R. G., & Carlton-Ford, S. 1983 The adjustment of early adolescents to school transitions. *Journal of Early Adolescence*, 3, 105-120.
- Brentano, F. 1955 *Vom Ursprung sittlicher Erkenntnis. Mit Einleitung und Anmerkungen*. (O. Kraus, hg.). Hamburg: Felix Meiner Verlag.

Brownfain, J. J. 1952 Stability of the self-concept as a dimension of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 597-606.

Bruner, J. 1990 *Acts of meaning*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Bruner, J. 1997 Will cognitive revolutions ever stop ? In D. M. Johnson, & C. Erneling (Eds.). *The future of the cognitive revolution*. New York: Oxford University Press. Pp.279-292.

Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. 1950 Investigations into the 'self-concept' I : The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.

Bühler, C. 1967 *Das Seelenleben des Jugendlichen: Versuch einer Analyse und Theorie der psychischen Pubertät*. Stuttgart-Hohenheim: Gustav Fischer Verlag. (original work published 1922) (原田茂訳『青年の精神生活』協同出版, 1969)

Bühler, C. 1991 *Das Seelenleben des Jugendlichen: Versuch einer Analyse und Theorie der psychischen Pubertät*. Mit einem Vorwort von Prof. Dr. R. Oerter. 7 Auflage. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag. (original work published 1921)

Burns, R. B. 1979 *The self concept: In theory, measurement, development and behaviour*. London: Longman.

Butler, J. M., & Haigh, G. V. 1954 Changes in the relation between self-concepts and ideal concepts consequent upon client-centered counseling. In C. R. Rogers, & R. F. Dymond (Eds.), *Psychotherapy and personality change*. Chicago: The University of Chicago Press. Pp.55-75.

Cantril, H. 1941 *The psychology of social movements*. New York: Robert E. Krieger.

Carlson, R. 1965 Stability and change in the adolescent's self-image. *Child Development*, 36, 659-666.

- 張日昇・高木秀明 1991 日中青年の友人関係に関する比較研究－その発達，および自己意識との関連－．横浜国立大学教育学部教育実践研究指導センター紀要，7, 123-142.
- Coleman, J. C. 1978 Current contradictions in adolescent theory. *Journal of Youth and Adolescence*, 7, 1-11.
- Coleman, J. C., & Hendry, L. B. 1999 *The nature of adolescence*. Third edition. London: Routledge. (original work published in 1980)
- Combs, A. W., & Snygg, D. 1959 *Individual behavior: A perceptual approach to behavior*. (Revised ed.). New York: Harper & Row.
- Cooley, C. H. 1902 *Human nature and the social order*. New York: Schocken Books.
- Coopersmith, S. 1959 A method for determining types of self-esteem. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 59, 87-94.
- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Davies, B., & Harré, R. 1990 Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20, 43-63.
- Dekovic, M., Noom, M. J., & Meeus, W. 1997 Expectations regarding development during adolescence: Parental and adolescent perceptions. *Journal of Youth and Adolescence*, 26, 253-272.
- Descartes, R. 1992 *Discours de la Méthode*. Paris: Librairie Philosophique J.Vrin.
- Douvan, E., & Adelson, J. 1966 *The adolescent experience*. New York: John Wiley & Sons.
- Dusek, J. B., & Flaherty, J. F. 1981 The development of the self-concept during the adolescent years. Monographs of the Society for Research in Child Development, 46 (4), Serial No.191).

Yamada, K. 1987 *Psychological Development of Japanese Adolescents*. Tokyo: Kinokuniya.

Dweck, C. S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 674-685.

江川泰一郎 1955 代名詞. 研究社.

Elkin, F., & Westley, W. A. 1955 The myth of adolescent culture. *American Sociological Review*, 20, 680-684.

Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. 1996 Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation: A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 461-475.

遠藤惣一 1987 学生生活への心理的不適応に関する研究—第4回カレッジ・コミュニティ調査資料の再分析—. 総研論集 (関西学院大学総合教育研究室), 8, 1-25.

遠藤毅 1981 自己概念に関する研究. 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 420-421.

遠藤由美 1992a 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討—. 教育心理学研究, 40, 157-163.

遠藤由美 1992b 個性化された評価基準からの自尊感情再考. 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋 (編)『セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求—』ナカニシヤ出版. Pp.57-70.

遠藤由美・西芳弘 1993 青年前期における自己評価の研究—認知された自己の諸領域との関係—. 上越教育大学研究紀要, 13, 111-120.

Engel, M. 1959 The stability of the self-concept in adolescence. *The Journal of*

*Abnormal and Social Psychology*, 58, 211-215.

Engel, M., & Raine, W. J. 1963 A method for the measurement of the self-concept of children in the third grade. *The Journal of Genetic Psychology*, 102, 125-137.

- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton.
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and society*. (2nd ed.). New York: W.W.Norton.  
(Original work published in 1950).
- Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and crisis*. New York: W.W.Norton.
- Fey, W. F. 1954 Acceptance of self and others, and its relation to therapy-readiness. *Journal of Clinical Psychology*, 10, 269-271.
- Fitts, W. H. 1981 Issues regarding self-concept change. In M. D. Lynch, A. A. Norem-Hebersen, & K. Gergen (Eds.), *Self-concept: Advances in theory and research*. Cambridge, MA: Ballinger. Pp.261-272.
- Frankl, V.E. 1947 Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager. Österreichische Dokumente zur Zeitgeschichte I. Wien: Verlag für Jugend und Volk. (霜山徳爾 (訳) 『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録—』 みすず書房, 1961)
- Freud, A. 1966 *The ego and the mechanisms of defense*. London: International Universities Press. (Original work published in 1936).
- Freud, A. 1958 Adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*, 13, 255-278.
- Freud, A. 1969 Adolescence as a developmental disturbance. In G. Caplan & S. Lebovici (Eds.), *Adolescence: Psychosocial perspectives*. New York: Basic Books. Pp.5-10.
- Freud, S. 1940 *Gesammelte Werke*. (Dreizehnter Band). London: Imago.
- Friedenberg, E. Z. 1959 *The vanishing adolescent*. Boston: Beacon Press.
- Frith, S. 1985 The sociology of youth. In M. Haralambos (Ed.), *Sociology: New directions*. Lancashire: Causeway Press. Pp.301-368.
- 藤井虔 1984 青年期の自己概念についての認知発達的研究. 京都府立大学学術報告 (人文), 36, 169-187.

- 古川晴風 (編著) 1989 エングリシャ語辞典. 大学書林.
- Gergen, K. J. 1971 *The concept of self*. New York: Holt.
- Gergen, K. J. 1972 Multiple identity: The healthy, happy human being wears many masks. *Psychology Today*, 5, 31-35, 64-66.
- Gergen, K. J., & Gergen, M. M. 1986 Narrative form and the construction of psychological science. In T. R. Sarbin (Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. New York: Praeger. Pp.22-44.
- Gergen, K. J., & Gergen, M. M. 1988 Narrative and the self as relationship. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 17-56.
- Goldstein, K. 1951 *Human nature: In the light of psychopathology*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Gough, H. G., Lazzari, R., & Fioravanti, M. 1978 Self versus ideal self: A comparison of five adjective check list indices. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 1085-1091.
- Graham, J. R., & Barr, K. G. 1967 Q-sort study of the relationship between students' self-acceptance and acceptance of their college. *Psychological Reports*, 21, 779-780.
- Greenwald, A. G., & Pratkanis, A. R. 1984 The self. In R. S. Wyer, & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.129-178.
- Grimes, J. E. 1975 *The thread of discourse*. Berlin: Mouton.
- Gruen, W. 1960 Rejection of false information about oneself as an indication of ego identity. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 231-233.
- Hall, G. S. 1904 *Adolescence: Its psychology and its relations to physiology, anthropology, sociology, sex, crime, religion and education*. (Vol. I & II). New York: D. Appleton.
- Hanlon, T. E., Hofstaetter, P. R., & O'Conner, J. P. 1954 Congruence of self and



- ideal self in relation to personality adjustment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 18, 215-218.
- Harré, R., & van Langenhove, L. 1991 Varieties of positioning. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 21, 393-407.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- Harter, S. 1986 Processes underlying the construction, maintenance, and enhancement of the self-concept in children. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol.3. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.137-181.
- Hartmann, H. 1958 *Ego psychology and the problem of adaptation*. (D. Rapaport trans.). Madison: International Universities Press.
- Hattie, J. 1992 *Self-concept*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Havighurst, R. J. 1952 *Development tasks and education*. (2nd ed.). New York: Longmans Green.
- Havighurst, R. J. 1953 *Human development and education*. New York: Longmans.
- Heider, F. 1944 Social perception and phenomenal causality. *Psychological Review*, 51, 358-374.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley & Sons.
- Hermans, H. J. M. 1987 Self as an organized system of valuations: Toward a dialogue with the person. *Journal of Counseling Psychology*, 34, 10-19.
- Hermans, H. J. M. 1988 On the integration of nomothetic and idiographic research methods in the study of personal meaning. *Journal of Personality*, 56, 785-812.

- Hermans, H. J. M. 1989 The meaning of life as an organized process. *Psychotherapy*, 26, 11-22.
- Hermans, H. J. M. 1992 Telling and retelling one's self-narrative: A contextual approach to life-span development. *Human Development*, 35, 361-375.
- Hermans, H. J. M. 1996 Voicing the self: From information processing to dialogical interchange. *Psychological Bulletin*, 119, 31-50.
- Hermans, H. J. M., & Hermans-Jansen, E. 1995 *Self-narratives: The construction of meaning in psychotherapy*. New York: Guilford Press.
- Hermans, H. J. M., & Hermans-Jansen, E. (in press). Dialogical processes and the development of the self. In J. Valsiner, & K. J. Connolly (Eds.), *Handbook of developmental psychology*. London: Sage.
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G. 1993 *The dialogical self: Meaning as movement*. San Diego, California: Academic Press.
- Hermans, H. J. M., Kempen, H. J. G., & van Loon, R. J. P. 1992 The dialogical self: Beyond individualism and rationalism. *American Psychologist*, 47, 23-33.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Higgins, E. T., Roney, C. J. R., Crowe, E., & Hymes, C. 1994 Ideal versus ought predilections for approach and avoidance: Distinct self-regulatory systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 276-286.
- Hilton, D. J. 1990 Conversational processes and causal explanation. *Psychological Bulletin*, 107, 65-81.
- Hoge, D. R., & McCarthy, J. D. 1984 Influence of individual and group identity salience in the global self-esteem of youth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 403-414.

- Hollingworth, L. S. 1928 *The psychology of the adolescent*. New York: D. Appleton.
- Honess, T., & Yardley, K. (Eds.) 1987 *Self and identity: Perspectives across the lifespan*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Hume, D. 1739 *A treatise of human nature*. (E. G. Mossner, ed.). Penguin Books.
- Husserl, E. 1950 *Husserliana Band I: Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*. (S. Strasser, hg.). Netherlands: Kluwer Academic.
- 飯島宗享 1992 自己について. 未知谷.
- 今田恵 1956 自我. 牛島義友・阪本一郎・中野佐三・波多野完治・依田新(編)『教育心理学事典』金子書房. Pp.207-209.
- 伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的变化—2次元から見た自己受容発達プロセス—. 発達心理学研究, 2, 70-77.
- 岩田純一 1998 <わたし>の世界の成り立ち. 金子書房.
- James, W. 1890 *The principles of psychology*. Vol.I and II. New York: Henry Holt.
- James, W. 1892 *Psychology: The briefer course*. (G. Allport ed.). Notre Dame Indiana: University of Notre Dame Press.
- Janis, I. L., & Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland, & I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press. Pp.55-68.
- Jorgensen, E. C., & Howell, R. J. 1969 Changes in self, ideal-self correlations from ages 8 through 18. *The Journal of Social Psychology*, 79, 63-67.
- Josephs, I. E. 1998 Constructing one's self in the city of the silent: Dialogue, symbols, and the role of "as-if" in self-development. *Human Development*, 41, 180-195.

- Josephs, I. E., & Valsiner, J. 1998 How does autodialogue work?: Miracles of meaning maintenance and circumvention strategies. *Social Psychology Quarterly*, 61, 68-83.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 (第2版). 東京大学出版会. (初版 1980).
- 梶田叡一 1991 内面性の心理学. 大日本図書.
- 梶田叡一 1998 意識としての自己—自己意識研究序説—. 金子書房.
- 亀井勝一郎 1951 人間教育. 角川文庫.
- 片桐雅隆 1996 プライバシーの社会学—相互行為・自己・プライバシー—. 世界思想社.
- 加藤隆勝 1962 青年期における自己受容と自己批判の年令的変容について. 岐阜大学学芸学部研究報告 (人文科学), 11, 83-89.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造. 心理学モノグラフ No.14 (日本心理学会).
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造—その変容と多様化—. 誠信書房.
- Katz, P., & Zigler, E. 1967 Self-image disparity: A developmental approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 186-195.
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観 [I] —私立女子校生における発達の様相—. 岩手大学教育学部研究年報, 30, 57-76.
- Kistner, J. A., Osborne, M., & LeVerrier, L. 1988 Causal attributions of learned-disabled children: Developmental patterns and relation to academic progress. *Journal of Educational Psychology*, 80, 82-89.
- 北村晴朗 1962 自我の心理. 誠信書房.
- 小林信明 (編) 1982 新選漢和辞典 (新版). 小学館. (初版 1963).

- Koffka, K. 1935 *Principles of gestalt psychology*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- 桑原知子. 1986 人格の二面性測定の試み—NEGATIVE語を加えて—. 教育心理学研究, 34, 31-38.
- Lau, S. 1990 Crisis and vulnerability in adolescent development. *Journal of Youth and Adolescence*, 19, 111-131.
- Lazzari, R., Fioravanti, M., & Gough, H. 1978 A new scale for the adjective check list based on self vs. ideal-self discrepancies. *Journal of Clinical Psychology*, 34, 361-365.
- Le Dantec, F. 1912 *L'Egoïsme: seule base de toute société*. Paris: Ernest Flammarion.
- Lessing, E. E. 1968 Demographic, developmental, and personality correlates of length of future time perspective (FTP). *Journal of Personality*, 36, 183-201.
- Lessing, E. E. 1972 Extension of personal future time perspective, age, and life satisfaction of children and adolescents. *Developmental Psychology*, 6, 457-468.
- Lewin, K. 1936 *Principles of topological psychology*. (F. Heider, & G. M. Heider trans.). New York: McGraw-Hill.
- Lewin, K. 1939 Field theory and experiment in social psychology: Concepts and methods. *The American Journal of Sociology*, 44, 868-896.
- Lewin, K. 1943 Defining the "field at a given time." *Psychological Review*, 50, 292-310.
- Lewin, K. 1954 Behavior and development as a function of the total situation. In L. Carmichael (Ed.), *Manual of child psychology*. 2nd edition. New York:

John Wiley & Sons. Pp.918-970. (original work published 1946)

Linville, P. W. 1985. Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.

Linville, P. W. 1987. Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.

Locke, J. 1959 *An essay concerning human understanding*. (Vol.1, A. C. Fraser, ed.). New York: Dover.

Lundholm, H. 1940. Reflections upon the nature of the psychological self. *The Psychological Review*, 47, 110-126.

McCarthy, J. D., & Hoge, D. R. 1982. Analysis of age effects in longitudinal studies of adolescent self-esteem. *Developmental Psychology*, 18, 372-379.

Marcia, J. E. 1966. Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

Marcia, J. E. 1967. Ego identity status: Relationship to change in self-esteem, "general maladjustment," and authoritarianism. *Journal of Personality*, 35, 118-133.

Markus, H., & Nurius, P. 1986. Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.

Marsh, H.W. 1986. Global self-esteem: Its relation to specific facets of self-concept and their importance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 1224-1236.

Marsh, H.W. 1993. Relations between global and specific domains of self: The importance of individual importance, certainty, and ideals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 975-992.

Marsh, H. W. 1995. A Jamesian model of self-investment and self-esteem: Comment on Pelham (1995). *Journal of Personality and Social Psychology*,

- Mead, G. H. 1913. The mechanism of social consciousness. *The Journal of Philosophy*, 10, 1151-1160.
- Marsh, H. W., Richards, G. E., & Barnes, J. 1986 Multidimensional self-concepts: The effect of participation in an outward bound program. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 195-204.
- Marsh, H. W., & Shavelson, R. 1985 Self-concept: Its multifaceted, hierarchical structure. *Educational Psychologist*, 20, 107-123.
- Marsh, H. W., & Yeung, A. S. 1998 Top-down, bottom-up, and horizontal models: The direction of causality in multidimensional, hierarchical self-concept models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 509-527.
- McAdams, D. P. 1988 *Power, intimacy, and the life story: Personological inquiries into identity*. New York: The Guilford Press.
- McDougall, W. 1932 *The energies of men: A study of the fundamentals of dynamic psychology*. London: Methuen.
- McGuire, W. J., & McGuire, C. V. 1980 Salience of handedness in the spontaneous self-concept. *Perceptual and Motor Skills*, 50, 3-7.
- McGuire, W. J., & McGuire, C. V. 1988 Content and process in the experience of self. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 97-144.
- McGuire, W. J., McGuire, C. V., Child, P., & Fujioka, T. 1978 Salience of ethnicity in the spontaneous self-concept as a function of one's ethnic distinctiveness in the social environment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 511-520.
- McGuire, W. J., & Padawer-Singer, A. 1976 Trait salience in the spontaneous self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 743-754.
- Mead, G. H. 1912. The mechanism of social consciousness. *The Journal of Philosophy*, 9, 401-406. In A. J. Reck (Ed.), *Selected writings: George Herbert Mead*. New York: The Bobbs-Merrill, 1964. Pp.134-141.

- Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society, from the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 三田英二 1988 Self-Esteem に関する研究 (3)－重視される自己の諸側面との関係について－. 臨床教育心理学研究, 14, 25-29.
- 宮部菊男 1954 格と人称. 研究社.
- 宮沢秀次 1979 青年期における自己受容性の一研究. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 105-117.
- 溝上慎一 1995 WHY 答法についての理論的考察. 大阪大学教育心理学年報, 4, 61-72.
- 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因と SELF-ESTEEM との関係－個性記述的観点から考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係－. 教育心理学研究, 45, 62-70.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論－実証的心理学のパラダイム－. 金子書房.
- 溝上慎一 2000 自己意識の発達. 堀野緑・濱口佳和・宮下一博 (編)『子どものパーソナリティと社会性の発達』北大路書房. Pp.44-55.
- 溝上慎一 2001a 大学生固有の意味世界に迫るためのポジション理論. 溝上慎一 (編)『大学生の自己と生き方－大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学－』ナカニシヤ出版. Pp.50-66.
- 溝上慎一 2001b 自己評価を規定する自己とそれに関連する大学生的文脈. 溝上慎一 (編)『大学生の自己と生き方－大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学－』ナカニシヤ出版. Pp.69-95.
- 溝上慎一・水間玲子 1997 「自我－自己」からみた青年心理学研究－意義と問題点, 今後の課題. 京都大学高等教育研究, 3, 25-45.
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について. 教育心理学研究, 46, 31-141.
- 水間玲子・溝上慎一 2001 大学生の適応と自己の世界. 溝上慎一 (編)『大学生の自



- 『自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版。  
Pp.19-46.
- Monge, R. H. 1973 Developmental trends in factors of adolescent self-concept. *Developmental Psychology*, 8, 382-393.
- Montemayor, R., & Eisen, M. 1977 The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- Moore, J. S. 1933 The problem of the self. *The Philosophical Review*, 42, 487-499.
- Moretti, M. M., & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- 森下正康 1985 自信および劣等感と自己認知の諸側面との関連. 日本心理学会第49回大会発表論文集, 208.
- 村瀬孝雄 1976 青年期危機概念をめぐる実証的考察. 笠原嘉・清水将之・伊藤克彦(編)『青年の精神病理 I』弘文堂. Pp.29-52.
- Musgrove, F. 1964 *Youth and the social order*. New York: The Humanities Press.
- Muuss, R. E. 1969 *Theories of adolescence*. 2nd ed. New York: Random House. (original work published 1962)
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究(1) -Self-Differential 作製の試み-. 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-106.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2) -Self-Differential の作製-. 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- 中村元 1989 自己の探求. 青土社.

- 成瀬無極 1929 疾風怒濤時代と現代独逸文學. 改造社.
- Natanson, M. 1956 *The social dynamics of George H. Mead*. Washington, D.C.: Public Affairs Press.
- Neisser, U. 1988 Five kinds of self-knowledge. *Philosophical Psychology*, 1, 35-59.
- Neisser, U. 1993 The self perceived. In U. Neisser (Ed.), *The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge*. Cambridge: Cambridge University Press. Pp.3-21.
- Noppe, I. C. 1983 A cognitive-developmental perspective on the adolescent self-concept. *Journal of Early Adolescence*, 3, 275-286.
- Offer, D. 1969 *The psychological world of the teen-ager: A study of normal adolescent boys*. New York: Basic Books.
- Ogilvie, D. M. 1987 The undesired self: A neglected variables in personality research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 379-385.
- 岡路市郎 1973 青年心理学の系譜. 依田新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留宏・西平直喜・藤原喜悦・宮川知彰 (編)『青年心理学研究の課題と方法』金子書房. Pp.193-245.
- 大槻文彦 1982 新編大言海. 富山房. (初版 1956).
- 大山泰宏 2001 因果性の虚構とところの現実. 河合隼雄 (編)『心理療法と因果的思考』岩波書店. Pp.123-165.
- 尾崎仁美 2001 大学生の将来の見通しと適応との関連. 溝上慎一 (編)『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版. Pp.167-196.
- 尾崎仁美 2002 個人における将来展望の重要性をとらえる方法の検討—自己研究の知見を導入して—. 梶田叡一 (編)『自己意識研究の現在』ナカニシヤ出版. Pp.87-113.

- Patton, W. C. 1991. Relationship between self-image and depression in adolescents. *Psychological Reports*, 68, 867-870.
- Peeters, G. 1971 The positive-negative asymmetry: On cognitive consistency and positivity bias. *European Journal of Social Psychology*, 1, 455-474.
- Pelham, B. W. 1995a Self-investment and self-esteem: Evidence for a Jamesian model of self-worth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1141-1150.
- Pelham, B. W. 1995b Further evidence for a Jamesian model of self-worth: Reply to Marsh (1995). *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 1161-1165.
- Pelham, B.W., & Swann, Jr. W. B. 1989 From self-conceptions to self-worth: On the sources and structure of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 672-680.
- Pepper, S. C. 1942 *World hypotheses: A study in evidence*. Berkeley: University of California Press.
- Phillips, L., & Zigler, E. 1961 Social competence: The action-thought parameter and vicariousness in normal and pathological behaviors. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 137-146.
- Piers, E. V., & Harris, D. B. 1964 Age and other correlates of self-concept in children. *Journal of Educational Psychology*, 55, 91-95.
- Polkinghorne, D. E. 1988 *Narrative knowing and the human sciences*. Albany: State University of New York Press.
- Rafaeli-Mor, E., Gotlib, I. H., & Revelle, W. 1999 The meaning and measurement of self-complexity. *Personality and Individual Differences*, 27, 341-356.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton Mifflin.

Rogers, C. R., & Dymond, R. F. (Eds.) 1954 *Psychotherapy and personality change: Co-ordinated research studies in the client-centered approach*. Chicago: The University of Chicago Press.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

Rosenberg, S., & Gara, M. A. 1985 The multiplicity of personal identity. In P. Shaver (Ed.), *Self, situations, and social behavior*. (Review of personality and social psychology, Vol.6). Beverly Hills, CA: Sage. Pp.87-113.

Sakamoto, S. 1998 The effects of self-focus on negative mood among depressed and nondepressed Japanese students. *The Journal of Social Psychology*, 138, 514-523.

Sampson, E. E. 1993 Identity politics: Challenges to psychology's understanding. *American Psychologist*, 48, 1219-1230.

Savin-Williams, R. C., & Demo, D. H. 1984 Developmental change and stability in adolescent self-concept. *Developmental Psychology*, 20, 1100-1110.

Schutz, A. 1962 *Collected papers I: The problem of social reality*. (M. Natanson ed.). The Netherlands: Kluwer Academic.

Shavelson, B. J., Hubner, J. J., & Stanton, G. C. 1976 Self-concept: Validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*, 46, 407-441.

Shepard, L. A. 1979 Self-acceptance: The evaluative component of the self-component of the self-concept construct. *American Educational Research Journal*, 16, 139-160.

Sherif, M., & Cantril, H. 1947 *The psychology of ego-involvements: Social attitudes & identifications*. New York: John Wiley & Sons.

下山晴彦 1981 青年期における「自分」の確立の研究. 東京大学教育学部教育相談室紀要, 4, 109-118.

新堀通也 (編) 1985 大学生—ダメ論をこえて— (現代のエスプリ 213). 至文堂.

新村出 (編) 1998 広辞苑 (第5版). 岩波書店. (初版 1955).

Simmons, R. G., Blyth, D. A., Van Cleave, E. F., & Bush, D. M. 1979 Entry into early adolescence: The impact of school structure, puberty, and early dating on self-esteem. *American Sociological Review*, 44(6), 948-967.

Simmons, R. G., Rosenberg, F., & Rosenberg, M. 1973 Disturbance in the self-image at adolescence. *American Sociological Review*, 38, 553-568.

Snygg, D., & Combs, A. W. 1949 *Individual behavior: A new frame of reference for psychology*. New York: Harper & Brothers.

Song, I., & Hattie, J. 1984 Home environment, self-concept, and academic achievement: A causal modeling approach. *Journal of Educational Psychology*, 76, 1269-1281.

Spranger, E. 1924 *Psychologie des Jugendalters*. Heidelberg: Quelle & Meyer Verlag. (土井竹治訳『青年の心理』五月書房, 1973)

Stirner, M. 1995 *The ego and its own*. (D. Leopold ed.). New York: Cambridge University Press.

Strauss, C. C., Forehand, R., Frame, C., & Smith, K. 1984 Characteristics of children with extreme scores on the children's depression inventory. *Journal of Clinical Child Psychology*, 13, 227-231.

杉浦健 2001 大学生の自己形成における転機の役割. 溝上慎一 (編)『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版. Pp.140-164.

高木秀明・張日昇 1990 日中青年の自己意識の発達に関する比較研究. 横浜国立大学教育紀要, 30, 21-43.

竹山道雄 1951 解説. ゲーテ, J. W. von『若きウェルテルの悩み (竹山道雄訳)』岩波文庫. Pp.187-213.

- 田邊敏明・堂野佐俊 1999 大学生におけるネガティブストレスタイプと対処行動の関連－性格類型およびストレス認知・反応を通じた分析－. 教育心理学研究, 47, 239-247.
- 田中一彦 1998 訳者あとがき. In J. Bruner, *Actual minds, possible worlds*. Harvard University Press, 1986. (田中一彦訳『可能世界の心理』みすず書房, 1998). Pp.303-305.
- Tappan, M. B. 1989 Stories lived and stories told: The narrative structure of late adolescent moral development. *Human Development*, 32, 300-315.
- Tappan, M. B., & Brown, L. M. 1989 Stories told and lessons learned: Toward a narrative approach to moral development and moral education. *Harvard Educational Review*, 59, 182-205.
- Tellenbach, H. 1983. *Melancholie: Problemgeschichte Endogenität Typologie Pathogenese Klinik*. 4th ed. Mit einem Exkurs in die manisch-melancholische Region. Berlin: Springer-Verlag. (original work published 1961)(木村敏 (訳)『メランコリー(改訂増補版)』みすず書房, 1985)
- Teri, L. 1982 Depression in adolescence: Its relationship to assertion and various aspects of self-image. *Journal of Clinical Child Psychology*, 11, 101-106.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*, Vol.2. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.1-31.
- Thibaut, J. W., & Riecken, H. W. 1955 Some determinants and consequences of the perception of social causality. *Journal of Personality*, 24, 113-133.
- 藤堂明保 1965 漢字語源辞典. 学燈社.
- 藤堂明保 (編) 1978 学研漢和大字典. 学習研究社.
- 外山美樹・桜井茂男 1999 大学生における日常的出来事と健康状態の関係－ポジティブな日常的出来事の影響を中心に－. 教育心理学研究, 47, 374-382.

- 豊田秀樹・前田忠彦 1994 大学入試方法の改善に関する進路指導担当教員からの自由記述意見の分析—調査研究における自由記述データの分析方法の提案—, 行動計量学, 21, 75-86.
- Trent, R. D., Fernandez-Marina, R., & Maldonado-Sierra, E. D. 1960 The cross-cultural application of the adjectival check list adjustment index: A preliminary report. *The Journal of Social Psychology*, 51, 265-276.
- Tumlirz, O. 1925 *Einführung in die Jugendkunde: Mit Besonderer Berücksichtigung der Experimentell-Pädagogischen Forschungen*. Zweiter Band: Die Geistige Entwicklung der Jugendlichen. Leipzig: Julius Klinkhardt, Verlagsbuchhandlung. (original work published 1919)
- Turner, R. H., & Vanderlippe, R. H. 1958 Self-ideal congruence as an index of adjustment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 202-204.
- Vitz, P. C. 1990 The use of stories in moral development: New psychological reasons for an old education method. *American Psychologist*, 45, 709-720.
- Watkins, M. 1986 *Invisible guests: The development of imaginal dialogues*. Hillsdale, NJ: The Analytic Press.
- Weigel, R. G., & McKinney, F. 1971 Self-oriented sentence completion responses and reported personal biographical data. *The Journal of Educational Research*, 64, 201-202.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W., & Cook, R. E. 1972 Causal ascriptions and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239-248.
- Woolfolk, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Allen, L. A., & Polino, M. 1995 Self-complexity, self-evaluation, and depression: An examination of form and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1108-1120.
- Wylie, R. C. 1961 *The self concept: A critical survey of pertinent research literature*. Lincoln: University of Nebraska Press.

やまだようこ 2000a 人生を物語ることの意味－なぜライフストーリー研究か？－, 教育心理学年報, 39, 146-161.

やまだようこ 2000b 人生を物語ることの意味－ライフストーリーの心理学－, やまだようこ(編著)『人生を物語る』ミネルヴァ書房, Pp.1-38.

やまだようこ 2002 なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？－質的研究における仮説構成とデータ分析の生成継承的サイクル－, 質的心理学研究, 1, 70-87.

山田ゆかり 1981 青年期における自己概念 (I), 日本教育心理学会第 23 回大会発表論文集, 22-423.

山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究－20 答法での自己記述をてがかりとして－, 心理学研究, 60, 245-252.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68.

山中襄太 1976 国語語源辞典, 校倉書房.

山崎博敏 1985 ダメの解剖, 新堀通也 (編)『大学生～ダメ論をこえて』(現代のエスプリ No.213) 至文堂, Pp.59-62.

平成16年4月



## あ　と　が　き

本論文は、主に私の修士論文から現在に至るまでの研究を、『青年の自己感情とそれを規定する自己の諸相－青年の内在的視点と固有の文脈を考慮して－』としてまとめたものである。各研究の発表箇所などについては、各章末に付記として記載した。

本論文をまとめるにあたっては、京都大学大学院教育学研究科・やまだようこ教授にご指導ご鞭撻を賜った。先生からいただいた鋭く示唆に富んだコメントのおかげで、本論文の主張点、オリジナルな点がかなり明確になったと考えている。もちろん、この作業過程で、今後検討すべき課題が浮き彫りにもなった。論文の不十分な点は、今後のさらなる検討課題とさせていただくしかないが、まずはここに、心より御礼申し上げる次第である。

学部時代より節目、節目をお世話下さった吉田圭吾先生（神戸大学大学院総合人間科学研究科助教授）、梶田叡一先生（京都ノートルダム女子大学学長）、田中每実先生（京都大学高等教育教授システム開発センター教授）にも御礼を申し上げたい。ほかにも、名前をすべて列記することはできないが、筆者のこれまでの仕事にご指導ご鞭撻を下さった先生方、先輩方、同僚に心より感謝申し上げます。

平成15年1月